LIBRARY
OF
THE INSTITUTE OF BUDDHIST STUDIES
Berkeley, California
PRESENTED IN MEMORY OF
THE REVEREND TAIGAN HATA
March 9, 1889 - October 21, 1968
by His Family

オウガスチン

懺悔錄

宮原晃一郎譯

DISCARD

INSTITUTE OF BUDDHIST STUDIES LIBRARY

譯者序

世に三大懺悔書としてジャン・ジャック・ルツソオ『Les Confessions レエフ・トルストオイの『Ispovjedi』と、本書とを推すうち、その年代の最も舊いものは本書である。而して他の二書が社會に對し、公衆に對しての告白であるのに本書は獨り神に對する告白である。それだけ他に拗ない宗教味が本書に於て豐かに見出される。

然しどれ程文化が開發せられたとて、それは畢竟外面的のものではなからうか。形而上的方面に於ては、人は只智的に多くの進歩を經來つたにも拘らず、感情の方面に於て依然として三千年以前も今も聊かの變りもないではないか。理智に統御（コントロール）された情といふものが如何にも望ましいことであり、また或る程度までは可能であつても、所詮理智なるものは我々の全生活の主なるものではない。我々の全生活を形造くる一要素に過ぎないで、全的のものではない。我々の全生活の主なるものは依然として理智の統御なるものも斯う觀ずれば、それは單に賢い侍女、

聖オウガスチン略傳

アウレリウス・アウグスティヌス（オウガスチン）は三百五十四年十一月十三日アフリカ州タガステの市に生れ、カルダーゴに於て修辭學（或は雄辯學）の教師となり、廿七才のとき「美とその適應について」なる一論文を著はした。三百八十三年にローマへ行き、そこで二三ヶ月修辭學を教へ、其處からミラノ（ミラン）へ行き、司教聖アムブロシウスに感化せられ、三百八十七年四月二十五日洗禮を受けた。その母モンニカ間もなくオスチヤで死す。三百八十八年彼は故郷タガステに歸り、その財産を賣り拂ひ、貧民に施し、三ヶ年の間隱遁の生活を送つた。三百九十一年、彼はヒツポの司教ヴレリウスに代つて司祭に任ぜられて、三百九十五年、その後を襲ふてヒツポの司教となつた。三百九十七年から四百年にかけて多くの著述をした。四百三十年八月二十八日齡七十六才にして、ヒツポが異狄ヴンダルの圍みを受けてゐるうちに歿した。

人間といふものゝ力を過當に見積つてゐる現世紀の子等には、彼等が勇敢に行ふ悖徳非行を聖人が多くの恥と悔ひとをもつて神に——遠の昔彼等にとつては死んだ筈の！——告白し、その恩惠によつて始めて救はれて安きを得たといふことが、頗る可笑しいにちがひない。けれどもそれには、人間の靈の惱みといふものが、如何に永い年月の推移によつて遂に變遷、消滅することなく、その唯一の解決はまた遂に頓悟して信仰の道に入るか、或は墮落に滅亡するの外ないことも千歳の後今なほ昨の如くである。

だから我々はオウガスチンの苦惱煩悶を讀んで、直ちに自分の身に引きくらべて、同感することが出來る。彼が經歷は卽ち我々の經歷である。肉慾、榮達の誘ひは、オウガスチンの時代にもまさつて今我々を苦しめ、汚すものである。「様々の教への風に靡かさるゝ」今がひどい。怪しげなマニケウスの宗教から、希臘の懷疑主義に入り、再轉してネオ・プラトオン哲學に、三轉して遂にカトリックの信仰に入つた彼が「天路歷程」は怪しげな人道主義、科學的の決定論、生半可な唯物史觀、いかものゝ親鸞崇拜等、變遷

補弼の臣の役目をつとめるに過ぎない。理智至上の發現たる科學について ベルグソンは言つた――「科學は迚も生命をとらへることは出來ない。それが鳥でも獸でもの生命をしらべるとき、そこには生命はない、たゞその屍體があるばかりだ」と。解剖刀と、試驗管と、微顯鏡とによつて死骸をいぢくる科學は、その考察に於ては單なる外的の記述と、蒐集したる與件の整理に過ぎない。思想の女主人公（ミッス）はこれによつてその弛緩放埒に流れんとするのを防ぐだけで全生命に對しては甚だ無力である。だから文藝宗教なるものが、如何ほど世の中が進歩していつても、舊きは舊いまゝで價値を失はないで、永遠に嘆賞され、信仰される所以である。それは理智がどうしても到達し得られない人生の核心に觸れ、全生活の中樞を把持してるが爲めに外ならないのである。

聖オウガスチンの懺悔錄は、その書かれた年代の古く、其敍述の方法といひ、文體といひ非常に今日のものとは異るのであるが、しかも之を讀んで我々が打たれ、感動さゝれることは毫もその書かれた當時とちがはないと斷言し得られる。勿論自我意識の非常に强く、

本書に讀むに當り、一應記憶して置くべきことがある。譯者は自分の義務として、それを次に書く。

懺悔錄はどうして書かれたかといふに、之は聖人の晩年に、その德行を賞讃する聲が餘りに嘖々と聞えるのを、そのお生涯を顧みて悔恨たる彼は、一つは不當な賞讃をおさへんが爲め、二にはその救はれた恩寵を天父に對して感謝せん心から、三には之によつてその傳道のたすけとなさんが爲めに書いたもので、その年代は彼の母、聖モンニカの死後約十三年卽ち西曆四百年頃、聖人がアフリカ・ヒッポの司教をつとめてゐた折りである。

聖人がカトリック教に入る以前に信奉してゐたマニケウス、或はクウブリクスといふ西曆紀元二十六年バビロンに生れたものが起した宗教である。彼は天の啓示を得たととなへて、東方を巡歷して、印度や支那までにも入つた。そして當時のペルシャ皇帝シャプルに認められホルミズド第一世を敎化し、後バーフラム第一世の爲め十字架につけられて、皮を剝がれた。

推移止むことない今日我々の思想狀態そのまゝではないか。しかも我々はろを知らないのである。

我々が此書を讀んで感ずることは。著者が自己の非をかざり、また隱すことなく。極めて卒直に、大膽に。また熱情を以て總てを記述してゐることである。神に直接して語てゐる聖者の言葉としてよりも寧ろ我々に對して、謙虛な態度で。ありし昔の我が罪の數々を說き、迷ひの徑路を示してゐる點である。此處には世の一般の宗教家が殊更に自分の罪を懸値して、自分が悔改のエラサを吹聽するやうな厭味がない。此厭味は宗教を喰ひ物にしてゐる人間。殊にクリスチヤンに多いが。聖オウガスチンにはその點が味塵もないので。讀んで不快を覺えさせるところがない。只聊か談理に墜ち、くど〳〵と神を呼ばう缺點がないでもないが。それは大した疵でない。我々は本書を讀んで依然甚大な興味とその熱烈な信仰に打たれるのである。

かつた。即ちアウグスティヌスをオウガスチンとした如きはその一例である。けれども其他は多くはラテン讀みとした。尤も伊多利の地名のうちでは、のと大した相違のないのは、そのとほりにして置いた。たとへばミラノをミラーヌムとせなかつた類である。

また基督教々職の名は成るべく天主教の用語を用ひた。たとへば Bishop を監督とせず司教とした如き類である。プロテスタントのなかつた時代のことだから、その方が感じがよいと思つたからである。

譯者はラテン語は至つて拙劣なものである。然し飜譯は必ず原文によるべきものと信じてゐるところから、テキストはラテン本に及ぶ限りとつて譯した。只全體に於て達意を主として、語調や情調や、文法に拘泥することは避けた。文體の如きも、最初は舊式の漢文雅語の混淆を試み、次には「である」流を、最後に、現在のものに落着いた。古典といふ

彼の説は二元論で、パルシャ思想の特色を有てゐる。即ち光りの諸靈ム、ゾォラスター、佛陀、及び純粋な靈者を地上に送る。然しマニケウス自身は神聖な要素最後の産物であつて、イエスやボウロの仕事、換言すれば光から暗を分離する役目を果しに來てゐるといふのである。

マニケウス教はバビロンを中心にして、次にはサマルカンドを主として、その本國に榮えた。それが西方に入つたのはヂオクレシウスの頃である。しかも烈しい迫害を加へられたにも拘らず、それは非常な速度で羅馬帝國に傳播した。特にコンスタンチン帝の御宇以降が一層甚しく、北アフリカではオウガスチン教と外觀上は大差なかつたのである。聖人が先づ之から進んでキリスト教徒になつたのは當然であらう。

本書に用ひた人名地名等は在來呼びならはしたものはそのとほりにして別に異をたてな

ものである。

凡そ總ての事業は最初に手をつけたものが最も困難に逢ふものである。また手際が拙つくなるのは止むを得ない。後から行くものは既に先人の切り開いた路を行くのでやさしく。後になればなる程愈々容易に、かつ手際よくなるのである。だからたことに後からのものは感謝すべきものである。此意味から譯者は宮崎氏と中山氏とにその勞を感謝するものである。殊に中山氏の譯には多くの解說や註がついてるて、譯者にとつて非常の便宜を與へた。けれども原文の解釋については彼我の間に多くの相違があるけれど、あまりに煩はしいから、一々指摘しない。只譯者が之を特に此處にいふのは中山氏が立派なラテンのテキストにより忠實に譯された範模譯（さうした意氣込みがその序文に見える）と、此拙譯とが餘程相違してるが爲めに、此譯が粗漏、該譯に滿つるものと思はれないようにとの用意に外ならないのである。

尙ほ此譯は、なるべくラテンのテキストに從つたが。他の諸國語譯も皆それ〴〵ちがつ

感じを出すには、古い文體がいゝだらうし。また簡明直截な趣きをみせるには「である」がまさらう。然し本書は虚誕な心を以て、神に自己の非を述べ、その救ひの功徳を嘆稱するのであるから、祈禱の際に、我々が衷心から神に訴えるその話振りこそ最も適當なスタイルであると譯者は考へた。その結果が之である。

懺悔錄は全體は十三篇から成立してゐるが、普通英譯などでは大抵十篇、または九篇までゝ、其餘は譯してない。その故は第十篇からは懺悔ではなくてオウガスチンの神學論であるから勿論興味はあるけれど、局外者には可なりに煩はしいことがないでもないからである。本譯書は最初全譯の積であつたが、讀書として、他書との均衡上、第九篇まで、即ち眞の懺悔錄だけで、神學論は他日に割愛して置かなければならなくなつた。

日本語に譯された本書は在來二種ある。一つは宮崎氏のもの、もう一つは中山昌樹氏の

目次

第一篇

一　神の讃美……一
二　神人合一……四
三　神の遍在……九
四　神の屬性……一四
五　赦罪の祈禱と神……一八
六　嬰兒と神の永遠……二〇
七　嬰兒も罪人……二四
八　少年時代……二九
九　雅ひな學業と好きな遊び……三二

てゐるので、ラテン古文の簡潔に過ぎて、それだけの直譯では充分意味のとれないところは可なり多くの布衍をしたと、修辭上の比喩も除り我々に馴染がなくて、聯想を起させ難しを認めたものは、日本流に直したところもある。之は理解といふことを主としたが爲めに萬止むを得ない次第である。

我が主の御代一千九百二十二年九月二十日

譯者

第一篇

一　罪の青年……四六
二　學業の中斷……四七
三　情慾……五〇
四　盜み……五五
五　原因なくして罪はない……五七
六　快樂の僞り……五九
七　赦免に對する感謝……六四
八　盜みを樂む……六五
九　共にするは樂し……六七
十　神への躍進……六八

遊戯に熱して兩親の戒を忘る……二三
大患と洗禮の延期……二四
學問を強いらる……二七
荒唐無稽の古典……二八
希臘語と羅典語……三二
神の愛を祈る……三四
荒唐な話の害毒……三五
教育の無効……三八
人の掟は守り神の法律には背く……三九
少年の罪、大人の悪……四二
神に恩賜を感謝す……四四

母が涙の祈り……九七
司教の豫言的答へ……一〇〇

第四篇

一　過誤の九ケ年……一〇三
二　修辭學を教ふ……一〇四
三　占星術を學ぶ……一〇七
四　親友の死……一一一
五　涙は何ぜ甘いか……一一四
六　烈しき悲み……一一五
七　鄉里を去る……一一八
八　時は慰藉者……一二〇

第三篇

一　不純の戀愛……七〇
二　演劇の誘惑……七二
三　學生々活……七六
四　シセロの影響……七八
五　聖書を侮る……八〇
六　マニケウス教に欺かれる……八一
七　マニケウス教徒の愚……八六
八　神の許し給ふ物……九〇
九　罪と裁判……九五
十　マニケウス教の虚妄……九六

三　フアウストスに會ふ……一四八
四　神を知らぬは不幸……一五三
五　マニケウスの邪教……一五四
六　フアウストスの淺學……一五七
七　期待は裏切られる……一六〇
八　母を欺く……一六四
九　再び大患……一六六
十　懷疑哲學と唯物主義……一七三
十一　マニケウス教と天主教……一七八
十二　下劣な羅馬學生……一七九
十三　アムブロシウスに會ふ……一八一
十四　信仰の崩し……一八三

第二篇

神によつての友情……一一一
魂の憩ふ處……一一三
萬有は變るも神は變らず……一一五
神に於ての平安……一一七
愛の源泉……一三〇
美與の自省について……一三一
神を求む……一三五
アリストテレースの影響……一三九

第五篇

我が魂は神を證む……一四五
神の不可避……一四六

第七篇

十一　オウガスチンの困惑……一一一
十二　獨身と結婚生活……一一六
十三　オウガスチン妻を求む……一二九
十四　理想社會の計畫……一三〇
十五　舊の妾は去り、新たに妾來る……一三二
十六　死と審判の恐れ……一三三
一　神觀なほ解けず……一三六
二　ネブリディウスの爭論……一四〇
三　自由意志は罪の基……一四二
四　神は不朽……一四四

第十八篇

一　聖モンニカ來る……八六
二　郷里の迷信を棄つ……八八
三　聖人の教へ……九一
四　儀文と聖靈……九五
五　聖書の權威とその用……九九
六　野望は空し……一〇二
七　友を回心せしめる……一〇七
八　アリピウスの再誘惑……一一一
九　アリピウス盜みの嫌疑を受く……一一四
十　アリピウスの無潔と、ネヴリディウスの……一一八

第八篇

七 大 充 キ 世 一 二 三 四 五

神を識ることを妨ぐるもの……二七五
基督のみが救ひ……二七八
基督の權化について……二八〇
プラトーンの書……二八三
聖ポーロの書翰……二八五
老儒シムプリキアヌス……二八九
ポクトリヌスの回心……二九三
罪増せば恩も増す……二九九
大人物回心の價値……三〇三
歸正の障害……三〇五

六　罪惡の起原……二四六
五　占星學の迷妄……二五一
四　惡の根元を計ねる書……二五七
三　神の救ひ遂に來る……二六〇
二　プラトーン派と基督教……二六〇
一　神は不滅の光……二六五
十　萬有皆否の因……二六八
十一　萬有皆善……二六八
十二　神に惡はなし……二七〇
十三　遂に神を悟る……二七二
十四　萬有は神の眞と愛とを願つ……二七三
十五　萬有皆善。只或る物に不適……二七四

目次

終焉 …… 三五三
愈々退隠 …… 三五三
アハヅロスの静心 …… 三六三
遂に法悦を受く …… 三六四
神告を宣ふ …… 三六六
国、重モンカ …… 三六九
開モンカの徳 …… 二七四
モンカ永生に入る …… 二八〇
国の死 …… 二八五
モンカの死を悼む …… 二八八
亡き国の為めに祈禱 …… 二九五

第九篇

感謝……三四三
二　教師の職を棄てる……三四五
二　友人の聖なる死狀……三四九
三　ボーテイアヘンの事……三一〇
七　聖人の心動く……三一八
八　内部の爭鬪……三二二
九　心と肉體との關係……三二六
十　意志の多様……三三三
十一　肉の爭鬪……三三八
十二　遂に歸正……三四三

第一篇

神の讃美

主よ、貴下は偉大にましまします。貴下は偉大に讃美に値し給ひます。貴下の力は大きく、貴下の智恵は無限でムいます。そこで貴下が創造の一小部分たる人間は貴下を讃美せんと欲しますー此人間、身には死滅てふことを、自分の罪の證據を、又其上に、貴下が徴憶なき信を有想ひ給はぬ證據をすら帶びてゐる此人間といふものが。——しかもなほ且つ人間、貴下が創造の一小部分は貴下を讃美させようとして。貴下は私共の心は貴下のうちに憩ふまでは安んじません。

主よ私が先づ爲すべきことを知い、又理解らして下さい。貴下をまづ呼びませうか、或は寧ろ先に爲すべきことは貴下を呼ぶことと、どちらを先に爲すべきでせうか。之貴下を知ること

なぜかなれば私が神を呼ぶ時には、私自身のうちに神を呼び入れるのですから。又私がちにどん広場所があつて。神が私のうちに来り給ふのでせうか。天地を造り給ふ神よ。虚空なる神よ。私の裡に貴下を含むことの可能な何さへも来り給ふからには。まつたく。私はそのうちに造り給ふた天も地も貴下を入れまものは何でも将貴下が無ければ在り得ないのですから。有るものは何でも将貴下の裡に在さねば。有る筈のない私といふもの、裡に。私んでもまだ余りがあるのでせうか。私は実際にゐ求めてゐるのでせうか。若し貴下が私の裡に在すること以降のてゐても。貴下は矢張り其処に在すのですもの。だか王よ私といふものは有る筈が無かつたのです。まつた貴下が私の裡に在さぬかつたら。私は全く有ることができな貴下を通して有り。貴下に帰属してをります。その通もし私は既に自分が貴下のうちに在ると知りながら

か。けれども貴下を未だ知らない者が、どうして間違ひなく貴下を呼ばせう。それとも寧ろ——
か。何せかなれば、其様な人は貴下の代りに、他の者を呼んですひませう。
貴下を知る爲に。先つ貴下を呼ぶのでせうか。然し知らないでゐて、どうして貴下を呼べ
ませうか。又何うして説教者がなくて貴下を信じませう。更に又主を信じませう。何せかなれば捜す者は主を發見するからです。そして發見したら、主を
たゝへます。おゝ主よ。私は貴下を呼び、貴下を捜します。又貴下は私共に宜べ傳へられたのですもの。主よ、私の信仰は貴下を呼びます。此信
仰は御子の人間性により、又貴下の説教者達の奉仕により貴下から賜ふたものでありま
感せしめ給ふたものでありま す。

二　神　人　合　一

又私は、私の神で又主にまします。私の神をどういふ風に呼びませうか。分りません。

ません。といふのは、容器は壊れても、共に注がれ給ふ時でも、貴下が投げ下され給ふのではなくて、即つて私共を貴下がお散らされなさるのでなくて、即つて私共を蒐め給ふのです。貴下は、貴下の全體で以て、萬物總てに滿ち給ふのです。それとも萬物總てを容れられませんから、貴下の一部を容れるのですか。又總ての事物は、此その能力に相應した若干部を容れてるますか。でなければ。各々の或る部分は大きくて、他の部分は小さいのですか。從つて貴下は同じ部分を皆一緒に容れてるなるのですか。又貴下が私も貴下全體を包含してゐるないのでせうか。

四　神の屬性

では私の神は如何なるものにましますのですか。私は訊きます、主たる神でなくて何であらうかと。私は如何せなればほの外に誰か神でムいませう。又私共の神以外に

貴下を呼ぶのでせう。又何處から貴下はお出でなさいますか。何ぜかう訊くかと云へば、「自分は天と地とを滿たしてゐるのだぞ」と貴下が仰せられ、私の神樣が、その天地から忍に御降臨ましますが爲めには、私は天と地とを除いて、一體何處へ身を退きませうか、それが分らぬからでムいます。

三　神の遍在

貴下が天地を滿たし給ふが故に。天地は貴下を含有するのですか。或は天地は貴下を容れきらないからでありますか。貴下がそれをお滿しになつても、なほ其處に貴下の過剩があるのですか若しさうであるなら、貴下の殘部を、何に貴下は注入なさいますか或は、萬物を容れて後、尚容れ給ふ貴下は、容れまつるべき物を必要となさらぬのですか。といふのは貴下のお滿ちなさるのは、萬物を包容なさることで、これによつて貴下はお滿ちなさるのではありのですから。貴下のお滿ちなさる容器が、貴下を安定に致してゐるのではあり

語らぬ者は不幸です。といふのは他のことを喋つたとて、それは唖と變りがないからです。

五　赦罪の祈禱と神

誰か貴下のうちの憩ひを私に與へますか。誰か私の胸に貴下を入れて、私の唯一な善たる貴下を抱かせる爲めに、此胸を醉はして呉れるでせう。私は貴下に取つて何ですか。どうぞ私に語らして下さい。貴下は私に、貴下を愛せよと命じ、若し愛しないならば、貴下は私に對して立腹して、非常な患難を以て私を脅かし給ふではムいませんか。でも貴下は貴下を愛しないことが。つまらぬことですか。噫。どうぞ答へて下さい。おゝ主よ、私の神よ、貴下は私に對して何でありますか。私の魂に言つて下さい「私はお前の救ひだよ」と。私の魂に言つて下さい。御覽下さい。私の魂の耳は貴下のみ前にムいます。おゝ主よ、其耳を開いて、私の魂に言つて下さい。「私はお前の救ひだよ」と。私はその聲に跟いて走り、貴下を捕へませう。み顏を私に隱くさいで下さい。み顏を見る爲

至高、至善、至強、絶對の有力、絶對の實能。絶對の憐愍、絶對の正義、絶對の近在、絶對の美。絶對の強。常住で、捕捉し難く、不變であつて、しかも萬物を變化せしめ、新らしくもなく、古くもなく、萬物を更新し、驕者を老ひしめて、彼自らを悟らしめず、常に働き、常に休み、寛めてはるめ給ふけれど、何の缺乏があるでもなく、求めながらも、總てを持ち給ふ神よ、貴下は烦悩なくして愛し、憂慮なくして妬み、又悔みて、しかも悲まず、怒つて、しかも穏かに、みわざを變へ給ふも、目的を變へず、兒付け給ふものを取り給ふても、何物をも失ひ給はず、泣しくはなくて、獲ることを悦び、貪りはなさらぬけれど、高利を取り、自ら債務者とならんが爲め、貴下に對して過分の要求を許し給ひます。しかも誰か貴下のものならぬものを有ちませう。貴下は借りずして負債を拂ひ、借財を返して、しかも失ひ給ふことはムいませんか。けれども私の神、私の生命、私の聖き喜びよ。と私共は申しまして、誰でも貴下のことを語るとき、何と申して善いでせうか。けれども貴下のことを

を欺かうと致しません。私は貴下と是非を爭ひません。何ぜなれば、主よ、若し貴下が不義を照覽ましまさば。誰か克く支へることが出來ませう。

六　嬰兒と神の永遠

けれどもお恵みの前に私が訴へるのをお許し下さい、埃と灰とに過ぎない私の如きものでしても。なほ一度私に言はして下さい、私か話をしますのは貴下の御憐愍に對してするのですから。それは貴下だつても私をお嗤ひなさいます、私は只斯うよ。私は只斯うよ。それでも貴下は振り返つて、憐んで下さいます。主なる私の神よ、主よ、若し貴下は生きてゐる死に（私はさう稱びませう）或ませんー「私は此死んでゐる生命に（私はさう稱びませう）或何處からか來たものか知らないー」と。私は知らんのです。只私は貴下の憐愍の慰めに力づけられたことを私の肉の父母に聞かされました。（私自分では覺えの無いことですから）貴下は父からも母からも、又母のうちに。或る時私を形造り給ふたのです。ですから、先づ人の乳の慰め

めに、死〟ないないやうに、死なして下さい。

註〟イエホバの神を見る者は死すといふ信仰がユダヤ人にはあつた。しかも神を見ずとも死するのだつの（出埃及記二三C、申命記三三の一八、詩篇一四三の七）神を見て死するは、死てあつて死でないに死なう。是却つて不死の道だ、といふ意味である。

私の魂の家は貴下がお這入りなさるには餘りに狭いのです。どうぞ貴下によつてそれが廣くなりますように。又それは壊れてもあとから、建て直して戴きますから。けれど誰がそれを知つてをり、又告白致しますか。私はそれを知つてをり、又告白致しますの障りになるものが澤山ムいます。私の隠れた罪を潔めて下さい、知らぬ罪から貴下の下僕をお救ひ下さい。私は信じてゐるが故に語るのです。おゝ主よ、私の罪を赦し給ふたではありませんか。私は眞理に在す貴下と神よ、そして貴下は私の胸の不信を除き給ふたではありませんか。私は眞理に在す貴下と議論は致しません。又私の不義が、それ自身の僞證をする恐れがありますから、私は自分

げられました。すると容易にそれを信じたのです。他の嬰児がさうすることを私共は見てをるのですから。私は自分に關した斯麼ことを記臆してをりません。すると奈何です、少し宛私は自分の居る所を悟り出したのです。又自分は何が欲しいのかを、私に取つてくれる人々に知らせる望みを起しました。けれども私はなほ未だ充分には私の望みを彼等に言ひ表はすことは出來なかつたのです。望みは内にあり、人々は外におつたからです。又彼等もその何れの官能によつても私の魂に入ることは出來なかつたのです。だから私は手足をばたゝかせ、又出來る限り私の慾望に似寄つた他の若干の合圖をしながら、幾らかの言葉を出したのです。それでも此合圖は慾望には似てゐないものでしたから、成は私の意志が彼等に解らないか、又は聽かれなかつた時には、私は自分に從はなかつた年長者、又は私に奴隷的奉仕を背んじなかつた自由人に立腹して、泣いて復讐しました。嬰兒は斯るものであることを、私は嬰兒を見て知りました。私も亦斯の通りであつたことを、それを知つてゐる私の乳母達よりも、知らない嬰兒が、却つて克く私

が私に與へました。けれども母の乳は日も次第に出なくなりました。母は、のみ兒の口の大きな白い乳房と、穀物の粗末にあてもなく給ふ貴下の富にあふれる御慈悲とを思ひ比べて、貴下の御慈悲の食物を私に與へ給ふたのであります。久貴下が與へ給ふたものの食慾な私の乳母達に勝るやうに私に過分に與へます、貴下から受けたものの食慾な私に與へる心を、貴下から潤澤に與へた御慈悲に勝るやうに私の乳母達に與へます。何世かたれば乳母達に、貴下から受けた御慈悲を願けたのですか

れば、彼等が彼等から受けた恩みに、貴下から受けた恩みに、彼等に取つても恵みであつたからであります。けれどもそれは、彼等が彼等から来たものではなくて、彼等を介して来たものであります。なぜなら私は貴下の御慈悲の深い事は、貴下から出て、久私の神から私の健康も来たのですから。久後、貴下が内かも私に賦與し給ふた性質の本體が通つて貴下が私に御用となされたとほり、私は之等のものに適いたけでした。

その後私は久笑ひ始めました。先づ眠り、それから醒めました。私は自分の事を斯う告

の記憶も。貴下は斯る質問の爲めに私を
るものに
ついて貴下に讃美し、又懺悔す
を讃美し
。又私の記憶しない私の前生と
けれども
貴下は他人にあることを見て、
女の信仰により、人自らに關する多くの事を信ぜしめ給ひます。其時で
し、又生
きてゐました。そして既に嬰兒
思ひを表
はさうと致しました。斯る動物
う、又誰
か自分の創造者であり得ませう
から出て
。私共のうちに存在と生命を流
は存在と
下御自身
ぎ去らず
。或は貴下に於て過ぎ去りま

に致へました。

然るに今は奈何です、私の嬰兒時代は疾くに去りましたが。私は未だ生きてをります。

然し主よ貴下は、永久に生き給ひ、且つ貴下にあれば何物も死にませんの。何ぜかなれば。

世界の始まる以前。又以前と稱び得られる總ての物より以前に貴下は在し、御手に創られし萬物の神にして、且つ主におわしましたのです。貴下のうちには。一時的な萬有の、永遠にして、一時的な萬事の常住な起原と。不合理で、過ぎ去る萬物の原因と、變化する理智とが嚴存致します。神よ、語つて下さい、貴下は、私に語つて下さい、私の神よ、私の嬰兒時代は、既に過ぎた或る時代に續いたものでせうか。私はそれに就いて或る證據を持ち、又自らも娠姙してゐる女を見たのです。その前代といふのは私が母の胎内で過ごしたものでせう。私は何處に在つて。何でありましたらうか。私は此時期以前、神よ、私の喜びよ、誰も私に答へることが出來ません。父も、母も、他の者の經驗も、又私

人を導き給ひます。貴下は人を創り給ひましたが、どうかこれに正義を施して下さいますように。貴下の眼前には何人もこの罪を免れることはできないのです。嬰児時代の罪を私におぼえさせ給うな。地上に来た罪が一日の生命をもつうちからの無垢であるならば、誰が此事を私に心づけますか。私自身を思い出すことはできません。誰かこの罪を犯しましたから。それでは私に何で罪を犯しましたか。乳房を拒んだことも若し私が今よしや乳房に對してしばらくでも、年齢相當の食物に對して食りたいと思ったなら、私は叱られるでせう。だからその時ですらも、非難せられるべき程の事をしたことにはなりますが。私を養う者の心を推察し得なかったので、習慣も理性も私共が成長すれば、斯る小兒の習慣を恨こそぎにして、棄て去るからであります。又私は、貴い人であるなら、何物かを潔める時、それと共に善いものを棄て去るのを見たことがあります。何物かを求め、泣かれたら、自分の身は、若し與へられたら、有害なものを泣き叫んで求め、

あり。貴下が保有なさらねば。何物も過ぎ去ることがなく、無盡藏なので。貴下のお齢はいつも今日です。私共の日、私共先祖の日がどれだけ此今日を通つて過去となり、又それに依て彼等の存在の様式と限定とを受けましたらう。又他のものも矢張りそれからゆる明日と。又その先。あらゆる昨日と又その後な。貴下は貴下の今日爲さんとして、今日爲し給ふたのです。貴下自らはお変りなさいません。あらゆる者は此事を知らずとも、私にとつて何でありませう。こんな者は棄んで言ふがいゝです——「是は何だ」と。其者は喜ぶがいゝのです。それと一緒に在す貴下の「歳月」は——

七　嬰兒も罪人

お聞き下さい、神よ。悲しいのは人類の罪であります。人は是を言ひますとき。貴下は

明かであります。ですから神よ、主たる私の神よ、私の嬰児時代に如き諸種の官能をそなへ、四肢をといのへ、形を美にし、且つ一般らゆる手段を與へ給ふた神よ。貴下は斯うした事の爲めに貴下を褒ことを命じ給ひます。いと高い方よ。よしや貴下は是等のもの以外にしても、貴下は全能で、善い神に在すのです。なぜなれば、是等の事は誰もすることが出來ず、只貴下だけが出來るのですから。貴下は只一人在し、貴下から總ての様式は出て參ります。絶對の美よ、貴下は萬物に形を與へ、萬有をその法則で支配なさいます。

ですから、主よ、私の記憶にない私の生涯の此時代、私が他の者に聞いて信じなければならないより外仕方のない此時代は、たとへ斯うした諸々の證據は、非常によく私の推測の當つてゐることを保證したところで、私は自分が此世に送る生活のうちに之を加へることを好みません。それが忘却の闇に掩かれてゐることは丁度、私が母の胎内に過したと同様だからであります。けれ

を亡ぼすやうな命令を聞かれなかつたとて、自分の機嫌の善いやうにしなかつたと言つて、力の限り強請したことは、たとへ一時ではあつても、年長者達や、生みの親や、其他自分よりも賢い人々が、私の意志に奴隷的の服従をしなかつたとて、自分の機嫌の善いやうにしなかつた白山人やか。だから無垢は嬰兒の肢體の弱さにあつて、その魂にあるのではムいません。私は幼兒の姤むを見て知つてをります。それが未だ物も言へないのに、自分の乳を他の兒が呑んだといつて、どんなに蒼白くなつて、恨めしさうに眺めましたでせう。

誰か此事を知らないでせう。母親や乳母達は何だか分らない藥で、斯麼ものを宥めるといひます。けれども充分に溢れる乳の泉を頒けることをきかないのは、罪が無いと言へませうか。此あはれな兒は切に之を要し、又只それだけで生命をつなげるのではありませんか。けれども私共が愛を以し之を許るして置くのは、罪がないからといふのではなく、只年をとると共に之は無くなるからです。何ぜかなれば、若し同樣の罪が成年の人にあることが分れば、貴下が看過なさらぬことによつて

則によつて言葉を私に教へましたからです。私は叫めいたり。様々の聲を出したり。けれども、神よ。貴下その心によるように。私自らの胸中の僞りを表はさうと努めました。けれども私のもちいもの一切も。又私の欲するものもあらゆる合圖を以てしても私はそれをたのでムいます。そこで私はつく〴〵と記憶をたどり、人々か何かを名指へ彼等の身體を動かした時。私はそれを觀察し、それを綜合して、人々がれたのでムいます。此自然の言語は顏色、眼付、その他の部分の働き、聲音で、慾求し、享樂し、拒絶し、或は何かを避ける心の作用をあらはすのでムいます。斯何に、適當な箇所に於かれて。屢々繰返される言葉を、少し宛寄せ集めての記號であるかを知り。私の口を發音に從はせ、それによつて私は自分の意味を發表致し

ども若し私が不義でつくられ、罪に於て母が私を孕んだものとすれば、私の神よ、何處で貴下の下僕たる私は。また、何處で、又何時無垢でしたらう。けれども照覧ましませ。今私はその時代を省略してしまひます。何の痕跡をも想起し得られないそんな時代のことが私に何の關係かムいませう。

八　少年時代

嬰兒の時代から引續いて私は少年時代に入らなかつたでせうか。或は寧ろ少年時代が私に來て、私の嬰兒時代に續いたのではありませんか。けれども未だ嬰兒時代は去つたのでせうか、何ぜかなれば何處にそれは行つたでせうか分りません。それでもはなかつたことは事實だつたのです。即ち私は物の言へない嬰兒ではなくて、既に物の言へる少年であつたのです。その事ならよく記憶してゐますし、又その後どうして語ることを學んだかを觀察しました。それは私の年長者達が、後は文字を教へたと同じく、或る教

（け）れども私共は、主よ、或る人々が貴下に画るに、私共が貴下に画るのと、どこが違うのでしょうか。私共は偉大な方で、私共の官能にこと（の）出来る神方であることを、貴下は御存じなされないのでしょうか。私の避難所たる貴下に訴えるのは、私の舌の小さいながらも、私はよく貴下に訴えたのでした。而して貴下が聴き給うたのでした。（そこで）私が当時一番大きな、且つ一番ましい（と）思つた願いは、貴下が私に何の害も起ることを欲しないということでした。（悪鈍な者でもそれ程の事やらは）誰かでも強い筆等が只貴下に訴え付けるのでありましょう。人々が貴下に訴えるのは、其他様々の煩悶（これに比べ）ると、ずっと小さいものでありましょう。人々が貴下に訴えるのは、

ました。斯うして私は皆と一緒に交はし。私の慾求を傷へ、親の権威に人事の煩らはしい社會へ突入しました。

九　嫉ひな學校と好きな遊び

神よ、私が、未だ小兒であるものから、立身出世を爲し、人も羨ましがる富と名譽とを得る事と、私はどんな教師の人達に、服從を強いられたとき、私はどんなに學校に送られましたでせう。次いで學問をする爲めたが、おほよそ學問の役に立つものかをよく分りませんでした。しかれな話です、私はそれが何んのでした。しかてゐたからでした。

も學問を少し怠けれは、直ぐに打たれ

來るように。

勞苦と悲しみとが增されました。

他の教師に負かされると、私がテニスの競技で仲間に打負かされた時とひどく怒つて、相手を怨むのではムいませんか。

十　遊戯に熱して兩親の戒を忘る

けれども私は罪を犯しました。主なる私の神、自然の創造者で、又は只司法者。罪について何ぜかなき罪を犯しました。私の神よ。私は兩親と、是等教師の戒めに背者である主よ、私に達成せしめようと彼等が欲したれば、彼等が何の目的でさうしたらうとも。私に達成せしめようと彼等が欲したのを、私は後になつて善用し得たではムいませうから。然るに私が彼等に從はなかつたのは、一層語い道を擇ばうと思つたからではなく。只徒に遊び度いばかり、あらゆる遊戯で大將になり、私の耳をつまらぬ作り話で擽ぐり、一層烈しくこれが眼からも光つて、大人達の行く見世物や、遊戯に向ひ刺激せんと欲したいます。同樣に仕方のない好奇心ました。その業（わざ）をする人達は、殆んど總ての觀客が、自分等の子供もそんなもの

責を突つたやうに、それを悲しく恐れる人がムいますか。私共も管を恐れないのでもなければ、他の者共よりもそれを免れようと、祈りのでもなければ、又課業のこともなおざりにしながら、私共は讀書にも、習字にも、それ程恐れかつたのでムいます。それ程恐れるにも、要求されたよりも催かにして、餘りに多く遊戯に耽りました。私共は、記憶も又才能も欲しくはなくて、年の割には豊かに貴下が下さつたやうに、それを免れようと、祈りのでもなければ、他の者共よりもそれを恐れない

にしたいと思ふ程、その業によつて多くの名誉を得るのでムいました。それにもかゝわらず、若し野る遊戯によつて勉學が妨げらるゝれば、悦んで打たれました。しかも彼等は勉學に於て他日共子を同様なものに仕上げようと願つてるたのではムいません。主よ、あれ等は是等のことを見、今貴下をお呼びする私共を救ひ出して下さいませんか。主よ、それは非者共が貴下をお呼び申す者から救ひ出して下さいませ。また貴下を呼ばないからでムいます。

十一　大患と洗禮の延期

けれども既に少年の時から、私は、私共の傲慢であるが爲めに、降臨ましました主なる私共の神が謙遜によつて私共に約束し給ふた永遠の生命のことを聞いてるました。又非常に貴下に信頼した私の母の胎内から、既に十字の記號をしるされ、御子の鹽に味つけられました。（マタイ傳第五章廿三節）主よ、私が少年の時、或る日突然胃が苦しくて殆んど死ぬところ

ん。けれども、どれ程多く、又どんなに烈しい誘惑の浪が、私の少年時代の後に、聖なる像（「神其像を造り給へ」創世記）よりも、遙か私が後に新らたに錆込まれる鑄形の粘土を其誘惑の浪にまかせようと欲しました。

十一　學問を強いらる

けれども青年時代よりも私に餘の恐れられなかつた此少年時代に、私は本を好まず。それでも私は強いられました。尤もそれは私にとつてよい事でムいましたが、私はそれをよくは致しませんでした。私は強いられねば、決して學問をしようとは致しませんでした。尤も誰も自分の意志に反して善くは致しません。又私を強いた人々もそれを善く致しませんでした。私に善い事をしたのは貴下だけでムいました。何ぜなれば、私に學問を

下が仏の父としようと労めたからでムいます。父助け給ふたからでもムいます。母は父よりもなりました。しかしさうしたのは貴下の御命に従つたのでムいますが、何の為めに斯う私の洗濯が延期されたか知りません。又恰もその為めに罪の手綱が弛められたやうに感じます。それとも事実は弛るのもれたのではなかつたのでしたらうか、それなら今なほ八方から次のやうな苦か盛しく私の耳を撲つてくるのは何故でムいませう。

「抛つて置け、あいつに何でもさせて置け。あいつは未だ洗濯を受けてゐないのだから」と。けれども肉體の健康については――「もつとひどく怪我をさせろ、あいつは未だ癒つてゐないのだから」とは申しません。ですから直ぐに癒されて、私の友人や私自身の勉励により、私の魂に健康を恢復せしめ給ふた貴下の保護の下に置かれたならば、それはどんなに善かつたでムいませう。眞個、遂によかつたにちがひはムいませ

いました。（即ち文典ではなく文學が好きだつた）と申しますのは讀み書き、算へる初歩の諸學課は、も劣らぬ厄介物、又愚鈍と思つたからでからでなくて、何處から來ませうか。何とい風に過ぎないからでムいます。それは勿論此小學の學課は、忽ち書いてあるものを覆へ、自分の欲するものを書くだけの技術を私に授けたし、又現に授かつてもゐるのでムいますから、私は自分の漂浪は忘れながら、知りもしないエーネアスの漂浪を暗記さへ、或は又、神よ私の生命よ、哀れな私が貴下に對する愛の無いところから、低まされたりする羅典文學などよりは優つけれども自分を憐まぬ情ない者よりもつと慘めなものがありませうか、即ち、エーネアスを繞して死んだディドに向ひ涙を注ぎながら、貴下を愛しないで自分を哭かない人間より以上慘めな者がありますか。おゝ神よ、私の魂の光りよ、私の魂と、私の胸とを結ぶ最

強いた人々は、富める乞食心（こじきごころ）と、恥づべき慾望の飽くなき慾望を滿足せしめるのでムいます。けれどもその眼には私共の髪の毛の數すらも算へられる貴下は、私に學問を強制した者共總ての共通な謬りを悟じて、私自身の利益となし、學問を欲しない私の過ちを私の懲罰に轉用し給ひました。その懲罰は、當時小さな兒童で、又大きな罪人であつた私に決してそぐはぬものではムいません。斯うして貴下は善くしなかつた人々によつて、私の爲めによくして下され、私の罪によつて、正しく私を鬪し給ひました。それは貴下は常軌を逸した人間の慾情は、人間自らの罰となるやうに定め給ふて、その通り實行なされていらつしやるからでムいます。

十三　荒唐無稽の古典

然し私が少年の折に教へられた希臘語を何ぜ嫌つたか未だに解りません。羅典語は私は大好きでムいました。それも文法家が授けるものでなく、文學者が授けるものが好きでム

眞個（まったく）でムいます。小學校の入口には帷（カーテン）がかけてあることは。けれども之は貧しくて、誤謬の看板に過ぎません。今は私が恐れもしないその小學の教師達をして、私を叱らせないで下さい。然し、私の神よ、私は告白致します、何を私の詐い道を愛する爲めに、私自らの惡るい道を安心して排斥するを。又貴下の賣買者をして、私に向ひ叫ばせないで下さい。若し私が、詩人ぞ是等文法學者の言ふのが本當で、エーネアスは當てカルターゴ來たのかと彼等に訊くなら、無學な者は知らないと答へませうし、學んだものは、それは本當ではないと否定しませう。けれども若し私が、エーネアスの名はどんな文字で書かれてあるかと訊くなら、それ位のことを學んだ者なら誰でも、便宜上人々の間に約束せられてゐる符號を正しく言ふでせう。そこで再び、私は伺ひますが、讀み書きと、それとも詩的物語と、どちつを忘れた方が人生により少く損害をか。白痴狂者ならざる限り何と答へるかを誰が知らないでをりませう。ですから私は小兒の時、此無益なものを、有益なものよりも餘計に愛して、といふ寧ろ是

も丈夫な絲よ。私は貴下を愛しませんでした。又貴下に反いて姦淫を行ひました。然るに傍の者は「克くやつた、克くやつた」と囃し立てました。然し此世を愛することは神に對する姦淫でムいます。然も此姦淫者は、人がさうをしないのを恥と思ふ程盛んに暗策し、奨勵するのでムいます。けれども私はこを哭きは致しませんでした。却つて劍に伏して死んでデイドを私は泣くように仕向けられたのでムいます。私由らは、貴下を棄て様なつの此いやしい者のあとを躡ひ、自らも賤しい土でありながら土へと急ぎました。然し若し斯なに悲しませるものを讀むことを禁じられたら、私は悲しませるものを讀めないので。どん。

然しんだでムいませう。斯る馬鹿げたことが推稱すべきものと尊ばれ、讀み書きするりも美しい學問が尊ばれのでムいます。

私の神よ、今私の魂に叫んで下さいませ——「さうではない。さうではない。前に言つた方（讀み書きの小學の學問）がずつと善い學問だぞ」と。何ぜなれば、私は讀み書きよりも。遙か容易にエーネアスの漂泊や、その他のつまらぬことを忘れてしまふからでムいます。

又羅典語とも知らない幼児の時代からありましたけれど、私は何で、一つも知らない幼児の時代から、乳母達の他愛ない事や私に話す間に、突いて、面白い話をして呉れんでくれる人をや、私と遊びによつてそれを拾得したのでもなくして、之を學びました。私のこゝろの思ふことを言ひ表らはさしたのですに、その思ふことを言ひ表らはさしたのです。是は、私が様々の言葉――と言つて、教師が教へてくれる言葉ではなく、先方が私に打解けて話り合ふ人々の言葉を學ばなかつたなら（會話によつて習得したのです――譯者）迚も出來なかつたことです。私の方でも又自分の思つてゐるまゝを口に出して話り合ふといふものは、自由な好奇心の方が、他から加へられる壓迫よりも有力なことの解放を拘束致しますの。けれども神よ、此力は貴下の掟によつて、自由の解放を拘束致しますの。けれども神よ、此力は貴下の掟によつて、自由の解放を拘束致しますの。その貴下の掟は、教師の鞭から、殉教者の試煉に至るまで、健全な苦味をもつてゐて私共が貴下から誘ひ出す愛病的快樂から、再び之許へ呼び戻すものでムいます。

を嫌ひ、彼を愛して罪を犯しました。「二に二足すの四」は私にとつてはエーネアスの中にある木馬のことを意味す（エーネアスの中にあ）。トロイの燒打、クレウサ（エーネアスの妻）の亡靈などはつまらぬものゝうちで最も面白い觀物でした。

十四　希臘語ごと羅典語

けれども當時は「一に一足すの二」「二に二足すの四」は私にとつて實に耳障りな歌でムいました。けれども武にの一杯に入つた木馬（ヂヴアルス）

けれども何せ當時私は此の様なことを歌ふ希臘文學を嫌つたのでせうか。ホーマーも矢張り斯麼話を巧みに拵へて、最も面白い下らぬものでしたのに、少年の私にはひどくいやだつたのです。私は信じます。私がホーマーを學ばされたやうに強いられたら、希臘の小兒に取つてヴアジルは矢張り同じ事でしたらう。眞の困難、別言すれば外國語を學習する困難は、丁度ギリシヤ寓話の甘いところへ、膽汁を注ぎかけたやうなものでした。私はその一語をも知らないのに、無暗に呀し付け、懲罰を加へ、無理強いに學ばされたのです。

そんなものは、それほどつまらなくは無い研究に於ても。亦學ぶことが出來た筈です。

又それこそ小兒の行くべき最も安全の道でムいました。

十六　荒唐な話の害毒

然し難ずべき、滔々たる世の風潮よ。お前は何時まで誰かお前を押止めやう。

子達を躾かせて、木の上に乘つた人すらも之を乘り切ることがやつと出來た程な、巨きく、恐ろしい海に漕ぎ込むのか。（木は卜宇架のことそれに乘る人は殉教者）私はお前のうちに、或る時は雷鳴し、或る時には姦淫するヂユピターのことを讀まないか。けれども一人で斯う兩方を兼ねることは出來ないものである。事實は、雷霆の作り話に托つけ、本當の姦淫の眞似を許るさうとするのである。けれども私共の長袖の教授共のうち誰か、自分等と同じ校舍の埃りの中から出て來た者が「是はホーマーの作つたので、人間の事を神々に移したのである。けれども自分は寧ろ神々の性質を人間に持たして欲しかつた」と叫んだからとて、それに耳を傾

十五　神の愛を祈る

主よ。私の願をお聽き下さい、貴下の矯正の下に私の魂を汨喪させないで下さい。又貴下が私の最も惡い路から私を救ひ出して下さつたそのみ惠みに私が告白して來たあらゆる誘ひから超脫して、一層快きものとなり給ふ爲め、又貴下が私を引き出して下さるやうにと祈つたそのものを愛して、私の心の全力をあげて貴下に取り縋り、遂には誘惑のあらゆる危險から

譯者註、テレンス即ちデレンチウヌは羅馬の喜劇作家の名である。彼はヂユピターがアグリシアス王の女ダナエに懸想し、その幽閉されてゐる銅の塔に、黄金の雨となつて降り。ペルシユースを生ましたといふ神話の描畫を見てゐる青年を自分の作中に取り入れたことを此處では指してゐる。

此若者は言つた——

「して如何なる神かと、彼は言ふ。

いとも高き天の宮居をその雷にて震はすは

又我ゝ。人は斯ることを爲し得じとや。

我は爲せしぞ。喜びて爲せしぞ。」

決して〳〵此汚穢な事によつてそんな言葉を學ぶのは便利でない、却つて此等の言葉に汚穢が安心して爲されるだけである。私は斯る言葉そのものを非難するのではない、言葉は善い器である。けれども其器に入つてゐる、醉ひしれた教師達に依て私共に飲まされる葡萄酒がいけないといふのである。しかも私共もそれを飲まないならば

けるだらうか。けれども本當に之をホーマーが逆つた。又神々の性質を恥づかしい人間に附與して、恥も恥でないようにして、誰でも同樣なことをする者は、墮落した人間を眞似るのではなくて、天上の神々を眞似るのだと思はせようと作り設けたものである。

尚又、おゝ地獄の河よ、人の子等はお前の中に投げ込まれ、金を拂つて、斯麼作り話を習らはされる。そして公會に於て、學生の支拂ふ謝金以上に斯金の收入を許す法律の下に、公々然之を演述する時には大仰なものである。しかもお前はその嚴々に當つて、激し、吼えて言ふ「此處で言葉が學ばれる。此處で雄辯が修得し得られる。こゝで意志の表明し、最も必要な辯舌が得られる」と。それではまるで、ヂユピターが黄金の驟雨となつて、自分が誘惑せんとする女、ダナエの膝に降つたといふ話を描いた繪を見て、ヂユピターを自分の姦淫の模範にした猥褻な若者を舞臺に上げなかつたなら、「黄金の驟雨」「豚」「欺き」「天の宮居」等の辭を私達は決して知らなかつたらうか。見よ、如何に此若者が肉慾に與奮するかを、まるで神の權威を身に受けてさうするかのやうではないか。

てゐる人物の嚴厳に従ひ、よくその忿怒やら嘆きやらを現らはし、最も適した者の言葉は最も喝采せられたのです。おゝ私の眞の生命、私の神よ、私じ年、同じ級の多くの者共に優つて褒られたからとて何になりませう。是は皆煙や風ではムいませんか。又私の智恵や辯舌を費す程のものも無かつたでせう。貴下の讃美は、貴下の聖書によつて、私の胸の柔かな新芽を支へてゐるたらう、そ斯様なつまらない些事に曳摺られて、空の鳥の汚い餌にならないで濟んだのでし。といふのは墮落した天使等（悪魔のを意味す）に献物をする道は唯一つだけよりないのでません。

十八　人の掟は守り神の法律には背く

けれども、模範として私の前に置かれた人々が、元來は悪くないその人々の或る行爲を語るのに、下卑た口をきいたとか、無作法な言ひ方をしたとか非難せらるれば、狼狽しな

私共は嘗(かつ)て喰はされて、之を訴えやうにも素面(しらふ)の裁判者を得ることが出来なかつたのだ。

おゝ私の神よ、今み前にをればこそ、想ひ起しても安全でムいます。私は不幸にも斯る物を、大喜びで、進んで勉強し、そのお陰で。之は前途有望の男児であると言はれました。

十七　教育の無効

おゝ私の神よ、貴下の思賜であつた私の才智と。又それをどんな馬鹿げたふうに毀したかを語らして下さい。私の魂にとつて。非常に面倒臭い問題が私に課されました。それは御寮美か、或は恥と苦かといふ條件が附いてをりました。たとへば。トロヤ王を伊多利が追ひ出し得なかつたことを怒り。且つ悲しむデュノ（前記の雷神デュピタールの妻にゐる羅馬の女神）の言葉を復誦せよといふやうなのが課題でムいました。しかも實際デュノはそんなことを言はなかつたと私は聞いてをります。けれども私共は此詩的な物語の足跡を踏み迷はされて、詩人（ヴアルデ）のことで、以上には其著作エーネアスのことゝ）が徘語で書いたところを散文で書かれてあつたのでした。また描かれ

から聖顔から眞に遠ざかるのは暗い情慾によるものです。

おゝ主なる神よ、御覽じませ。いつもの通りに辛棒強く御覽じませ、彼等の以前に語つた人々から受けた文章、默辭句の約束を注意深く守りながら、いた永久の救ひの約束を無視してをるでムいませう。たとへば發音古來の法則の學習者は、Hom-o(人間)といふとき、最初の綴りに、文法通り强勢(アクセント)をつけないある教師や學習者は、人間たる其人が、貴下の御旨に反して、人間を憎んだつたら、人があつたら、それはまるで人は誰でもその敵は、それに對して自分が起した憎りつけるのでムいます。惡の念以上に惡いものだと感じ、或は怨恨により自分の魂を傷ける以上に、してゐる者をひどく傷けることが出來ると想つてゐるやうでムいます、まつたく良心の此法則、卽ち「自ら欲しないことを他に爲す」(マタイ傳第七章、第十一節)法則にまさる文字の眞の智識はムいません。いと高いところに、無言で在す神よ、唯一人にましまして、忘らぬ法則により、不法な野望の罰として、肯目(めくら)と爲し給ふ神よ、人が辯舌の力を恃み、人間の審判者の

がら、自分等の不仕鰐な生活を、豊富な、修飾された、態裁の善い言葉で賞揚せらるれば、それを名譽とした時代に、私かみ前を離れてい斯うまで虚榮に乘せられたことが何の不思議でムいませう。「長く忍びて、憐憫と眞理とに富み給ふ主よ」貴下は之を見そなはしていらつしやいませうか。今でも、貴下は、默ていらつしやいます。貴下は永久に默つていらつしやいませうか。「その心汝に向ひて、我汝の聖顏をたづねたり、主よ、我汝の聖顏をたづねん」(詩篇第廿七の第九)と云ふ魂を此熱ろしい深淵から引き出して下さいます。暗い愛慾は貴下の聖顏から私を遠ざからして居るからでムいます。貴下から離れ、又は貴下に歸るといふのは、足によつて歩むからのことでもなければ、距離があるといふのでムいません。またあの若い放蕩息子(ルカ傳第十五章)が遠國に行つて、出發の時貴下が日的で馬とか、車とか、又は見える翼を望みなされたものを抛放蕩の生活に耽すのでした。貴下は彼にお與へなさつた時には慈愛の父に在したのですが、彼が無一物で歸つたときには、なほ更慈悲に在したのです。だ

遊びが好きで。玩具を欲しがり。芝居の眞似をしたく。そわ〳〵とつて師傅。教師兩親を欺いて、自分と同じい者にまでも嫌はれてる私の如き者よりも。

私は又親の窖(あなぐら)や食卓から盜みも致しました。貪慾にとらはれてかそれとも白分等も私と同じことをしたのでムいます。又此勝負に於て優者とならうとする慾望に打克たれて、欺瞞的に私が爲てるると同じ不正なことを、他の者がやつてるのを見付けた時には、どんなに私は幸棒氣がなく、又どんなに激しく喰つてかゝつたでせう。しかも自分が見付かつたら、私は承服するより、寧ろ喧嘩を致しました。足は少年の無邪氣でムいますか。ではムいません、主よ、決してさうではムいません。私は貴下に御慈悲を叫びます。私の神よ。私共が年をとつてから後には、師傅や教師や、栗や、雀などがなすてますが。その代りに、王や、知事やに關し、又黄金、邸宅、奴隷を得ることについて。同じこと。まつたく同じ事があるのでムいます。けれども此小兒の遊びは、丁

前に、多くの人により取り巻かれ、その最も猛烈な憎悪を以て、其敵に對して罵詈する時には、自分の舌が人々の前でOmne（Homines）（Omnes）（人）といふべき場合に誤つた發音をするやうな）といふやうな失策りを（しくじり）せないやうに、最深の注意を拂ひます。けれども怒りの爲め、人を社會より放逐することを氣にかけません。

十九　少年の罪、大人の惡

是こそは私が不幸にも少年時代に習慣の門口でムいました。私の神よ、私は是を申上げて、貴下に懺悔致します。けれども其様の計に恐れた私は仲間に褒められました。彼等を悦ばすことを當時私は善いことと思つてるなことで、私は是こそ私が、破格をすることを餘ました。當時私は貴下の眼を離れて投げ込まれてゐた。汚穢の渦巻く淵に氣がつかなかつたのでムいます。貴下の眼の前に既に汚れた私よりも、もつと汚れたものがありましたか

れ苦痛、卑陋、無智を避けました。斯様な小さな生物にあつて、之が不思儀でなく、感嘆すべきことでなくて何と致しませう。それを私に賦與したものは私ではムいません。然らば私を造つた方が善いわけでムいます。其方は私のが私自身なのでムいます。又そんなものは善いものでムいません。それを一緒に集めたもの善なのです。其方の前に、私は自分が小兒のときにもつてゐた、あらゆる善の爲めに讃美を捧げませう。その方に於てゞなく、その方の創造物——自身やその他のもの——に於て、私が快樂、崇高、眞理を求めて、悲哀、混亂、誤謬の中に、眞逆様に陷つてしまつたのは私の罪でありました。私の悦び、私の光榮、私の信賴に在す貴下に感謝致します。私の神、貴下の恩賜に對して感謝致します。けれどもその恩賜をなほ私に戴かして置いて下さい。そこで貴下が私を保持して下さるなら、貴下が私に下さつた物は增大せられ、完成せられ私自らは貴下と共にをりませう。なぜかなれば、私の存在は貴下の賜物なのでムいますから。

度盛の後に、なほ大きな間が續くやうに、年を一層とるにつれて、以上のものに引き續かれます。ですから私共の主に在す貴下が「天國にをる者は斯の如き者なり」と仰言つて諫の裏微として膝みし給ふたのは、只幼兒の身丈が低いことを意味し給ふたまでのことでムいます。

二十　神に恩賜を感謝す

けれども敢も殆れて、最も善い、宇宙の創造者、支配者の主よ、私に只少年時代だけの生命を下さつたにしても。私はその時ですら存在し、生きてゐます。私は感謝致します。

感じてゐたのでムいますもの。私の安寧に掃理が——非處から私が出て來た——神祕な統一の痕跡があつたのでムいますもの。私は内部の感覺によつて、私の感覺全體を保護し、是等の小さな事に於てすら、小さな事物に關し思惟することに於てすら、員理を悦んだのでムいます。私は欺されることを嫌ひ。旺盛な記憶を有し、辯才をそなへ、友情に慰めら

貴下の眼に厭ふべきものとなり、私の美は消え失せてしまひました。

二　情

慾

又愛したり、愛されたりすることに、私は何を愛しましたらう。けれども私は精神からの愛の尺度、即ち友情の境界を守らないでしまつたのです。そこで肉の時明と情慾と、青年の空想から、霧が立つ騰つて、私の胸を蔽ひ暗らまし、私は愛の區別を如ることが出來ませんでした。此二つがゴチャ〳〵に私の裡に煮えて、私の恒心なき青春を、不潔の斷崖の上に追ひやり、私を恥辱の淵に陷らせました。貴下の怒りは私のそれを知らなかつたのでムいます。私は自分の死滅の鎖の環によつて私の魂の傲慢の罰でムいました。斯うして私は愈々貴下を遠ざかり、貴下は私にかまはないで、私は揺られ、浪費られました。私は姦淫に煮えかへり、しかも貴下は靜まりかへつてをられました。おゝ私の遲い歡喜よ、貴下は共と

第二篇

罪の青年

私は今自分の過去の汚穢と、私の魂の肉的腐敗とを想ひ起しませう。それは私がそんなものを愛するが爲めではなく、私の神よ、貴下を愛しようといふのだからであります。私の最も悪いことを、貴下の愛の爲めに私はさうするのであります。私の憶のうちに顧みて、貴下が私に慕はしいものとなつていたゞき度いからであります。貴下は非常に苦がい記慕はしく、一方には、惠みあり、且つ確實な慈愛によしまず神よ、貴下は放蕩な粉味の塵に引き裂いて、唯一にましまず神よ。貴下に背いて、私が雜多なものゝうちに身を沈めてしまつたとき、私を取り纏めて下さいました。私は靑年時代には、地獄(ハ)滿足を得度くて、影のやうな樣々の愛に狂つたのでした。自分を悅ばし、又他人の眼を悅ばさうとして、私は

（同第七章第廿二、廿三）といふ是等の言葉に私は一層注意して耳を傾け、天國の分として聖別せられて、なほ大きな幸福を以て、貴下の抱擁を待ち望むべきであつたのでムいます。けれども、あはれな私は、丁度荒らぶる海のやうに、私自らの潮の奔るに任かせて、貴下の命を悉く乘り越して、泡立つたのです。それでも私は貴下の答を免れることは出來ませんでした。どうして人間にそんなことが出來ませう。貴下は何時も私に對してお情けで嚴にして、私の不檢束な逸樂に、最も苦がい雜ぜ物をなさいました。私に雜りのない快樂を求めさせようとの思召だつたのです。はれども主よ、貴下に於てゞなく、何處に斯様な快樂を求めることが出來ませう。貴下は悲しみに依て救へ、癒やす爲めに、私共を傷け、貴下を離れて死なゝいように、私共を殺し給ふのではムいまんか。私が肉の年十六才で、貴下の法律は許しませんけれど、人間の無恥が、それに勝手氣儘を免してゐる肉慾が私を支配し、私が全然それに身を任せてしまつた時、私は何處にゐましたか、又どんな處まで落んで貴下の御家から放逐されたのでしたらう。私の友達も當時結婚によつて私の

き靜かりかへつておいでなさいましたので、私は猶更速く、貴下から遠く迷ひ出し、自棄自棄になつて、なほ〳〵重のない悲み(たねはたけ)の種畑へ蹈み入りました。

嗚、誰かゐて私の辛慘を愉快にし、是等の最新な虚榮の褪せゆく美を善用したならばよかつたでせうに！　その樂しさに制限を加へて、私の青春の潮が、よし靜まらないまでも、結婚の岸に打ちにげて、主よ、貴下の攝理が定めてゐるとほり、家族を造る目的のうちに止まつたならばよかつたでせうに！　主よ、貴下は斯うして、貴下の樂園から追はれた荊棘を優しいまでに、私共の子孫(人間の子孫の意味)を造り給ふのではムいません。貴下の大能は、私共が貴下を遠ざかつてゐる時すらも、私共から出た聲に(天來の言葉即ち聖書に)注意した答でムいます。即ち「されど斯る者は其身苦みに遇はん。おれ汝等を苦難にあはすに忍びず」(哥林多前書第七章廿八)と、又「男の女に觸れざるを善しとす。」(同上第七章一)と、又「妻なき者はいかにして神を悦ばせんと世のことを考ふ、されど婚姻せし者はいかにして妻を悦ばせんと世のことを考ふるなり」

信仰の生活以上に、貴下の御身に近いものは何でムいませうか。又誰が私のものがムいませうか。自分の力に及ばぬまでも、彼はその子息の勉學の爲め、遠い旅に出る總ての必要品を整へようとしたのでムいますもの。遠かに自由のきく市民達でも、その子供の爲めに、斯麼ことは致しませんでした。けれども此父は私が貴下に對してどうなつたか。どんなに純潔であつたかは少しも心配致さなかつたのでムいます。その結果私は只辯舌に富み、貴下の畑である私の胸の、唯一の眞なる、又善い主にまします神よ、貴下に對する開拓については荒るゝがまゝに打棄てゝムいました。

けれども此十六の年。一時（惡惰の一時期が兩親の手許不如意の爲め挿まれることにムいましたが）學校を退いて兩親と一緒に住つてゐるうちに、不純な情慾の荊棘は私の頭に生ひ茂り、しかもそれを拔取る手がなかつたのでムいます。のみならず、私の父は、私が入浴してゐるとき、既に成熟して、逸り勝ちな青春の氣の漲る私を見て、早くも孫のことを期待して、喜んでその事を母に告げ、創造者たる貴下を忘れ、我意といふ精神的な酒に醉

墮落を救ふ心配をして呉れなかつたのでムいます。彼等が唯一の心配は、話して、有力な辯士となることでムいました。

三　學業の中斷

　其年私の學業は中止されました。けれども、更に遠くカルターゴに旅する用意してありました。しかもそれは、タガステの貧乏な白山民に過ぎないがゆるした（習ひ始めたところ）から歸るとからなのではなく、寧ろ其決斷によるものでムいました。誰に私は是を話してるのでせうか。まつたく、私の神よ。貴下のみ前で私の同胞に對つてゞはムいません、たゞ極めて僅かな部分に對つて之を言ふのでムいます。しかも偶々此書を讀む人類の爲めに私が之を言ふのでせうかと、總て之を讀む者に、奈何深淵から私共は貴下を呼び求むにきかを明かに考へようといふのでムいます。私自ら

だと思はれました。けれどもそれこそは貴下の御言葉であつたのに、私は知らなかつたのです。そして私に劣らぬもの共が、共大罪でムいます。で貴下は無言にましますもので、語るものは單に母だと思ひました。實際は又私によつて、即ち彼女の子息たる私によつて、母のうちの貴下は侮辱さ母を通して貴下は私に對して無言ではましまさなかつたのでムいます。母のうちの貴下の女中、貴下の召使の子息、貴下の御言葉であつたのに、私は知らなかつたのです。けれども私は知らなかつたのです。そして私に劣らぬもの共が、共大罪を誇るのを聞くとき、いや、それどころか墮落すればする程、彼等がそれを誇るのを聞くとき、私は仲間のうちでは、厚顏無恥になりやうが少ないのを、恥ぢと思ふ程日がくらんでをりました。そこで私はさうすることの面白さの爲めばかりでなく、褒められるのが嬉しさに、そんなことを致しました。貴むべきものは惡でなくて何でムいませう。けれども自分を惡いものに致しました。實際よりも自分を惡いものに致しました。又何事にでも恥溺した者共のやうに罪を犯さなかつた場合には、私は爲ないことを爲たやうに見せかけました。無垢の爲めに卑屈と見られ、純潔の爲めに輕蔑せられたくなかつたからでムいます。

ふて、貴下御自身の代りに、貴下の創造物に愛着して、岐路に入り、最も卑しい物に拝跪すべき官能のさやぎに耽んでゐました。けれども貴下は、既に母の心のうちに貴下の神殿とその聖き住家の建築を始め給ふたのでムいます。けれども父は未だ洗禮志願者で、その入門も極く最近のことでしたから母は敬虔な恐怖と、戦きとに、冷々してをりました。又私は未だ信仰に入りませんが、貴下に後ろを向けて、正面しない人々が行く邪道を、私が踏みはせぬか心配とてゐらつしたと私は敢て申しませうか。本當に貴下は其時默つてゐらつしたでせうか。貴下に忠誠な私の母を通して。貴下が私の耳に唱ひ給ふたのは、み言葉でなくて何でムいませう。けれどもそのうちの一言すらも充分私の心に這入つて、そのとほりにさせなかつたのでした。母は私が姦淫をせないように、殊に他人の妻を冒さないようにと、殊に私を警めたことを私は憶えてをります。斯麼ことは私には女々しいことで、それに從ふのは恥

並みの學問は雪に貴下に到達する妨げとならないばかりでなく、却つてその促進とすら思つてゐるたのでムいます。私は出來るだけよく兩親の性質を憶ひ出して斯う推測致します。それに遊びに暇を潰すことには、適當に嚴しかるべき制限を越へて、手綱は弛められるどころか、放埒に流れて、樣々に私を苦しめました。そして總てのものには霧がかゝつて、私の神よ。貴下の不議は肥え太り飛び出づる」ほどになりました。（詩篇第七三の第七）

四　盜み

主よ、盜みは貴下の法律にも、又人の胸に書かれ、其不義を以てしても消滅させられない法律にも罰せられます。盜まれて默つてゐる盜人はムいません。なたとへ自分は物持ちの盜人であつても、貧乏なものに盜まれることを許しません。けれども私は盜まうとして。飢じさの爲めでも、貧乏の爲めでもなく、只正義を嫌ひ、不義を欲してした

如何でムいませう、私はどんな仲間と一緒にバビロンの街（滅亡の市街の意味）の中に、その泥濘（ぬかるみ）に臥轉んだではムいませんか。そして私がそるで肉柱や貴重な油の中にでも臥るやうに、動きが取れないでるるようと、眼に見えない敵は私を踏み付け、私が誘はれ易いのにつけ入り、私を誘惑したのでムいました。又バビロンの中心を逃れ出ても、未だその郭外を一層のろ〳〵歩るいてるた私の肉の母も、私に純潔を忠告した程には、自分の良人から聞かされた私のことに注意してちにそれを制限しようとは致さなかつたのでした。尤も母は此放埒は速かに除かれてしまはれないなら、現在では悪疫のやうなもので、未來にとつて危険なものと思つてはるたのでムいます。母が此事を意に介しなかつたのは、妻といふものが私の出世の希望の妨げをするだらうと懸念したからでムいます。その希望とは、母が貴下のうちに置いた來世の希望ではなくて、兩親ともに無暗と私に成就を慾求した學問の希望でしたを少しも考へてならず、私のことは只虚しい僞りだけを考へてるましたし。又母は此世間

よつて何物も求めはせず、恥その物を求めて、お前の蒼空から、亡滅の中に墮ちた魂よ！

五　原因なくして罪はない

總ての美しいものには、卽ち金にも銀にも又總てのものには、魅力がムいます。身體の接觸に於ては、浮世の名譽にも又優美、征服力、支配力があつて、そこから又同情の力が甚だ強く。各々の官能はその適當な目的物にしつくりと合ふも のでムいます。しかし是を皆得ようとして、主よ、貴下を見棄て、又貴下の掟に反くことは許されません。私共が暮らしてゐる生活も又、それ〳〵似合つた自らの蠱惑（こわく）とは此下界のあらゆる美しいものに相應するものを持つて居ります。人間の友情も又多くの魂に形造られるものとせられます。總て斯る原因又は同樣に、愉快な結合によつて慕はしいものとせられます。總て斯る原因又は同樣なことにより罪は犯され、又最も低い階級にある是等の善に過度に傾倒するから、、、より善く。、、より高いもの、卽ち貴下、私の主なる神、貴下の眞理、貴下の法律が棄てられてしま

ことでした。何せなれば、私は充分に持つてゐるものを、また遥に善いものを持つてゐるものを、盗みましたのですから。私共の祖国近くに一本の梨の樹がありましたが、色も味も別段によくもない癖がそれに生つてをりました。之を揺り落して盗む程の為め、私共の或る狡猾な若い者共が一夜遅く出掛けました。その為め、私共の弊風に従ひ、共時間まで街道で遊ぶのをやめて、それで食べもしないで、残りは豚に投つて喰はせたのでムいます。斯麼とは許されないとでしたから、恣々私達は喜んでしたのです。神よ、照覧ましませ私の胸を、それは只悪そのものゝ、為めに悪を為さうとすること以外に何にも思はず、無暗に悪いことをしたものを、ここに求めてゐたことを。私の心に語らして下さい。それは汚れてをりました、で私はそれを愛しました。見すゝ死ぬのに、愛しました。自分の過ちを愛したのではなくて。私の過ちそのものを愛したのでした。汚れし魂よ、耻に

ち「懶惰の爲め手又は魂の萎縮しないよう」にであります。（以上の句はカチイリナが謀反の仲間を激勵した言葉である。カチイリナは紀元前一〇八年に生れたローマの勇者である――譯者）ではそれは何の爲めですか。様々の惡業により都市を占領したとき、名譽と、權勢と、富とを獲、又法律に憚るところなく。自分の家族が貧乏にて困らぬように、又自分の惡事を意識せぬようにし度いからのことでムいます。してみると、カチイリナ自らはその惡事を好まず、外に何か欲しいものがあつて、その爲めにそんな事をしたのでムいます。

六　快樂の僞り

では。その十六才の時。お前、私の盜みよ。あはれな私は一體お前のうちに在る何を愛したのか。お前は盜みであるが故に。私にとつてお前が愛すべきものではなかつたのだ。けれども神よ。貴下に此のやうにお話しするに足りものでせうか。私共が盜んだ梨は美しうムいました。それは貴下の創造であつたからでムいます。總てのうちで最も美

ひます。何ぜかなれば、是等の低いものもその嬉びをもつてをります。けれども萬物を造り給ふた私のやうではムいません。何せかなれば「美しき者は彼を悦び。而して彼は心正しき者の歡喜たる」（詩篇第六十四の十）が故でムいます。

だから私共は、何か共處に、私共が斯くの如く低い善と何せ犯罪があつたかを訊ねる時、呼ぶものを得る慾望があつたとか、或はそれを失ふ恐れがあつたかといふやうに見えなければ、私共はそれを信じないのでムいます。といふのは斯麼ものは、より高い、美しい善と比べては卑しく、低くはありますが。矢張り美しく。立派だからでムいませう。何ぜですか。彼はその妻を愛し。その領分を欲しがつたからです。或は自分の爲め盜まうとしたのか、又はそんなものを他に取られることを心配した害を被つたので。怒つて復讐したかでムいませう。誰が何の原因なくて。只殺すことを樂みに人を殺す者がありませうか。誰がそんなことな信じませう。好んで兇惡、慘忍と言はれる、獰猛。野蠻な共人にすらも斯うした理由を附せられるのです、卽

もないのでムいます。

そこで傲慢は高尚を偽せます。けれども貴れます。大望――それは名譽と光榮の外に何つて名譽ありて、永しなへに光榮にましますのれることを悦びます。けれど神より外に誰が が扭ぢ取られて、又奪ひ去られませうか、何時が出來ませうか、何處で、何處へ、又繼ひも優しいものはムいません。又總てにまさつに美しいものもムいません。好奇心は智惠を求むる心に似てをりますでムいます。眞個（まつたく）、無智と愚そりまます。何せかなれば貴下より以上は罪人自らのものはムいませんから。更に忘惰は仕業であるのに、何が無邪氣でありませう。

ほしい貴下よ、よき神に在します貴下よ。神よ、私の主たる君、私の眞の美は美しうムいませんでした、けれども私のあはれな魂はそれを欲しませんのでした。何ぜかなれば私はそれよりもつと善いものを持つて居るて、それでもなほ私がその梨を蔑めたのは、只盗みたいからでムいました。だから、私は蔑めたとき、それを投げ棄しました。是から受ける唯一の御褒美は私自らの罪で、私はそれを楽みに致しました。ですから若し其梨のいくらかゞ私の口に入つたとき、それを甘主よ私の神よ、私はその盗みに於て私をらしめるもの、それが罪であつたのです。今、どうでせう、それに何の愛すべき點もなかつたのでムいます。即ち正義、智恵に於ける如き愛すべきものはムいませんでした。又心や、記憶や、官能や、人間の眞やうな美すべきものもなく、又諸の星がその軌道於て輝き、美しいと同じ美があるでもなければ、其處には無種の光ち滿ちて、その生誕によつて、死んだ者に交代する（生物あつて其處に生じ又滅す）陸や海のやうな美があるでもなく、又欺く罪悪を飾る、僞はりの、陰の如き美すら

てきますが、その時が即ちそれが姦淫を行ふのでムいます。斯うして貴下から離れて、貴下に反抗する者共は皆此通り邪しまに貴下を傚ねます。けれども斯う貴下を傚ねながらも彼等は貴下が萬物の主に在すことを公言致します。ですから彼等が全然貴下から離れ去られる場所はムいません。では彼の盗みのうちに、私は何を愛したのでムいませう。力に因て出來なくてるても、或は邪しまにでも私が私の主を何で眞似したのでムいませう。外皮(そとがは)だけも貴下の掟に違犯してるるやうに見せかける積りでしたらうか。換言すれば囚虜の身でありながら、自分には許るされないことをしても罰は受けないこと、即ち貴下の大能を仄かに似せることについて、不具な自由を裝はふとしたのでせうか。御覽なさい。その主からのがれ、影を求めてるる貴下の下僕を。噫腐敗よ、噫生命の變怪よ、死の深淵よ。爲(し)たくないものを、只爲(し)たくないといふ理由だけで、私は免るして置かれやうか。

てなりません。けれども主のお傍を措いて豊満と呼ばれ度いのでゐます、けれどとのない貴下は腐さらぬ快楽の充実で、寛大の影をみせます、けれども貴下こそは總ての善の溢れる施興者でゐます。貪慾は多くの物を持つてをります。けれども貴下でゐます。淡望は優越なものが有りを主張致します、が貴下よりも優越なものを危くする、異常、突飛なふせうかは愛するものに對して惹き起され、自分の安全を心配しますは愛するものを危くする、異常、突飛なす。けれども誰か貴下よりも正しく復讐されませう。恐れら、貴下には何が不測れで、突然でゐませうか。又誰が貴下の愛し給ふものか悪裏はそれでなければ、何處に慌りと安んじてをられませう。又貴下と一緒の慾望の慌びであつた物が失せたことで憐つれます。何せなれば何物も貴下から取り去られないと同様、それは自分が何物をも取り去られ度くなかつたのです。斯うして魂は貴下に反いて、貴下によらずに。純潔でないものを求め、遂に貴下に歸つ

者に取つては左程必要ではなかつたもゝのやうに。だから、貴下に呼ばれて、み聖に從ひ、回想し、氣に罹りながら告白してゐる私に於て、誰でも斯うした物を認めてそれを避の醫者に醫やされた私をして嘲笑させぬやうにして下さい。共者とてもそ助けがあつたればこそ。病氣に罹らなかつた。といふよりも寧ろ思ひが少かつたのです。貴下より多く貴下を愛しなければなりません。何ぜかなもの。だから彼も矢張り。否より一層のひどい勞症から癒やされ。同じく共醫者によつて又同様な罪の勞症に罹らないですんだことを知つてゐるからでムいます。

八　盜みを樂む

どんな結果を私は（あはれな人間よ！）そんなものから獲たでせう。それを憶ひ出して今私は恥づるのでムいます。（羅馬書第六章二十一節）特に盜む爲めに私が愛したあの盜みに於て何を獲ましたらう。それも又空虛なものでした、ですからそれを愛した私は慘めだつたのです

七　赦免に對する感謝

何を私は主に酬ゐませうか、主は私に是等の物を想ひ起させ給ふのに。
に驚かないやうに、穩かにして下さるではムいませんか。主よ、私は貴下
感謝し、貴下のみ名に向つて感謝致します。貴下は私を斯麼悪い罪から解
ムいます。貴下は私の罪を氷のやうに融き給ました。私は之を貴下の恩寵
又罪を犯かさずに濟んだ一切の事も、貴下の恩寵に歸し奉ります。なほ又
業も皆貴下の恩寵と致します。罪の爲めに罪を愛しさへした私が、何をば
たでせう。まつたく皆取り去つて戴けたと私は告白教します。私白らの熱
た罪も、又御導きによつて犯さなかつた罪も共に。自分の弱い事を知りな
と無垢とを自分の力のせいにしようとする者は誰でせうか、恰もその爲め
なく愛してもよいかのやうに。また、貴下に御頼みする者に、貴下が赦し
給ふ御憐憫は其

九　共にするは樂し

た私で出來ましたら魂の此慾情は何でしたらうか。確にそれは餘りに汚れてゐたのではなかつたでせう。が一體それは何でしたらう。誰が自分の誤謬を理解することが非常に可笑しなものが現はれるときには、人は誰も自分と一緒にゐないからでせうか。普通、誰も獨りでは笑ひまはん。けれども或る場合、其心に、何かありでせう。私共は、盜んだのは私の仕業とはつゆ知らず、盜まれた人達（梨の所有者達が意味す）を、うまく〳〵一杯喰はした時には、腹の痛くなる程笑つたのでしたが、すつかり笑はされることがあります。けれども私はそんな笑ひを獨りでしたことはありません。照覽ましませ、私の神よ、私の鮮やかな獨りでは、決して窃盜を――私は盜んだものを悦んだのを悔悟します。私は獨り

けれども私は單獨でそれを致しませんでした。私はそんな人間でムいます。ですから私は自分と一緒に盜みをした共謀者の協力をも愛しました。ですからまた私は窃盜そのものだけより外には何にも愛しなかつたのではなく、否、寧ろそれ以外には何物でもなかつたからでムいます。眞個、之は何んな場合に協力の有無は罪の成立に取つては一體何が私の頭に來て訊ね、論じ考へるのでせうか。といふわけは、當時私が盜んだ梨を兒顯らはし給ふ御方の外、誰か私を教へられませう。私は獨でそれを爲したのでせう、私の樂しみを遂げんが爲めには、只盜みをするだけで澤山ではなかつたでせうか。又是等の共犯の摩擦によつて、慾望を刺戟する必要はなかつた筈ですのに。然し私の樂しみは梨になかつたのです。それは共犯者達が犯した罪そのものゝうちにあつたのです。

者は恐ることもいらず。最も善い者に於て自分も善くなるのです。私の神は貴下から。私の立場たる貴下から餘り遠かに離れたり、自己に對して荒れ果てた國となりました。

註――(一)主人いふ「善いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅かなる物に忠なりき　我なんぢに多くの物掌らせん、汝主人の歡喜に入れ…」(マタイ傳第廿五章第廿一節)

註――(二)ルカ傳第十五章十四節、有名な放蕩兒の喩へを見よ。

ではなく、
盗むといふことを悦んだのでム
ます――致しませんでした。
も面白くなかつたでせうし、盗
みもしようとは思はなかつたの
がひのない友情よ！　お前、魂
の不可解な詐瞞者よ。興に乗り
悪戯をしたがる心よ、自分の利
益又は復讐を欲するのではなく
て、他人の損害
を喜ぶ渇望よ。けれども行かう、やらう
づるではないか。
と言はれるとき、私共は無恥
又単独でなら、
います。噫
、氣まぐれによ
て、他人の損害
でないことを恥

十　神への躍進

誰かその
捻ぢれ、縺れた結節を解き得ませう。それは汚れてをります。
れを見ることは私は厭でムいます。總て純潔な者の眼には美しく、立派で
満足にまします。正義と無邪氣よ。貴下と共に在つて、恩ひは始めて全く
づらわされることがムいません。貴下に入る者は、また生命はわ
ることがムいません。その主人の歓喜に入るものです。その

第三篇

不純な戀愛

私は、おもしろい、と言ってくれた、そして底に潜んでいる、何か純一なもの、を求め、内面的の真摯、即ち貴下といふものについて熱情が起つてゐるのだ、と言ひました。私は自分の欲望の少ないことを悲みました。私は何かを探ねる、探ねる、探ねる、と言ひました。私は何かを探ねる、探ねる、探ねる、と言ひました。私は何かを探ねる、探ねる、探ねる、と言ひ

さす程、うまく演出されなかつたら。彼は
が激情を動かさるれば、彼は熱心にとまつ
では涙と悲哀とは人に好まれるのでせうか。喜んで泣きます。
れでは人は辛惨を好まないけれども。憐みと
ことは悲しみがなくして出來ないとなのでせうか。確に總ての人は喜び度い
論是も又友情の共脈から湧き出るのでムいます。なぜそれは汚れた肉慾の深いことを喜ぶからでムいます。
流れてるますか。なぜそれは汚れた肉慾の恐ろしい潮を湧き出させる激流に流れ込むので
すか、何ぜそのやうな汚穢にそれは好んでせうか。此理由だけで悲しみが愛さ
潔を汚かされて。形を變へるのでせうか。決して
そんなことはありません。悲哀は時には好ましいものでムいます。汚れ
の魂よ、私の神、私共先祖の神に在して總てにまさり、永久に賞め稱へらるべき神のお守
りの下に、汚れをつゝしめ。何ぜかなれば私は今もなほ憐みをやめませ
ん、けれども當時

三　演劇の誘惑

芝居観物も亦私を惹付けてしまひました。劇の中に私の辛苦の姿や、私の見て、悲哀を催したいと望むものでせうか。人は何せ、自分では悩みもしない、悲劇的なもみに抱き、せう。何故かなれば、人は演技に動かされる程、斯る感情により感動するのです。然し、その人が自らの身で悩む時は、辛苦といふ名が付けられ、お時、それは煩悶といふ名で呼ばれます。けれども此偽りの、舞台上の事件に對して起す同情ですか。観客は助けることを要せられるのではなく、只悲しめばいゝのです。そして観客が悲しめば悲しむ程、悪ければ悪い程、観客に涙を流す人物共（古代のものでも、今は單に假作のものでも）の思難が

く悲しみに傷けられない主なる神よ、貴下も亦此通りになし給ふのですから。

けれどもみぢめな私は悲しむことを愛し、悲しかるべきものを求め、例へ假作で、單に芝居の上だけに過ぎないとは云へ、他人の辛苦が、巧みに演じられる時には、私は非常に悦び、最も强烈に心を惹かれて、涙を流しました。貴下の群から迷ひ出し、貴下の監守に罹つたことは、別に怪しむに當りますまい。焦れた不幸な羊である私が、惡るい病氣（の心）に

だから悲哀を愛したのでムいます。むもそれは心の底まで泌み込むやうなものではムいません。といふのは私は自分が見たがつてるた辛苦を自分ですることは好きでなかつたからでムいます。そこで只假作の話を聞いてるるやうな、表面だけを引掻くに止まる程遠淵な悲哀でムいました。そしてその表面には、毒をつけた爪で掻かれたやうに、腫れ、爛れ、腐れが出來ました。私の生活は斯麼ものでムいました、それが生活でムいませうか、私の神よ。

劇場に於いては、たとへそれが芝居であつても架空なものではあつてもまた、歓びをしてゐる時、戀人等と共に樂みに同情するやうに、彼等と共に悲しんだのです。而も劇中の人物が歓ぶもまた悲しむも等しく私には樂しみでムいました。けれども今私は、或る厭ふべき快樂を失くしたことによつて、又慘てゐると思はれてゐる人を憐れむよりも以上に、その邪曲を樂しむ者を憐れむのでムいます。是が確に、より眞實な憐愍でムいます。其慈悲心はそんな歓びを與へません。何ぜかなれば慘じめな者を悲しむ人は、一つも無いのを希望しますから。又、若し惡意に基づく好奇といふものかあるなら（そんなものは決して有のですが）衷心から、誠實に憐れむ者は。憐れみ度いから。と望むとふことになりませう。だから或る種の悲哀は結構でムいます、けれども好かれは致しません。何ぜかなれば、私共より遙かに潔く魂を御愛しなさり、一層不朽に憐み深

程餘計に賞讃せられたのでムいます。之こそ自分の盲目すら誇りとする人間の盲目でムいます。私は今や雄辯學校で首席となりました。それを得意にして、威張り返つてをりました。尤も、主よ貴下は御存じでムいます。私は「壞亂者」（此氣味悪い、悪魔的の名はお洒落のありました）共の間は伍して、眞の表號で彼等と同樣ならぬことを、恥ならぬ恥として住ひながら、その壞亂から全然超脫して、靜にしてはゐました。私は彼等と共に住ひ、時には彼等と交誼を悦んで結びました。が彼等の行爲を私は頗る嫌ひました。即ち彼等の「壞亂」と稱するものは、それでもつて穩なしい新入者をいぢめ、嘲り、それで足さしたのでムいます。是以上に悪魔の行爲によく似たものは有り得ません。先づ彼等を「壞亂者」と稱するにまさる適當な名はムいません。先づ彼等自らが壞亂せられ、全然顚倒せられ、詛らかす惡靈に知らず〳〵嘲られ、誘はれて、他人を嘲り、又詛らかしてゐる彼等こそ本當にさう稱ばるべきです。

又貴下の翼つてをりました。どんなに悲しむべき不義に私は身を窶れかしましたらう！　貴下を棄て、欺瞞の淵に私を伴れて行かうとする、冒瀆の好奇心や、私の悪行を供物に捧げた悪魔の奸策やに乗せられてしまつて！　又そんな事の爲め貴下は私を笞打ち給ひました。私は貴下の儀式が教會の壁の中に行はれてゐる間で すらも。其結果は死に相當する不都合な事を望み、又企らんでをりました。その爲め貴下は私にひどい罰を下し給ひました。尤もひどいとは言へ、それは私の答にくらべれば無いも同様なほどのものでムいました。おゝ私の過分な慈悲よ。私の神よ、恐ろしい破壊者から私の隠れるところよ。さうした破壊者の間を私は、頑然として貴下からなほ更遠ざかり自分の道を愛して、貴下の道を愛せず、漂浪の自由を愛しました。

又推奨せられる學問も、法廷でその卓越を示すことを目的としてをりました。狡猾な者

ではなくて、その事實でムいました。

私の神よ、當時私は如何に身を焦がしてゐましたらう。しかも私を貴下はどうしようとお思ひなさるび貴下に昇らうと焦せつてをりましたらう。しかも私を貴下はどうしようとお思ひなさるかを知らなかつたのでムいます。何ぜかなれば智惠は貴下にこそあるのですから。けれども智惠に對する愛は希臘語でフイロソオフイア（φίλος「愛」とσοφία「智」の二語より成り、卽ち哲學）と言ひ、それがある偽め、此本は私の熱心を高めました。白分等の誤謬を、流麗、名譽な名のもとに糊塗して、哲學といつて他を欺かうとする者がムいます。當時や又その前時代の斯るいかさま者共は。悉く此本でその面皮を引剝かれてをります。又貴下の語き、敬虔な下僕によつて明かに示された。貴下の健全な勸告「汝等心すべし、恐らくはキリストに從はずして人の傳說と此世の小學とに從ひ、人を惑はす虛しき哲學をもて汝等を奪ひ去る者あらん。それは悉く形體をなしてキリストに宿れり」（哥林多後書第八章九節）もその中にあります。共時には（私の胸の光りよ。貴下は知ろしめします）使徒書は私の知らなかつたものでした

是等狂氣染みた仲間に加はり、その弱年の頃、私は雄辯術の本を學び、やうな目的、即ち虛榮を悅ぶ人間の心から熱心に雄辯にならうとしました常道により、私はシセロの或る本が讀むことになりました。シセロの辯舌を褒めるところでムいましたが、その心はさう褒められてはをりませんでした。彼の此本は哲學の推奬をしたものでホルテンシウスといふものでムいました。けれども此本は私の性情を變へ、主よ、私の祈りを貴下に向はせました。又私に他の目的と慾望とをあらゆる虛しい希望は直ぐに私にとつて無價値のものになりました。私は信じ難き程の熱心もつて智惠の不滅を羨ひ、今や、貴下に歸らうとして立ち上り始めました。當時私は十九才で、父は二年前に死んでをりましたので、母の金で雄辯を勉強してゐたのですが今はもうその爲めではなく、此本を使ひましたのはその文體

来る人間ではなかつたのでムいます。その譯は私は今話しているやうには、當時聖書に向つて感じなかつたからでムいます。聖書はツウリウス（マルクス・ツウリウス　キイケロ＝シセロの事）の堂々たる様には及ばないやうに私は思つたのです。私の増長した慢心は聖書の卑近なのに尻込みして、私の鋭い智恵はその内部に貫徹することが出来なかつたのです。けれどもそれは幼児と共に育つたものでした。然し私は幼児たることを卑み、傲慢におさまり返つて。自分を偉大な人物だと思つてをりました。

六　マニケウス教に欺かれる

その爲めの私は誇大狂で。甚しく肉的で、多辯な、その口には貴下や、聖靈や、仲保者（とりなし）で私共の慰めの人なる、私共の主イエス。キリストのみ名の綴りを混ぜた烏賊があつて、口に悪魔の罠をもつ人々の仲間に陷つてしまひました。こんな名は彼等の口から離れたことはなかつたけれど。只音と舌の音とを出すだけで、心には眞理がなかつたのです。それでも

から、私は此教訓を獲て喜びましたが、それは只強く覚醒せられ、學派の如何に只眞理そのものならば何でも愛し、求め、獲、把持しようといふ熱心を起さしくも心を燃やされながら。その中にキリストの御名のなかつたことが私の最大げました。何ぜかなれば。此御名は、主よ。貴下の御恩賜により、私の幼き胸に母の乳と共に熱心に吸ひ込まれ、深く秘藏せられてで、その名がなければどれ程學ばれ、嚥かれ、又は眞理であつても、どんなとらへることは出來なかつたのでムいます。

五　聖書を侮る

そこで私はどんなものかと聖書に心を傾けました。けれども、どうでせう、者には理解されず、子供には開かれず。近づくに易く、達するに奥深い、神秘物を見るのでムいます。しかも私はその中に入り、頸を曲げて、その足跡に從

業に飢ゑ渇いたのではなく、眞理に在まし「變ることもなく、又めぐる陰もない」（雅各書第一章第十七節）貴下御自身を求めたのでムいます。それだのに彼等は私の前に置いた皿に燗く幻影を盛りました。私共の眼を通してその心を欺く是等の幻影よりも。寧ろ少くも私共の眼に眞實であるお太陽を愛する方がましでしたらう。しかもなほ私はそれを貴下と思ひましたから、それを食べました。でも貴下はそのうちには、如實に私に味はゝせ給はなかつたのです。卸て空虚になりました。眠むつてゐる時の食物は醒めてゐる時の食物によく似てをりますが、眠つてゐる者は、眠つてゐるが爲めに、それによつて養はれません。けれども今貴下が私に仰言つたやうに、是等のものは、どんなにしても貴下のやうではムいません。何ぜかなれば。是等は其體的幻影、虚妄の物體で、天上のものにせよ、又地上のものにせよ。私共が肉眼で見る眞の物體の方が遙に確實であるからでムいます。是等の物は私共が想像する以上に惱りします。

彼等は「眞理々々」と呼び、盛んに眞理について私に語りました。けれども其のうちに眞理は無かつたのです。彼等は雪に、獨り眞理に在します貴下について僞らず、貴下の創造物である、此世の諸要素についてすらも僞りを申しました。そこで私は本當にそれについて眞理を語つた哲學者達を求めました。貴下。此上なく善で美しい物の美に在す貴下を愛するが爲めに。眞理よ、その時ですらも奈何に私の魂の眞髓は貴下に向つて、「來てよしまなければならなかつたのです。

う、それはその時、彼等が屢々、又様々に、或は多くの厖大な書籍に於て、ほんの反響だけであつたけれど、貴下について私に聞かしてくれたからでムいます。そして貴下に飢ゑてゐる私に、彼等が與へた御馳走は貴下ではなくて、貴下の美しいみ業であつて、貴下のみ業であつても、貴下御自身ではなく、否貴下の最初のみ業ですらもなかつたのでムいます。貴下の靈的のみ業は、是等其體的なみ業に先だつてあるもので、天に屬するものではありましても、輝いてゐるのでムいます。けれども私は斯様な貴下のみ

で私が飼つてゐた豚の、その食べてゐる殻（文學のこと）さへも私は食ふ道を斷たれて、貴下を離れて遠く漂浪しました。文法家や詩人達の寓話は、斯麼瞞着に比らべて、どれだけ優つてをりましたらう、詩と歌と、「飛ぶメデア」（コルキスの王アエテスの娘で、ヤソンに欺かれて、棄てられたので龍車に乘り、天を飛んで雅典へ歸る）は、暗黑な五つの洞があつて、その一つ毎に各々異つた原素があるといふ說（マニケウス敎の說、暗黑を闇、煙、惡風、惡火、惡水の五つの洞窟より出るものとして、それに對して）光、空氣、風、水の五素があつて、太初の人は之を着て暗黑と鬪つたと）よりも確に金が多いのです。詩と歌とは之を職業にしたら私は之を眞の食物と變へられませうが、「飛ぶメデア」は、たとへ私が歌つてゐるにしても、確實と主張することも出來なければ、又歌はれるのを聞いてゐても、私はそれを信じなかつたのです。噫、噫、噫、眞理の要求に勞しつゝ、沸りつゝ、如何なる梯階によつて私は冥府（よみ）の底までも伴れ行れましたか。かつた時にも私に憐みを加へ給ふた貴下に之を告白致します。卽ち私は、貴下が、默に優さらせようとして給ふた心の叡智によらないで、肉感によつて貴下を求めたのでムいます。けれども貴下は私に對して、私の內部よりも一層深くましまし給ふて、私の最も高いとこ

てをります。更に又私共は是等によつて存在しない他のより廣大で、無るよりも、一層精確に是等の形を感じます。當時私は斯麼殻で飼はれて、も聊かも營養を取れなかつたのでムいます。けれど一層強くならうとして焦れた私の愛よ、貴下は天に在すにもせよ、私共が現に見てゐる物ではの處に私共が見ない物でもムいません。又其も是を貴下の最高のみ業のうちには加何ぜかなれば貴下は是等の物を創想、全く存生しない物體の幻想よりは、造し給ふて、しかの心像は、幻想よりは確實であり、又物自らは更に確實であります。けれども斯る物が貴下ではムいません。又其物體よりも確實ですけれど）然し貴下は魂のうちの生命、生命のうちで生きてゐる生命そのものであらせられます。

だから當時私から見て神よ、貴下は何處に在し、又どんなに遠くに在したのでせう。殺

ると思ひました。私は未だ、悪とは善の缺乏に外ならずして、遂に全く無となるものとは知らなかつたのでムいます。眼の視力は只肉體に及ぶだけ、又心眼の視力は只肉體に過ぎない私が、どうしてそれを見ませう。で私は神が靈に在して延長を有し給ひ、或はその存在容積で在まさないことを知らなかつたのでムいます。何せなれば各容積は全體に於けるよりも、部分に於て小さいものだからでムいます。又若しそれが無限であるならばその無限に於てよりも、或る空間によつて限定せられる斯麼部分に於ては、より小さい筈ですから。で私は私共の内にあつて、私共を神に省せるものは何か、又、聖書に「神の像に似せてL と言はれるのが正しいでせうか。又さうなると靈のやうに、到る處に全體として在る筈がないのです。

又私は、習慣によつて裁かず、諸國諸時代の仕方をその國々と時代々々にとよつて處理した、大能の神の最も正しい律法によつて裁く眞の精神的正義を知らなかつたのでムいます。尤も此律法は何處にあつても變ることはなく、此處にてはどう、彼處ではかうといふ

ろふのも、一層高くに在したのでハ、いまず。私はソロモンの謎「門の坐に食らう糧は楽しく、籠みたる水は飲みて甘し」（箴言第九章十三節―十七節）といふ、下の大膳なる女（愚昧の表象、「門の坐に坐しては、外面的物質生活のこと）に躓きました。彼女が私を誘なは、私の魂が外へ出て、私の肉の眼に痛り、彼女の誘ひに乗つて私が喰う不食物か、猶りで反噛してゐたからでムいます。

七　マニケウス、教徒の愚

私は是以外に、直に在るものの知らなかつたからでムいます。そこで、一二神は国體の形によつて制限せられ、疑や爪やを有つか」「同時に多くの涙なもつ者、人を殺しやすかれやうか」（列王紀第八章四十節）などと彼等が私に訊いたとき、生物を犠牲に供へた者は竟人と雖も、まるで自分の機敏なことを誇るもののやうに、私は此愚かな欺偽漢共に答へました。此事で私は自分の無智から非常に當惑して、自分はその方へ進んでる

兩者ともに同じく正義に從つたものだと言はれるのを聞いて。憤慨するやうな者共であります。けれども同一人か。同じ日。同じ事に對して。且つ以前には正しかつた事が。時の經過により正しからずなり。一方で許るされ。命令された事も、他方に於ては當然禁じられ、又罰しられることを知つてるのでムいます。では正義は變遷するものでムいますか。けれども正義の司る時間は、均分に流れは致しません。そこが時間のことですから。けれども地上の生命の短かい人間は、自分が經驗しない古代の他の國民の事を、現に經驗してゐる事物に、當て嵌めることは感覺的に出來ないのであるならば。どの手に何が適し、どの季節には何が向き。何の部分には何が合ひ、何の人には何が良いと、直ぐに分りません。ですから昔の事はいけなくて。今の事には肯從するのです。

當時、私は斯麼事を知らず、又心にも留めませんでした。周圍にザラにあつても、私はそれを見ませんでした。私は詩を作つたのですが。何處にでも韻脚を置くことを許るされ

やうなことはムいません。そしてそれによつてアブラハム、イサク、ヤコブデ其他神の口により褒められた者は義とせられました。けれども彼等は「審き」。自分達の小つぽけな習慣によつて全人類の道徳上の習慣を裁く愚物められました。その有様は武器庫の内で、各々身體のいろ〳〵な部に當つた頭に脛當を被り、又は足に胃をのに似てをります。或は午後には商賣が一般に禁じられてゐるものが、自分は午前からやつてゐるのだからといつて。憤つてゐるやうなものです。更に又食卓係がまつてはならない物な或る下僕が手に取つたことを或る家で見る時、又は食堂のうちでは禁じられてゐることが、既の中では許るされてゐるのを見て、一つの家、一つ家族のうちで。同一の事が到る處に行き渡つて行はれないと憤るにも似てをります。又彼等は、今日正しくなくても。以前には義人により義とせられたといふ何事かを聞き慣る人、或は神由により、彼等には或る一事を命じ給ひ。他の者には又別なことを吩咐け給ふたのだが。

如くその隣りを愛することが不正でせうか。ですから天性に反したその罪は到る處、如何なる時にでも憎まれ、罰せらるべきものでムいます。たとへばソドムの罪の如きものでムいます。神は、人を斯く相互に用ふるやうには造り給はなかつたのでムいます。神の律法によつて同じく有罪と斷じらるべきものでムいます。神と私共との間にある交誼すらも。神の造り給ふた天性が肉慾に汚されるときには、破れてしまひます。或は國家の習慣によつて定められたものは、國民であらうと、外人であらうと、その習慣に從つて避けなければなりません。それは致しません。その全體と一

けれども神が。人の習慣、又は制度に反して。今までになかつたことをしろと、御命令なさる時に。若しそれがぷつと以前に中止されてあつたものでも。現在法律と爲すべきものでムいます。以前一度も法律とならなかつたものでも、現在法律と爲すべきものでム

す、半仄が違ふまい、異つた風に置かされ、又二つの平仄に於てすら、同じ平仄に於てすら、毎節に同一の韻脚を置かされませんでした。けれども私がそれに因て詩を作つた技術そのものは、是等様々な場合に對して、様々な原則があつたのではなく、總て只一つに包含されてゐたのです。でも私は善且つ神聖な人々が守つたその正義が、遥に勝れ、崇高なものであり、神の命じ給ふて、如何なる部分にも變化のないそれ等のもの總てのうちに含まれてゐるが、只それはあらゆるものを同一に規定せず、時に從つて各自に適したものを割の當てられ、配合されてゐることに氣付かなかつたのでムいます。そこで私は、盲目の爲めに、神父達が、神の御命令に從ひ、その靈に感じて、現在のものを用ふるばかりでなく、又神が彼等に示し給ふた將來を豫言さへもした事を非難致しました。

八　神の許し給ふ物

人にとりて、何時、何處で、心を盡し、精神を盡して、思ひを盡して神を愛し、又己の

に對する嫉妬の爲めか、或闘士（眞劍勝負をみせて商賣にしてゐたローマのグラヂエトル）、見うる觀客、或は他を罵り又嘲ける者のやうに他人の困つてゐることを樂しみとするの場合でムいます。是等は他の上に立ち、見たり、感じたりしようと慾する望、或は其うち一つ又は二つ、或は此三つを全部萠え出させる不義の根となるのでムいます。斯うして人は、至高至美の神よ、三絃と七絃をそなへた十絃*の琴、卽ち貴下の十誡に違犯して悪くなるのです。けれども汚される

註　*モーゼの十誡を三つと七つとに分けることをいふ。卽ち誡めの始めには三位の神を象る。次に七つの誡めがある。それを隣人に對する誡めとして。琴の絃にたとへたものである。

ことがない貴下に塗りつける汚れがありませうか、害を受けることが絶對にない貴下に塗りつける汚れがありませうか、害を受けることが絶對にない貴下に對してどんな暴行が加へられませうか。けれども貴下は人間が自身に對して爲すことに復讐をなさいます。何となれば貴下に對して罪を犯すのは自分の魂に對して邪曲を行ふことだからなのです。又「不義は自らを虚りとし」（詩篇第廿七の第十二節）ます、卽ち、貴下が創造整頓なさ

います。なぜかなれば、一人の王がその支配する市に於て、自分よりも前のどの君主も、又自分自身も是までしなかつたことを命ずるのは正當です。又、彼に從ふことがその市の安寧幸福に反しないばかりでなく、即つて從はなければ。社會の福祉に反します。何せかなれば人間社會の一般の契約は、その主君達に從ふといふことなのですから、そしたら私共が萬物の支配者に在す神の御命命に躊躇するところなく從ふのが。どんなにか忠實なのでムいませう！　人間の社會で、小權よりも、大權に先づ從ふのが當然であるやうに。一切のものに先んじて神に從ふのが當り前ではムいませんか。

暴虐に於ても同樣でムいます。其處には罵詈し、又は傷害して。他をそこなはうとする望みがムいます。そしてそれは何れも敵が敵に對して復讐するときか、或は强盜が旅人を襲ふ時か。他人と競ふて利を占めるときか。或は何人から害を受けはしまいかと鬼胎（おそれ）を抱く場合、或は運の惡いものが幸運なものに對する場合。又は何事か盛に成功してゐる者が或は既に對抗者が出來て困つてゐる場合など、他

けれども汚行や罪のうちには、圓熟に進みつゝある人々の罪もムいます。その罪は、誤りない裁判をする人々には、完全の法則に合はないと非難もされゝば、又丁度之から成長する穀物の線な葉のやうに、より善き實を結ぶ見込みがあるのだからと、推稱もされるところのものでムいます。又汚行や暴虐に似てはゐますが、それでも私共の主なる神をも、又社會の秩序をも妨げないので、罪とはならぬものもあります。卽ち、或る時期に適當した物を取つて、生活に使ひ、しかもそれが果して貪慾から出たものか否かを、私共が判斷せられなかつた場合の如き、又は或る行爲が、矯正の目的により、規定の法によつて所罰されることがあつて、しかもそれが害を加へようとする意志から出てゐるかどうか分らぬ場合の如きは此例になります。だから人が見て嘉しとしない行爲の多くは、貴下の證明によつて嘉しとせられ、又人に褒められる多くのものが、貴下が證人に立ち給へば、卽つて

れた天性を汚し、悪用し、或は詐すべからぬものに濫用し、或は禁制のものに憬れ、天性に反する第九章第五節）貴下に對して罪を犯し、或は社會の範圍を紊し、自己の好惡によつて、大膽にも勝手に結合分離して悦んでをります。（使徒行傳）「刺ある鞭を蹴り」

配者に在す生命の源よ、貴下を棄てたときに行はれ、個人的の傲慢により或る一つの虚僞な物が其處から擇ばれて、愛せられることに立至ります。だから私は謙遜して、貴下に歸らんければなりません。さうすれば貴下は私共の悪い習慣を拂ひ潔め、又懺悔した罪を御慈悲を以て聞き、給ひ凶人の欺きに耳を傾けて給ひます。總ての共通の善たる貴下よりも、己れ自らの善を愛し、愈々貧る爲め總てのものを失はふ危險な日にあはされ、虚僞の自由の角を貴下に向つて擧げなければ、貴下は私共が自分で造つた鎖から、私共を解放して下さいます。

の樹が乳のやうな涙を流したといふ馬鹿げたことを少し宛信ずるやうになつて、貴下に輕蔑せられたくらゐのことでした。しかも其無花果が他人の手で摘み取られ。取つた罪を負はないマニケウス教聖人の一人に喰べられて、聖人の臟腑にまじるなら、其聖人はその無花果から天使達を吐き出すといふのでムいました。いや、聖人の祈禱、嘆息に於て神の微分子を吐き出すのだといふのでムいました。さうした、いと高き、眞の神の此分子は、選ばれた聖徒の齒又は腹によつて解放せられないうちは、その果の中に殘つてゐるとの話でムいましたから。すると憐むべき私は地上の木の果の方が、その果を白分の用に造つて貰つてゐる人間よりも、餘計に御恩惠を頂いてゐると信じました。それで若しマニケウス教徒でない一人の飢ゑた者が食を乞ふなら、それに與へられる一口のものは、私には死刑に處せられたものと見えました。（神がその中に在すのに、聖人がそれを解放せず、俗人が食つたから喰べて）

十一　母が涙の祈り

罰しられも致します。是は即ち行爲の外觀、行爲者の心理、伏在する裏面の事情等を皆異にするからでムいます。けれども貴下が不意に命令して。異常なもの、思ひ掛けないことを命じ給ふても、否寧ろそれは之まで禁じ給ふたものであつて、一時貴下が御命令を下された理由を秘密になさるとも、又それが人間の或る社會の秩序に反しましても、貴下に仕へる社會は善い社會であることは知れてをりますから、誰かその命令に從ふべきものたることを疑ひませう。然し貴下が御命令なさつたことを知るものは幸福でムいます。何ぜかなれば。貴下の下僕等の一切の行爲は現在に必要なことを示すからでムいます。

十　マニケウス教の虚妄

私は此事を知らないで。是等神聖な貴下の下僕共と。預言者達とを嘲笑しました。が彼等を嘲いつゝ、私は何の獲る所がありましたらう。無花果が其實を摘み取られた時。その母

を歎くのです」と答へました。すると共青年は、安心なさいと、母に言ひ、更に、「お前のゐる處には彼も又ゐる」ことを、よく心をとめて見よと忠告致しました。そこで母は是に心をとめてゐますと、同じ定規の上に、自分に近く私が立つてゐるのを見ました。此幻は貴下のお耳が、彼女の心の叫びに傾けられたのでなく何でムいませう。あゝ全能の語よ、貴下が我々各自を守り給ふことは恰も一人を守り給ふと變りがなく、又萬人を守り給ふことは、恰も一人を守り給ふと變りがムいません！

母は此幻のことを私に語りましたが、私はそれを解釋して、それは母が後になつたら、私の今日の狀態に失望しないだらうといふことだと、曲解しましたところが、母は聊かも躊躇しないで「いゝえ、私は――わたしのゐる處にはお前もゐる――と仰つたのを聞きました」と、答へました。

――お前のゐる處にはわたしも亦ゐる――

私は最も確實な記憶を貴下に白狀致します、主よ。又私は屢々此事を申しましたが、母が私の光らしい偽りの解釋に迷はされ

然るに私の忠信な母は、世の母達がその肉親の死を哭くよりかも一層烈しく、貴下にむかつて泣きました時、貴下は上からみ手を伸べて、此深い闇黒の裡から私の魂を救ひ出してくださいました。母は貴下から受けた信仰と聴とにより、私が死んでゐるのを明かにさとりました。けれども主よ、貴下は母に聴き給ひました。確に聴き給ひました。又母が祈る處に注ぎ降つてその眼の下の地を沾うす涙を憐んじ給はなかつたのです。えゝ眞に個貴下は聴き給ふたのです。さもなければ彼女を慰めに貴下がお遣はしになつた夢は何處から參りませう。その夢を見た後、母は、今まで私の誤謬の冒瀆を嫌つて、爲たがらなくなつてゐること、即ち母と共に住み、ほと同じ食卓で食べることを私に許るしたのです。

母は其眠りのうちに、自分は木製の定規の上に立つてゐると、一人の美しい青年が自分の方へ來て、日毎に涙を流すのかと訊ねました。然し人がいつも知らうと訊いてゐるやうではなくて、愉快な顔をして、すつかり悲み悄れてゐる自分に笑みかけて、何故そこで自分の哭くのは、此私が亡滅するの訓へてやらうといふやうなふうに見えました。

は貴下に対して、もつと急いで申上げねばならぬことに、心が急き立てられてゐる迄から、澤山なことを書いてしまひます、が又多く忘れもしましたこと遺憾にしまひました。その時貴下は、教會に直ぐ下つて、もう二つの答へを母に下さいました。母は其人に會つて、どうか私と話して、私の誤謬を論駁し、又惡いところを說示して、それを除き、善を教へるように願ひましたとき、其人は、若し教へて然るべき者と見れば、教へたのですが、賢明にも私には教へまさんでした。その事を私は後になつて知りました。

司教は答へたのでした「貴下ご自言る通り、あの方は異端の新說に目がくれ、傲慢になつて、未熟な者を愚弄で迷はしてをられますから、未だお教へ申す時機ではありません」と言ひ、「一生懸命に彼の方の爲めに主にお祈りなさい。彼の方御自分でお讀みなさつて、その誤りを發見なさいませう」と忠告致しました。そして司教自身も、幼少の折り、誘惑された母の爲めに、マニケウス教徒とさられ、雷に其經書の總てを讀破したのみならず、又寫し取りまでした程であつたけれど、誰からも論破せられないで、此宗派の排斥すべきも

す、又宮殿さうであるべきことで、しかも母が直ちに見破つてしまつたこと――は、その時の夢そのものよりも私を悦ばしました。其夢ここは久しいのちに實現せられるべき母の歓喜を、當時苦慮してゐた、敬度な母を慰める爲めに、豫じめ示されたものだつたのです。その結果、略ぼ九年に亘り、反對に私は深い泥濘と、塵芥の闇黒の中に轉がつて、屢々起き上らうとしながら、愈々深く沈綿したにも拘らず、此貞潔、敬虔、淑やかな貴下の愛し給ふた寡婦は、却つて益々希望に活きてをりましたこと、それで彼女は祈りの時、常に私のことを貴下に向つて數くを忘らず、更に少しもひるまなかつたので、その祈りに貴下のお耳はとまりました。けれども貴下は猫ほ私が此闇の中にころげまはるのを放棄つてお置きになりました。

十二　司教の預言的答へ

その時貴下はもう一つ別な答へをほに下さつたことを私は回想致します。

第四篇

一　過誤の九ケ年

のであ、ふこ
ほはなほ安
て口説き立
れ、此のや
は屢々私に

な悟い、断然之を棄てたことを母に語りました。斯うまで司心しないで、矢張り、私に曾つて、説諭してくれと、益々強く願ひ、涙を流してましたので、司教も聊か立腹して「去つて下さい、神のみ恵み貴女にあうな涙の子は決して亡びるものではありませんから」と申しました。此答を母は

がら、それによつて他に勝つべきお喋りを賣りました。けれども私は。(いいます。)その時でも善き弟子と言はるゝに、何の偽りもなく。明らさまに欺くことを教へました。尤も無辜の者ひるのではないのでムいました。然し時には有罪の者の辯護には用ひたそして神よ、貴下は遠くから、滑り易い路に、僅かな信仰の燃え上りき無暗に燻りながら、跼蹐めいてゐる私を御覽なさいました。私はその信伴侶にしてゐる、虚榮を好み、虚偽を好む者共の道しるべに致しました。其頃私は一人の女をもつてをりましたが、それは正式の婚姻によつて知つたものではなくて、無思慮放肆な情熱に驅られて得たのでムいました。子を生む爲めの結婚の拘束とけれども私は唯其女一人をもちりましたが、それに貞操を守肉的戀の約束との間にある相違を、私は彼女にの例によつて經驗致しました。肉情にあつては子供は生れゝばそれに對して愛情の意志には反するのでムいます。

私と共に欺かれた友達と一緒になつてやりました。私の神よ、傲慢でありながら、未だ貴下の爲めに、その魂の救はれるように打ちのめされ、踏みくだかれたことのない者共に私を嘲らしてください。けれども私は貴下を讃美して、自分の恥を告白致します。どうぞ私を免るし、私の過去の誤謬を廻避することによつて、現在の記憶を打消さして下さい。そして獣畜の供物を貴下に捧げさして下さい。貴下が在まさなければ、私は自分の墮落の案内者たらずして何者でムいませう。又人が人たる外、人は何でどうしましよう。でなくとも只貴下の乳を吸ひ、不朽の食物に在す貴下に養はれる嬰兒なども弱い者がムいませう。けれども私は弱く、貧しい魂(我等)にいつも貴下に告白さしていたゞきます。

二　修辭學を教ふ

私は其數年の間修辭(雄辯術とも譯して置いた同一なる故)の術を教へました、そして自分では慾望に負けな

こと。換言すれば、道を踏み迷ふて、彼等の歡喜と嘲笑の的となるのでなくて何でムいませう。

三　占星術を學ぶ

そこで私は占星術者といふ欺僞師共に、憚らずして相談しました。それは彼等が何の犧牲も捧げず、又そのトひをするに何等の靈にも祈りをしなかつたからでムいます。その術はキリスト者も又眞の信仰も嫌つて、彈劾するものでありました。何せかと言へば、貴下に告白して、「我を憐み、わが魂を癒やしたまへ、われ汝にむかひて罪を犯したればなり」（詩篇第四十一の四）と云ひ、又貴下の慈悲を濫用して、罪に耽らず。却つて「見よ、なんぢ癒えたり。再び罪を犯すなかれ、恐らくは更に大いなる惡しきことあらん」（ヨハネ傳第五章十四節）との警告を記憶するのは善いことだからでムいます。總て此救をもたらす勸告を亡ぼさうと努めて申しますには、「お前が罪業の原因は天に定つてるもので避けられないものだ」

私はなほ一つ憶ひ出しましたが。それは劇場で歌の競技に加はらうとしたとき。何とも得體の知れない妖術者が私に對ひ。月桂冠をきつと手に入れさせて上けるが、一體いくらか排ふかと訊きました。けれども私はさうした汚ない秘法を憎み嫌つたので、其者に答へて。たとへ冠は黄金で出來てゐても、私はそれを手に入れる爲め、蠅一疋の生命すらも取らうとは思はないと申しました。さう言つたわけは、妖術者はその供物にきつと生物を殺し。それによつて悪魔を私の身方につけることが分つてゐたからでムいます。けれども。私の心の神よ。私が此悪事を斥けたのは、貴下に對する節操の爲めではムいません。何せかなれば物質的輝きの外には何も知らなかつた私は、貴下を知つてをりませんでしたから。斯る架空な妄譚を信ずる魂は、貴下を離れて姦淫を行ひ。僞りの希望に寄り縋り、風を喰べてゐるではありませんか。然し私は確に、妖術者が、私の爲に犠牲を供へることを望まなかつたのでムいますが、矢張り、自分の迷信を捧げることによつて、私自身を捧けたのです。何せかと云へば風を食ふといふことは、その悪靈を食ふ

有用なことに心配して。努力して。斯麼無益なものにかゝづらうなと、私を諫めました。

彼は申しました——自分は少年時代に此術を學び。之を生業とするつもりであつた。若しヒツポクラテース（醫術の元祖である）を解したなら、此術にも通じ得られるだらうといふ希望をかけてゐたのだつた。けれども自分は後それを止めて。只醫術にのみ專心した。といふのは他でもない。それが最も悲しい欺僞であることを知つたので、元來眞面目な自分は、人を欺いて生活することを好まなかつたからであると。「けれども君は身を立てる修辭學や職業にしてゐるのだから、必要上からではなくて好んで此欺僞をやつてゐるのだ。だから猶更君はその眞意に通じて、それだけで生活を立てようとした此私を信用しなければやいかんよ」と申しました。では占星術で多く豫言の的中するは何ぜですかと訊きましたら、彼は。自分に出來るだけのことを答へました。「萬物に普及してゐる偶然いふものゝ力によるのさ。書し人が出鱈目に詩人の本を開いてみたとする。すると詩人は全く他のことを目的として歌つてゐるのに、その詩句が屢々、吃驚する程現在の事實に符合することがある。だから。

と言ひ、又「さうしたのは金星と、土星と、火星の爲すわざだ」などと言つて、人。即ち肉にも、血にも、又傲慢な腐敗にも責を歸せず、造物主や、天の支配者や、星やに罪を塗りつけようと致しました。けれども各々その業に從つて酬るをなし、碎け、悔いてゐる心をも輕蔑し給はない者は、柔和で、正義の源である私共の神より外誰がありませう。

その頃、非常に醫術に巧妙で、斯界に名高い人がありました。共人はその手で逆上してゐる私の頭に競技の冠が置かれました。勿論それは醫者の資格をもつてしたのではムいません。何せと申せば、此病は、只「高ぶる者を拒ぎ、謙卑る者に恵み給ふ」（ペテロ前書第五章五節）貴下の外には醫すことがH來ないのでムいますから。けれども貴下は此老醫によつて私の魂を醫すことに失敗なさいましたらうか。私は愈々此人と親しくの教へを堅く信頼しました。彼の語は洗煉されたものではなかつたのですが、思はず、又愉快にも聞えました。彼は私との會話により、占星家共の書に耽つてゐるのを知つてゐましたので、眞面目にもその不可を說き、慈父の如く懇々として、

四　親友の死

その頃、私が始めて自分の故郷で修辞學を教へ始めた時、學間の仲間から、同じ齢の。青春の花咲きみだるゝ、一人の親友を得ました。此者は少さい頃から私と同じやうに育ち。二人とも同じ學校に出て一緒に遊んだのです。けれども彼は未だ後になつてのやう眞の友達ではなかつたのです。否。後になつても本當の友ではなかつたのです。といふのは、貴下から私共がいたゞく聖靈により、又汎く私共の心に注がれる愛によつて、貴下が結び給はなければ、友情は本當ではないのでムいますから。けれども私共の友情は同窓の熱によつて煮え立ち、非常に愉快なものでムいました。ですから、私は、彼が年若かなために、彼が眞實に、又充分に入つてゐなかつた本當の信仰から彼を誘ひ出して、私の母が唆いてゐた迷信、邪説に彼を引き入れました。そこで今は彼は私と同じに心に迷ひが出來、又私の魂は此者がゐなくては在ることが出來なくなりました。けれども復讐の神に

人間の魂の中から、それ自身では何をしてゐるかちつとも知らない、或る、より高等な本能の働きによつて、訊ねてゐる者の事件や事實にきつちりと合ふ答へが出たからつて、別に不思議なことではない」と。

共人から、即ち共人を通して貴下は斯の通り、眞によく私の事によく氣をつけ、後私自身で檢査するように、私の記憶に共事を下書して下さいました。けれども當時は未だ、此人でも。又私の最親愛なネブリディウス（極めて性質の善い。潔白な青年で、占ひを全然嘲つてゐた人）でも私を說服して、此術の研究を斷念させることが出ませんでした。其譯は斯道の著達の權威がなほ私に對して強かつたのと、一つは又斯うした學問の先生達によつて豫言されたことは、ほんの偶然であり、まぐれ當りであつて。星を見る眞の術によるのではないといふことを。明瞭に、少しの疑ひもなく論證せらるゝものを私が求めてゐるまでムいます。

私と一緒に洗禮を嘲るだらうと思つたのでした。けれども彼は恰も敵にでも向ふやうに、私に對して戰慄し、突然、不思議に自由な態度で、若し私が彼の友人となつてゐる積りならば、彼に對してそんなことを言ふのは止めて呉れと、私に命じました。私は驚いて、私の好きなことを一緒にせられる程、彼の健康の强くなるまでは私の感動を押へました。けれども彼は貴下と共にをる爲め、又私の慰籍に控へて置かれるように、私の狂愚かみは私の心を暗くし。私が眺めるものは皆死ばかりになりました。故郷は居辛い處、父の家は非常な不幸となり、又私の友人と一緒にしたことは、今はその人が無いので最も恐ろしい惱みとなりました。私の眼はあらゆる處に彼を求めました、けれども彼は私の眼に見へませんでした。又彼が居ないので、私はあらゆる場所を憎みました。又生きてゐた日、彼が不在の當時に言つたやうに、今は「なあに、直き來るよ」と、言ふ言葉を私はもう聞くことも出來なくなりました。私は自分を大きな謎と思ふやうになりました。

在して、同時に又慈悲の源にまします貴下は、方法によつて私共を貴下に立ち歸らせ給ひました。卽ち貴下は此者を、此難く樂しい私との交情の一年を、未だ滿たしもあへぬうちに取り給ひました。

誰か、自分の心にだけ感ずる貴下の讃美を算へることが出來ませう。私貴下は何をなさいましたか、又貴下の裁きの淵はいかに測り難いでムいまの汗をかいて、氣絶してゐましたから、絶望と見られて、自覺を授けられました。けれども私はそんなことに體に施されたものよりも、寧ろ私から受けたものを保存するだらうと思つけれどもまつたく違つたことが起りました。卽ち彼は遁つて、健康を恢復す。で彼が私と話すことが出來るや否や（私は決して彼のそばを離れず、深く信頼してゐたからでムいます）直ぐに、彼その受けたことをやつと今知つたばかりの洗禮について、嘲らうとしました。私は彼も又

貴下に在ますけれど、私共は様々な試煉のうちに轉ろげ、まろびます。しかも私共は貴下の御耳に向つて嘆かなければ。他には殘る希望とてもムいません。だからどうして人生の苦艱である呻吟、涙、嘆息。又不平から甘い果實を摘み取ることが出來ませう。貴下が聞いて下さるといふ希望をもつことが、それを甘くするのでせうか。之は私共の祈禱については正しい考へでムいませう、祈禱は貴下に近付く希望を内に含んでをりますから。が是は亡くなつた者に對する悲哀、又はその時私がすつかり溺らした悲哀についても矢張りさう言はれるでせうか。何ぜかなれば。私は其時彼の甦りを期待してをらず、又甦りの爲めに涙を流して祈りもしなかつたのです。たゞ自分の慘めさと、すつかり喜びを失くしたので、烈しく泣いたのですから。或は哭くのは苦しいものでも。私共が以前に樂しんだものが厭になり。そしてその樂しみが厭になつた時。涙が私共を快からしめるのですか。

六　烈しき悲み

は自分の魂に「何ぜ哀しむのだ、又何ぜ私を斃すのか」と尋ねましたがふべきか知りませんでした。若し私が「神に期待せよ」と云つたところ從はなかつたのでムいます。何ぜかなれば魂の失つた此最愛の友は人で期待せよと命じられた此幻想的な神よりも、一層眞實で、一層善かつたからでムいます。今は只涙だけが私に快よいものとなりました。それは私の愛情の極致といふ處で友人の代りをするやうになつたからでムいます。

五　涙は何ぜ甘いか

然し主よ、今、是等の事は過ぎ去つて、時の經過は私の傷の痛みを和げました。何故惱む者は泣けば心が慰められるか、眞理に在す貴下から、私は聞くことが出來ませうか。又貴下が私に語り給ふやう、私の心の耳を貴下の口に向けられませうか。けれど、貴下は私共の惱みを、遠くへ投げ棄てゝおしまひなさいました。又貴下は恒に

した。私は想像致します、彼を愛することが強ければこそ、彼を私から奪ひ去つた死を、最も惨虐な敵として、憎みもし、恐れもしたのだらうと。又死は彼を殺すカをもつてゐたのだから、速かに總て他の人々をも亡ぼすだらうと想ひました。私は全く斯う考へたと記憶致します、私の神よ、私の心を見、私の内部を照覧ましませ。私の希望よ、御覧下さい私は之を記憶致してをります。貴下こそは私をこんな愛慾の不潔から潔め、私の眼を貴下に向はせ、又私の足を係蹄から引き出して給ふのでムいます。私は、まるで永久に死なぬものゝやうに思つて愛してゐた彼が、今死んでゐるのに、他の人間が生きてゐることが不思議だと思ひました。いや、彼に取つては第二の自我たる私が、彼の死後なほ生きてゐられることを一層不思議に思ひました。或る人がその友人を、私の魂の半分と言つたは至言です。私はなほ、自分の魂と彼の魂とは一つ物で、二つの身體に入つてゐるもいとさへ感じたからでムいます。だから私は半分になつて生きてをられない筈でムいました。だのに、多分、私がこんなに強く愛してゐた

が一體何だつて私はこんなことを語るのです。それは今は訊くべき時ではなくて、貴下に懺悔すべき時だからでムいませんか。あゝ情によつて結ばれる魂は何れもあはれなものは私でした。又朽つべきものゝ、友まだ失はなかつた以前から既に慘じめであつたら、その慘じめさを始めて感ずるのでムいます。その人は朽つべき物を失へば、す。私は當時此通りで烈しく泣いて、而も其らさのうちに最も良い安靜を得ました。私は斯うも慘じめでした、しかも其慘じめな生ましたけれど、なほ親友を失はうよりも、にすら、此生活を、私は自分の親友よりももつと愛くしみ此生活を失ふことを欲しなかつたからでムいます。のみならず、彼と交誼をつゞける爲めは、私は此生活の轉換を欲しましたけれど、なほ親友を失はうよりも、にすら、此生活を失つてもいゝと思つたかどうかも私は存じません。それは丁度オレステースとピラデースとの傳說（若し物語でないとすれば）のやうに、一緒に生きてるないのは、死ぬよりも惡いと言つて、互に死を喜んだやうでした。けれども又之と反對の感情が私のうちに生じました。卽ち人生は私に取つて堪だ煩さく、死は又恐ろしいものになりま

いま す。けれども私の魂が嘆きと涙とから離れたときには、どれ程重荷を負はされたでムいませう。主よ。此重荷は只貴下の御手で揚げられ、軽るくせられるべきものでムいました。私も之を知つてゐましたが。さうする意志も又力も私にはムいませんでした。といふのは當時は貴下のことを思つても、貴下は確固、實質的なものとは見えなかつたからです。本當の貴下が私の神ではなく、私の愚かな妄想や誤謬が私の神だつたからです。愈はうとして、よしその上に私の重荷を卸ろさうとしたところで、重荷は虚空に落ちて、再び私の上へ降りましたらう。斯うして私は依然として不幸な重荷の置き場となつてをりました。私はそれに安住することもならねば、又立退くことも出來ませんのでした。私の心が私の心を立退いて何處へ行かれませう。又自から去つて何處へ逃げませう。何處へならば自分のあとをつけて行かれないでせうか。それでも私は自分の郷里を逃げ出しました。それは彼を見ることの出來ない處に、私の眼が彼を餘計に求めないようにし度いからでムいました。斯うして私はタガステの市からカルターゴに來ました。

た彼が、全然死んでしまふだらうと心配して、自分の死ぬことを恐がつたのでムいませう。

七　鄉里を去る

あゝ、人が當然愛せらるべきやうに、人を愛することを知らぬ狂氣よ。まその時苛立ち、嘆き、泣き、取り亂し、安靜も、思慮もなかつたのです。私は、ぢつと私に抱かれてをらうとしない、私の裂かれて、血みれになつた魂を持ち歩るいたのです。が私はそれを卸ろすべき場所を見出せません でした。樂しい林の中にも、遊戲又は歌にも、甘い香りのする庭園にも、珍らかな宴會にも、又は寢床の快樂にも、又詩文を繰り返し讀んでみても、安ひは發見されなかつた。えゝ、光りでさへも厭でした。何事にもあれ、只嘆息と涙とが例の、又厭はしかつたのですが、只それだけ、ほんの僅かな憩ひを發見したからでムいました。といふのは私はそのうち

ました。けれども此話は、屢々私の友達が死ぬる程、私に取つて、やゝ/\と死にはしませんでした。他に彼等と一緒に、私がすつかり心を奪はれたものがありました。即ち共に談笑し、交互に親切を盡して、面白い本を讀み、或る時には戯れ、他の時には即互に眞面目に過ごし、時には自分にするやうに、別段惡意があるのではなくて、わざと逆らつてみたり、又稀に此逆ひでもつて、私共の一層屢々な和合に味をつけ、或る時には互に教へ、互に學び、あるなければ待ち悶え、來れば喜び迎へました。斯るものや、愛し又愛される人々の顔付、言葉、眼色、その他幾百千の愉快な擧動によつて、私共の魂は新のやうに燃え上り、多くの魂を只一つに致しました。

九　神によつての友情

之が友人といふものに於て尊ばれるものでムいます。又若し彼が自分を愛して返す人を愛しないなら、或は自分を愛する人を愛して返さないで、只その人が愛情の表示をしてく

八　時は慰籍者

時は空しく時を過ごしません、又怠惰に過ぎ行きません。私共の感覚を通して、心に不思議な働きを致します。御覧なさい、時は日毎に来て又過ぎ去りました、そして去来してゐるうちに私の心に他の観念、他の記憶が起つて、少し宛古き歓喜を以て心の彼れを縛ひ私の現在の悲しみはそれに幾分か慮を譲りました。何ぜかなれば、私が、死ぬべきものを、決して悲しみの原因（この世の快楽）が後を繼ぎました。何ぜかなれば、私が、死ぬべきものを、決してこの世の悲しみではなくて、他のものゝやうに愛して、自分の魂を埃りの上に注いだからでなければ、何處から以前が私の魂の奥底に其様に容易く侵入することが出来ましたらう。殊に私を力づけ、又爽快なものを、私と一緒になつて愛しらしめたのは私が後に愛した他の友人達の慰籍であります。愛したものとは即ち大きな作り話（マニケウスの教書）又長い嘘でムいました。この姦淫にそゝられて、私の耳の内にムづくしながら入つてゐる私の魂は腐らされてしまひ

十　魂の憩ふ處

「萬軍の神よ。再び我等を復し給へ、さらば我等救はれん。」（詩篇第八十の十九）と云ふのは、人の魂は何方に向いたところで、貴下に向はなければ、よしや美しいものに定着しても、矢張り悲みに行き當つてしまふからでムいます。美しいものも有ることからでなければ、その美しいものも有ることによつて存在を始め、完全にならんが爲めに成育致します。完成し、老ひ、朧て滅びます。總ての物が老ひはしませんけれど、滅びなければなりません。だから存在を始める時、愈々速に成長すればたのです。貴下は斯の様に萬物を定め給ふたのです。何ぜかなれば是等は、一時には存在しまいと急ぐのでムいます。此通り私共の話も意味ある音によつて行はれます。しかもその言葉すら、一

れるこ
より外には何物をも期待しないな
か友人
が死ねば悲があり、悲哀の闇があ
ます。
だから又死にかけてゐた者の生命が
りま
す。貴下を愛し、貴下にあつて其友を
ます。
何ぜかなれば不朽の者に於て、總てを愛する者は。其最愛のものを
がムい
ませんから。是こそ私共の神より外誰がありませう。神よ、貴下は
ひまし
た。これを充たすことによつて造り給ふたからでムいます。貴下を
それは
單に悦び給ふ貴下を去つて悦び給はぬ貴下に行くだけのことでムいます。
何人も
貴下を失ふものはありません。又貴下を棄てゝ、何處に行き、又何處へ
云へば
自分が受ける刑罰のうちに、何處に貴下の律法が發見せられないでせうか。
貴下の
律法は眞理で、眞理は卽ち貴下御自身でムいます。

いふ自分達の運命を聞いてゐるからでムいます。

十一　萬有は變るも神は變らず

私の魂よ、愚であるな、又前の愚を以て心の耳を聾にするな。けれども聞けず身がお前に立戻れと呼び給ふのだ。又其處には妨害も受けない靜かな場所があつて、ではお前の愛は、自棄して棄てられることはないのだ。見よ。是等の物は、他の物を自分達の位置に來させて、此最低の宇宙をそのあらゆる部分によつて完全せしめる爲めに、過ぎ去るのである。けれども神の言葉はいふ「私は何ぞへ行つてしまふだらうかと」と。其處にお前の住居を定め、お前の持つてゐるものを總てそこに預けなさい、私の魂よ。少くともお前は今是等の虛妄に疲れ果てゝゐるのだ。「眞理」から誠いたものは何でも「眞理」に御頼なして置きなさい。さうしたらお前は何物をも失はないだらう。また前の腐れにも再び花が咲き、お前の倦怠も皆癒やされやう。又お前の妄へ行くことは

つの言葉が自分の分を繕かして、過ぎ去り、金にはならないのでございます。萬物の造主にお貴えていたゞきます神よ、是等のものによりて私の身體の官能が通して、愛の門かに粘りつかせないでください。何せかなれば萬物は無に歸さうとして、その行くべきもので、又變化のやうな無常の愛を以て、魂の切なく慕ひ求めるものでありますから、その愛するものゝうちにはゐません。

のものが多くより成り、その多くの總てが一緒に存立してゐないときには、びが同時に感じ得られるものとすれば、いつも此通り。一つ〳〵ゐるよりも一緒にゐる方が人を喜ばすことは確かである。けれども是よりも遙かに善いのは萬物を造つたものであ る。その者が私共の神であらせられる。又神は後繼者をもち給はぬから。去り給ふことは決してない。

十二　神に於ての平安

若し物體がお前を悦ばしたら、その爲めに神を褒め、お前の愛を、若し總ての悦た神へ返せ。でないとお前を悦ばす是等のものにより。神の不興を招く恐れがある。若し魂がお前を悦ばすならば。それが神にあつて愛せられるやうにしなさい。それは魂も變るものではあるが、神に於ては確立せられてゐるからである。でなければ魂は去つて。死んでしまふのだ。だから彼等は神にあつて愛せらるべきである。そして又お前が出來る限り

總て、膨張となり。新らしくなり。お前に結びつけられるのだ。なほ又それはその自ら下つた場所にお前を置くこともなく、お前と一緒にゐて。永久に確立して止むときない神のみ前に、永久にしつかと立つであらう。

然らば。お前は何ぜ矢張り自分の肉について行くのをかへて。お前について來さしちや奈何だ。

何には兎もあれ、お前が肉によつて感ずることは只部分だけである。お前が知らないのだ。しかも之等をその部分とするの全體を悦ばせる。しかも之等のものはお前を悦ばせるの肉感が全體を知ることが出來、お前の受くべき罰の爲め、全體のうち一部分に、それが局限せられるのでなかつたなら、お前は今の世に存在するものを悉く超越して、そこで全體が愈々お前を喜ばしたであらうに。といふのは私共が語ることを、お前も（自分の魂にいふ言）亦同じ肉感によつて聞くからである。けれどもお前は同じ綴りを永久に響かせずに、速に飛び去らせ、お前が全體の文句を聞き取らせるやうにする。凡そ一つ他の綴りを來らさせ、

お前達は死の國で幸福な生命を捜がしてゐる。のない處に、何で幸福な生命があらう。

けれどもそれは共處にはない。少しも生命けれども私共の此生命は共處に下つて、私共の死を取り給ふて、よつて死を殺し給ふた。彼は又私共を此處から彼に歸らせ、そこからお出でなされた神秘な場所に来いと、雷鳴の轟きをもつて呼び給ふのだ。彼は先づ處女の胎に入り、共處で人間、即ち朽つべき體を、永久に朽ちないようにと、娶り給ふたのだ。新郎がその殿より出づるが如く。勇士が競ひ走るを歡ぶが如く」であつた。そこから彼は「宛言葉と、行爲と、死と、生命、降誕と、昇天とにより。大聲叱呼して、私共を彼に復歸せしめ給ふたのだ。そこで彼は私共の眼前を離れてお去りになつたが、それは私共が自分の心に歸つて、共處に彼を發見するようにといふ御配慮に基づくものだ。彼は去り給ふた。が見よ、矢張り共處に在すのだ。彼は永く私共と共に留まらうとはなさらなかつたが、私共を全然放棄りはなさらなかつた。彼が行き給ふたとこからは、彼は決して去り給はなか

の汝くの魂をつれて神に行き。その魂共に言へ――我々は神を愛しようぢやないか、神を愛しよう。神は總て是をお造りなさつたのだ。又神様は是を離れて遠くに在さないのだ。――と。何ぜなれば、神は之を造つて、それから去り給はないで、萬物は神から出て、神のうちにおる。見なさい、眞理の香るところには何處にでも神は在すではないか。神は胸の奥に在すのに、心は神を離れて迷ふのだ。再びお前等の心に歸れ。おゝ、反逆者共よ、そしてお前達を造り給ふたお方にしつかりと結りつけ。神と共に立て。そしたらお前達は安全だ。神に於て憩へ、そしたらお前達は何處へ行くのか。噫何處へ行くのか。お前達が愛する善は神から出てゐる。神に關係してゐるからそれは善でもあり、又快くもあるのだ。けれども神より出つるものな何でも不當に愛して。その爲めに神を棄つるなら、それは當然苦がいことになる。お前達は今。何處へ此困難な わづらはしい路を前へ前へと辿つて行くのか。お前が求める憩ひは其處には見出されないぞ、お前等の求めてゐるものを求めなさい。たがそれはお前等が求めてゐる處ではない。

で沈み、友達に言つたのでムいます――「我々は美しいものを愛するか。では何が美しいか、何が美であるか。斯く我々をまどわし。我々の愛するものに我々の愛着を惹くものは何か。若しそんなものゝうちに優美がなければ、どんなにしてもそれは私共を惹き付けることは出來ないのぢやないか」と。而して肉體のうちに一種の全體を形造る美がある。更に又身體全部とその部分との關係のやうに。又は靴の足に於ける等の如く。互に適應するもう一つの美のあることを認め、さとりました。此考へが私の胸の奥に浮んだので「美と適合」とについて、若干の著書を出しました。二三冊と思ひますが。今私は此書を自分は有たず。失くしてしまひましたから、どうなつたか知りません。

十四　美學の自著について

けれども主なる私の神よ、何が私を動かして此書を、羅馬の辯舌家ヒエリウスに献げさしめましたか。私は彼の顔を識らなかつたのですが、その隆々たる盛名により、彼に私淑し

つた。といふのは世界は彼によつて造られたのであるから。又彼は此世に罪人を救ふ爲めに來給ひ、彼に私の魂は今告白し。彼はそれを癒し給ふのだ、その魂は彼に向つて罪を犯したからである。人の子等よ。お前達はいつまでもこんなに愚鈍なのか。生命は既に來り給ふたのに、お前達は未だ上らうとせず。生きようとしないのか。

けれどもお前達は高くにゐるから、天にまで頭をあげてゐるから。此上る爲めに。神へ上る爲めに。降りて來なさい。神に反して上ることは墜ちるのだぞ。此涙の谷に泣かせる爲めに。

いふことをお前達が愛する魂共に斯う言つて、彼等をつれて神の許に行きなさい。若し慈悲の火に燃えて語るなら、彼のみ靈によつてお前は語つてゐるのだ。

神よ。

十三　愛の源泉

私は其時分、こんなことを知らないで。是等低級な美に魅せられて、ドン底にま

（私が愛した人々は）一層毎日に、私が自分でもう優れたいと思つた人々であつたと云ふ事を、私自身では特優を愛めて、愛してゐましたが、自分は特優としてこそ愛されたいと望んでゐたのでムいます。そんなことで賞讃されるよりも、一つの驚くべき私であつたい、さうして愛されてをりますか。どうしてこれ程自身からは薬でゝ押しのけたいものを、他人にあれば、どうしても私は愛するものを、私は同じ人間でありながら、それを以て直ちに人間である俳優の場合に比較することは出来たところで、善い馬になることは頭はないでせうか。自分が善い馬になることは出来ません。では同じ人間でありながら、私は自分がなりたくないものを、他人に於て愛するのでせうか。人は大きな深淵でムいます。おゝ主よ、貴下は「この髪をも算へ」（馬太傳第十章廿九、廿一）給ふので、それは貴下のお目を免れることはムいません。私の感情よりも、彼の頭の髪を算へる方が遥かに容易でムいます。

てなりました。又私が聞いて喜んだその言葉が好きだつたのです。けれどもそれ以上に私の氣に入つたのは、彼が人々の氣に入つて、世間が非常に彼を賞讃したからでムいます。即ち彼がシリヤ人であつて、初め希臘の雄辯術を學んだのが、後に驚くべき雄辯家となり、又特に智識に關する總ての學問に長じた人であるといふことが私の氣を惹いたのです。人はそいつ〔illegible〕愛しられます。然らば此愛は賞する者の口から直接に聞くものゝ胸に入るのでムいませうか。いゝえ。一人の愛する者があれば。それによつてもう一人の者も燃やされます。ですから賞める者が僞りのない心で言つてゐると信じられる時、即ち愛する者がその愛人を賞めるとき、賞められてゐる者が愛しられることになります。

何人も欺き給はぬ神よ。當時私は此通り、貴下によつてゞなくて、人々の判斷によつて愛しました。けれどもそれ以上に私る有名な戰車乘りや獵人でなかつたのは何ぜでムいませうか。否。そんな者どころか。

す。

白分の辯舌と、學殖とがその高名な人に知られるのは。私にとつて大事なことでありました。で。もし彼がそれを認めれば、私は一層熱を高めますし、若し又彼が全然貴下のその適應とについて彼に書き送つたことを。私は想ひ出してはニコ〳〵してくれもしないのに。自分獨りで嘆賞してゐたのでムいます。

十五　神を求む

然し、只獨り奇蹟を行ひ給ふ全能者よ、私はまだ此重大な事が、貴下のみ業のうちに。中樞を置いてゐるのだとは知り得ませんでした。私の魂は有形物の間をさまよひ、私は。只がれ自らだけで美しいものを美しと定めて、區別し、又他の物に應用して始めて美しくなるものを適合と致しました。私はこをいろ〳〵の實物で例證致しました。又私は魂の本

けれども此演舌者は私が自身でもさうなりたいと思つた程のものでムいました。私はいやます傲慢によつて、誤り「さまざまの風に吹き廻かされ」（エペソ書、第四章第十四節）ました。けれども矢張り知らず〳〵に貴下のみ手に操られてをりました。さて又私は、其人の名聲を高めた善い才能そのものゝ爲めよりも、其人を愛した者共の愛の爲めに、彼を愛したことをどうして知り。又どうして確實な理由に立つて告白致しませう。則ち、若し同じ人が其人を褒めないで。却つて貶したとしたら、又貶したい、輕蔑したりすることに於て、その人に就いて同樣なことを言つたなら。私は決してそのやうに燃えもしなければ、その人を愛するほど氣乘りがしなかつたのでせうから。しかも確に事實はちがひはなく、その人自らも異りはなかつたでせうに。只語る人達の感情だけが異つてゐたゞけでムいます。御覽なさい。未だ眞理の堅實さによつて支持されない無力の魂の仆れてゐるのを。丁度舌端の嵐が批評者共の胸から起り。それは前後左右に吹きまくられ、光りはそれから隱くされ、眞理は見えなくなるやうなものでムいます。けれども御覽なさい眞理は私共の前にムいま

なかつたのです。

若し自ら衝動を有する、又傲慢粗暴を働くその魂の運動が腐敗してをりますならば、罪となるやうに、又肉の快樂が流行する魂の愛執が過度にゐる時、害が生ずるやうに、虚僞な意見は、若しその理智の魂そのものが惡るくなつてをれば生命を汚すのでムいます。私に於てもその通りでムいました。當時私は、魂は自らが眞理の核心ではないから、それを自分の分擔者たらしめるには、別な光りによつて輝らされなければならないことを毫も知りませんでした。貴下こそ私の蠟燭を灯して下さいますに、おゝ主、私の神よ、貴下こそ私の暗を輝らして下さるのですに。貴下は「世に來る總ての人を照らす光に在す」（ヨハネ傳、第一章第十六節）のですもの、「貴下に變ることもなく、又變る影もない」（ペテロ前書第五章の五ヤコフ書、第四章第六）のでムいますもの。

けれども私は貴下に迫つて、しかも、（私は傲慢であつたがために）死の味を祖めよと、跳ね返されました。貴下は高ぶる者を斥け給ふからでムいます。又貴下御自身である天性によつて、私自

質について研究致しましたが、精神的のものに關する先入の謬見が私に眞理を發見することを許ろさなかつたのでムいます。只眞理の力は時々私の眼に閃めきましたが、私はそして魂の鼓動する魂を總ての無形物から、それに輪廓、色彩、並に仰山な容積に轉換致しました。うちにこんなものが見られなかつたから、私は魂は見ることが出來ないものと考へました。斯うして私は徳として平和を慕ひ、悪として不和を憎みました。前者に於て私は一致を認め、後者に於て一種の分劃を認めました。その一致に於て、私は合理的の智、眞理並に至上善の性質の存在を認めました。けれども此分劃のうちに、愚かにも私の知らない非理性的生命の實質、並に實質ではないばかりか、又眞の生命である最大悪の性質でしかも、嗚呼私の神よ　總ての物の本源たる貴下から出てるないものがあると想像致しました。けれども私は前者を性をもたぬ魂であるとして單元（モナド）と呼び、後者を複元（ノンド）と申しました。複元は即ち犯罪に於ける忿怒、暴行に於ける肉慾の如きものだつたのでは。私は悪は實質ではないこと、又私共の魂は主要、且つ不變の善ではないことも知らねば、又學びも致さ

るのか」とは訊かれたくはなかつたのです。私は、自分の變化すべき本質が自由意志によつて迷ひ、私の過ちが卽ち私の罰であつたと告白するよりも、寧ろ貴下の變化しない實質が拘束を化損じたのであると、頑固に主張致しました。

私が此本を著はしたのは多分十六か七でしたらう。當時は是等の物體的な架空な說に浮身を窶しました。おゝ甘い眞理よ。寧ろ貴下の內部的な妙音に傾けてゐた心の耳は當時矢張りそんな空論に蟬噪して。始終私の「美とその適合について」かゝづらひながら、立つて、貴下に聞き、貴下の新郎の聲を聞いて、悅ばうと翼つたのですが、それは出來ませんでした。其理由は私の過ちの聲により、私は自身から追ひ出され、又私の傲慢の重みによつて、最も低い坑に沈んだからでムいます。貴下が私に喜びと愉快とを聞かして下さらず又未だ碎かれてゐなかつた私の骨を歡ばして下さらなかつたからでムいます。

十六　アリストテレースの影響

身が神であるとする驚くべき狂氣の沙汰以上に傲慢なものがありませうか。然し私は變べきものであり、私が賢くならうとした願ひは、悪るいものからより善くなりたいました。なぜかなれば、うとする願ひであることは明かでありましたから。けれどもじものであると自分を思ふよりも、寧ろ貴下が變るべきものだとの考へを捨ひました。から私は跳ね返され、又貴下は風のやうな虚しい私の頑冥を斥け給ふたのでハいはゆる具體的な形を想像して、肉であるから、肉を呪ひました。又「吹き過ぐる風故、私は貴下に歸らなかつた」（詩篇第七十八の三十九）のです。然し私は貴下のうちにも、肉體のうちにもなく、又貴下の眞理によつて私の爲めにも造られたでもなく、只私自身の虚妄によつて、物體から案じ出された、非實在を果てもなく追ひかけました。又私は貴下の忠信な子供であり、私の同胞市民に訊ねました（私は自分では知らぬうちに、その仲間を追ひ出されましたのに）私は修辭に實際しまつたく馬鹿なお喋りやでしたのです、（私はまつたく馬鹿なお喋りやでしたのか」とつけれども私は一では神の給ふた魂が何せ通ちをする

の、換言すれば實質の範疇に編入せらるべき無數のものを總てを、此本體に示ゝしてをるやうに思はれました。

斯廣こと私に何の利益となりました。

萬物は總て此本の範疇のうちに含まれるものと思ひ、あゝ私の神よ、貴下も、恰も貴下も亦貴下御自身の大と美とに隷屬在すものゝやうに解しようと試みました。ですから物體に於けると同じく、大も美も、貴下のうちに在つてその主體として存在すものと致しました。けれども貴下御自身か偉大で、又美で在すれば、それは物體であるが故に偉大でも又美しくもないのです。けれども私が貴下につい て考へたことは虚妄であつて、眞理ではなく、私の辛慘の妄想であつてなかつたのです。何ぜかなれば、貴下は私の爲め地に荊棘と薊とを生やし、又額に汗して私の食を得なければならないやうに命じ給ふて、その通りになつてをるのですか

私が未だ二十才にもならない時、アリストテレースの「十個の範疇」といふ本が手に入りました。私のカルターゴに於ける修辞學の先生や其他の大學者と崇められた人々に名聲嘖々たる本でした。が私がそれを讀んで何になりましたらう。最初私は一種偉大で、神聖なものゝやうに熱心にそれに取り着きましたけれども再讀して、果して私を理解しましたらうか。又後、非常な苦心を以て、最も有爲な師傅についてばかりではなく、又その構造や例證を地面に描いてまで教はつた人達に訊ねて授を受けたばかりでは、私が獨りで讀んでさとつた以上それについて知ることは出來ませんでした。此本は私に人とか、その性質とかいふやうな實質を明かに語つてゐるやうに思はれました。たとへば人の顏のことなら、それがどんな種類のものか、又身丈ならば、幾尺とか、その血緣は、誰の兄弟であつて、何處に立つてゐるとか、何時生れ、或は何處に立つてゐるとか坐つてゐるとか。又は靴を履いてゐるとか、武裝してゐるとか。何かをしてゐるとか、それともされてゐるかといふやうな事や、今私が上に述べた此九つの部類に編入せらるべきも

善い物として、善く用ひられねば私に何の益がありませうか。勤勉にして、ますらも、是等の學術を理解することは面倒なものですが、私は後に之を自分がてやらうとするまでには、そんなことをちつとも感じなかつたのでした。しかも私の說明を聞いた者のうち、最も秀才といはれる者ですら、單に遲れず、私の說明について進める人が卽ち秀才であつたのです。

けれども主にして眞理に在す神よ、貴下が宏大な光明體にましまして、私は只その一部分であると想像することが私にどんな益を與へましたらう。餘りに遠しい劣惡です！　私は當時そんな惡い人間だつたのです。しかも我が神よ、公けに冒瀆な言葉を吐き、貴下に對して反くことを恥としなかつた私が、憶面もなく貴下に對して、貴下が私に下さる御憐憫を賜び申したのでした。だから當時、よしや私が人に愧を告白して、厚ケ間しくも貴下を御呼び申したのでした。だから當時、よしや私が人に教はらないで是等の學術書や、難解極まる書籍を讀み、とくだけ智惠がすぐれてゐたからとて、若し信仰に教理に於て斯慶愚かな誤りをして、斯慶冒涜な無恥をしたなら、それが何

ら。（創世記を見よ）

又私のやうな悪い情慾の奴隷である者が、所謂る白山と稱ばれる是等學術の本を。私の目の及ぶ限り澤山讀んで、それを獨りで分ったからとて私に何の益がありましたらう。又私はその本を悦んでも、その中にある眞理と確實とが何處から來たかを知らんでも、その中にある眞理と確實とが何處から來たかを知らなかつたので、顔を背を向け、顔を照らされてゐる物に向けました。だから照らされてゐる物の顔そのものは照らされなかつたのでムいます。凡そ書かれたものは。修辭學でも、論理學でも、幾何でも、音樂でも。又數學でも。私獨りで。さして困難もなく、私が解し得たことは、我が主なる神の知ろしめすところでムいます。といふのは理解の迅速と、辨別の正確とは貴下の賚でありますから。けれどもそのうちから何物をも私は貴下に獻げは致しませんでした。だから是は私の益とはならないで、即つて私の亡滅の基となりました。私は自分の財產の此様に尊い部分を。自分の手に握り。自分の力を控え置いて全然貴下に向けないで。「貴下を離れ、遠國に行いて、娼婦に費したからです」（路可傳第十五章）

第五篇

一　我が魂は神を讃む

私の舌の働きによる、私の告白の供物を受けて下さい。貴下はみ名に告白せよとて。舌を造り、それを動かし給ふのです。「私の總ての骨を捻し。それに、おゝ主よ。誰か貴下に比ぶべきものがありませう」（詩篇第卅五の二十）と云はして下さい。人が貴下に告白せよとて、それは自分の御意の頑固も貴下のみ手を拂ひのけることは出來ないのでムいますから。貴下は自分の心を貴下に告げるのではムいません。鎖された胸も貴下の御眼をよけることは出來ないのでムいます。或は憐憫をもつて、或は復讐をもつてそれを開き「物として貴下の和照（にこり）から藏はれるものはない」（詩篇第十九の第六）のです。けれども貴下を私の魂が愛するように、貴下を讃美して欲まゝ。又貴下の貴讃に沈默も致して下さい。貴下の創造全部は貴下を讃美して欲まゝ。又貴下の貴讃に沈默も致

の徒になりましたら。或は又是よりも遥かに鈍い智が貴下の子供達に何したらう、何せかなれば、彼等は貴下の教會の巢の中で、安全に羽を生やして慈悲の翼を養はうとして、貴下から遠く離れ去らなかつたからでムいます。貴々の神よ、み翼の陰に私共に希望を與へ、我々を護り、我々を負ふて下さい。

主なる、我々は何せかなれば私貴下は私共が小さいときでも、又白髪になつても私共を負ひ給ふのです。

共の堅實さは、それが貴下のである場合には、本當に堅實なのでムいますが、れが私共だけのである場合には跪うムいますが。私共の善は常に貴下と一緒にそれから反きたるとき、私共は邪惡となります。主よ今、私共を戻らして下さい。私共の善は貴下共に住みますが、少しの腐れもなく、その善は卽ち貴下であるからでム、覆されないよいます。又私共は墮落したからとて、歸るところがあるまいと心配するには及びません、貴下のお家——貴下の永却は絶えることはないのですから。

れたのでムいます。盲目滅法に貴下に躓のを薬て給はないのですから）即ち不義身を退いたがもとで、貴下の正義に躓と譯したが或る英譯はtheir own「彼等自らの」と原文にあるまゝに「貴下の」なつてゐる。羅典のテキストが相違すると見ゝいます。嘘、まつたく彼等は如何なる場貴下から遠く離れた者にすらも近くに在を立戻らして、貴下を求めるようにして下さい、彼等が自分の造物主を楽てたやうには、貴下は彼等をお薬てなさらなかつたのです。彼等を立戻らして、貴下を求めるようにして下さい。貴下は彼等の心に、即ち貴下に懺悔し、貴下に飛び附いて、自等造の嶮路を辿つた後貴下の懐中に泣く心に在すのです。その時貴下はやさしく彼等の涙を拭ひ取り、彼等は愈々泣き、泣いて嬉れしがります。主に在す貴下、血と肉の人間に在さずして、彼等を造り給ふた貴下が、彼等を改造し、彼等を慰め給ふことが嬉れしいのです。けれども私が

しません。或は貴下に向けられた瞳をもつて人の魂も
それを瞑想する者の聲を以て褒めて欲むことがムいません。それは我々の魂がこの疲勞から
ふた貴下に行かうといふからなのでムいます。
二　神の不可避
不安な者、不信な者は貴下から遁れるがいゝです。けれども貴下は彼等を照覧ましますのでムいます。けれども如何でムいます、彼等は汚ないけれども、彼等の暗黒をも推知し給ひます。彼等と一緒にある宇宙は美しいではムいませんか。しかも彼等はどれ程貴下を損ひましたらう。或は又天から此最低の地に及ぶまでも正しく且つ完全な貴下の御支配をどれぐらゐ汚しましたらう。彼等はみ前を遁れたとき、何處へ遁げまたか。又貴下は何處に彼等を見出し給はなかつたでせう。只彼等は自分を見そなはす貴下を見まいとして遁

又私は斯うした哲學者達について多く讀み、熟く記憶してゐましたので、マニスケウ教のその長い作り話と、哲學說のうちの或るものとを比較してみて、後、學者達の主のことについては、何の手段をも彼等は見出さなかつたのでムいます。何ぜかなれば貴下は偉大に在して、傲慢なものは他所に見給ふからでムいます。

又貴下は主よ、そして遜る者を顧み給ふも、傲慢な者によつて見出され給はず、又彼等が不思議な術によつて星や砂を算へ、星の天を測り、遊星の通路を究めても、貴下は心に悲しむ者により外には近寄り給はず、

何ぜかなれば、貴下が彼等に與へ給ふた理智によつてこそ彼等は斯るものを捜し出すのでムいますから。そして彼等は多くを發見致しました、又日蝕と、月蝕を多年の前にあつて、何日に何時に何分何厘蝕があると豫言して、その推算は間違ふことはムいません。彼等はそのとほりに成り、彼等はそれを規則として書きとめましたので、それは今日

貴下が求めてゐた時、貴下は何處に在したのですか。貴下は私の前に在しましたのに、私は貴下を遠く離れてゐたのでムいます。又私は自身すらも見出さなかつたのですから、まして貴下などは猶更でムいました。

三　ファウストに會ふ

私は自分の二十九才の齢を、私の神のみ前にのべませう。其時カルタゴにマニケウス教の司教で、ファウストスと稱ばれる大きな悪魔の罠が參りまして、その巧辯の誘ひに多くの者が陷りました。私はその辯を推奨はしましたけれど、私が當時熱心に習はうとしてゐた事物の眞理とはちがつてゐることは知つてをりました。なほ又此ファウストスが、私に喰べさせようとして私の前に置いた學問の御馳走に比らべれば、それ程人々には稱讃せられてゐた辯舌の器は私にとつては左程有難い物ではムいませんでした。前から彼はあらゆる有用な學問に精通し、又總ての高級な科學に熟達してゐるといふので名高かつたのです

けれども彼等は貴下の「言葉」、（ヨハネ傳第一章第一節以下參照）卽ち其御方によつて彼が算へてゐるもの、算へてゐる彼等自身や、彼等に算へさせる感覺やが造られてゐること、又數限りなる彼等自身や、彼等の感覺やが造られてゐることを知らなかつたのでムいます。けれども「貴下の智惠は獨子自ら言ひ給へる如く、我々の爲めに智惠と、義と聖となり、贖と、（詩篇第百四十七の第五）といふことを知らなかつたのでムいます。（コリント前書第一章三十節）私共の人數に算へられ、カイザルに貢を納め給ひました。（馬太傳第七章二十七節）彼等は自分からその方に降りて行く道や、又その御方によつてその御方に昇る道を知らなかつたのでムいます。此道を知らないで、自分等は星の間にあつて、輝いてゐると思ひました。然るにどうです、彼等は地に墜ちて、彼等の愚かな心は暗くなつたではありませんか。造られた物についてなら、彼等は正に多くの眞實なことを申しました。けれども彼造物の造物者たる眞理を恭しく捜すことは致しませんでした。その爲めに彼等は其御方を發見しませんでした。或は發見しても、神に在すことを知り、神として崇めることを知らず、又感謝もしないで、只その想像に慢じ、自分自身が貴下の物であるのに、彼等自身いものであるとして、自らを賢いものと致しました。

でも讀まれ、それに據て他の者共が、何年何月に、月又は日の何の部分が蝕すると豫言すれば、ニの豫言のとほりに成るのでハいます。斯麼ことを、此術を知らない者は不思議がり、驚き、是を知つてゐる者は褒められて、威張ります。そして不敬虔な傲慢によつて貴下から離れ、貴下の光りを失ひ、自分の光りが蝕してゐることは見ないで。ずつと前から太陽の光りの蝕することを豫見致します。何せかなれは彼等は敬虔に何處から彼等が是を捜出す智惠を得たかを捜さないからでハいます。又貴下が彼等を造つたことを發見して、貴下が造つたものを保存なさるようにと。身を捧げて貴下に仕へないばかりか、自分が自分を造つたものゝやうに汚へて、貴下に犠牲を捧げません。又空の鳥のやうに天翔ける彼等の想像を殺さず、又海の魚のやうに、深淵の秘密な小徑をさすらう、或は又野獣のやうな彼等の奔修をも殺しません。是は主よ、「焼き盡す火に在す」（申命紀第四章の廿四節）貴下が、是等の死んでゐる配慮を嬉き盡して、彼等を不滅のものに再造し給ふ爲めでムいます。

四　神を知らぬは不幸

では主なる眞理の神よ、誰でも最等のことを知つてをれば、その爲めとへ之を知らないでも、貴下を知つてゐる者は幸福でムいます。又貴下しますか。確に斯る事を皆知りながら、貴下を知らない者は不幸でムいつてゐる者は、その物の爲めにより多く幸福なのではなく、只貴下を知を崇め、その念ひに虚しいところなく、感謝してゐるならば、貴下の御り、神として貴下の御陰によつてのみよ幸福でムいます。たとへば木を自分の所有にすることを知つてゐて、その用に立つが爲めに、貴下の御氣に召に感謝を言ふ人は、その高さが幾丈あつて、その幅は幾尺かといふことを知らないでも、その枝を皆算へながら、自分のものにしようともせず、また其實を充分に測り、その枝を皆算へながら、自分のものにしよりは遙に幸福です。忠信な人も亦此のとほりでムいます。一切の富をあげて全世界はその人のものでムいます。又萬物の仕へまつる貴下に

斯くて道を説き真理の燈火を高く掲げ、真理に在る者の生涯を豊かにし、一朽つることなき道の発光体となり、像とし、一朽つることなき人、および島、仕へるのです。（羅馬書第一章二十三節）

けれども私達は此道理について、私達の主、救主イエス・キリストは日本国、平安、霊魂、肉体について、狂気じみて最も高く善い道理について、私達はつて

ぜかゝれば斯麼世間的のことを知つてゐたれど、貴下に對して懺悔することは敬虔のきひまをしたゝ、そして彼が斯る物について多々に訐かれ、他の一層深遠なものについて彼の理解がどんなものだか知れたかゝんでムいます。彼は自分を卑しく思はれたくないばかりではなく、進んで「聖靈卽ち貴下の忠信な者の慰籍者、致富者にまします御方はその全權を以て、人格的に彼のうちに在る」と說いたから、その辯を非したのは、その事に眞に精通してゐる人とか發見されたとき、たとへ其事は宗教の星辰、日月の運行について彼が僞りを教へたことを己れ自らに歸せしめようとする程狂暴な傲慢を以て揑造したもの述べ傳へた分明かでムいます、彼は實に自分の知らないばかりでなくて、恰も神聖な人にすると同樣、キリストを信ずる兄弟達が其事を知らないで、或は誤解して語るのを聞く時、その人が

頼る事によつて、「彼は何も有たざる者の如くなれども凡てのものを有つてゐる」（コリント後書第六章第十節）のです。彼は大熊星の軌道をさへ知らないにもせよ、貴下を知らないにもせよ、諸天を測り、諸星を数へ、諸元素を秤量しながら、あるか否かを疑ふのは愚でムいます。諸天を測り、諸星を数へ、諸元素を秤量して分布なき貴下を顧みない者こそは何たる不幸でムいませう。

五　マニケウスの邪教

けれどもマニケウスに、斯るものなき書けと命じたは誰ですか。斯る技巧は信仰の要素ではないのでムいます。何せなれば貴下は人に向ひ「兄よ敬虔は智識なり」と仰せられたからでムいます。彼等は斯る物については完全な智識をもつてゐましたけれど、此敬虔については無智でムいました。けれども彼等は此事を完全に知らないで、潜越至極な教へをしたのを見れば、彼は明かに信仰に關する智識を得ることが出来なかつたのでムいます。何

瞭に見定めることは出來なかつたのでムいます。よし又解釋を私がつけ得たにしても、果してその通りであるや否やは依然として不明でしたらう。けれども私は、彼の權威は信じたでムいませう。

六　フアウストスの淺學

斯様に私は迷ひながら、此教を聞くこと殆んど九ケ年間、熱心にフアウストスの來るを待つてをりました。その理由は斯教の人々で、私が出會つた程の人は、誰一人私の質問に説明を與へることが出來なかつたので、私にフアウストスを奬め、彼が來て、一緒に談したら。そんな疑問や、より大きな疑問（若しあれば）も至極容易に、又明快に解決し得られやうと言つたからでムいます。驚て彼が來ました。すると私は彼が辯舌に巧みな人には相違ないけれど、そのいふところはいつも他の人達が談してるたゞけのことで、それを美しい辭で、お喋りするのに過ぎないことを知りました。然し立派な給仕のよいお躾も、なほ

自説を述べるのを見てゐるだけの幸福は私にもムいます。父母物の造り主よ、貴下にふさはしからぬ何物をもその人が信じない限り、たとへ具體的な被造物の位置又は特性について知らぬといふことが、その人を損ふと私は思ひません。けれども若しそれが信仰の教義の眞髄に關はるものであるとして、自分が知らないことを頑固にひ張ならば、それはその人にとり害となります。けれども信仰が搖籃の中に於て、此通りに弱くのつてすらも、母なる「慈愛」は、新たに生れた者が成育して、一人前となり、「様々の教への風に吹きまはされないやうになる迄はおつと忍耐してドさるのです。けれどもマニケウスは道を說いて信者となした人々の教師、著者、或は上長であると自稱し、自分に從ふことを、單に人間に從ふのではなくて、貴下の聖靈に從ふことであると思はせました。

一度偽教の實が評かれたら、此様な狂妄な話實さられて、卦床を受くべき者は兒易いことでムいます。けれども私は未た、晝夜の長短、變化、並に晝夜さのものゝ、久日蝕、月蝕、その他私が諸種の書籍で讀んだ此類の說が、一切汝の言葉によつて解釋されつくかどうかを明

に又粗末過ぎられたから眞で。派出な言ひまはしをしたから僞りだといふわけにもいかない。畢竟。賢と愚とは恰も一つは滋養分のある食物。他は滋養分のない食物のやうなもので。修飾した言辭と。無修飾の言葉とは。丁度一つは都會の磁器。他は田舍の土器のやうなものあるの。しかも何の食物を。どの皿に盛らうが一向差支へはないと。

ですから斯く迄永く。ファウストスの來ることを熱望してゐた私の心は。時のその學動と。感情と。又その觀念に着せる適切流麗な言辭によつて。すつかり悦ばされたのでした。で私は悦び。多くの人々と一緒になつて。否寧ろ彼等より以上に彼を賞讃しました。けれども聽衆の集會で。私の迷つてゐた事を質問して。親しく彼と言葉を授受することは許るされなかつたので。私は困つてゐました。がとう〳〵私は親近な者共と一緒に。ファウストスが人と議論しても不都合のない機會を捉へて談話を交へることが出來ましたから。兼てから私の心に思つてゐた事を言ひ出しますと。私は先づ彼が文典の他に文典すらも何の高等な學藝にも通じてゐない人間であることを知りました。しかもそ

高貴な酒を欲しかつてゐる。渇えた私に何の役に立ちませう。そんなことはもう私は飽きあきするまで聞かされてをりました。又巧妙に語られたからとて。それが優れてゐるとも。乃至は雄辯であるからとて。その魂が智恵に滿ちてゐるとも思はれなかつたのです。けれども私に。ファウストスを期待させた人々は物事を良く批判し得る人々ではムいませんでした。ですから彼の辯舌はすつかり彼等の氣に入つたので。彼等はファウストを賢者と見ました。然し私は。世にはもう一つ別な種類の人間があつて、若し流暢。豐富な言辭を用ひて語らないなら。即つて眞理をも疑つて。それに不安を感ずるといふことを知つてをります。でも。私の神よ。貴下は不思議な。未知の方法によつて私を教へ給ひました。だから私は之を信じます。のみならず何處で、又何處から來て私の心を照らしたにもせよ。貴下の外に眞理についで師となるべきものはムいませんのですから。だから私は今貴下から下の如きことを學びました。即ち。雄辯に語られたからとて必ずしも眞だとは思はれぬ、又秩序なく、偽りとは限らぬ。更

最早持たなくなつてしまひました。彼はよしやさうしたことを知らなかつたとしても、若しマニケウス教徒でなかつたなら、なほ彼は信徒の眞理を確保し得たのでせうに。まつたくマニケウス教の書には天。星。月、月などに關する長い話が一杯に書かれてありました。

が私が切望したこと。換言すれば。是まで私が多く讀んで知つた議論に比較して、マニケウス教派の書中に載せられてゐるものが一段優つてゐるか、否少くともそれも同等に理にかなつてゐるかどうか。そんなことをファウストスが詳細に解說し得られるとは私も最早思はなくなりました。けれども斯樣なことを考量し。又論破して呉れと、私が申出ました

とき、ファウストスは如何にも謙遜に、自分は敢てその任にあらずと辭退しました。彼は自分にはそれは分らぬのだと悟つてゐたのでムいますが。それでもさう明らさまに言ふことを恥ぢたのでムいました。彼はお喋りではムいませんでした。私はお喋り共にはまつたく弱らされてをりました。彼奴等私にこの事を教へると言ひながら、しかもちつともその事を言はなかつたのです。然しファウストスは、主よ。貴下に向つては正しくないにして

やう〳〵普通程度のものでありました。でも彼は若干のツウリウス（シセロのこと前に出づ）の演説集
又極めて僅かばかりのセネカの著書、諸詩人の書、ラテン語で美事に書かれた自分の宗
派の書などを讀み、其上毎日辯舌を習つたので、雄辯でありました。しかもその雄辯は、
天賦のオと、その一種優美な性質に調和せられて、愈々愉快に、魅力のあるものとなつた
のでゐます。主、我が神、わが良心の審判者よ、事實は、今私が回想してるとほりで
はなかつたでせうか。私の心も記憶も共にみ前にゐます。當時貴下は、私に斯麼ものを
見せて、それを憎ませようとして、貴下の攝理の秘やかな働きによつて私を動かし、私の
諸々の恥づべき過失を私の眼の前に列らべて下さいました。

七　期待は裏切られる

私はフアウストスが該博であるだらうと想つてゐたそれ〴〵の學問に、案外彼が通じて
ゐないことを充分明かにさとつたとき、私の悩みを彼によつて解釋せられるといふ希望を

も私は全然此派の信徒達から離れたのでは出さない人のやうに、いつか外にもつと優れたものがひよつと出るまでは、しばらく如何なりと、自分が落ち込んだところに満足してゐるやうと心をきめました。死の罠となつたフアウストスは、私を捉らへた罠にとおつて歪かうともせず、又私が罠におちたことに気もつかぬふうで、今は段々とそれをゆるめ出したのです。ひそやかな御摂理に於て、貴下のみ手が私の魂を薬てゝ、その日夜、注がれた涙をとほして、貴下に供物として捧げられたからでムいます。すると貴下は不思議な方法によつて私を處置し給ひました。貴下は處置し給ひました、おゝ我が神よ、なぜかなれば「人の歩みは主により其の道を主は喜び給へばなり」(詩篇第三十七の三十二參照)と錄してムいます。或はその造り給ふたものを再製なさる貴下のみ手より外に、どうして私共は救ひを得ることが出來ませうか。

も、彼自身に對しては、決して無頓着ではなく、自分の無智についてといふのは彼が美事に退避し脫出し得られないやうなつたのです。しなかつたからでムいます。また熱望したものよりも慨悔する魂の誰遜は、より美しいからと彼の態度であることを私は斯うして挫けました。又そのマニケウス教の教師等については猶更斷念して。茲に私はフアウストスと共に文學の研究を始めました。是は彼自らも熱心に學び。又私は當時修辭學者として。カルターゴの青年達に教へてゐたものでムいました。私が認めて。彼と一緒に讀みました。只此宗派に入る目的で私がつゞけてゐた努力は。此人を識ると同時に。すつかり消えてしまひました。けれど

又教師から許可を得ないでは、絶對に教師に近寄らされないと聞いてるたからでムいます。之とは反對に、カルターゴでは學生達は實に恥づべき亂暴な風習をもつてるました。彼等は無茶苦茶に他人の部屋へ亂入して、殆んど狂氣じみた擧動を以て、彼等の利益になるやうにと設定して置いた秩序を破壞してしまひました。之が若し習慣だといふ點で、庇護せられなかつたなら、法律によつて當然罰せられる筈の多くの惡行は、彼等は驚くべき程平氣にやつてのけました。貴下の永遠の法律によれば、斷じて正しくないやうなことを、まるで正いもの、やうに行ふので。これは一層あさましいものたことが明かになりました。しかも彼等は、さうしたところが、罰は受けないと思つてるるのです。然し彼等の肯目によつて既に所罰せられてるて、彼等の受ける苦しみは、彼等の所業に比較せられることも出來ない程ひどいのでムいます。ですから斯様な亂暴な習慣は私の學生時代には好まなかつたのですけれど、教師になつてみると、私は他人がこんな行爲をするのを忍んでるなければならなかつたのでムいます。だから羅馬を知つてる者は皆私

八　母を欺く

貴下は、私が羅馬へ行いて。カルターゴで教へてるたことを共慮で教へるやうにお取計ひなさいました。私は此事をするように、どうして說伏せられたかを。貴下に告白するのは此事に於ても亦貴下の智慧と、私共に對する貴下の不斷の惰憫とを思ひ忘れまいまい。といふ。且つそれを言はなければならないからでムいます。私が羅馬に行かふとしたのは。それを私に說き勸めた友人達が。英大な所得や。高い位置を私に請合つたからではムません。又當時是等のものが私の心を惹くには惹いたのでムいますけれど。私の最大、殆んど唯一とも云ふべき理由は、羅馬の青年達は靜かに學問を勉強してるること。一層秩序立つた規律の下に置かれてるるので、カルターゴに於てのやうにでもない人の教室に闖入するやうなことはなく。

いましたけれど、それを私にも、火私の母に示してはくださいませんでした。私は母に向かって、「母さま、ゆうべ私の見た夢をお話ふて来ればよかったのに。」と言いました。「母さま、ゆうべ私の見た夢をお話ふて来ればよかったのに。」と言いました。

ければ、自分もついて共に熊鳥に行くとごねだからです。その晩が風に出すると、母を駄目にするのだからと、母を駄目にするのだからと、母を駄目にするのだからと

に向ひ、共處へ行けば、そんな亂暴なことは行はれないと言つたので、私は羅馬へ行くことを非常に悦びました。けれども眞に我が希望。生ける者の地にて我が得べき分に在す君よ、私の魂を救ふ爲め、地上の住家をかへさせようと。貴下は私をカルタゴでひどい目にお遇せなさいました。して又羅馬に於ては。私をそこに誘き寄せる爲めに、奸佞をなしました。何れも死の生命である此世を愛する人々によつてそれを果し給ふたのでム、います。即ち最初に名指した地では狂暴な行爲をする人により。後に言つた地には虚しい希望の約束をして私の移住をお誘ひなさいました。又私の行く路を正しくする爲め秘かに彼等の邪曲と、私自らのそれとを利用し給ふたのでムいます。何せかなければ私の安寧を案じたものも。その恥かしい狂亂沙汰によつて目が見えなくなり。亦私を羅馬へ誘ふた者も土を喰つたからでムいます。そして一方で苦がい現實を味つた私は。他方で非現實な幸福を求めました。

けれども何は私故カルタゴを去つて羅馬へ行きましたら。神よ、貴下は御存じでム

苦悩のうちに、自分が産んだ者を悲しみながら求める悲しみ。即ちエヴから遺傳して來た罪があらはしました。けれども母は私の詐僞と無情とを責めた後、思ひ直して私の爲めに貴下に執成をして、家へ歸り、私は羅馬へ參りました。

九　再び大患

然るにどうです、私は羅馬で肉體の病の笞に迎へられ、その上に人間がアダムによつてところの原罪の縛めの外、貴下、御自分と、他の人々とに對して犯かした、多くの大きな一切の罪咎とをもつて、今や地獄に墮ちるところでムいました。何ぜかなれば（「私はまだキリスチャンでなかつたので」といふ文句を入れて讀むべし）貴下は此罪のうちのいづれをもキリストにより赦るして下さらず、又キリストは私の罪により、貴下に對して招くに至りました怨恨をそゝいで、貴下の十字架によつて、どうして之を解くことが出來ませう。私は（マニケウス教徒は十字架を斷く見た）によつて、どうして之を解くことが出來ませう。私は（マニケウス教の說に基いて、キリストを幻影と信じましたから、）彼の肉の死は私には虛僞に見えただけに、

でムいました。主よ、涙を渇らして母が貴下にお願ひしたのは何でしたらう。それだのに貴下はその御差止めなさるようにといふのでしたらう。それだのに貴下はその深い聖旨によの出立を御差止めなさるようにといふのでしたらう。それだのに貴下はその深い聖旨により。只母の願ひの要點だけを聞いて、當時彼女が求めたことを聞き届けてお遣しなさらなかつたのでムいました。それは母にたでムいました。それは母にたものです。風は順に吹いて、私共は帆を張り、岸邊は私共の眼界から消え失せました。朝日は濱邊を泣き狂ひ、怨恨と、呻吟の聲をもつて、貴下の耳をうづめてしまひ然し貴下はそれを顧み給はなかつたのでムいます。貴下は私自らの願を以て、そ終局さしてしまうと思召して、此通り私を追ひやり給ひました。又一つは母の私に對する肉的な愛着も、悲哀の笞で、至當の所罰を受けさせようとの聖旨に基いたのでムけれども私は矢張り世間並の母達のやうに、否寧ろ、より多く私と一緒にゐたいと歡喜を成し給ふて、貴下が彼女の爲めに、どれ程大きな利川し給ふのです。しかも私の不在を望みましたのです。彼女は知らなかつたればこそ泣き叫び、此

来ます、つたく母の私に對するこの愛情と、又肉體的に私を産んだとらゐ遥に大きな苦痛を以て再び産まうとしたかといふことを。

ですか、その爲め彼女の悲深い心が斯うして若し私が死にましたら、如何して母が癒やされるか、私は知りません。して又、此様したなら、慈悲に在す神よ、貴下のみ許にさゝげられる外、何處に置くべき場所がありませう。

それとも、謹慎な寡婦の煩悶、卑遜な心を輕蔑なさいますか。母は盛んに施物をなし、貴下の聖徒をいたはり、またそれに奉仕して、朝夕貴下をその説教のうちに聽き、同時に彼女自らをその祈りのうちに貴下に懸いてゐました。それは決して無駄話や、年寄つた女達のお喋りをしようとしてゞはなく、一日も過ごすことがなく、貴下の會堂に紹えず御詣りを致しました。それは決して無駄話や、年寄つた女達のお喋りをしようとしてゞはなく、一日も過ごすことがなく、貴下の會堂に紹えず御詣りを致しました。

嚢かうといふ積りでした。貴下はこんな者の涙を輕蔑し、貴下のお助けまひなさいますか。涙を流して母が貴下に御願ひ申したものは、金銀でもなけれ

又それ程私の魂の死は本當であつたのです。又彼の肉の死はこれを信じなかつた私はもう死ぬと安心であつただけ、それだけ眞實であつたのです。さて熱病は愈々重り、こゝでムいましたなら、貴下の律法によれば、しい刑罰は火と火と硫黄とに投げ込まれるのでなければ又何處へ行かれます、私の病氣を知らなかつたのでムいますが、なほ自分の傍にゐない私の爲めけれども到る處に在す貴下は、彼女のお處で、彼女の祈りに聽き、又私をお救ひ給ふたのでムいました。斯うして私は回復致しました。然し私は斯様に危險に瀕しながらも洗禮を志願しなかつたのです。私は遂に回想して、背ロ致しましたとほり、少年時代に、私の母のかでなかつたのです。私は遂に回想して、背ロ致しましたとほり、少年時代に、私の母の信仰により洗禮を願つた時に、小兒ながらも、今よりは善き立派でムいました、けれども成長して却つて恥多いものとなりました。今はすべてと堅みだから私は（同時に靈と肉に）二つの死に給はなかつた貴下のみ旨を、愚かにも私は朝り笑ひました。私は此處に充分言ふことが出

十　懐疑哲學と唯物主義

そこで貴下は私を此重病から回復せしめ給ふて、貴下の婢の子の肉體を醫し給ひました。でムいまして、貴下が更に優れた。それは貴下が更に優れた。更に確なものです。けれども、此頃私は羅馬にあつてもなほかの人を欺き、又自ら欺かれてゐるマニケウス教徒の聽聞者（私が病氣にかゝつて、恢復した家の主人も矢張りその一人でムいました。）と彼等仲間で言ふ者達とも交りを結んでゐるまゝでした。といふのは私には矢張り。罪を犯すものは私共ではなくて、他に私の知らないなやうにおほえたからでした。それが罪を犯すといふ（マニケウス教の説明）のが本當な

ば、又失くなつてしまふ實でもなかつたのです。只その子の魂の救ひでもの賜物によつて彼女は斯うなつたのです。それを貴下は彼女を輕率な、決してさうではありません。まつたく貴下は近くに在してよ、私共に聽き、又とは、豫め一々順序が立てゝ、それに悲いて事を爲し給ふのでムいます。貴下はいろ〳〵な夢と、貴下のみ答へによつて（そのうちの或るものは私に既に述べました、又或るものは未だ述べてありません）母をお欺さになつたものとはどうしても考へられませんそれを一々深くその信仰の胸に藏つて置いて、丁度貴下からいたゞいた肉筆のやうに、それによつて貴下に御履行を迫り、默願してゐました。何ぜかと云へば、「貴下の憐憫はとこしへに絶ゆることがない」（詩篇第一三八の八）から、貴下は彼等の負債を赦し給はなかつたのです。自ら負債者となることも厭ひ給はなかつ

且つどんな眞理も、人間はそれを識る能力が
を聞いて、其人達は他の者共よりも賢いと思
意が呑み込めなかつたので、只一般に雷同附
いましたそこで私の宿の主人は、マニケウ
じてゐるのを見ますと、私は明々白に彼をと
ども私は此異端に加はつてゐない人々に交は
以前のやうな熱心をもつて此異端の擁護は致
ウス教の親密な交際は、私が他に
しました。天地の主にして、眼に見える、或
は眞理を發見すべき望みを失ひました。それ
向さしたからでムいます。また貴下が人間の
の束縛を受け給ふは、不似合ひなことだと私

んで自分といふものを辯護して。私のうちにはあるけれど、私ではない、何やら得體の知れない或る物に好んで罪を塗りつけてしまひました。けれども眞個これは私でムいまして。私の不信は私の自我に逆つて。分裂したのでムいます（卽本然の自我と不信の自我とが分立した）しかも此罪は私を罪人として裁かなかつたので、愈々度し難いものでムいました。その上に。私は自我を貴下の前に屈服さして救ひを受けるよりも。寧ろ貴下。全能の神よ。貴下を私に服從さして。自ら滅びようとしたのは、咀ふべき不義でムいました。ですから貴下は「わが口のまへに門守を置き、わが唇のまはりに堅固なる扉を」（詩篇第百四十一の三、四）置き給ひませんでした。ですから私はなほ彼等の所謂る「選ばれし者」と結托してゐました。けれどもこの僞りの敎に、否それどころか、若しより優れたものに遇はなければ、それに滿足してをらうと決心した事柄にさへも。最早利益を受けることが絶望となりましたから、私はやう〳〵注意しなくなりました。

それは所謂るアカデミコスと稱ばれる哲學者達があつて。一切の事は疑はしいと云ひ。俚忘し出して。

形に於て有限に在すと想像するよりも。
の有限を認めざるを得ないにしても。他
が、敬虔であると思はれました。無智で
實質であつた私には、悪は實に本體であ
中に瀰漫してゐるものとより外に考へる
のみ子に在して。我々の救主にておわし
地獄のうちから、私共を救ふが爲めに分
て私は容易に描いた斯うしたことの外に
人いまゝその上、キリストの性質がさ
像に描いたものが混じらないで
は、聖女マリアから生れることは出來な
かつたのでハいます。だから私はキリス

ようとする時、私はそれを物體の容積としてより外には、何とも考へようがなかつたのです、いましたから（何せかなければ總て物體でないものは存在しないと私には思はれたので）此處に最大の誤りと、且つどうしても避け得られない殆んど唯一の原因がありました。

さうなものですから、私は惡も又一種特有の容積の本體であつて、忌むべく、醜いそれなもつてゐると信じました。更に又私の當時の信仰によれば、善に在す神は惡と性質をも創造し給はなかつたことになつてゐるましたから、私は（惡善）二つの容積を立て、五に相反してゐるながら、双方ともに無限に存在するものである。只惡の方は範圍が狹く、善のが大きいのだと考へました。抑も此發端がいけないので、それからく、種々様々な冒瀆を私は續けました。私の心は公教會の信仰に復歸せんと努めましたけれど、私の信じてゐたことは公教會の信仰でないところから、私は追ひ返へされました。また私の神よ、貴下が總ての部分に於てその得給ふた人間の悲は感射に堪えません。私に

ました。のみならず彼等はその答辯すらも容易に公けにしないで、窃かに私共にみせました。それは斯ういふことでムいました。キリスト教の信仰に。ユダヤ人の律法をつぎ木をしようと思つて。誰か知ら新約聖書を捏造したのであると。さう言ひながら、自分等もその正本といふものを一つも差出すことは致しませんでした。けれども私と拘らはれて、幾分か窒息の氣味で、その下から喘ぎ〳〵貴下の眞理の糈氣を求めたのでしたが、清く、純粹にそれを吸呼することは出來ませんでした。

十一　下劣な羅馬學生

私は維馬に來た目的どほり、熱心に修辭學を教へ始めました。そこで先づ若干の人々を自分の家に集めますと、その人々たちの紹介で、又廣く知られるやうになりました。然るに意外、私が嘗て過はなかつたところの他の罪が羅馬で行はれてゐることを知りました。

で、その受肉ということを信ずることを嫌ひました。今貴下の濃の人々が、讀むならば、きつと楽しく、又愛らしい顔をして。私に向つて微笑なさるでムいませう。けれども本當に私は斯麼人間でムいました。

十一　マニケウス教と天主教

更に私は貴下の聖書のうちで、マニケウス教徒等が批評したところは、總て辯護することの不可能ものと思つてゐました。私は此書籍（聖書）に通じてゐる人達とさうしたその人がそのことを實際どう思つてゐるか、實驗してみようと思ひました。といふのは、マニケウス教に反對して、その教徒の面前で語り且つ論じたエルピデイウスといふ者の言葉が、既に私がカルターゴにゐたときから、私の心を動かしてゐたからでムいます。此人は容易に反駁し得られない文句を聖書から引き出して來ましたが。マニケウス教徒等の是に對する答辯は極めて薄弱なやうに私は思つてゐ

願つてをります。けれども當時は、貴下の爲めに彼等の悔悟改善を望むよりも、寧ろ私自身の爲めに彼等の邪惡を爲すことを好まなかつたのでムいまぢの

十三　アムブロシウスに會ふ

そんな鹽梅でしたから。ミラノの人々が維馬の市長に使者をやつて、自分達の市に修辭學の教師を公費を以て派遣して貰ひ度いと求めて來ました時。私は。それがマニケウス教の迷妄に醉つてゐる人々の斡旋によるものであることは知りながら、內實彼等を離れて去らうといふ下心で。白分が行き度い旨を申し出て。當時の市長シムマクスに二三の題について試驗を受けて。とう〳〵其處へやられました。但しマニケウスの信徒達は私の內心を知らなかつたのでした。そこでミラノに來て。當時名聲嘖々たる貴ドの敬虔な働き人、司教アムブロシウスに逢ひました。彼の雄辯はその頃貴下の參熟した穀物と、葡萄酒の素面(しらふ)の醉ひとや。ふんだんに貴下の民に與へてをりましたっ私は知らないうちに

これは、貴下に陥落しての心青年達か、カルターゴの「擾亂」を此處では行はなかに聞かされたとほりでございました。多くの青年等は教師に對する報酬を踏みにじられたとほりでございました。金錢の爲めに正義を輕んずるのでございました。金錢の爲めに正義を輕んずる信我の破壞者共がありました。俄かに他へ轉校するの共謀して、俄かに他へ轉校することでした。「死の苦痛みではなかつたけれど」（詩篇第百十三九の二十三）私の心は是等の青年達を憎みました。是は彼等が爲すことが不正であるからと云はうよりも、寧ろ私が彼等の爲めに困らされたものですから、大に彼等を憎くがつたのでしたらう。本當にこんな青年共に迷ふて、貴下を離れて姦淫を行ひ、現世の過ぎ去る假相と。また摑めば手を汚すやうな穢らはしい利得とを慕ふて。果敢ない世を愛し。却つて貴下を魂を呼び返して。しかも貴下に歸るならば。赦してとさる不朽の貴下を輕蔑するのでございます。尤も若し改めたらば私は愛しますが。金錢よりもこの學ぶ所邪曲な者どもを憎みます。私は彼等即ち眞理にして。又確實な善の標準。最も潔い平和に在す貴下を愛するようにありたいと

十四　信仰の萠し

何ぜかなれば。私はアムブロジウスの話つたことを學ぶのでばなくて。只その話すことを聽かうと努めたのですが（私はどうして貴下に近づく道を發見すべきかといふことをもう望みを失つてゐましたから、私に殘るところは斯麼つまらない希望だけだつたので）私が擇んだ言葉と共に、私が氣にとめない言葉とが一緒に私の心に來ました。それを分けることが出來なかつたからでムいます。斯うして心を開いて、彼がどんなに巧みに語るかを聞いてゐた時、徐々ながらも、如何に眞理を語つてゐるかといふことも亦入つて來ました。又マニケウス教徒の攻撃に對して、少しも反駁を加へられないと思つてゐた公教の信仰も、今は何の恥かしいこともなく公言し得られると私は思ふやうになりました。舊約聖書の一二箇所。又屢々此喩になつてゐるところが說明せられるのを聞いたときは。殊にさうでした。そんな箇所は私が文字通りに解釋したときには精神的

御導きによつて彼のところに參りました
との御擧措でムいました。此神の人は、
私の來着を迎へました。その爲めに私は
貴下の教會にないものと私は諦めてゐま
した）の教師としてゞはなく、
した。けれどもムいました。私は其人が自
ど當然抱いてゐなければな
どほりでゐるか、或はそれが
たのでムいます。それで私は熱心に彼の
題については私は冷淡な、嘲笑的な傍觀
が。話振りはファウストよりも。魅力
較になりませんでしたけれど。けれども
れてゐました。それでも無意識の裡に少
し宛近寄つてゐたのでした。

らう
彼等
はそ
較し
哲學
はれ
たる
下に
哲學
るこ
ぶべ
にな

と一生懸命に考へました。若し私が靈の本體が何であるかを考へつ
の奸計は忽ちに破れて、私の心から驅逐せられてしまふのでしたら
れをすることが出來なかつたのでムいます。けれども愈々考へ、又
てみますと、私は、此世界の組立、また感覺に觸るゝところの自然
斷致しました。そこで私はアカデミコス派の態度と思
總ての物の間に逡巡、狐疑して、遂にマニケウス教徒
た。私の懷疑時代にすらも、既に或る哲學者達よりも
あるものと私が思つた斯の宗派にも止まつてをるべきではないと考へ
ました。尤是等の者共はキリストの救ひの名をもたなかつたので、私は自分の魂の病ひの癒しを委かせ
なかつたので、私は何か慥りと定まつたものが、何處に私の道筋を擇
きかを、明かに示すときまではと、私の兩親が私にすゝめてくれた公
つてをらうと決心致しました。教會の洗禮志願者

に殺されてしまつたのです。

註 ※ (2Cor. iii. 6) Litera autem occidit, spiritus autem vivificat.「文字は殺し、霊は活かせばなり」といふ句から來てゐる。文字の意味とは文字どほり、文字の意味といふことである。

斯うして此書の多くの箇所は經由されましたから、私は律法と豫言とを呪ひ嘲る者に對して、決して反駁は出來ないものと諦めてゐたことを今は貴めるやうになりましたけれども詳細にして、且つ譯りなく反對論を駁撃する學識博大な辯護者があるから。それで公教の信仰の方がまさつてゐるとは思はれず、又双方ともに共主張することを維持し得たところで、その爲めに私の主張はいけないものだとも思はれなかつたのでムいました。畢竟、公教の信仰は敗けたとは私に見えなかつたのでムいますが。それでも未だ勝つたとも見えなかつたからでムいます。

そこで私は、如何してよくマニケウス教徒の教義は僞りであると決定し得られるかを知

きかせました。彼女は幻のうちに、貴下のまつたく眞理を研究することに失望して、れどもまだ公教會の信徒にはなつてゐませんでしたが、もう疾くマニことを聞いたやうに歡び、けれども彼女が安心したのは、その爲めに私をもう死んだものとして出したあの私の悲慘な部分がなくなつたことでした。母は貴下が「寡婦の子、若者よ、われ汝に言ふ、起きよ」と仰言れば甦つて物を言ひ始め、これをうにと願つたのでした。ですから、彼女が日々涙を流がして、貴下にれ程までも果されて、而も未だ眞理に達しなかつたが、迷妄から曳きされてゐても、母の心は沸き立つ歡喜に亂れることはなかつたのでムいまに一切を約束して下さつた貴下が、その殘りの分をも何時かは下さることと確信してゐるまを。非常に安心して、信仰にみちたに、私が此世を去る前に、私が公教會の信

第六篇

一　聖モンニカ來る

私の幼少の時からの希望よ、貴下は私をおいて何處に在したのですか。かしたのですか。まつたく貴下は私を、四足の獣や、空の鳥よりも堅く造り給ふたのです。だのに私は暗い、滑り易い場所を歩るいてるて、貴下を自分の外部に求めて、私の心の神を見出さなかつたのです。又海の底にまでも行きました（詩篇第六十六の二十三）、そして常に眞理を信ぜず、それを發見することに失望しました。其時私の母はその強い信仰に扶けられ、海山遥々と私の後を慕つて、あらゆる危險も貴下のみ手に守られて、安らかに私の處へ來ました。母は海上で危難に遭つたときなどは、慣れない乘客があはてるのを、自分は落着いて、即つて之を安心させる役の水夫共をすら勵まして、きつと安着するることを言ひ

に非いたが禁止のひましたうなことはなかつたときつたいで小さな猪此の様で川ひなつたすけよ

ことを知りましたとき、母は如何にも恭しく、柔順に服従しました。理由は何故かも否さないで。斯うといふのは母は葡萄酒を飲んだところで。その心を楽すことも歌に對して。好酒家が水を呑むことを厭がるやうに真理を厭ふこと。恰も禁酒のために真理を捨てるのでした。けれども彼女が以前カルヴィンで此飲食物を携えて行やうのでした。決して一緒になつて飲むのではなかつたのです。又それも酒ぎらひな自分の口にあふ程にうすめて、ほんの只礼儀の上から、又若し死者の為めに建てられた紀念の御堂で、一杯飲むだけだつたのです。

祭りの行はれることが頻繁な場合には。母は此同じ盃を携へあるいて、総ての處で一口宛飲むのでした。母は此同じ盃を携へあるいて、総ての處で一口宛飲むのでした。宮に澤山水を混和したばかりでなく、持ち廻つたゝめに、人々の歓樂を増すために、だから是は母が人々に頒けて飲ましたのでムいます。だから是は母が人々の信仰を熾にしようと、思つたのでムいます。祖

徒となるのが
言つたのは
私の問を照ら
た。彼等熱心に
に耳を傾けま
に不安と煩悶
と感ずるまで
があつた後、

二

母郷里の迷信を棄つ

そこで母は
パン、葡萄酒
ナリカでする慣はしの
門番の爲めに祭じられました。それは司教の禁令

き、アムブロシウスは屢々口をきはめて私の母を褒め。非は本當にいゝ母をもつて幸福であると申しました。しかもその母がどんなに多くの不幸な手をもつてるたかは知らなかつたのでした。私はこんなことを總て疑ひ、生命の道を見出すことが出來るなどとは決して思つて居りませんでした。

三　聖人の教へ

けれども主よ。私は未だ。貴下に、お助け下さいと祈りもせねば、嘆きて斯の様に立つて始末がつきませんのでした。そして一般の學問に熱中して。理屈ばかり言つて派な人達から侮蔑せられるアムブロシウス自身を。私は世間並みの考へから、幸福な人であるが、たゞ獨身生活を守つてゐるだけは苦しいことだらうなどと思ひました。けれどもその人の抱いてゐる希望や。その立派な心が、誘惑に對してどれ程闘つてゐるたか。逆境にあるほどれ程の慰藉を受けてゐるたか、又貴下のパンを咀嚼玩味する時には。どれ

先を祭ることはまゝで異教徒の迷信に酷く似てゐるから、よしそれをよ、してはならないと、司教から誡められてゐるものであると知ると、母は快くそれを止めたのでムいます。

そこで此上の果物や完たした籠の代りを貧乏人にすることを學びました。是れは斯念の御堂に携へて行き、又及ぶ限りの施して主の御受難に倣つた殉教者達が蒙えいふ）を正しくいたゞかせようといふのでした。けれども主なる我が神よ。之を禁じたものが、若し私の救ひを望む爲めに。母が非常に愛敬したアムブロシウスのやうな高徳な人でなかつたなら。恐らく母はその言葉に從つて。容易に此習慣を破らうとはしなかつたらうと私には思はれます。私の心はみ前にあつて〟その事について以上述べたやうに思ふのでムいます。

多くの苦いことをし、又熱心になつて、アムブロシウスの方ではまた母の信仰篤い話を聞いて、益々足繁く教會に行きました。でますから私に會つたと

を誰だつて妨げることを致しませう。私共は思ひました。職務の煩らはしさから遁がれて靜に精神力を養ふ爲めに得た此ほんの僅かな時間を。他の事の爲め奪ひ去られることは。彼の欲しないところでおらうと。或は又彼が朗讀したなら。その本の著者が何か不明瞭なことを言つてゐるとき。或る注意深い聽者、又は迷ふた聽者は彼にそれを說明してくれと頼むか、さうでなくとも態々面倒な或る問題を論じてくれと願ふことを懸念したかも知れないのでした。それはそんなことに折角の暇を潰させられたならば、自分が讀まうと思つたほり、澤山の本を讀むことは出來なかつたのでせうから。尤も彼の聲は少し話すと、おきに弱つたので、彼がその聲を惜しんで大事にしようといふのが。それ以上の理由であつたかも知れません。兎にも角にも。どういふ動機から彼が默讀したにもせよ、斯廣人に於ては、その動機はよいのでムいました。

私が答へて欲しいと思つたものようちで。貴下の最も神聖な御宣託の出る彼の胸に寄ね る幾會が私に與へられたものは、只本當に簡單に答へられるものついてだけでムいました。

程の感慨が、その心の隠くれた口に味はれるのことは、私の推察の及ばぬところですが。「聽て何も言はず」そのまゝ立去つてしまふのでムいました。斯う一心にその質感などは夢にも知らなかつたのでムいます。然るにアムプロシウスの見るばかりでムいました。私共はそれを見て永いこと默つてそこに腰掛けてゐるのでした。

惑ひをも、私の危険な陷穽をも知りませんのでした。何ぜかといへば常に彼の言葉を聞くことも、又彼に語すことも、私は彼の言葉が雜踏してゐましたから、私は彼の言葉を恢するごとを思ひどほり充分に訊ねることが出來なかつたのです。彼は人々の思惟に一身を捧げて仕へてゐたのです。また僅かの間でも、その方の煩はゝ、彼は必要な營養を取つて身に元氣をつけ、或は讀書をして心を養つたのの時には、彼の眼は紙面を滑り去るので、意味はその心で探りました。然しと（誰でも入つてもかまはず。又誰が來たとも斷らなくともいゝことになつてをりました）。いつも彼は斯うして默讀してゐるのでした。

てゐる給ふ貴下よ、貴下は或るものは、より大に、又或るものより小さな手足といふやうに。様々な肢體を有ち給はないのです。けれども如何なる場所にも制限せられ給はないし、又此様な具體的形をも有ち給ひません。けれども貴下のみ像に似せて人を造り給ました。照覧ましませ、人は頭から足まで空間に制限せられてをるではムいませんか。

四　儀文と聖靈

斯く貴下の此み像がどんなふうにして存在するかを知らなかつたので、私は「教への門を」叩いて、どうして信ずべきものでせうかと、訊くべき筈であつたので、決して猥りに反對し、又嘲笑すべきものではなかつたのでムいます。ですから一體確實なものとは何であるかといふ念が、愈々烈しく私の胸を噛むにつれて、私は愈々益々恥ぢました。共わけは、確實であるぞと約束せられて、よくも私は、しかも此様にまで多く確實でないものを、本當に確實であるかのやうに、幼兒のやうな迷ひと

私の熱心な希望を披瀝するには、先方に十分のひまが入用であつたのでムいますが、それは一度も見出されませんでした。けれども彼が主の日（日曜日のことなり）毎に人々に眞理を含む言葉を正しく説くのを聞きましたとき、私は、神の聖書に對して、私共を欺く者共が結んだいろ〳〵、狡猾な奸計の難問は皆解決せられたといふことを、愈々深く確信するやうになりました。貴下が人間を御自分の像に似せた眞の形によつて拘束せられ給ふものだと、信じてるないと私が知りましたとき（尤も如何なる精神的の資質にてあらせられるかについては、私は未だ微かにも、或は朧ろげにすらも分らなかつたのでしたが）私が多年の間吠えついて立ち向つたのは公教會の信仰ではなく、肉的空想の假構に對してゞあつたことが分つて、面を赧めながらも喜びました。學ばねばならないものを、生意氣にも非難した程甚しく冒瀆で、又敬虔を缺いでをりました。おゝ最も高く、しかも最も近く。最も秘密に在して、しかも最も顯はれ

いましたが、最早さうした眼を以て讀まんでも濟むことを嬉しく思ひました。私は堂に上下の聖者達がさう思つてゐるとて。その人達を貴めたのでしたが、その實は、彼等はさう思つてはゐるなかつたのでムいました。また私はしばしばアムブロシウスがその信徒に向ひその說教のうちに熱心をこめて「儀文は殺ろし、靈は活かす」といふ使徒の言葉を、恰も典雨であるかの如くに薦めるのを聞いて嬉しく思ひました。何ぜかなれば、彼は神秘のヴェール面紗を取除いてくれたのでムいます、そして儀文どほりにすれば、邪曲を敎へるものと見へる、此經文といふことの意味を明かにして呉れたからでムいます。斯うして彼の語つたことは、私が未だ眞だか、僞だかを確めなかつたのですけれど、彼はただ少しも私を躓かすやうなことを語りませんでした。眞道様に誤謬の谷に陷込むことを懸念して、私はきつと心を引締めて、何物をも容易に斷定しなかつたのです。けれども斯して私はぢつと停止してゐたばかりで。却つて一層酷い日に殺ろされたのです。といふのは私は。自分で親しく見ないことでも。なほ七と三とを合はして十になることが確實であるとほりに、確實であるよ

熱心とを以て嗤々とおしやべりしてゐたのに。後になつて。そんなことは皆虚偽であることが知れたからでムいます。けれども彼等が不確實であつたことや。當てにならぬ自分が精神的盲目となつて、爭ひを好み。貴下の公教會を誹謗したのは。その當時彼等の言ふところが本當だと誤解したからのことであると。私は確に信じます。私は公教會で、眞理を教へるとつかなかつたのですけれど、私が激烈に非難したやうな惡いことを教へないは未だ認めがたいことだけは私も認めました。斯うして私は迷ひながらも心を改めました。而して我が神よ貴下の獨子の身體である教會（私は其處で未だ嬰兒の折りにキリストのみ名に入れられたのでした）が此樣な馬鹿げた迷妄にとらはれてゐないこと。又その健全な教理に於ては、商物の造り主に在しまします貴下はたとへ大いに在しまして空間に於て制限せられ給ひませんけれど。なほ到る處、人間の五體の形に制限を受け給ふといふ妄説をとなへないことを私は歡んでをりました。

私は律法（おきて）と豫言者等の萬約聖書が私の前に置かれる時には。奇怪なものに見えたのでム

五　聖書の權威とその用

その時以來私は何よりも先づ公教會の教理を擇んだのでゐます。（或る種の人に向つては別は、別に論證を用ひないでも信仰せらるべき筈のものであつて、（或る種の人に向つては別として、教理はそれ自身に於て論證せられることが出來るか、それとも全然出來ないか、どつちかだつたのです）マニケウス教徒の教義よりは、一層穩健で、又何の僞りもないことを私は感じました。マニケウス教に於ては、私共の信仰は、或る智識を得るだらうといふ怪しげな約束の爲めに嘲けられ、その次には論證することが出來ないから、只信ずべきものだと、荒唐無稽のものを強るつけられるのでした。けれども主よ、貴下は其後、最も柔しく、最も憐み深いみ手をもつて、徐ろに私の心に觸れ、これを靜め、私が見たこともなければ、又其行はれた時分に在りもしなかつたけれど、私が信じてゐた數多のことを、私に考へさして下さいました。即ち貴下は、世界の歷史にあらはれた多くの出來事、私がま

うにと希望したからでムいます。私は未だ此最後の北例が實證によつて理解されないだらうと思ふ程には、氣がちがつてゐませんでした。只私は私共の感官に觸れない他の物體にもせよ、または物體としてゞなければ滂へ得られたい靈體にもせよ、總て癒やされ、斯數理的正確を以て明かにせられんことを要つたのでした。そして私は信じてない貴下の眞理に、どうにかして向けられる筈だつたのです。然し惡い醫者にかゝつても、屢々その身を任かせることを恐れるものであるやうに、「思ひきつて神の教育の御手に、身をまかせきらなかつたのでムいました」ぎりは、癒やされることの出來ないものだつたのに、信じさゝれるものが無しや虛妄では無いかと疑念して、私は癒されること拒み、信仰の良藥を調合して、全世界に漫延してる病に用ひ給ふて、その藥にそれ程大きな權威を與へ給ふた貴下のみ手にしばらくは反抗致してをりました。

下の在すといふ信仰だけは奪ふことは出來なかつたのでムいます。又人間の爲す業は皆貴下の支配に屬してるるといふ信仰をも、私から奪ひ敢ることは出來なかつたのでムいます。

げれども私が此信仰は或る時に強く、また或時には弱くなりましたが、貴下の實在し給ふことと、私共を顧みたまふこととは常に信じてるました。たゞ貴下の本體について、どう考へたものであらうか、或はまた貴下に伴れ歸る道は、どういふ路であるかを私は知らなかつたのでした。そこで單純に理性によつて眞理を見出すには、私共は餘りに弱は過ぎ、その爲めには聖書の權威が必要でありましたから、私は當時下のやうに信ずるやうになりましたし——貴下か若し私共が聖書によつて貴下を探すことを好み給はなかつたとしたら、貴下が總ての國々で、聖書に斯のやうに卓越した權威を決して與へ給ふことはなかつた筈である——と。その理由は私が是迄聖書のうちで怪しみ、又躓かされたことが、多く合理的に說明せられるのを聞いて、私はその奥義の深いことを思ひ、その權威はますく尊いものと私に見えるやうに

だ見もしないところの市のことや、多くの友人や、多くの醫者や、又多くの誰彼等私共が信じないとすれば、此世に於てどんなことも爲し得ないもの、最後にかといふことを、どれ程堅く信じてゐるかといふこと——こんなものの出來ないこと、即ち私がどんな兩親から生れたろを信じないでは、私自身では知ることと、貴下の聖書（卽ち貴下が殆んど總ての人氏の間に、一大權威として定め給ふたところの聖書）を信じる者はよし、さもなくて、信じないものは罪せらるべきものであるぞと、懇々と說き諭して下さいました。なほ又人が私に對して「どうしてお前は是等の事が唯一にまします、眞なるもの、又最も眞なる神のみ靈によつて人類に與へられたと信ずるのであるか」と、言つたところで、それを聽かんでも差支へないとも說き諭し給ました。何せ此根本の點こそは凡てのものにまさつて先づ信ずべきものであるからでムいます

私は矛盾附會の曲論も貴下の如何なる御方に在すかは、私は知らなかつたのですが、貴下の如何なる御方に在すかといふ私の信仰だけは、換言すれば、貴下の如何なる御方に在すかといふ私の信仰だけは

私は栄譽、富貴、婚姻といふやうなものに憧れてゐましたので、貴下は私を嘲り給ひました。私はこんなものに於て。最もつらい苦難を被つたのでムいますが、貴下は御自身ならぬ物は何に限らず甘くないやうにして、益々み惠みをふかく爲し給ひました。主よ私の心を御照覽下さいませ、貴下は斯麼ことを私が想ひ起して、貴下に告白することを望みみ給ふのでムいます。ですからどうぞ私の魂を貴下に容り縋らして下さい。貴下は私の魂を、死の粘ばり強い鳥黐から解き放して下さいました。私の魂はどんなにかみぢめなものでムいましたらう。しかも貴下はその傷の痛みを激しからしめ給ふたのです。それは私の魂が一切のものを放棄して貴下に立ち歸つたよめに、癒やされるようにといふ御心盡しでムいました。貴下は萬物を超越して在すのです、そして貴下のみ手を離れては萬物はあり得ません。さて私が皇帝に對する頌辭を述べる日に、貴下は如何に私をあしらひ給ふて、私を困らしておしまひなさいましたでせう！　私はまつたく困つてしまひました。しかもそれが嘘だと知つてゐる人々から喝采せられたのでした。

なり、まして理屈明白ではムいますが、その意義はいやが上にも深遠で、しかも企及く諫諱抑遜して、言葉を平易にし、文體を通俗にしながらも、たところの懐中に受入れて、狹き門（眞理に入る門なり意味ござず）を通つて、貴下に到る少數の人々を導くために。

巍然として心の光りではないやうなものにも注意を加へてをります。もつとも若し聖書が群衆を引き寄せなかつたならば、此少人數であるとすらも遥かに大多數であると申されませう。當時私はそんなことを考へてをりましたが、貴下は正しく私と一緒に居り給ふたのです。私が喫きましたら、貴下は私に聽き給ひましたし、また世の遠き路（亡びにしてそこに至るの道は廣く其の門は大いなり）へ歩るいてゐましたけれども、貴下は私を棄て給はなかつたのです。

六　野望は空し

ました。彼は確實に喜んでゐました。然るに
てゐました、然し私は不安の裡にゐました。
恐れる方がいゝか、お前は何とも
へたでせうか、訊きましたなら、私は樂しむ方を取ると答
を願ふかと望むか、それとも當時のお前自身であること
であること訊いたなら、私は心配と恐怖とに疲れてはゐましたけれど、矢張り、自分自身
て本當ではムいませんといふのは、私が乞食にまさる學問をもつてゐるとは申されないからでムいますが、却つて學問を
乞食にまさる學問をもつてゐるとは申されないからでムいます。私は學問に苦悦を見出さず、
以て人を樂しましたのでムいました。即ち人々を教へることはしないで、只彼等を樂しま
もただけでムいました。ですから貴下も又懲しめの杖をもつて、私の骨を砕き給ふたので
ムいます。

私の魂に向ひ「人の樂しむ理由には相違がある。あの乞食は醉ひを、お前は樂譽を樂し

私の心は斯うしたつまらないものを得たいといふ慾望にあこがれて、思ひに身を焼き盡くすのでした。で或るとき、私はミラノの街を通りますと、一人の乞食がをるのを見付けました。彼は滿腹で、戯れ興じてゐるやうに私には思はれました。そこでは私は嘆息して一緒にゐた友人達にむかひ、私共自らの狂亂の結果起つた多くの悲しみについて語りました。自分の不幸といふ重荷を曳ずり、慾望にかられて、自分の不幸といふのは私共はその時自分達は見ることによつて一層苛立くして、大に艱難辛苦しながら、或る目的を達せんとしてゐるのでムいました。然るに私共が達しようとしてゐたそのものは、既にそこに、私共は乞食の苦悩にすらも、遂に到達してゐたのに、私共は乞食の苦悩にすらも、遂に到達してゐたのでした。換言すれば、彼が乞食して得た金錢に換へて得たものを求めてをりませんでした。彼が然しそれども私はただも斯うした野心を抱いて。なほ一層確實ならぬ

な結果を齎したかを屢々気付きました。それが私とともに損となつたときには、私は愛ひましたが、さして私の不幸を倍にしました。また幸運がほゝゑみかけてくることを厭がりました。何ぜかなれば幸運は殆んどいつも私がそれをらへるに先立つて、逃げ去つてしまつたからでムいます。

七　友を回心せしめる

友人として共に生活してゐた私共の間では、いつも此事を慨いてなりましたが、中にも私はアリピウスとネブリディウスとよく此事を語り合ひました。この二人のうちアリピウスは私と同じ市に生れたもので、兩親は共市の上流社會のものでしたが、彼は私よりも若い齢で教授を開いたとき、私について教はり、後にでした。で彼は、タガステの市で私が初めて教授を開いたとき、私についてカルタゴに行つてからも、私について勉強したのでムいます。彼の目に映じた私は、親切で且つ博學な人だつたので、彼は大變私を慕ひ、私の方でも又、彼が年の少ない割には

んたのやうなお方がいかにといふ者よ。私の魂から主よ。此處に所謂貴下に於てのそれではムいません。乞食の樂しみが眞正のものでないやうに、私の樂しみも亦眞正のものではムいません。しかも私の魂を滅亡することにかけては一層大きいのであります。彼はその夜自分の罪ひを消散さしてしまひましたでせう。けれども私は知れど、貴下は私が幾日神よ、貴下は私が幾日知れど貴下はムいます。けれども「何處から來るかによつて相違がある」がムいます。

私もまた敬愛なる者望の歡喜はこんなつまらないものとは比較にならない程相違したものであります。乞食の方が私よりも上でした。といふのに彼のびもなく私ふりは詮論ではなくて。彼は祝福の施與者のために降らんことが、びもなく私ふりは詮論ではなくて。彼は祝福の施與者のために降らんことをのみ求めたからでムいます。彼は喜悦に涵されてをりながら涙ながら臨しいものをまでの當時私はよくこんなことを親しい友達に話しました、そしてそれが私にとつてどん

然し私は、彼がつまらぬ遊戯などに夢中になつて、盲目的に、無暗な慾望の爲めに折角の天才を滅ぼしてしまはないやうに忠告することを忘れてをりもせよ。自らの造り給ふた萬物の舵を司から選ばれて、貴下の奥義の祭司となる彼を忘れ給はなかつたのですが、私を明瞭に貴下に歸し奉るが爲めに。貴下はそのことを私を通して爲し給ふたのですが、私はさうとは悟りませんでした。そこで或る日のこと、私は學生達を前に置いてゐたとき、アリピウスが入つて來て、私に會釋して、其ほの敎壇に坐め、私が論じてゐることに心をとめました。其時偶然、私は或る文章をとつて、それを誰述してゐるのに。私のありまして、それを說明するのに。私の言つてゐることに興味を添へ、且つ之を一層明かならしめるもので、私は演技場のことを例に引かうと思ひ付き、斯の遊戯に狂してゐる者共を烈しく罵つたのでムいます。神よ、貴下は知召します、私は其時、なほ此精神的惡疫から癒やしてやらうなどとは夢にも思つてはをりませんでした。けれども

極めてその徳性の苦しいのを認めたので、彼を愛しました。けれども馬鹿げた兒世物に熱狂してゐたカルターゴ人の悪風俗の渦巻は、彼を演技場裡の狂瀾に溺沒してしまひました。然し彼が此のやうに、無慘な目にあつて、その渦中にころがつてゐる時には、私は其處で、雄辯學の師となつて、公立學校をやつてゐたのでしたが、生憎くと、私の父と彼の父との間に或る事情の爲めに、仲違ひを起して、彼は未だ私に教へを乞ふ都合になつてをりませんでした。私は彼が演技場の兒世物にどれ程深く溺惑してゐるかを見、且つその有望な前途を失はうとし、既に幾分火つてゐるのを見ました。けれども私は友人としての好誼により、又は教師の威光を笠に被つて、彼を諫め、制して、正しい路に呼び戻すことは出來なかつたのでした。といふのは彼は私に對して、彼の父と同様な悪感を抱いてゐると思つてゐたからでムいましたが、其實さうではなかつたのでした。ですから彼は此事については、彼の父の意見がどうであらうと頓着せず、私に少時講義を聽いては立去るやうになりまして、又折々は私の教室へやつて來て、會釋をした
り、

たいとその父に願ひました。父は元よりを說き伏せ、私と一緒に、た。彼は之を好まなかつたのですけれど、徳の最深處に潜む誠實なものだと思ひました。けれども本當のところそれは未だだけに欺かれ易い魂をとらへたのでしたありました。しかも聖物に過ぎないもの、上つ面

八　アリピウスの再誘惑

けれども彼は尚親の榮達に眼が昏んで、矢張り此世の道を棄てず。法律を學ぶ爲め、私よりも先きに羅馬へ渡つて、其處で奇怪千萬にも。劍士の決鬪見物に耽るやうになりました。その わけは。彼は最初斯うした見物を厭つて。排斥してゐたのでしたが。偶然友人達と烈て歸る數人の同級生で。親しい者共と。フト街に遇つたのでムいます。

それが聞いた彼は、その事が自分に宛て、
そして他の人であつたら、私に對して怒り發して、怨むべき筈のところを、此誠實な青年におかつて憤の、却つて憐れみ私を慕ふやうになりました。といふのは貴下の智慧ある忠告のよ。さらば彼汝を愛せんと、箴言第九章第八節と。仰言つて、貴下の聖書に編入し、
も私は彼を責めたのではなかつたのですが、知らず知らず私の心と舌とを燃える炭となし給ふたからで、人います。けれども絶ての人を、貴下自ら知ろしめす順序（その順序は正しいのです）によつて。之により、此弱つた行路な魂に火を點けて、此誤つた道の癒やし給ひました。貴下の讃美を稱へぬやうな者は、貴下の憐憫か考へない者は。
や、好んで私の心と舌とを燃える炭となし給ふて。之により、此弱つた行路な魂に火を點けて、此誤つた道の癒やし給ひました。貴下の讃美を稱へぬやうな者は、貴下の憐憫か考へない者は。
にたすつて下さい。私は衷心から貴下の憐憫を告白致します。彼は私の此言葉を聞くや否や、好んで飛び込んで、そこで怪しい歡びに日を暇ましてゐた。非常に深い坑から、飛び出して、非常な兎に心に振ひ立つたのでムいますもの。斯うして演技場の遊戯はのこらず彼から飛び出して、再び彼は其處へ參らなかつたのでムいます。そこで彼は私を教師にし

その爲め彼は自分が見たいと熱心に望んだその劍士が肉體に受けた傷よりも、更に深い傷を彼の魂に受けました。また斃れて、大きな叫び聲をあげたものより、彼は精神的に斃れたのでした。此音がアリピウスの耳から入つて、彼の眼を開けました。それはその間際まで勇敢といふよりも、寧ろ剛腹であつた彼の魂を取り挫く道を開く爲めであつたのです。と申すのは、貴下に依り頼まなければならん等のところを、不遜にも自分に依り頼んでゐたので、それだけ又愈々弱かつたからでございます。彼は此血を見るや否や、直ちに此殺戮の酒を飲み、脇目も振らずして、之に眼を注ぎ、兇猛な快感を飽くまでも貪り食らひて、しかもそれをさとらず、罪すべき爭闘に滿悦して、血腥い歡樂に醉ふたのです。今や彼は入場した時の彼ではありません、なほ無慘なさまで集の一人でした。只彼は後から來て、それに加つたのです。いやまつたく、彼をつれ込んだ者共のお仲間だつたのです。それ以上もう言ふ必要はムいません。彼は眺め、喝采し、興奮し、狂亂しつゝ此處を立ち去つたのでムいます。此狂亂は實に彼をして此處に彼を拉

しく扼んで抵抗する彼を、心安立ての腕づくで、殘忍、血腥い此野蠻な見世物の行はれてゐたその當日、演技場に拉し去つたのでした。彼は其時友人達にかう申しました――「たとへ君等は僕の身體を彼處へ引張つて行つても、僕の心と眼とをそんな見世物に向はせることは出來はせんぞ。だから僕はゐたつて、ゐなかつたも同樣だ。僕はこの見世物と君等に打ち勝つのだ」と。友人達はそれを聞いて、よしそれでは、果してそのとほりに出來るかどうか、試してみるといつて、彼を引張つて行きました。彼等はアリピウスと共處に行き着いたとき、彼を及ぶ限り最上の場處に坐らせました。そのとき滿場は恐ろしい歡樂に熱中しきつてゐるのです。けれども彼は眼瞼をとぢ、心が斯る罪惡に向つて行くことを禁制しました。若し彼が耳をも此通りにとざすことが出來たらよかつたのでムいましたらうに。といふのは劍士が闘つて斃れると、觀客の怕ろしい叫び聲が、烈しく彼の耳をうち、彼は好奇心にすつかりと打敗かされ、どんなものが眼に映つたにしろ、自分はきつとそれに打勝つて、本心を棄すことはないと、覺悟をしたものゝやうに、眼を開いたのでした。

彼に。物事を批判するときには。輕々しい信念によつて、猥りに人を罰してはならないこと を。既に學ばして下さつたのでムいませう。彼は書板と筆（書板は板に蠟を塗り筆は鐵製のもの）とを携へ ひとり裁判所の前を歩るいてゐたとき、學生達の仲間の一人で、本當の盜人である青年 が、そつと斧をもつて、アリピウスに氣付かれないで、忍び込み、銀細工人達のゐる頭上 を覆ふてゐる鉛の格子に達し、その鉛を切り取りにかゝりました。けれども上に聞える斧 の音に、下なる銀細工人共が氣がついて騷き騷ぎ、人をやつて、其處に來合せた者は誰で も捕へさしました。其盜人は此騷ぎを聞くと逃げてしまひました。そして小斧をもつてゐ ては捕へられる恐れがありますから、それを棄てゝ行きました。此方はアリピウス、その 盜人の這入るのには氣は付かなかつたのですが、出て行くのを認め、その急いで逃げ去る のを見ました。そこで不思議に考へ、何事が起つたかを知らうとして、其處に這入り、小 斧の打棄てあるのを見付けて、不審に思つて立つてゐるところを、どやくやつて來た 人達は、双物を携へた奴が只一人其處にゐるのを見て、これこそはあの音を立てた奴で。

し来つた友人達と一緒に再び兒物に來させたばかりではなく、却つて自分が卒先してさうした程夢中にならしめました。けれども貴下は最も強い、最も憐み深い手をもつて彼を此處から引き出し、自分にたよらず、只貴下にたよるべきことを彼に教へ給ふたのでムいます。

九　アリピウス盜みの嫌疑を受く

けれども之は後々の藥になるようにと、彼の記憶に貯へられました。その話は彼が未だカルターゴに於て私の生徒として學んでゐた時分の同樣なことも矢張りさうせられました。

につきてムいます。彼は學生達がいつもするごとくになつてゐる、自分の演說の課題は彼を盜人として共處の警官に逮捕せられることを許し給ひました。惟ふに、貴下がこんなことを許し給ふたわけは他でもありません。後にはあのとほり大きな人物となるべき

あることを認めて、その手を取り、引き離してこんな災難に遭つたのかを訊ね、詳細に事情を聴き取り、其處にゐて騒ぎ立ち、喚き立て、脅かしてゐる者共に向ひ、自分に跟いて來いと命じました。そこで一同は偶然實際に盗みをした青年の家の前を通りましたが。主人の困ることなんか少しも知らないで、するとスつかり前後の事情を打付けてしまふ程の年のいかない者でした。此少年は主人の供をして市場に行つたのです。アリピウスは此少年を見て、直ぐあの場にゐたものであることを想ひ出し、建築家にそれを告げました。そこで建築家は件の奔を少年に見せて——「之は誰のものか」と訊きますと——「私共のものです」と直ぐに告白して、更に深く訊ねられると、殘らず事情を打明けたのでした。そこでその事件はその家に移され、既にアリピウスを眞正の犯人と思ひ込んで、彼に對して威張つてゐた群衆は大に狼狽したのでムいます。貴下のみ言葉の管理者でありまして、同時に貴下の教會に於ける多くの事件の審判者となるべき筈であつた彼は、善い經驗と教訓とを受けて立ち

自分達が捕らへに來た其盜人だと思ひ込み、有無を言はせずアリピウスを引捉へ、曳きり行き、市場の人々を集め、惡名高い一ムいまする。これから彼は裁判に附せられる爲めに、其處から伴れ去られもされど彼が受くべき教訓は是だけで下は直ぐにおいでになつて、罪の無い彼を救ひ給ふたからでムいます。といふのは、主よ、貴證人に在し給ふのですから。

扨てアリピウスを引つ捉らへた者共は此人に會つたのを非常に悦び、公共の建物を管理してゐた一人のフォルム廣場で品物が紛失した時には、此人はいつも此者共の仕業だらうと嫌疑を掛けたのをみせて、是まで行はれた竊盜は誰がしたものだつたのです。然るに此人はいつも御機嫌ものだつたのです。或る元老院議官の家で、屢々アリピウスにあつてゐたので伺ひに行き、直に彼で

十　ヨハネの黙示録

新しい天と新しい地

21:1 また、わたしは新しい天と新しい地とを見た。先の天と先の地とは消え去り、海もなくなっていた。2 また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そして、玉座から大きな声がこう言うのを聞いた。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神は人と共に住み、
人は神の民となる。
神自らが人と共にいて、
4 その目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。
もはや死はなく、
悲しみも、嘆きも、労苦もない。
先のものは過ぎ去ったからである。」

5 すると、玉座に着いておられる方が言われた。

「見よ、わたしは万物を新しくする。」

また、言われた。

「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、真実である。」

6 また、わたしに言われた。

「事は成った。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。7 勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐ。わたしは神となり、彼はわたしの子となる。8 しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人殺し、淫らな行いをする者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽る者、これらの者に対する報いは、火と硫黄の燃える池である。これが第二の死である。」

新しいエルサレム

9 最後の七つの災いで満たされた七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、わたしに語りかけた。

「ここに来なさい。小羊の妻である花嫁を見せよう。」

10 御使いは、霊に満たされたわたしを大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のもとを離れ、天から下って来るのを見せた。11 都は神の栄光に輝いていた。都の輝きは、最も貴重な宝石のようで、透き通った碧玉のようであった。12 都には大きな高い城壁があり、十二の門があった。門には十二人の御使いがいて、門の上には名が書いてあった。イスラエルの十二部族の名である。13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。14 都の城壁には十二の土台があり、その上に小羊の十二使徒の十二の名が記されていた。

15 わたしに語りかけた御使いは、都と門と城壁とを測るために、金の測り竿を持っていた。16 都は四角形になっていて、長さと幅と高さは同じであった。御使いが竿で都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さと幅と高さは同じであった。17 また、城壁を測ると、人間の測り方、すなわち御使いの測り方で、百四十四キュビトであった。18 城壁は碧玉で造られており、都は純金で、透き通ったガラスのようであった。19 都の城壁の土台は、あらゆる宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、20 第五は赤めのう、第六はしょうこう石、第七はかんらん石、第八はべリル、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一はジャシント、第十二はアメトストであった。21 十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

22 わたしは都の中に神殿を見なかった。全能者である神と小羊とが都の神殿だからである。23 都には、これを照らす太陽も月も必要ない。神の栄光が都を照らし、小羊が都の灯火だからである。24 諸国の民はこの都の光の中を歩み、地の王たちは自分の栄光をこの都に携えて来る。25 都の門は昼の間は決して閉ざされることはない。そこには夜がないからである。26 人々は諸国の民の栄光と誉れを都に携えて来る。27 しかし、汚れたものは決して都に入ることはなく、また、忌まわしいことをする者や偽りを行う者は入ることができない。小羊の命の書に記されている者だけが入ることができる。

熱心な探求者として、また最も困難な問題の最も鋭い考究者として。彼は私のやうに嘆息し、私のやうにためらひました。斯うしてそこには三人の貧しい者の口がムいまして、御五に自分の窮乏を嘆き合ひ、「時に従ひて彼等に糧を與へ給はんが爲めに、貴下を俟ち望みました」（詩篇第百十四の十五）そして貴下の御憐憫により、私共の此世の業に伴ふあらゆる苦惱の裡に在つて、私共は前途を望んで、何で斯麼苦艱を忍んでるるかと、其理由を訊ねました。ですから私共は後をふりかへつて——「では何時まで斯うであらうか」と申しました。私共は屢々斯う申したのです。しかもさう申したのでした。といふわけは、是等のものを棄てなかつたのでムいますから。なほ是等のものを棄てながらも、一定したものか明かには分らなかつたのでムいますから。

十一　オウガスチンの困惑

私はまた、物事を惟々（つらく）と考へてみるに、智慧の切望に火と燃え立ちて、是をさへ見出し

す。けれども彼は正義といふものを考慮して、その目的をより善い方に轉じ、さうすることを禁じてゐる公平の方か、それによつて許さうとする權力の方よりも有力であると考へたのでした。是等は小さなことでムいます。けれども小事に忠なる者は大事にも忠でムいます。また貴下の口から出る眞理は決して無用ではムいません。即ち「汝等もし不義の富に忠ならずば、誰か眞の富を汝等に任すべきや」（ルカ傳第十六章第十節）と、また「汝等もし人のものに忠ならずば、誰か汝等のものを汝等に與ふべきや」（ルカ傳第十六章第十一・第二節）と。アリピウス當時如何いふ狀態の生涯を送つたらいゝかと、私と同様判斷に迷つてをりました。

またカルターゴに近いその故郷を去つて、後、更に彼が永らく住んでゐたカルターゴに來ました。是はたゞ私共に熾烈火の如き熱心をもつも出つたネブリディウスは、大きな財産と邸宅とを棄てゝ、その上にも彼に從つて來るのを好まなかつた母をも棄てゝミラノに來ました。是はたゞ私共に熾烈火の如き熱心をもつて、眞理と智慧とに活きようとしたが爲めに他ならないのでムいます。祝福された生活の

いのだ。寫本をさへも私共は何處で手に入れやう。何處から、又何時それを調達しやう。誰からそれを借りやうか。時を定め、或る時刻を私共の魂の健康の爲めに、割り當てゝ貰ひませう。大きな希望の曙光があらはれた。公教の信仰は私共が考へてゐるたやうなことを不敬慶であると言ふ。して私共はその學者達は神は人の體の形に制限せられたと信ずることを蹂躙しない。午前の時間は學生達に占められてしまう（教授をする故）、殘つた時間に私共は何をしよう。けれども私共は何時私共の大きな友人等を訪れやうか、私共はその人達に日をかけて貰らはなければならないのだ。私達が學生に與るものを、何時拵へようか。此緊張した氣持から、いつ心をくつろがして、のう〳〵されようか」と。

「あらゆるものは死滅しろ、私共はこんな空しい虛榮を追ひ拂はう、そして一生懸命に眞理の探求に身を委ねよう。人生は悲慘で、死は不定である。死が俄かに襲ふて來たならば、私共はどんな狀態で此世を去るだらうか。また此世で等閑に附してゐたものを、何處で學

たなら、其他の總ての虚しい慾望の、空虚な望みと、欺瞞する虚妄とを棄てて心を定めたにどうでせうか、私が十九の齢以後、どれ程長く年月が經つてゐるかに驚いてしまふるでも、矢張り爲の同じ泥濘にへばりついて、無常流轉、私の魂を喪亡せしめる浮世の歡樂を貪つて、申しました——「明日こさう、ほうら、マニケウス派のファウストスが來たら、一切を解決してくれるのだ。嘘、諸君、偉大なる方々よ、アカデミコスの人々よ、生活を整頓することは出來ないのですか。否、私達に一層熱心に探らして、それだけまた絶望さなよ。ほうれ、教會の聖書のうちに、遽には不思議に見えたものも、今や私達の意味に正しく解釋し得られるのだ。輝く眞理がなくなつたぢやないか。且つ他の慈悲深い立場に、自分の足を踏み締めてゐるまでは、私は私の子供の時分、私の兩親が立たして遣いて呉れやうか。アムブロシウスにはそれを聽いてくれる暇もあるまいし、私共のかぢや又木を讀んでゐる暇もな

妻も貰へるだらう。此處らがまづ我々が慾望の限度であらう。多くの偉大な人物。
べき價値の最も多い人達は結婚して智慧の研究に身を委ねたのである」と。
私がこんなことを語つたり、こんな方面の定まらぬ風が變り變つて、私の心を彼處此處
と吹きまくつてゐる間に、時は容赦なく經つてしまひました。けれども私は貴下に立歸る
ことを躊躇致しました。そして一日〳〵と貴下に於ける生活を遷延してをりましたが、そ
の爲めに私自身に在つて死することを延期は致さなかつたのでムいます。幸福な生活を葬
ひながら、私はその本家本元に入ることを恐れました。否、それから逃げながら、それを
求めたのでムいます。私は、女に抱擁せられなければ、自分は餘りにみぢめなものだと
思ひました。そして此弱さを癒すべき貴下の御慈悲といふ藥については、試みたことがな
かつたから、思つたことがなかつたのでムいます。節制といふことも、私は自分にそれを
行ふ力があるとは思ひませんでしたけれども、私共人間にはあるもので、愚かにも「汝給
ふにあらずは、何人も慾を仰ふる能はず」（ラテン聖書中智慧の書第八の二）と書かゝれてゐることなどは知

ばれやうか。或は寧ろ、此等閑の罰を受けないだらうか。若し死自らは一切のものであつたにも拘らず、さうだとすれば是こそまう研究の価値なんか何でもないぢやないか。

絶頂が、斯う全然自己をさゝげてしまふことを躊躇しないのであるか。だがなら。神は私共の為めに、斯うまでして下さらなかつたのだらうか。では何ぜ世の希望を棄てゝ、神及び祝福さ

待てよ、斯うしたものもまた楽しいものだ。

二度それに立ち戻つてくるのは恥かしいことだから。私共は軽々しく是を抛棄してはならないのだ。ほう、今ぢや或る地位を獲ることなんか何でもないぢやないか。

有つてゐないにしても、私共は優れた友人を

とも、長官になることが出来るだらうし、又

た。私は彼等の偉大な精神を去ること遥かつたのでムいます。そしてその快味とにとらはれて。それを解かれることを恐れながら、また恰も彼が私の傷に觸るものゝやうにその善い諫言を斥けました。彼はめを、餘計な御節介をして、解いてくれるものに思はれたのでした。そればかりでなく蛇（サタンの形容（創成記を見よ））は私の手によつて、アリピウスに語り、私の舌により、美はしい係蹄を編んでその徑をひろげ、彼の正しく、自由な足を絡らみまして。捕らへようと致しました。

アリピウスは、自分が涙み〳〵ならず尊敬してるた私が、此快樂の烏黐につけられて、此事について、私が、自分は決して獨身の生活を送ることは出來ないと云ふのを怪しみました。私の方ではまた。彼が怪しむのを見ると、自分を辯護致しましたは——「それは君はこつそりと。一寸の間やつたばかりで、今は殆んど記憶にだけ殘つてるるに過ぎないことだから、何にも苦しまないで。容易に侮られるけれど、僕の方では永い間慣習となつてるる快樂だから。それは大變な相違がある。また婚姻といふ名

らないうへに、若し私が自分の内部の呻吟をもつて貴下の耳に對して、開けて下さるやう」叩いて、堅い信仰をもつて私の心配を貴下にお任せしたならば。貴下が之を下さるのである にとを知らなかつたのでムいます。

十二　獨身と結婚生活

アリビウスは私が妻を娶ることを制止しまするのには――「若し妻を娶るなら、私達が久しく望んで來たやうに。安易な暇なもつて、智恵を慕ふ生活を決して一緒に送つては行けなからう」と。彼は當時自ら此點では非常に謹嚴でめつて、人も慫いてるた程でムいました。又彼はその青年の始めに交接な經驗しましたが。それに執着するこのです。そして寧ろ彼はそのとを悔い、それを憎んで全く性慾を抑へて來ましたので、猶更さうだつたのでムいます。けれども私は婚姻した人でも習慣を培ひ、神の恩寵を受けて。友達を眞實に愛した例もいくつもあげて。私は彼に反對致しまし

知らない情慾に滿足を與へる習慣であり、彼をとらへて、曳摺つて行つたのは、嘆美する心でありました。いと高く在す御方よ、貴下が私共の卑しいのを棄て給はないで、憐むべき私達をあはれみ、奇しく、秘密の道によつて、私達を救つてやらうと、御入來なさるまでの私は、こんなものでムいました。

十三　オウガスチン妻を求む

そこで私は妻を娶らうと熱心に努力を續けました。私は求婚したり、女を約束せられました。之は母の苦心によるもので、母は日毎に私が洗禮を受けるに適するやうになつて行くのを見て、大變悦び、彼女の祈願と、貴下の御約束とが私の信仰のうちに段々と成就せられて行くのを認め、一度結婚したら、健全な洗禮によつて、私が潔められるように願つたのでムいます。まつたく其時分、私の要求と彼女の望みにより、母は心の強い叫びをもつて、私が行はうしてゐる婚姻について、貴下から何か幻によつて御告げを蒙りたいと、

さへつけば、僕がこんな生活を決して輕蔑しなかつても、君はさう不思議には思はないだらうよ」と。そこで彼もまた決して斯樣な肉の快樂に負かされたが爲めではなくて、只好奇心の爲めに婚姻を希望致しました。彼は私に申しました――「君の生活は非常に樂しいものに見えるが、君が、此點に缺けたなら、生活も生活ではなく、刑罰であると謂ふのはどういう譯か僕知りたいからなんだ」と。即ち、斯うした囚れの鎖から解放せられてゐた私が奴隷となつてゐるのを見て、不思議におもひ。怪しみながら之を試めしてみようといふ慾望を起し、とう〳〵それを試みることになりましたが。更に一歩進んで、恐らくその怪しんでゐた奴隷の狀態に陷つたかも知れません。といふのは彼は「死と契約を結ばう」（イザヤ書第廿八章第十五節）そのわけは。秩序正しい結婚生活、家族生活の務めにどれ程名譽があつたかとて、そんなものはたゞほんの僅かばかり私共を動かしたに過ぎなかつたのでムいます。しかも私にあつては之を欲したのは重に私をとらへて、いぢめぬいた。飽くことを

さて我々多くの友人仲間では、人生の煩しい苦難を語り合ひ。論じ合ひ。また嫌ひ、紛擾の巻を生つて、靜かに生活をしようと、殆んど決心をしたのです。此靜かな生活といふのは私共が有つてゐるものを殘らず持ち寄つて、一つの共同的家庭を作り、私共の友情の誠實により、是は誰のもの、あれは誰のものといふやうに、各自に所有しないで、總ての人が持寄つたものだから、全體を各自のものとして、また全體を總ての人のものとしようといふことでムいました。そこで私共が思ふには、此團體に加はつてゐる者は約十人あつたらうと。そのうち數人はなか〳〵な富裕なものでしたが、私共と同じ市民であつたロマニアヌスは中にも金をもつてゐました。彼は私が幼いときから非常に親しい友人でムいましたが、この時にはその事業を猛烈に行つた結果が重大な裁判沙汰になつて、法廷へ引き出されてゐました。彼は私共の新計畫に最も熱心でムいました。その上、彼の財産は他の者共よりのものよりも遙かに多かつたので。彼の聲は此計畫を說くとき特に權威がありました。私共は毎年二人の役員を選らんで。之に一切必要なことをやらして。他の者は面倒

!!何に貴下にお祈りを捧げたのでへいふまでもなくはるかつたのです。尤も彼女は或る虚しき幻の様なものを見ましたけれど。是は人が猛烈に精神を集中するときに起る種類のものでした。母はこんなことを私に話しましたが。それは貴下が何事かを示し給ふたときのやうなそのまゝではしないで、即ちそれを疎んでしまひたいと。彼女自身の魂の夢との間に在る相違を辨別することが出来ると申してすゐけれども事情が切迫して、貴下の啓示とも難い一種の直覚によつて、私はひとりの乙女と婚約を結びましたのでした。けれどもその娘は結婚するには二年が若かつたので、その年齢が達するまでは待つことにきめました。

註　法律による結婚の年齢（Marriage Age）はスウェーデン法典により十二才からであつた。

十四　理想社會の計

はれてゐた私の心は裂かれ、傷つけられ血を流しました。そこで妾（めかけ）は他には決して男を知るまいと貴下に誓ひまして、自分が生んだ私の庶子を殘してアフリカに歸つて行きましたけれども女をすら摸ねることの出來なかつたあはれな私は、許婚の女が妻となるまでにはなほ二年もあるので、迚も遲いのに我慢がしきれないで、父別の女を手に入れましたが。是れも妻ではなかつたのです。といふのは、其女も婚姻の戀人ではなくて、只肉慾の奴隷に過ぎなかつたからでムいます。斯うして二度目の女により魂の患ひは持續せられ、力をつけられ、又增加せられて、婚姻の領域に届きました。しかも前の女を離別したことから受けた傷は癒やされないで。却つて非常に痛み、惱ましく、その後私の苦痛は漲らぎましたけれど、愈々失望すべきものとなりました。

十六　死と審判の恐れ

憐憫の源よ、貴下に讃美を捧げます、貴下に榮光を捧げます。私は愈々みちめになり、

しないでをらうといふのでムいました。けれども私共のうちの或る者は既に妻帯者であり。又他の或る者は結婚しようとしてるるので、さうした生活をその妻女達が承諾するや否やといふことを考へ始めたとき、斯うもうまく立てられた計畫は、私共自らの手のうちで、味噌に碎かれて、薬てられてしまふよひました。そこで私共は嘆息して、世の賤い、坦々たる大道に私共の歩みを進ばせることになりました。さうなつたわけは、私共の心の裡に、多様多岐の思ひがあつたからでムいます。然し貴下の聖旨は永遠に變ることはムいません。この聖旨によつて貴下は私共の考へを嘲り、貴下の聖旨の基礎を掘ゑ、私共の魂を祝福を以て滿たし給ひました。

十五　舊の妾は去り、新たに妾來る

兎角するうち、私の罪は增し加へられました。そして私の結婚するのに邪魔になるといふ理由から、私と一緒にいつも臥てゐた妾（めかけ）は、私の側から引き離されたので、彼女にとら

つては見出されないものであることを知らなかつたのである。また。あはれな私は。
偽り（汚れたもの）か。どういふ源泉から流れ出してゐるかも考へないで。友達と一緒に
こんなに愉快さうに話し合つたのでムいます。なほ又肉の歓楽がとれほど渇望にあつたに
しろ、當時私が抱いてゐた觀念によつてすらも、私は友達がなければ。詐瞞にしてはいか
れなかつたのでムいます。しかも其友人を私はまつたく彼等自身の故でもつて愛しられたのであると知りました。
あゝ曲れる徑よ！　貴下を離れ去つて。なほも渇いものを獲ようと望んだ不遜な私の魂
は禍です。私の魂は仰向けになり、横に臥、又腹創つて、いろ〳〵に反轉してみましたが、
矢張り苦しみが免れませんでした。只貴下だけは休息していらつしやいました。そして
うです。貴下は私共に近く在して、私共をその憐ましい漂浪から救ひ出して、貴下の道に
置き、慰めて仰言います「來れ。われ汝等を負はん。われ汝等の導かん。またわれ彼處に
汝等を負はん」（イザヤ書第四十六章第四節）

貴下は愈々近づき給ひました。貴下の右の手は絶えず私を泥濘の中から引き出して、洗ひ浄め給ふのですが。私はそれを知らなかつたのでムいます。また死と、將に至らんとしてゐる貴下の審判（さばき）の恐怖より外には、何物も私を肉的歡樂のより深い淵から呼び返しは致しませんでした。また私の友人アリピウスとネブリデイウスなどと一緒に善惡の性質について議論を圖はした時、私は斯う申しました——「僕が若しエピクウロスの信じなかつたことを信じなかつたら、僕の心に於て勝利者として棕櫚の葉を受けたらうに」と。その生前の行爲に從つてそれ〴〵應報を受けた人の死後その靈魂は生き殘つて、しかもそれを失ふ恐れがなくして生きていかれるならば、僕達は幸福であると言はざるを得ない。私はかゝる肉體の歡樂を味ひながら、何で他に求めるものがあらうか」と。しかも不朽な肉體の基であることを知らなかつたのでムいます。私は斯のやうに混沌し、又目が盲いて、正直と美とは（それ自身の篇ある

に信じました。
よりも劣等であるといふのはどういふ譯か分りませんが。私は朽つべきものは朽ちないものを傷けられることを明かに見て確信し、また何の躊躇もなく私は傷けられないものは私の妄想を叱りつけ、只一撃のもとに、私の心よりも優等であるときめてるたからでムいます。私の心は猛烈にあらゆるうと努めました。けれども追ひ拂ふと直ぐに、私の眼に群がつてる不潔のものを追ひ拂はり圍み、私の眼を曇らして、貴下が人間の形にこそはましまさねど。それに迫り、私の眼に迫り、貴下が人間の形にこそはましまさねど。それでもなほ貴下、變るものよりも優等であると思つた、朽ちず、傷けられず、變ることのない貴下を、世界に滿ちくてか。或は又その外に無限の擴がりをもつてか、どつちにせよ空間に在すものとより外に考へることが出來なかつたのでムいます。そのわけはどんなものであらうが、此空間といふものを取りまとられたなら、虚無、左樣全く虚無であつて、空虚ですらもあり得ないと思はれたからでムいます。例へば一の物體がその空間から除かれ、その空間には土もなければ、水もなく、又空氣もなく

第七篇

一　神觀なほ解けず

私の恥づべき、罪の青年時代は今や死んで、（彼の年は三十一才であつた）齢をとるにつけて、愈々私は壯年時代に移つて行きました。斯うしてゐるものを除いては、如何なる木體をも私は考へることが出來なかつたのに汚されました。私は空虚なものは少し智慧がついてきて、傾聽しかけてゐましたから、私は貴下を人間の形に於て考へずそんなことを避けたのでムいました。そして私は私共の肉眼に見ちに之を見出して喜びました。けれども他に何とも貴下を想像しようとも思ひませんでした。そして人たる、又斯麼人である私は、貴下を至上、唯一の眞な神と考へようと致しました。そして私の魂の奥底に於て、貴下は朽ちず、傷けられず、また變らないものと本當

いやうに、或は自身を裂き又は切るやうなことをしないで、自身を全く充たして貰かしめるやうに、私は只天と、空氣と、海との本體のみでなくて、地の本體もまた貴下を通過させることが出來るもの、又最少の部分も等しくそのあらゆる部分に亘り、神秘な感によつて、内からも外からも貴下の臨御を受け、貴下は斯くしてその造り給ふた萬物を治め給ふのだと思ひました。別に考へやうがなかつたので、私は斯う推察致しました。何ぜかなれば、地の大きな部分は貴下の大きな部分を、小さな部分は小さな部分を含むといふことも亦た多く、その結果、貴下は世界の各部に片々に臨御ましまして、大なる部分では小に在すと。けれども貴下はさうではなかつたのでしたが、それでも未だ貴下は私の闇を照らし給ひませんでした。

一切のもかなければいけれど。なほ空間として、
ゐると思はれました。
　ですから頭の御祖末千萬な私は私自身をすら判斷し得られないで、凡そ一定の空間に擴がりもなく、又深みもせず、膨脹もせず、或は此のうちの二三の次元の形を受けなかつたものは全然無であると考へました。それは私い心は私の眼でみるやうな形に總てのものが纏めたからでムいます。
　そんなものであつたことをさとらなかつたのでムいました。ですから私は、私の生命の生命にまします貴下を考へて、無限の空間に擴がり、此世界の全容積を到る處に貫通して、之を超越し、無量無邊の空間に遍在し給ふので。天も貴下を容れ、地も貴下を容れ、萬有は貴下を保存して、しかも高有は貴下に於て限られねばけれど。貴下は何處でも限ぎられ給ふことのない巨大な一體にましまずと想像致しました。卽ち地上にある空氣が日光の自身を透過することを拒まな

れないところの天性と混じ合つて。是等のものにより逝しく墮落し、一層惡るいものに變はり。遂に幸福から不幸に移り。救ひ出される爲めに。又潔められる爲めに。助けが要るといふやうな戰は。まつたく理由がなくなりませう。又貴下の「言」は此魂の束縛を解き。汚れを清め給ふと申しても。しかもその御言葉自らは此同じ一つの本體から出てゐるものですから。貴下は。どんなものにましまですとも、貴下の本體は朽つることはないと申しますなら。こんな言葉は皆嘘であつて、呪ふべきものであると言ふなら。それこそ大の僞りであつて。その口から出るや否や。直ちに排斥すべきものであると。

そんなわけで。此ネブリディウスの議論は。滿腹の私がムカ〳〵して吐き出していゝ程な。いやな彼等を反駁するに充分足りたのです。何ぜかなれば。斯う考へたり、喋つたりしては、心も又舌も。最も戰慄すべき冒瀆なしには出來なかつたからでムいます。

二　ネブリディウスの爭論

主よ私は、（貴下の言葉が彼の口から聞こえないからです）欺かれつゝ欺く者、また嘘であつて（貴下の言葉が彼の口から聞こえないからです）語る者共を反駁することが出來ました。卽ち以前、私共がカルターゴにゐた時、ネブリディウスによつて說明せられたのを聞いて、私達がすつかり動搖させられたところの論を以てムいます――「光明たる」ケウス教徒の對立せしめる暗黑の世界も。若し貴下が之と戰ふことを欲しらば、貴下に少しく害を加へてゐたゞらうと答へましたなら、貴下は傷けられ。又對し何をすることが出來ませうか。なぜかれば、彼等が若したなら、その暗黑は貴下がそれと戰ひ給ふ理由がなくなりませう。別言すれば、貴下の一部分または一つの肢體。或は貴下御自身の本體から出た子孫が、反對の勢力。

そこで私は、自由意志こそは私共の悪を爲す原因であり、また貴下の義しい審判こそは明かにさとることを悟らうと努力致しました。けれども是をすることは出來ませんでした。ですから私の魂の日を此深淵から引き出さうとなしましたが、また再びそれに沈んでしまひました。屢々努めては沈み〳〵致しました。けれども是は、私が生命をもつことを知つてゐる程、よく私が意志をもつてゐることを知つてゐるといふことで、私を少しばかり貴下の方に向つて、光りに引きあげました。換言すれば、私が或ることを爲さうと欲し、或は欲しない時、その欲する、又は欲しない時、動者なるものは私自身に外ならぬことを確實に認めたのでした。そして此處にこそ私の罪の原因の在ることを直ぐ悟つたのでムいます。けれども意志に逆らつて爲したことは、行つたと云はつよりも、寧ろ行はしめられたものであることを知り、それは自分の咎ではなくして、自分が受けた罰であると考へました。私は貴下は正しくましますと考へますから、私は不正當な罰を受くべきものではないと申しました。けれども私はなほ申し

三　自由意志は罪の基

けれども私は又、實に魂のみならず、私共の肉體までも造り給ふて、なほその上にも一切の萬有を創造し給ふた眞の神は、汚されることなく、變ることなく、移り給ふこともないと。私は確信してをります。しかも創造し給ふたところの私共の主に在す眞の神は、汚されることなく、變ることなく、移り給ふこともないと。私は確信してをりましたけれど。しかもそれは何であるかと。それを討究することが出來なかつたのでムいます。然しそれは何であるかと。それを討究することが出來なかつたのでムいます。然しそれは何であるかと。それを討究することが出來なかつたのでムいます。然しそれは何であるかと。それを討究しなければならないと。信仰の局限を受けないようにして、それを討究しなければならないと私は考へました。と申すのは、信仰の局限を受けないようにして、それを討究しなければならないと私は考へました。と申すのは自分自身を、その討究するやうなことにはならないかと懸念したからでムいます。ですから、私がするやうなことにはならないかと懸念したからでムいます。ですから、私があたゞニケウス教徒の信條は確かに間違つてゐることを認め、安心して惡の根底から嫌つて致しましたと見るよりも何たるかを研究體が惡を容れ給ふのであると見て、彼等自ら惡に滿たされてゐるからでムいます。

そこで私は、前に朽ちないものは朽つるものよりも優つてゐることを發見したと此事について何か他のものを見付け出さうと努力致しました。でその爲めに、私はたとへ如何なるものに在すにもせよ、決して朽ち給ふものではないと告白致しますも優つた、如何なるものをも考へ得る人は未だ嘗つてあつた、最も高く、又最も善い貴下よりもしなければ、又後にもないからでムいます。既に申したとほり、朽ちないものゝ、朽つるものに優ることが、至上の眞理であつて、又最も確實ですから、貴下が若し不朽のものにましまさないとすれば、私は自分の心に私の神よりも優つてゐる者を想像するこことが出來るからでムいます。ですから何處に於て私は貴下を探し出し、それから何處に悪が存在するかを觀察し始むべきでムいます。卽ち、貴下の本質を決して害ふことのない、腐敗が何處から來るかといふこと、腐敗は、如何なる必要からも、また豫知し難い原因に基くも、腐敗は決して神を害ひまつることはないのでムいます。何ぜかなれば、

四　神は不朽

た——私を造つたのは誰か。善の神、善そのものに在す神ではなかつたらうか。善を欲しないのは何故であらう。そしてその結果罰しられるのが当なのだらうか。私は最も甘い私の神に全然つくられたのに。こんなものを私のうちに入れ、此苦い萌芽を私の内に入れたものは誰だ。さうしたものが、若し悪魔といふものは一體何處から来たのか。もし又、悪魔は自分の彼を悪魔たらしめた此悪るい意志によつて天使から成り下がつたものだとすれば、彼の悪い造物主のつくり給ふたものでは、彼のうちに此悪い意志は何處から来たのか。總ての天使は最も善くつくりされてしまひました。けれども私は再び意氣悄沈し。迷はいはうよりも。寧ろ貴下が悪を爲さしめ給ふと考へる迷ひの地獄（此處では誰も貴下に告白致しませんには伴れて行かれませんでした。

であるといふことを知らなかつたのでムいます。そこで私は自分の靈の眼前に、總ての造と共の中に私共が見ることの出來るもの、即ち、地、海、空氣、星、樹木、死ぬべき生物などを置き、更にまた、その中に私共が見ることの出來ないもの、即ち蒼穹、總ての天使、天にある總ての靈などを置きました。されども私はまるで是等のものはるがまゝに。彼方に此方に置かれた物體であるかのやうに見なしました。又私は貴下の創造を一つの大きな塊型（マッス）として、その體の樣々の種類によつて區別せられ、或は體であり、或は靈の代りに、私が物體であるやうに私自身が裝ふたものでムいましたが、現實的な概念をもつ大きなものと思ひましたが、現實的な概念をもつ大きなものではなく、私が知ることの出來ない大きさで、要するに漫然とした大きさであつて、せよ有限でありました。けれども主よ、私は貴下を、たとへ到る處に無限にてるらつしやると想像致しました。即ち丁度總ての部分に於て之を取り圍み、又貫通してるらつしやると想像致しました。即ち丁度到る處に海があつて無限を貫き、又到る處に只一つの無限の海の外には何ものもなく、且つ

神は御自身が神に在すが故でムいます。又神の欲し給ふところのものは善でムいますが故でムいます。神自らが善に在すが故でムいます。また貴下の意志は貴下の力にゝどんなことでも貴下は不如意の窮厄なる日にはされ給ふことはムいません。けれども若し貴下の御意志が貴下御自身よりも大でムいますなら、貴下御自身もまた大でムいませうたぜたなれば貴下の意志と力とは仍ち神自らたるが故でムいます。の給ふ貴下に、何の豫期なさらぬことがムいませうか。萬物のうちどんな何ものもムいません。けれども何ぜ此上にも、神てふ本體は朽つべきものではないかどうかに就いて、語る必要がムいませうか。若し朽つるものでありとしたなら、それは神ではムいますまい。

五　罪惡の起原

私はまた惡が何處から來たかと訊ね、それを惡い道に於て求め、私の捜索そのものが惡

神は總てのものを善く造り給ふたのではないか。だから造つた主も。造られたものも皆善なのだ。では惡はどこから來たらうか。或は一種の惡い物質があつて。神はそれでもつて惡を造り。完成し。整頓し、その上になほその中に若干の物を殘して。之だけを善に變へ給はなかつたのだらうか。けれども何ぜそんなことをなさつたのだらうか。どんなことでも爲すことがお出來なさるのに、全體を變化させることがお出來なさらなかつたのだらうか。最後に、神は何ぜそのものから何かを造らうとし給ふたのか。その全能をもつて寧ろ此惡しき物質を無に歸せしめ。御自身のみが全く、眞にして最も高い、無限の善とならしめ給ひさうなものだのに。或はまた、それは眞に神の意志に逆らつて存在し得られたものだらうか。或は惡は若し永遠の昔から存在したものなら、何故に神は過ぎ去つた無限の時間に。惡の斯う存存することを許し給ふて、斯廢に久しく經つてから後、それから何物かを造らうとし給ふたのだらうか。或は神が若しその時になつてから、俄かに思ひ立つて、何事かをしようとなさつたものならば、全能者は寧ろ此惡い

その中に大きいけれども有限な海綿があって、その海綿はその總ての部分に於て、此無量の海水に充たされてゐるといふやうなものでした。私は此様に貴下の創造そのものを有限であるとし、そして無限なる貴下によつて充たされるのであると考へました。そこで私は斯う申しました。「神を見よ、また神の造り給ふたものを見よ。神は善である。否最も力強く在して、こんな物よりも遥に優秀に在すのだ。けれども善に在す神はこんなものを善に造り給ふたのだ。而して如何にそれを八方から取り巻き、充ち給ふかを見よ。では悪は何處にあるか。何處から奈何して此處へ忍んで来たか。其根本は何であつて。その種子はを恐れて避けるのか。或は悪といふものは全然ないものか。もし無いものとすれば、何せ私共は無いものを刺戟し、苛責する恐怖そのものこそは悪だ。左様恐るべきものがないのに猶ほ私共が恐れるから、一層大きな悪だ。だから此場合、私共の恐れる悪といふものが果してあるのか、それとも恐怖そのものが悪だ。どちらかだ。では悪は何處から来たらうか。善い

六　占星學の迷妄

此時分。私はまた占星者等の僞りの占ひ。不敬な迷妄とを棄てました。私はいま御慈悲を感謝致します。それは貴下でムいます。全然貴下でムいます、（貴下より外に、眞びとについて。私は貴下に向ひ。裏心から貴下のらは光りを必要とせないで。而も光りを必要とする心を照らし、世界を支配して、ハタメク樹の葉にまでもその智の及ぶものは誰でせうぞ）私の頑冥をなほして下さつたのは――此頑冥によつて私は賢い老人ポンデイキアヌスや、又驚くべき才をもつ靑年ネブリデイウスと抗爭したのでムいます。賢い老人は私に烈しく反對し、秀才の靑年は、いくらか疑はしさうに。屢々申しました――「未來を豫言し得る術はない。その者共のトひといふのは一種の冨籤に過ぎない。彼等が言つた多くのものゝうちに、本當に起つたことがあつたにしても。それは自覺に基づくものではない、只嘯つてゐるうちにまぐれ當りに當つたのだ」

物質を無いものにして、御自身のみを眞、且つ無限の善たらしめ給ふた
在す神は善いものゝ工匠であり、また造
物を先づ取つて無となし。善い物質を造り
かなればならば、此惡るい、是を以て萬物を造り給ふたに。何せ
ふことが出來ないであらうに。何せ
んなことを私のあはれな胸のうちに。いろ
押し潰さと考へて、烈しく身を嚙む煩悶にすつかり
も公教會のうちに在す貴下のキリスト、私に。死んでしまふだらうと恐れました。けれど
きましたの主なる救主の信仰は。堅く私の心に結びつ
づれてはるましたけれど。なほ全然之を棄てることはなく。即つて日毎に益々その利益を
受けました。

ことに對する自分達の熱狂を一層煽り立て、とう〳〵その家に飼つてゐる。物言はぬ動物の仔を産む時刻を之によつて推測したり、またそれに關聯した天體の位置を觀察したり、よつて所謂る斯術の新らたな實驗をなさうと致しましたと。彼は更にその父が斯ういふのを聞いたことがあると申しました——母が彼を孕んでゐる時、父が友人の女中も又懷姙してるました。犬のお産ですらも、極めて精密に豫測しようとしてゐる主人が、どうしてを見逃しませう。そこで極めて精密に觀測して。日と時刻と。更にその分時までも計算したところが、妻の方の子も、女中の方の子も同じ時刻に生れました。そこで二人とも、一人は自分の子に、他は新たに生れたその奴隷の子に、いづれも極く微細な點に至るまでも同じ星を當てなければならなかつたのです。何ぜかなれば二人の女が分娩を始めるや否や、直ぐ五にその家に起つてゐることを知らせ合ひ、實際に産の氣がつくのを見ると直ぐ五に送るべき使者の用意を致しました。此使者は即座に報知を齎すように。何れも各自の領地で苦もなく準備されたのでムいました。そこで双方から各々人をやつたのですが。その使者はど

と。そのとき貴下は私に。占星家に急りなくトなつてもらう一人の友人ましたと。彼は占星術には暫く通じてはゐるなかつたのでしたけれど。今申心からそれを訊いてゐたのでした。しかしその父から聞いたといふ、或たのでしたが、その事が此種の價値を證するまでに足るものであるとは知つてのでしたが、親友であるところから。私にふのはフイルミヌスとよばれ、高等の學藝を教はり、辯舌の此友人といふのは占星術には暫く通じてはゐるなかつたのでしたけれど。今申心からそれを訊いてゐたのでした。しかしその父から聞いたといふ、或たのでしたが、その事が此種の價値を證するまでに足るものであるとは知つてのでしたが、親友であるところから。私にふのはフイルミヌスとよばれ、高等の學藝を教はり、辯舌のついて、所謂る星術から見て判ずればどうなるだらうかと相談したれども私は此事については既にネグリディウスの意見に傾きかけてゐたから、敢て占ひをも。心に浮ぶまゝのことを言つてやりました。それと同時に、自分は今や占星術などは馬鹿氣た、つまらないものと思ふことを言ひ添へました。その時、彼が申しましたるには、自分の父は占星術の書に逃だしてゐた。二人は共に學び。語りそして彼とは、こんな馬鹿げた

眞實にする爲めに。共奴隷が極めて卑しい血統に屬すること、その狀態の低いことを話さうとするなら、同じ星宿を見て、いろ〳〵ちがつた運をそれでトはなければならない。だから若し僕がホンの紳士とは非常にちがつた詳細のことを訊ねなければならない。同じ星宿を見て、いろ〳〵ちがつた運をそれでトはなければならない。だから若し僕がホンの紳士とは非常にちがつた詳細のことを訊ねなければならない。

んことになる。又若し同じ運を判じ出したなら、僕は嘘を吐くことになる。それだからは、總て此星宿を見て、そのトひが當つたといふことは、術によつてゞはなく、只偶然のまぐれ當りで、また間違ひといはれることは斯術に未熟なためではなくて、偶然當らなかつたゞけのことなんだと言はう」と。

さて斯う入口が出來たので、私は、自分が既に攻撃したり、蔑視して論破してやらうと思つてゐた此種の占星術を商賣にしてゐる阿呆共が、私に反對して、それはフィルミヌスの父が彼に嘘を教へたからだのと言はないようにと思つて、大部分は母の胎から、ほんの僅かな時間——たとへどんなカにもせよそれが物の性質に影響を及ぼしたところで人間の觀察では認めることの出來

つもの家から同じ距離を隔てた中間で出會ひ。双方とも星の位置や、その他の細い點まで、寸分の相違が認められなかつた程よく一致してゐました。フィルミヌスは申しましたけれども、世の光榮な道に進んで名を上げ、富を増したのに、此同じ星の下に生れた奴隷は決してその境遇の甚を弛められることもなく、その主人につかへたのですと。

私は之を聞いて信じました。此の様に信ずべき人に聞いたからでムいます。その結果私がそれまでの行き當つてゐた難關はすつかり壊れてしまひました。私はミヌスを此好奇心から脱がれさしてやらうと努力して、次のやうに申しました。「君の星廻りをしらべて、本當に君に起つたことを知るには。僕は先づ君の兩親が、その附近のすぐれてゐたこと、君がその市の貴族の子であること、なほ自由人に生れ。紳士的教育を受け。非常に多く學問をしたことなどを知らなければならない。けれども若し君と共通の星である其奴隷が。私にその運を聞きにきたなら。私はまた自分の言葉を

はせないで下さい。人間は遂に人間たる外はないのでゐますから。

七　惡の根元を討ねる

さて私の扶助者なるとよ、貴下は斯様にして私を鎖から解き給ふたのですが、私は何處から來たのでせうかと訊ねて、其處を出ることは出來ませんでした。下は如何なる思想の動搖によつても、貴下の實在し給ふこと、貴下の聖子なる我々の主キリスト、また貴下の公教と、貴下の審判し給ふこと、貴下の聖子なる我々の主キリスト、また會の權威が私に命ずる聖書と。そのうちに貴下が人の救の道を置いて、我々の死後に在紐すべき生命に至らしめ給ふことなどの信仰から、私は一惡斯うして。是等のことが私の心に確實に据ゑられて、私を離れ去らしめ給はなかつたのです。私は熱心に「惡は何處から來るものでせうか」と討ねましたが、苦悶を忍んでをりました。私の神よ、私の胸はどんなでをりましたらう。如何に呻吟してをりましたらう。私は口に出さずして、切に求めまし

ない。また員の事を豫言せんが爲めに、ト
い時間をおいて生れることをよく心にとめ
りはしないのです。何ぜかなれば、同じ圖
て同一運命を有つものと占ふべき筈ですから
なかつたのです。だから彼の言ふことは間
たとすれば、彼は同一の圖表を檢べて、同
りませんゝ換言すれば、彼の言葉の當つた
のです。何ぜなれば、宇宙の最も正しい支
つて働き（相談するものゝ、助言をする者共がしらべる圖表の中には
談するものは決して眞實を語
正しい審判（双生兒である）とについ
か」、「あれは何ですか」と言はせないで下

ます。そして私は貴下に歸屬して始めて、貴下は私よりも低級に造り給ふたものを私に配屬せしめ給ひました。而して是は貴下のみ像（すがた）（人は神の像に似せて造られたのである故）貴下に仕へて、私の肉體を支配して行くべき正しい捷、のうちに生きて、私の眞の適度、又中庸を得た安全でムいました。けれども私は傲慢にも貴下に逆らつて起ち、私の厚い楯をむけ、主の顏に馳せかゝつたときヨブ記第十五章（第二十六節參照）、こんな低級に造られたものが私の上に乘せられ、私を壓へつけ、私をしてどうにもゆつくりと呼吸することを出來ないやうに致しました。そんなものは集團をなして私の眼を遮り、私が貴下に歸らうとすると、求めもしないのにその形が私の思ひの中にあらはれて、丁度「取るに足らぬ、汚れたものよ、貴樣は何處へ行くつもりか」と言ふやうでムいました。そして是等のものゝやうでムいましたといふのは「貴下は傲慢なものを傷けられたものゝやうに卑くし給ふからです」（詩篇第八十八の第十一）そして私は自分の傲慢によつて貴下から離れ、また傲りに膨れ上つた私の顏は、眼を塞いでしまひました。

た時。私の魂の無言の苦悶は。貴下の仁慈に對して大に叫び呼はる聲でありました。私の苦しむことを貴下は知召したのでしけれれど。苦しみから出て、私の舌によつて、私の最も親しい者共の耳に入られたのはどんなものでしたらう。時間の經過も。又私の口吾も消し難い私の魂の動亂は靜し彼等の耳に響いたでせうか。然るに私の心の呻きから絞り出されたものは、悉く貴下のお耳に達したのです。そして私の願ひは總て貴下のみ前にあつて。私はその場所に(空間)にはなかつたのに。私自身は魂を休むべき何の場所をも發見し得なかつたのです。又それに言はせることは出來ませんのでした。更にまた、私は外に向つたからでムいます。此私の白分にとつて充分に善い處へ歸らして呉れることも致しませんでした。その場所に含まれてゐる物に熱中致しましたのわけは、光りは内に向ひましたが、私は外に向つたからでムいます。又それなものも私を歡迎して呉れて、「之で充分だ。それでよし」と私はそんなものよりは優つてゐましたけれど、貴下よりかも劣つてゐたからでムい

言葉が「肉體」となつて人類のうちに宿り給ふたことにより。貴下の御慈悲の大きな働きにより、誰遜の道を人々に示す爲めに、遣だしく傲慢な人を用ひて、ギリシヤ語からラテン語に譯せられたプラトーン派の書物を私に與へ給ひました。私はそのうちに、全然このとほりではなかつたのですけれど、次と同じやうな意味の言葉でもつて、多く、種々の點から立論された說を讀みました。即ち「太初(はじめ)に言あり、言(ことば)は神と共にあり、言は神なりき。この言は太初に神とゝもにありき。萬の物これによりて成れり。成りたるものに生命あり、この生命は人の光なりき。而して光は暗黑(くらさ)に照る。而して暗黑は此を悟らざりき。」と。自らはこの光にあらず。されど神の言は神なれば、此世に來りて總ての人を照らす眞の光なり。而して彼は世にあり、世は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。」(以上の言葉はヨハネ傳第一章、第一節にあるも)といふのでした。けれども此うちに私は「かれは己の民のもとに來りしに、己の民は此を受けざりき。されど此を受けし者、即ちその名を信ぜし者

けれども主よ。貴下はとこしへに在し給ひ、しかもとこしへに私共を怒りいません。貴下は私共の塵と灰であることを憐み、且つ貴下の不具を改造することをよしと見給ふたからでムいます。また貴下は良心の刺何せかなれば、貴下のみ像がはつきりと映つるまでは、私をして安閑とさして私の心の眼に。貴下の癒し給ふのみ前に私の置き給ひませんでした。そこで貴下の癒し給ふのではムを覚醒し、隠くれたみ手によつて。私の傲慢はしづめられ、また私の心の乱れて昏んだ瞳は泣き、健全な悲しみの。しみる眼の日に癒やされました。

八　神の救ひ遂に来る

それで貴下は先づ私に、高ぶる者を拒み給ふても、誰な者には恵みを與へ、また貴下の

九　プラトーン派と基督教

てなかつたのです。一切の時以前、また一切の時を超越して、貴下の獨りのふことがなく。貴下と共に永久に存在し給ふこと、魂の祝福を受けるには、いらつしやるうちから受けなければならないこと、又賢からんがためには、うちに宿つてゐる智慧を頒けていただいて。更新せられべきことなどは此書ましたけれども「時に及びて不虔なる者のために死にたまへり」また「なの獨子を惜まずして、われら凡てのために付したまへり」とは、其書のうちのです。その故は「貴下はこれ等のことを智者に隠して、嬰兒に顯はし給ふ」「罪する者。重荷を負ふ者彼に來れ、かれ汝等を休ません、彼は柔和にしてり」「われらの患難と、我等の勞苦とを見、また我等の凡ての罪を赦して、者を正義に導き給はん、その道を柔和なる者に示し給はん。」といふ御聖旨にけれど謂るに嚴格な教の束縛を脱く者は「我に學べ、さらば汝の魂に休息を得の仰せられたことを是に聞きは救しません。たいふのは神を知りながらなほこれを神とし

しは、神の子となる権を與へ給へり」とふ何は讀みませんでした。

私は矢張りこの本で、神にましまず肉によらず、血脈によらず、人の慾によらずして生まれしなり」と讀みました。けれども、何だかなほ腑に落ちませんでした。私は此本のうちに宿の給へりし」とは讀みませんで、我等のうちに宿の給へりし」とは讀みませんでした。父の貌を爲し給ふ子は神に等しからんとして盜みなす事であっても。父の貌を爲し給ふ子は肉によらず、たゞ神によりて生まれしなり」と讀みました。けれども、何だかなほ腑に落ちませんでした。私は此本のうちに宿の給へりし」とは讀みませんで、我等のうちに宿の給へりし」とは讀みませんでした。父の貌を爲し給ふ子は神に等しからんとして盜みなす事であっても。父の貌を爲し給ふ子は神と同じ性を有ち給ふて、自己を卑くして。死に至るまで、十字架の上につけられて死に至るまで、十字架の上につけられて死も——「自己を空しうして僕の貌をとり、人の如くなり給ひました。そして僕の貌をとり、人の如くなり給ひました。そして僕の貌をとり、人の如くなり給ひました。そ

トがら携へて出でさせたいと御望みなさいました。またシスの者共に、貴下の使徒によつて「彼等の詩人の或る者の言つたやうに、我等もまた貴下の黄金に心をとめました。うちに生き、動き、また在るなり」（使徒行傳第十七章八節）と仰言ひました。まつたく是等の書は其處から來たものでした。けれども私は、「貴下の黄金を以て仕へ、神の眞を易へて虚僞となし、造主を措きて、造られたるものを拜し、且つ之に仕へた」（ロマ書第一章二十五節）ところの偶像に私の心を向けませんでした。

十　神は不滅の光

そこで私はもう已れに歸れと諭されて、貴下の御導きにより、私の自我の内部に入りました。貴下が私を御扶け下さつたればこそ、そんなことも出來たのでした。そこで私は入つて、魂の眼、（それは弱くはありましたが）此魂の眼をもつて、私の心の能力以上に、不變の光りを見ました。これは總て肉眼で見ることの出來る此世の光りではムいません。ま

て悪めず、感謝もせず、「その念いは虚しくなれり。自ら智しと稱へて愚かとなりたればなり」（ロマ書第一章第二十二）とあるごとほりだからでムいます。

なほまた私がそのうちに讀んだのは「彼等は朽つることなき汝の榮光に易へて、朽つべき人および禽獣、匍ふものに似たる像となせり。」（ロマ書第一章第二十三節）即ち様々な偶像のことです（創世記第二十五章第三十三、四節）何ぜかなれば貴下の長子である人民はエザブトの食糧のことで貴下の代りに四足の獣の頭を拜み、その心はエヂプトに歸り、彼等の魂である貴下の像の前に屈ましたからでムいます（詩篇第百六の二十）私はそんなものを此處に見付けましたけれど、これに養ひを取りは致しませなんだ。そのわけは、主よ、貴下は兄を弟に仕へしめる爲め、ヤコブから、兄を貶しめた咎を取り去ることを嘉し給ふたからでムいます。斯うして貴下は異邦人を呼んで、貴下の遺業を與へ給ひました。そこで私は異邦人のうちから貴下のみ許へ參りました。それは貴下のものであるのを見て、私は貴下が御自分の民のエチプ

同じでない、異つた區域（靈的存在は距離によつて距だらず、不同によつて距たる）に居て、遙かに貴下から離れてをりまして。恰も天上から貴下の御聲が聞えて、かう仰言つたやうに覺えました。『俺は成人の食物だ。成長しなさい、さうしたらお前もそれを喰べることが出來るのだ。けれども肉を養ふ食物とはちがひ、お前がわしを同化するのではなく、反對にわしがお前を同化するのだ』と。而して私は、不義なるが故を以て、人を懲らし、また貴下は私の魂を蜘蛛のやうに消え失せしめ給ふことを知りました。（詩篇第三十九篇第十一參照）そこで私は言ひました――「我は有限または無限の空間に擴がつてるないから、無だらうか」と。貴下は遂くから私に叫んで、答へ給ひました――「我は有りて在るものなり」（出埃及記第三章第十四節）と。そして私はこれを心のうちに聞くやうに、聞き、全く疑ふ餘地がなく、眞理を無しとするよりも、私は活きてゐることを疑ふ方が容易であると致しました。眞理は造られたものを通して、明らかに悟り得られるのでございます。（ロマ書第一章第二十節）

た之と類を同じくした一層大きな光り、換言すれば、その輝きが遥かにまさつて大きいので、萬有を照らすといふやうたものでもムいません。この光りはそんなものではなくて、それとは相違、左様、すべてそんな光りとはまるでちがつたものでムいました。けれども此の光りは、水の上に浮いてゐる油のやうに。或は地上の天のやうに私の魂の上にあつたのではムいません。それは私の魂なつたから、それに優越してゐたのです。（單に位置が上であつたのではない、質前優越だつたの意實）又私はこの光りに導かれたから此光りの下にゐるたのです。眞理を知る者はこの光りの何たるやを知つてゐます。そして之を知るものは永遠を知るものです。愛は之を知つてゐます、おゝ永遠なる眞理よ。眞理なる愛よ、愛なる永遠よ。貴下はわたくしの神にまし給ふのです。私は誰も夜もあなたにむかつて嘆いてをります。私はほじめて貴下を知つたとき。貴下は私を迎へ給ふて。そこに見るべくして、未だ私が見ないものがあることを私に知らし給ひました。そして貴下は劇しい光りを私の上から降らし給ふて、私の弱い眼を射給ふたのです。その爲めに私は愛と畏怖とで顫るへました。また私は自ら

ならば、朽ちもしません。また善でないならば朽ちることもないからでムいます。何となれば最上の善はあったってすれば、朽つべからざるものであります。また善はいなくも、朽ちるべきものがそのうちに含まれてるがいはづですから。腐敗は物を損ねますけれど、その中から善を取り去ったならば、損ねることが出来ないものの外損ねはしないか、或は凡て朽たされるものは善を缺いでおるか。孰れか一方でありますが、後の方が、より確かでムいます。けれども、それは全くその存在を失ふでせうし、また朽つることもなく永久に存在するでせうから。ものが悪くその善を失つて、而も存在のとなのまゝでありましたら。前よりは優れたものがありましたら。物が若し悪等なものでありましたら、それは全く存在しなくなりませう。物が存在するの限りは。飽迄も善なのでムいます。それ

十一　萬有存否の因

また私は貴下よりの以下の他物を見ました。そしてそれは全然あるのでもなければ、また全然ないのでもないことを悟りました。といふわけは、貴下から出てるものは、無いのでムいます。さうですから神に絶いまつすけれども。貴下が在すやうに無いからでムいます。といふのは私が若し神のうちに宿らなければ。私はは私に善いことでムいます。けれども神は自身のうちに宿り給ふて。萬物を更新したまふのでムいます。またあなたは私の主にましますのです。その故は貴下は私の幸福を必要とし給はぬからなのでムいます。

十二　萬物皆善

また朽つべきものも善であることが私に明かとなりました。それは若し最高の善でない

また貴下に對しては何にも惡はムいません。まつたく、貴下に對しての創造全體にも惡はムいません。そのわけは、貴下が世界に於て定めたまふた規則を、外から使してゐるものは一つもないからでムいます。けれども是が他のものと調和しないから、惡とせられます。惡とせられ、また其自身でも善なのでムいます。してまた。相互には協和しないそれ〴〵の低級な部分即ち、雲や風の起る低窓を頭上にいたゞく部分とは、よくそぐふのでムいます。ですから、そんなものは有るべからぬものだといふことを神は私に禁じ給ふのでムいます。何ぜかなれば、若し私がこんなものよりも兒ないでせうものなら、まつたく私はもつと善いものを欲しがるでせうから。けれども私は只だけの物についてだけでも貴下を讃めなければなりません。貴下の賞讃を受け給ふべきことは「此地を始めとして。龍や、總ての淵、火、雪、氷、み言葉に從ふ嵐、もろ〳〵の山、もろ〳〵の丘、實を結ぶ樹、すべての香柏、獸、もろ〳〵の蕃士（ばんじ）

十三　神に悪はなし

によつてみますと、私がその起源を探りつゝあるところの悪は、本體ではないのでゐいますと、何ぜかと言へば、若し本體であります。ならば、即ち善でなければならないからであります。何ぜかと言へば、若し本體であるならば、それは全くの善か、それとも又、それが善でも悪でもない限りは、腐敗を免れ難い、或る腐敗せる本體でなければならぬからであります。さて、そこで私は、昔王が萬物を造り給ふたこと、また昔王の造り給はなかつたどんな本體も決してないことを知つてゐます。また、それが私に明白にせられたのでゐいます。萬物はそれ〴〵善にして、又物之半等に善く、我等の神は萬物を甚だ善く造り給ふたからでゐいます。（創世記第一章第三十一節）

魂は私の神に對して、不機嫌になりきらなかつたので、それを不機嫌ならしめたものを貴下のものとみなすことを好まなかつたのです。

るといふ說を取るに至りましたが、それに安住することを得難く、只徒に口舌を弄するばかりでムいました。そしてそれから立戻つて、魂は自らに據ゑました。そこで魂は又もや貴下のであると考へ、それを心のうちに據ゑました。そこで魂は又もや貴下のである、それ自身の偶像の神殿となり始めました。けれども貴下がお厭ひなさつた後、私は

に、私の眼を閉ざして下さつた後、私は

をなだめ、虛しいことを見ないようにと、私の眼を閉ざして下さつた後、私は

幾分か以前の私自身でなくなりました。そして私の狂氣はあやされて眠りました。斯うして私は貴下に於て醒め、貴下を無限に於て見ましたが、それは異つた仕方に於てゞムいました。しかも此視力は肉から導き出されたものではムいませんでした。

十五　萬有は神の眞と愛とを頒つ

年行ぬなき、若きをみな、老いたる人、をさなきもの、など皆貴下のみ名をたゝふることによつて「是等のもろ〳〵の天より、汝をほめたゝへ、もろもろの高きところにて、我等の神をほめたゝへ。なんぢの凡ての御使、なんぢの萬軍、日と月、すべての輝ける星と光、もろ〳〵の天の天、天の上なる水」（詩篇第百四十七篇一―十三）が貴下のみ名をほめたゝへ、もろもろの高きところにて、我等の神をほめたゝへ。なんぢの凡ての御使、なんぢの萬軍、日と月、すべての輝ける星と光、もろ〳〵の天の天、天の上なる水」（詩篇第百四十七篇一―十三）が貴下のみ名をたゝふることによつて「是等のもろ〳〵の天より、汝をほめたゝへ、もろもろ

十四　遂に神を悟る

貴下の、創造の少しでも氣に入らない人々は、健全なものではムいません。同様に私が貴下の造りたものが多く私の氣に入らなかつた時、私は健全でなかつたのです。又私の悟りましたことは、上なるものが單獨であるよりかも、上下皆一緒の方が猶更善いことをも、優さつてゐるが、上なるものが單獨であるよりかも、上下皆一緒の方が猶更善いことを悟つたからでムいます。又、より健全な判斷を以て、上なるものは下なるものよりたへますことを悟つたからでムいます。又、より健全な判斷を以て、上なるものは下なるものよりも、優さつてゐるが、上なるものが單獨であるよりかも、上下皆一緒の方が猶更善いことを悟りました。

私はまた健全なものゝ口においしいパンも、不健全なものゝ味覚にはまづいものとなり、また明らかな眼には薬はしい光りも、病氣してゐる者の眼には厭はしかるべきことは別段怪しむに足りないといふことを認めました。だから貴下の正義は悪い者が嫌ひます。貴下が善いものに造り給ふた顔や頭や頭にもまさつて彼等にいやがられます。然るに頭や頭が矢張り貴下の創造の劣等な部分に適應して善でムいます。不善な者共は、貴下に似ることが少なければ少ない程、愈々劣れるものに適應し、貴下に似ることが多ければ多い程、優つたものに適應するのでムいます。斯うして私は不義とは何かと訊ねて、それは實體ではなくて、神であらせられる貴下の至高な實體を離れ、その臍腑を投げ出して、外面へ膨れ上るところの意志の悖戻に過ぎないことを發見致しました。

十七　神を識ることを妨ぐるもの

すると私は今、貴下を愛して、また以前のやうに、貴下の代りに幻影を愛しなくなつた

また私はその他様々のものを顧みまして、その存在は貴下から出てゐるのは貴下のうちにあること、の有限なものは貴下のうちにあるけれども只その様式がそれ〴〵ちで、貴下は總ての物を貴下のみ手のうちで、即ちて在るのではなく、即ちその他様々のものを顧みまして、その存在は貴下から出てゐるのは貴下のうちにあること、の有限なものは貴下のうちにあるけれども只その様式がそれ〴〵ちで、貴下は總ての物を貴下のみ手のうちで、即ちて在るのではなく、即ち空間にあるといふこと、また萬物はその存在を有する理に於て維持し給ふが故に、貴下のうちにあるといふこと、また萬物はその存在を有する限りは眞なることと、また存在しないものを、存在すると思はない限りは、ものではないといふことを私はさとりました。私はまた萬物は電にその場のみならず、その季節と適合することと、また唯一の永遠にましまし給ふ貴下は算へ難き後働きを始め給ふたのではないことを知りました。といふのは、今なほ働く外には既に過ぎ去つた年も、亦來るべき年も、あらゆる時間を要して、決して去來するものではないからであります。

十六　萬有皆善、只或る物に不適

が、では何によつて斯う判じたのだらうと訊ねました時、變るべき管の心を超越して、らない眞の永遠の眞理の存在することを發見、能により知覺するところの魂へと移り行き、傳達し、またその感覺により更に、總て肉體の感覺によつて受けたものを渡されて、するところの理性の機能に進み行きました。此機能は私のうちで、自ら變化するものであることを發見して、白らその智を高め、かうして習慣により、自分の思想を抽き出し、矛盾せる幻想の群から引退するのでムいます。それは斯うして、少しの躊躇することもなく變らないものは、變るべきものに優ると叫ぶとき、その光りに沾ひをつけようといふのでムいました。それでした。それは或る方法で知られなければ、變るべきものにはさゝるといふ確實な證據はないといふことも知れました。斯うして、頭るべる一瞥の閃きで、遂に「存在する者」にまで到達致しました。次いで私は眼には見え給はない貴下が、造られ給ふことを見ました。けれども私はそれに瞳をとめて、見てはをられな

のを見て驚いてしまひました。けれども私は堅實に神を把持して之を樂しんだのでは
て、貴下の美に魅せられてしまつたのでした。それでも遂には自分の重さで、烈しく貴下
から再び引き離され、悲みつゝ墮ちて行きました。此自分の重さといふのは肉にいた習慣でした。けれども貴下については依然私に殘つてをりました。また私は自分の頼り縋るべき者のあることを決して疑ひませんでした。只私は未だ貴下に依りすがる者ではなかつたゞけでした。といふのは朽ち果つべき肉體は私の地を離れて、地上の幕屋（身體の）（ここ）は多くのことを瞑想してゐる心に重しとなるからでム
いまず。そして私は「世の創造以來神の見ることを得ない御働きは、その永遠の能力と神性すらも、神に造られた物により、明かに理解せられて。見ることが出來る。」（ロマ書第一章二十節）と確信致しました。といふのは、私はまた私を扶けて、愛るべきものを正しく審判し「是は斯くあるべく、是は斯くあるべからず」と言はしめるものは何によつて天上または地上の物體の差を置したか。なほ又、私は斯う判斷した

抱きまつらず、またイエスが弱くなり給ふたのは、何事を私に教へるつもりであつたかを知らなかつたからです。何ぜかなれば貴下の創造のより、より高い部分の上に優越してゐる永遠の眞理にましますご貴下の「言」は、投げ棄てられたものを、「それ御自身」にまで上げ給ふからでムいます。けれども此より低い世界に於ては「それ御自身」の爲めに我々の主の卑しい住家（我々の肉體のこと）を建て給ふて、是により、彼は主よゝ出づ）を誰ら下せて、自分の所に移轉せしめ、者共を誰ら下せて、自分に從順ならしめようとした愛を醱酵させてお遣はしになりました。それは彼等が自分といふものを悖んで、なほも遠くに迷ひ行かぬように、けれども神聖それ自らが、その身に人間の皮を着てゐらつしやるが爲めに、我々の卑下に弱つてゐまし給ふのを見て（創世記第三章第廿一節）人間が自らの弱さを知り、そして遂に疲れて、その神聖に身を投げかけるように、そして再び立つときに、彼等を自分と一緒にその神聖が引き上げ下さるようにといふのでムいました。

かつたのです。また弱い私は聖退せられて、
にもつてゐるのは懐かしい昔の記憶と、またたとへてみれば、匂ひを嗅いだゞけで、未だ
食ふことが出来なかつたものに對する憧憬の外には、何物もなかつたのでした。

十八　基督のみが救ひ

かうして私は貴下を楽しむに足るだけの力を獲得すべき道をさがしたのでしたが、「神と人との仲保者、萬物の上に在して、永久にほめたゝふべき人であるキリスト・イエス」（テモテ前書第二章第五節）を抱くまでは是を見出さなかつたのでした。イエスは私を呼び給ふて「我は道なり、眞理なり、生命なり」（ロマ書第九章第五節）との給ふたのです。そして彼は私共の受けることの出来ない糧に。私共の肉を混ぜ給ひました、別言すれば、「言」は肉體となりました。

それは貴下が用ひて萬物を造り給ふた貴下の智慧が、嬰兒である私共に乳を與へるやうにとの思召であつたのです。といふのは私は自分が誠遜して、誠遜し給ふたわが主イエスを

まして、少しもそれについて疑ふところがなかつたのでゐいます。といふのは或る場合には意志によつて身體の四肢を動かし、また或る場合には感情によつて動かされ、又時としては動かされず、なほまた時には人間の合圖（言葉のこと）を使つて賢いことを言ひ。時には沈默するなど、總じてこんなことは變化する魂と心との附屬物でムいます。また若しイエスについて記るされてある是等のことが、皆僞りであるとすれば、總ての書のうちには救ひといふものに對して、如何なる信仰も殘らなくなるでせう。けれども共處に書いてあることが眞實であるから、わたくしはキリストについて、完全な人、卽ち曾に人の肉體ばかりではなく、或はまた叡智をもたない感覺的な魂ばかりでもなく、また眞の人間であることを認めました。此人を私は曾に眞理が有形となつたものとしてのみならず、また人間の性質の或る人きな秀逸、智慧の最も完全な分有者として、他にまされるものと判斷致しました。けれどもアリピウスは思ひました——キリスト教徒は、神が肉を着給ふたのであるから、キ

十九　基督の權化について

けれども私は以上とは違かつた考へを以て、わが主イエス・キリストを單に何人も比較し得ない程に卓越した智慧をもつ人であると考へました。殊に我々に對する神慮により、それにかなつて不思議にも處女から生れ給ふたことは、不死の生命を得んとするには如何に浮世のものを輕蔑しなければならないかといふ一例を示し給ふ爲めであり、權威を受け給ふたやうに見えました。けれども「言肉體となれり」といふ聖句のうちに、如何なる奥義を含んでゐたかは私の夢知らなかつたところでムいました。たゞ私は彼の言述べてあるところによつて、イエスが食ひ、飲み、睡り、歩み、歡び、苦しみ、そして道を說き給ふたこと、肉だけが貴下の「言葉」にまつはりついたのではなく、魂も心も共に「言葉」にまつはりついたことを知つたゞけでした。是は貴下のみ「言葉」の變らないことを知つてる者は皆知つてるところで、私も此時私の及ぶ限りの之を知つて

二十　プラトーンの書

けれども當時、プラトーン派の人達のさうした書を讀みまして、後それを探ぐり出來ることを敎はり。私は見ることを得ない貴下を、遣られたものによるのを知りました。けれども一旦は突き戻されながらも、私は自分の心の暗いがために、瞑想することができないでゐたものを識り、貴下の在し給ふこと、しかも有限または無限の容間に據がつてゐらつしやらぬこと、また他の總てのものは彼等が存在するといふ、此最も確實な證據によつてさとることと、永久に變ることがなく、その部分にも、またその運動にも些かの變化がないことを確に認めました。私は實際かう信じたのですが、けれども貴下は眞に何でもよく知つてゐる者のやうにお喋りを致しました。けれども私が我等の救主キリストに於て、貴下の道を求めなか

リストに於ては神と肉とのほかに、魂はないと信じてゐる。また人間の心がそこまで行き渡らへなかつた——と。そして彼はキリストの行爲について語かれば、すること、出來ないものでなけれ生命があり、叡智をそなへたものでなけれども、彼はまづ〳〵徐々とキリスト教の信仰のかへ進み行てゐましたから、彼はまづ〳〵徐々とキリスト教の信仰のかへ進み行後になつて、是はアポルリナリウス派の異端の誤謬であつたことをよく了解しました。けれども私は喜んで公教會の信仰と歡迎し、それに加はりました。けれども私が「言肉體となり」といふ言葉を解釋することに於て。公教會の信仰の眞理とフオスの虚妄とい相違のあることを認めたのは。稍々しばらくしてからでした。異端を排斥する方法の如何となれば、承認された眞理を弱い者共の端者がなければなりませんのですから。

貴下が私にとつて親愛なものとなり給ひ、さうして後にプラトーン派の諸書を讀みましたならば、恐らく是等の書籍は。堅い信仰の基石の上から、私を曳きずり卸してしまひましたでせうから。或は私が若し其處に味はうてゐるところの健全な氣分に確實に立つてゐるまゝであると思つたなら、私は恐らく、自分は只これらの書籍を學んだから、之を得たのでせう。

二十一　聖ポーロの書翰

それだものですから。私は最も熱心に貴下の靈の爲い書、就中使徒ポーロの書翰を讀みました。さうしますと。私が遽に認めたポーロの矛盾、卽ち彼が議論の本文は、徃法（おきて）と豫言者達の證言とはよく一致しないところが時にあると思はれた難點も自ら消失して、此眞摯な雄辯（神の道をとくこと、前に「神の啞である」といふ言葉がありつた。此處はその反對）を語る顏は只一つであること、そこで私が始めました。そして私が前にその別を知り、私は再び戰いてゐを學びました。

つたならば、私は遂に己を知ることなくして死んでしまひましたらう。何ぜはもう既に、私自らの刑罰を充分に負はされて。人に賢く見えるようにと窃に念じ始めて哭き悲しみするどころではなく、却つて、傲慢に、自分の智慧にふくれ返つてゐたからでムいます。誠虚の基石たるイエス・キリストの上に建てられたその慈悲はそもく〳〵何處にありましたか。また何時是等の書は私にこのことを教へましたらうか。けれども私は下のやうなことを信じます――私が貴下の聖書を研究する前に、まづ贖ひ仏るべきこと、どれだけ此聖書が私を感化したかを、私は自分の記憶にとゞめること、更にまた後になつて私はその聖書によつて教へ易くなされ、貴下御自身の指が私の癒やしを企て、私の傷を治療した時、私が、僭越と懺悔との差異、別言すれば、その行くべき處を知りながら、如何にして行くべきかを知らない者と、たゞ祝福された域を知らせるばかりでなく、其處までつれて行つて休息させる道との差別を知るようにとの御配慮があつたことなどでムいました。私が若し最初に貴下の聖書に模型（モデル）せられて、逆にそれに親炙し、

た。彼は私共の意志を説服して。之を自分の意志と同じからしめたからです。その意志により人は貴下の眞理にるないのでムいます。あはれな人は何を爲しませうか。此死の體から、彼を救ひ出してくれる者は誰でせうか。たゞ我々の主イエス。キリストによれる貴下の恩寵ではありませんか。貴下はキリストを貴下とともに永遠のものとして生み給ふて、貴下の道の初めと爲し給ひました。然るに此現世の君主はキリストに於て何にも死に相當する罪過を見出しもしないのに、彼を殺してしまひました。それで我々に反對する眷類は塗り消されましたらうか。私が前に讀んだ本には此事は入つてをりません。こんな本には斯うした敬虔の情、懺悔の涙、貴下の犧牲、憐める靈、碎けて悔いる心、民の救ひ、新婦である都、聖靈の證據金。私共の贖ひの盃が入つてをりません。其處では誰も「私の救ひは神から流れ出でるのだから、私の魂は神に歸服しないだらうか。神こそは私の救ひ、私の守護者にましますのだから、私はもはや動かされはしない」（詩篇第六十二の一、二）と歌ひません。また何人も此處に「凡て勞する者はわれに來れ」（馬太傳第九章第三十八節）と彼の叫び給ふのを聞きま

なほて成んでゐた眞理は何に限らず。貴下の御恩を褒めたゝへつゝ此處にあることを發見致しました。また見るものは誰であらうとも、雪に彼が見ることのみならず、また見るべき力を受けたとのやうに（即ち自分獨りでやつたかの如くに。）誇らないようにといふのでした。何ぜなれば、私が有つてゐるものに、貴下にいたゞかないでゐるものがムいませうか。また更にそれは、永久に在して變り給はぬ貴下を見るように、彼に勸めるばかりでなく、癒やされて、貴下をとゝへるようにするためでムいました。また遙か遠くを見ることの出來ないのでした。貴下を見、貴下をとゝへる道を歩るくよりうにといふのでした。人は裏なる人に從へば、神のみ教へを悦びは致しますが、その身體に於ては、その心の法則と鬪ひ、私を身體の法則の下にある罪の法則の下に、捕虜となさせる他の法則に對して。どう致すのでせうか。と申すのは、主よ、貴下は正義に在すのに、私は罪を犯しかゝり。私共は當然「死の長（おさ）」（ヘブル書第二章第十四節）である古い罪人に付されましたからでムいます。不義を行ひ。不敬虔の行ひをしてゐる者を貴下の手は我々の上に重く乘

第八篇

老儒シムプリキアヌス

私の神よ。私は感謝の念をもつて、貴下の私に對して下し給ふた御慈悲を想ひ出して。今之を貴下に申上げます。わたくしの骨を貴下の愛にひたして、「主よ誰かなんぢに比ぶべきものあらんや。なんぢ我が縲紲(いましめ)を解きたまへり、われ感謝を供物としてなんぢに献げん」(詩篇第卅五の十節)と、私に言はして下さい。貴下がどうして之をとき給ふたか、私はそれを此處に述べませう。而して貴下をあがめるものが皆之を聞くとき「崇(たふと)き哉かな天地の主、その名は大にして奇しきかな」(詩篇第七十六の一節)と言ひませう。貴下のみ言は堅く私の心に粘りつき、私は到るる處に貴下にかこまれてをります。實ではあつたとは言へ、今わたくしは貴下の永遠の生命を確信致しました。けれども私は

せん。彼等はキリストが柔和であつて、謙遜にましまし給ふので、それに學ぶことを嫌ひます。それは貴下が「是等のことを智き者、悲き者に隠して、嬰兒に顯はし給ふ」（馬太傳第十一章二十五節）からでムいます。そして嶮峻な嶺から平安の故郷を見て、その處に通ずる道をとほらうとして、獅子とよぶ龍を君主とする主の軍勢にまもられて、その不安に通ずる道を行くことは、全然ちがつたことだからです。

（申命記第三十二章四十八―五十二節）空しく過ぎ難い道をとほらうとして、獅子とよぶ龍を君主とするお逃亡者（詩篇第九十一の十三）また脱走者達に沮止せられ、待伏せを喰はされることと、天より來る此處では犬の軍隊を脱走したものをも掠奪をしません、といふのは、彼等はこれ

ム、います。此處では犬の軍隊を脱走したものをも掠奪をしません、といふのは、彼等はこれを刑罰として逃げたからです。私が貴下の使徒達のうちで、一番小さな者（コリント前書第十五章第九節）

ひ、ひじやうに震へてしまひました。是等のことは不思議にも私の腸にしみわたり、私は貴下のみ業もをお

私のやうな悩める者の貴下の御道をとほらして頂く一番誇い方は、どに教へて呉れと願ひました。

私がこんなことをしたわけは、よしやや教會に人はいつぱいになつても、或る者は右し、或る者は左して、その歸趨が明瞭に分らなかつたからでムいます。然しさうだからと言つて、今更再び世の常道に從つて行くことは私が好まぬところでムいました。また私の願望も最早昔のやうに、榮譽、または富貴の希望を私の心に燃やさずに、私にとつて悲しい重荷でムいました。その故は。私がこれらのものは、最早私を悦ばすに足りなくなつてゐたからでムいます。けれどもなほ私は堅く女にとらはれてゐました。また使徒は是よりも優つたものを私に擇らべと勸めは致しましたけれど、結婚することを私に禁じは致しませんなんだ。（コリント前書第七章第廿七節）けれども私は弱いので、寛廣な處をえらびました。そして私はたゞ此事のために間々輾轉して、心配に惱まされました。このわけは他の樣々な事で、私の意志に

一切の智慧の源にまします一つの朽ちない實體のあることを疑ふのを全然よして、ただ、あなたについての確證を要求しないで。即つて益々堅く貴下に結び付かうと願ひました。一切のものがあやふやで。また私の心は古いハン種を取り除かねばならなかったのでした。（コリント前書第五章第七節）「道」にましますキリストは私を悦ばし給ひましたけれども。それでも私は矢張りその狹い道を行くことを躊躇致しませんでした。（シムプリキアスのところへ行く心を私に起させたまひました。）彼は貴下の遣い下僕でムいましたが私の眼には淨い事に見えました。彼はまた彼がその若い時に私には見えました。私はまた彼がその若い時分から、敬虔な生活を送ったことをも聞いてゐましたし、且つ非常に熱心に貴下の道を修めて。永い年月を過ごして來ましたので、彼は確に多くの尊い經驗を有つてゐるやうに私には見えました。また實際のところ彼はさうした經驗をもつてゐたのです。そこで私は自分の煩悶を彼の前にならべまして。彼が自分の經驗によつて

廿八章第二十八節）また「自ら見て賢しとするなかれ」とは「自ら賢しと稱へて愚かとなるべければなり」（箴言第三章第七節羅馬書第一章第廿二節）と人に仰せられたからでムいます。けれども私は既に「良い眞珠を見出してゐるものを悉く賣りて、私の有てゐるものを悉く賣りて、此を買ふべき筈でありましたのに」（馬太傳第十三章第八節馬可傳第四章第廿六節）私は躊躇致しました。

二　ギクトリヌスの回心

そこで私は、貴下の恩寵を受けることに於ては、アムブロシウス（今の司教）の父であつて、その人なアムブロシウスを訪問致しました。シムプリキアヌスが父として本當に愛した。私は彼に自分が迷ふてゐることを述べました、けれども私がプラトーン派の者共の或る書（これは一時ローマの修辭學教授であつたギクトリヌスのラテン語に譯したもので、彼は後クリスチヤンとなつて死んだと聞きました）を讀んだことを申しましたときに、彼は私が他の哲學者達の著書を讀まなかつたのは大によろしいと言つて悦び、さうした著書

ーンやゼナスと闘つた――及びゼナスは、雷の如く轟く聲で、多年の間。その教への有力な辯士でムいました――この教へは、貴下のキリストの幼兒となることを恥ぢいませず、貴下の洗禮盤の嬰兒となることを恥ぢいませず

は「この世の小學に從ひ」（コリント前書第二章第八節）惑ひと虚妄に充滿してゐるけれども、プラトーン派は純ての方法によつて、神とその「言」との信仰に人を導くものであると申しました。そこで「智き者に隠くされて、嬰兒に顯さるゝキリストの眞虚」（エペソ書第一章第十五節）を私にすゝめようと思つて、彼は、自分が羅馬にゐた時分に最も親密に交際してゐた處のボクトリヌスのことを此處に繰り返さないではをられません。

其譯は、此博學な老人、多くの貴い元老院議官の師であり、また此世の人々が見てもつて非凡となすところの顯著な治績の表彰である羅馬の廣場に立像に相當し、又立像するにも出來た彼、此齢に至る迄偶像禮拜者であつて、又其不敬虔な儀式に參與した彼――（當時羅馬の傲慢な貴族達は殆んど總て此儀式に加はり、又羅馬人に熱烈な愛を起さしたところの

「吼える神たるアヌビスと總てのあらゆる種類の怪物たる神々――それはネプチユ

意外にも突然シムプリキアスに向つて「私共は教會に參りませう。私はキリスト教徒にならうと思ひます」と、申しました。シムプリキアスよ、一緒に教會へ行きましたのはなぜ受けた後、間もなく名を記して、洗禮によりて新たに生まれ、羅馬は愕き、教會は歡び、ました。傲ぶる者どもは之を見て困惑し、齒がみして消え失せました。けれども彼は入門の式（額に十字架の印を指で描き、手を頭に置きて、臨を授ける式）

は貴下の希望でゐましたか、いまして、そして歸宅と偽の狂亂とを願み給はなかつたのでゐいます。

遂に、彼が信仰を告白すべき時が到來致しました。此告白は、貴下の恩寵に近寄らうとする人々が、高い處にのぼり、依者の眼の前で或る言葉を暗記して置いて述べるのが例となつてゐました。彼の話によりますと、長老たちはキクトリスにむかひ、その告白を如何にしてもよいと申し傳へました。是れは羞かしかり、逡巡するだらうと思はれる者に許されてゐた慣例でゐいました。けれども彼は寧ろ總て聖い會衆の前に於て自分が救はれた

教徒のうちには數へませんか」と。彼は笑つて云ひました「では壁がキリスト教徒であつたことを屢々語り、その度毎にシムのですか」と。斯うして彼は既にキリスト教徒でありました。彼がプリキアスは同じ答へをなし。そして「壁」の譬喩はまた屢々繰り返されました。彼がを云ふなことを言つて煎え切らなかつたわけは、その友人等の傲慢な鬼神禮拜者達を怒らすことを氣遣つたからでありませう。「主の香ばしき匂よりの如く」（詩篇第廿九章の第五節）そのバビロン式（淺亡に導くの意味）のに陰ちてくるだらうと思つてゐたのでありませう。けれども彼は讀んで驚き。確信を獲。かくて「彼がもし今キリストを人の前に言ひあらはすことを恥ぢんか、聖き使たちの前に否まれんことを恐れ」（ルカ傳第九章第廿六節）また貴下の「言」の譬喩の奥義を恥ぢて。是等の傲慢な鬼神どもの不敬度な儀式を恥ぢまに、その傲慢に倣つて。これを受け入れることを恥ぢなかつたのは、重い答を受くべきものであると彼に見えたので。彼は虚妄なり、眞理に對しては顏を赧めるものとなりました。そして彼自身が申しましたやうに。

善き神よ、絶望の狀態にゐるものなどの魂が救はれるのを見て、人が歡ぶことは、常に人により望みをかけられ、そして餘り危險な日にもあはなかつた魂が救はれるのは、一體どういふわけでムいませうか。それは斯うして、貴下も亦悔い改める一人の罪人のため、改悔の要のない九十九人の正しい者にもまして悦び給ふが故でムいます（ルカ傳第十五章第七節）また迷つた羊が牧羊者の肩に乘せられて、伴れ歸られ、皆の者に大に歡ばれ、また一枚の銀貨が貴下の金庫に回收せられて、近き女と共に隣人たちの悦ぶのを聞く度毎に（ルカ傳第十五章第七節）私は大きな悦びを以て之を聽きます。また貴下のお家に於て、貴下の御子息のことが讀まれ、あの方が一度はお死になさつて、お生きになり、死んでしまつてから、また歸つておいでになつたことを讀むときには、貴下のお家の嚴肅な饗宴の悦びは、涙ぐましいまで感激すべきものでム

三　罪增せば恩も增す

ことを告白しようと致しました。そのわけは、彼は救ひでもない修辞學すらもなほ公然宣べ傳へたからでムいました。自分の言葉を述ぶるときですら、狂ふてゐる群衆を物の數もしなかつた彼が、どうして貴下の「言」を宣べるときに、貴下の柔和なる信者の群な懼れませうか。ですから彼が壇に登つたとき、彼を知れる限りの者は、何づれも歡呼して、彼の名をたゝへたのでムいました。まことに誰が彼を知らなかつたものがムいましたらう。悦びあつてゐる群集の皆の口を通して、ギクトリヌスだ。ギクトリヌスだといふ低い囁きがかはされました。彼等が彼を見た時突然歡喜の叫びをあげたやうに、彼等が彼の言ふところを聽かうとしたとき、彼等は俄にパッタリと靜まつたのです。彼はまつたく泰然自若として、此眞實の信仰を宣べ、人はみな。彼を自分の心の中に引き入れようと望みました。愛と悦びとをもつて彼を引き入れました。愛と悦びとは卽ち彼を引き入れようとして彼等の手となつたのです。

かつて、その脈をみれば最早危篤に瀕して、彼も心を傷めてをりますとき、それが直ると致しませう、そしてただ以前ほどの勢ひはないけれど、床を出て歩むやうになれば、以前に健康であつた折りに、力強く歩るいた程の大きな歓喜がムいます。左様、人は只突然また私共の意志とは反對に私共のために陰ちか、つてくるものばかりではなく、計畫してたづね求めするところのも、苦痛を通して始めて獲られるます。すなはち、先づ飢ゑ渇く苦痛がさきにたゝなければ、食つたり、飲んだりしても一向面白くはムいますまい。また酒に醉ふ時にはなかつたものは。口のかに渇きをおぼえるその熱を得る目的で、鹽の辛いものを喰べます。またすぐにその情人にわたしてしまはないならはしになつてゐるのは、彼は退永い猶豫にまちわびて、嘆息を漏すことがなくうなことのないようにといふ用意でムいます。汚れた、そして呪ふべき快樂に於ても此通りでムいます。正しいとせられてゐる喜悦に

います。何ぜなれば貴下は、その神聖な御慈悲によつて聖められた天の使ひや、わたくしどもの歓び給ふからでムいます。何ぜかなれば貴下は永久に變り給はないからでムいます。何ぜかなければ、貴下は、常に同じではないところの萬物を、永久に同じ方法で知ろしめすからでムいます。

それでは何ぜ魂は、その常に愛してゐるものを、前から持つてゐるものも、それを發見し、又は回復することを餘計に喜ぶのでムいませうか。左様。他のものも之を證明し、また總てゐるものも「その通り〳〵」と叫んでゐる證據に充ち滿ちてゐるのはどうしたものでムいませう。勝利を得た皇帝は凱旋致します。けれども若し戰はなかつたならば、克つことは出來なかつたでムいませう。また戰ひに危險が多ければ多いだけ、いよ〳〵凱旋の歓喜も大きいわけでムいます。嵐は水夫共を吹きなやまし、破船の厄をもつて脅かし、人は皆死の近寄つたのに色を失ひますけれど、空と海とが靜かになれば、その歓喜は、その恐怖の大きかつたに比較して、いよ〳〵大きいと同じでムいます。また親しい者が病氣にか

ふでムいませう。しかも貴下は如何なる處に於ても身を退き給ふことはムいません。そして私は滅多に還りは致しません。

四　大人物固心の價値

主よ、さあどうぞおやり下さい。我々お搖り起して、呼び返して下さい。我を燃やして、貴下に引き寄せていたゞきませう、我々に香ぐはしく、また甘くなつてくださ々に愛しさせて下さい。我々に驅けさせて下さい。ヰクトリヌスが入つてゐるたよりもずつと深い盲目の地獄を出て、多くの人々は貴下に還り、貴下から受けるところの光りに照らされるのではムいませんか。その光りを受ける者は貴下の子となる權（ヨハネ傳第一章十二節）を受けるのではこいませんか。けれども彼等が若し世間に知られることが少なければ。眞に彼を知つてゐる人達でも、彼等の爲めに喜ぶことは少ないのでムいます。けれども多くの者が一緒になつて歡ぶときには、各自の歡びはいよ〳〵豐富になるのでムいます。そのわけは

於ても同様でムいます。最も眞摯であつて、至誠な友情に於てもさうでムいます。更によき友人は、たゞ一たび死んでまた生き、失くなつてからまた獲られたものもそのとほりでムいます。大きなよろこびは、いかなるところに於ても大きな苦痛によつて先立たれます、とは何うしたことでムいますか。貴下は貴下御自身に對して永久の歓喜にまします我が神よ、と仰しやつたり、退歩があつたり、反撥が起きたりして、千差萬化するのは何の意味でムいませうか。それともまた最も高い天から、最も低い地に至り、世の初めから末終りに至り、天使からまた物の部分ごとに、進歩があつたり、退歩があつたり、反撥が起きたりして、千差萬化するのは何の意味でムいませうか。それは物の習らはしでムいませうか。

最初の運動から最後の運動に至るまで、その種に從ひて、善き萬物と、貴下の正しき凡ての聖業（わざ）とをその各の處に置き、またおの〳〵その期に應ぜしめ給ふた時、貴下がそんなものに與へ給ふたものは盡きてしまつたのでムいませうか。嘘々！　貴下はその高さに於てどれ程高くましますでムいませう。またその深さに於てどれ程深くましますでムいませう。

のわけは敵は自分が強く捕らへてゐたものまた自分がそれを手先につかふ者を捕らへたもの、手で却つて打ち敗られることが多いからであります。ぶる者をその貪慾によつて、愈々つよくとらへ、またこの儆ぶるもの、權に多くのものを捕らへます。ですから惡魔が難攻不落の城砦として保つてゐた多くの人々を殺すところの大きな、精鋭の武器であつたボクトリヌスの心と、また白分がそれを手先につかふ者を捕らへたもの、手で却つて打ち敗られることが多いからであります。の舌とがどれ程、より以上に悦ばれ、貪ばれてゐたでせう。從つて貴下の子供でたそれだけ悦びが一層大きい道理です。その理由は。我々の王は「强い者を縛りあげて」、王から奪はれてゐるたその「器は潔められて、貴下のみ榮へにふさわしからしめられ、且つあらゆる善事に於て、主の御用に立つようにせられた」からであります。（馬太傳第十二章二十九節馬可傳第十一章第二十二、五節）

五　歸正の障害

彼等は懐かしげに熱し合ひ、燃やし合ふからでゐいます。更にまた多くの人々に知られるが故に懐域なもつて多くの人を救ひの道に入れ。また自ら先頭に立つて多く人々を作れて行きよ勝利打破の軍をなさうするとその先、立つて行く自分も、多くの附隨者のために悦ばされるのです。とは彼等は私自分だけで救ふのではなく、他の附隨者達と共に悦ぶの軍屋のうちでは高めあふものが貧しいものに先だつて、貴い者は賤しいものに先だつからでゐいます。神が「貴ドは、頭の弱き者を選び、有る者を亡ぼさんとて、此世の賢しきもの、輕き者を辱しめんとて、無きが如きものを選び給ふ」（第廿七章廿八）たからでゐいます。それでこそ「貴ドの使徒の首ドが主の舌によつて、以たのやうな最も愉快な言葉（ボーロ自身の言葉）――すなわち、總督ボーロが、此戰ひによつて、すつかりその誇りなる主（神の意味）の臣民となつたとき、其大きな證據として。その在來の名サウロなボーロと呼びかへられることを喜びました。さ

れを鎖と呼びます）私は動きがとれなかつたのでムいます。けれども唯一神よ、心のまゝに貴下を拜み、また貴下を樂しまうとおもふ新たな意慾は強固となつてゐる私の從前からの舊意志に、まだ打ち勝つことは出來なかつたのでムいます。ですからこの二つの意志が、一つは舊く、一つは新らしく、一つは肉であつて、他は靈であるところの私の裏に鬪ひ、そして其の爭鬪によつて私の魂を荒廢に歸せしめてしまひました。

ここでわたくしは、わたくしが當て讀んだ、肉の望むところは、如何に靈が逆らひ、靈の望むところは肉が逆らうかといふことを、實際の經驗によつてよく悟りました。本當に私はその何れをも要求してゐるましたこ けれども矢張り自分の心のうちで感覺してゐるものを求めてゐるうちには、前者のうちには最早ましたっ といふのは私は最早すきで事を行つたよりも、寧ろ大部分は心なからぶしてムいますから。私は自分からムこゐましたっ けれども私は自分の欲しないところに、進んで

けれども貴下のシムプリキアヌスがボクトリヌスのことを私に語つてきかした時、私は火の如く熱心に燃えて、直に之に倣はうと致しました。私はシムプリキアヌス皇帝の時代に、キリスト教徒の高等學藝および辯論の術を教へることを禁じられてゐたこと、そして貴下が赤此法律に服從してゐたこと、そして貴下が赤の「言」を棄てたがましであると思つたことなどを附言しましたとき、私は斯う思ひました——彼はたゞ主のみに仕へる機會を得てゐるから、幸福であると同時に斷乎として立つてゐるのであると。斯うした信仰こそは私が欲しがつて喫息してゐたものでしたが、他人から施された鐵鎖でなくて。自分の意志でふ鐵鎖に私はすつかり縛られて。どうにも仕方がなかつたのでムいます。卽ち邪しまなる意志は肉慾の下に隷屬するとは軈て習慣となり。習慣がもし反抗を受けないならば、それは軈て性質となつてしまふのでムいます。此連環によつてつながれて（ですから私はそ

醒めてゐる方がいゝのでムいます。けれども人は多く、その手足がだるくきには、その眠氣を追ひ拂ふとを躊躇致しながら、起きなければなりません。そして半ば不愉快ではあは自分の慾にとらはれてゐるよりも、貴下の御慈悲に身をまかすはうが、るかに善いと確信してはゐましたけれども、打の御慈悲は私を悦ばして、私を束縛致しました。けれども又「眠れる者よ、起きよ、死人のなかより立ちあがれ、然らばキリストは汝を照らし給はん」（エペソ書第五章第十四節）と、私に仰せられましたる貴下に對しては、私はついに何にも御答へするところがなかつたのです。また仰言つたことの眞實であることを到る處に示し給ふた貴下に向つて、私は眞理と知りながらもたゞ「やがては」「見よ、やがては」「只今」「少し待つて」といふ鈍ろくさい、睡氣にみちた言葉のほかには何の答も致さなかつたのでムいます。けれども「只今」「少し待つて」は隨分久しいあひだでムいました。

来ましたのでしたから、習慣によつて此平
らによつて正しい刑罰が罪人に臨み来
克くそれのでムいます。ですからたとへ
に抗辯することができませう。私
なかつたのでムいます——「眞理
輕蔑してもなほ神に仕へることを
しないのだ」と。然るに今
りました。けれども私はなほ地に
た。そして貴下に進み行くにあら
卻つてそれ程にその障害の加はらないことを恐れました。

斯うして私はまるで睡つてるる人が氣持よく荷を背負されてるやうに、此世の荷物をつけられたのでムいます。そして私が貴下について瞑想してるた迄へめようとしながら、また一層深い睡りに落ちる然し永久に睡りたいと願ふ者がないのです。また總ての人々の眞面目な判斷によるも。

み名にむかつて感謝を捧げませう。私は日毎に貴下向つて溜息を吐いてをりました。私を其重荷で呻かせるところの俗務が許すときには、私は貴下の教會へ屢々出席致しました。アリピウスも私と一緒でムいました。彼は既に三度、顧問の任務を終つて、その法律の務を罷めて、丁度私が雄辯術を他人に賣つてゐたやうに、若し教へて出來ることなら、法律上のいろ〳〵な助言を誰かに賣らうとして待つてゐるのでムいました。そのときネブリディウスは私共と親交のあるところから、ミラノの市民で、且つ文法家であり、私共一同と親しい仲であるヴエレクンドゥスの下にあつて教授することを承諾致しました。ヴエレクンドゥスは、自分が信實な援助を受ける必要があつたので、誰かさうした者を、友誼上、私共のうちから、是非一人來て欲しいと願つたのでムいました。ですからネブリディウスが之を承引したのは決して榮達名譽の爲めではムいませんのです。彼がもしそのやうなものを望むならば、彼は自分の學問によつて、更に一層大きな榮達の路に上り得られたのでムいます。けれども彼

私のからだのうちには、他の法則があつて、私の精神上の法則と戰ひ、私のからだのうちにある罪の法則の奴隷と致しましたから　私は只徒らに。内部の人（心）でだけ神の律法を悦んでるたのでムいます。何ぜかなれば、罪の律法は習慣の暴力となつてるますから、實際のところ、そのため心は不本意ながらその方へ引き寄せられて、捉へられるのでムいますから。斯う好んで自らその中に陷入つて行きまするので、此様に捉へられしまふのは尤も千萬のことでムいます。あゝわれ惱める人なる哉。此死の五體から私を救ひ出して下さるは誰（どなた）巢でムいませうか、私共の主イエス。キリストを通しての貴下の御恩寵を外にしては。

六　ポンティアヌスの事

おゝ主よ、私の扶助よ、私のあがなひ主よ。私を最も緊密に縛りからげてるた肉慾の絆（きづな）、浮世の務の繫縛から、貴下はどういふふうにして私を救ひ出し給ふたかを述べて、貴下の

とを氣付きました。勿論彼は、私が敎へることがいやになつてゐた雄辯學の本であらうと想つてゐたのでした。彼は微笑を浮べて私を見上げて、申しました、自分は意外にも此書を見、しかしそれが私（オウガスチン）の前にあるのを見て、嬉れしくも思へば、また不思議にもおもふと。その理由は彼はキリスト敎徒でムいました、そして彼は信者として、屢々敎會に行き、瀕りに、いつも我々の神にまします貴下のみ前に跪いて、祈禱を捧げたからでムいます。そのとき私は、自分が此書を讀んで苦しんでゐることを話しますと、そこに彼が話者となつて、エヂプトの修道士アントニウスのことが話頭に上りました。此修道士の名は當時は未だ私共には知られてゐなかつたのですが、貴下の下僕たちの間には非常に高名でムいました。然るにポンティアヌスは私共がアントニウスのことを知つてゐないのを見て、是程著名な人物を私共の知らないのを訝かり、なほその人の話を詳しく致しました。で私共は、それほど近い時に、しかも私共と殆んど時代を同じくして、正しい信仰をもつて、公敎會のうちに、このやうな不思議なことが證せられた話を聞いて、すつ

は友人としては、最も義俠心に富み、また心の柔しい人でありましたから、その職を引受け、私共の頼みを斥けなかつたのでムいます。ですから彼が一度その職に就くや、非常に慎重にその任務に盡くし。浮世の所謂るエライ人達に知られることをさけ、斯うして心の混亂されることを防ぎ、自由に仕事をし、また悠々として、出來るだけ多く時間を討究、讀書、或は智慧に關する事の聽講に使はうと致しました。

そこで、或る日のこと、何故であつたか私はもう記憶してはをりませんが、ネブリディウスが留守であつたとき、アフリカから來た私と同じタガステの人、ポンティアヌスといふものが、私とアリピウスに面會に、私の家へやつて參りました。此人は羅馬皇帝の朝廷で、顯要な位置を占めてをりました。彼は何をもとめるために私共のところへ來たか、私は知らなかつたのですが、兎に角に彼を通して。會見致しました。するとその者はソトて、開けてみたのでしたが、それは彼の豫想を全然裏切つて、使徒ポーロの書翰であるこ

の従者は皇帝について行き、他の二人は又一緒になつて別に逍遥してゐました。そして彼等が逍遥してゐるうちに「心の貧しく、天國を自分のものにしてゐる」（マタイ傳第五章第三節）貴下の下僕たちの幾人かゞ住つてゐる或る小屋へ參りましたとき、其處にアントニウスの生涯を記るした一冊の本のあるのを彼等は發見致したのでムいます。彼等のうちの一人はそれを讀んで驚き、また熱烈な讃仰の念に燃え立ちました。そして彼はそれを讀んでゐるうちに、自分もこのやうな生活をして、貴下に仕へ奉らうと思ひ、浮世のわざを棄てようと考へました。此從者二人は公務の施行者といふ職についてゐる人達でムいました。そのとき、その一人は卒然神聖な愛と、眞面目な恥辱とに充たされて、自分の身を憤慨し、きつとその友に眼をつけて申しました――「君にお願ひだ、どうぞ僕に言つて呉れ給へ、一體我々がいろ〳〵苦勞して、行き着かうとするのは何處なんだらう。我々はどんなものゝ爲めに奉仕してゐるのだらう。宮廷に於ける我々の希望は皇帝のお氣に入りとなる以上に何があるだらうか。しかもそのうちに脆くないもの、危險

かも驚かされてしまひました。双方ともまつたく驚いたのでムいます。いかにも大きいので驚き、話した方では私共が是程有名な話を知らなかつたことを驚いたのでムいました。

アントニウスの話から、彼は修道士達の仲間のことや、貴下にとつて美い香りである彼等の習慣や、また荒野の中でも信仰の花咲き果のなる沙漠のことなど。私共が少しも知らなかつたことなどに移りました。またミラノに於ても、市の城壁の外に。一つの修道院がありまして。それをアムブロシウスがもりたて、善い兄弟達が一ぱいに充ちてるたのでムいましたが、それもまた私共は知らなかつたのでムいます。ポンティアヌスは斯う語り続け、私共は默つて熱心に聽いてをりました。

さて彼は私共に語つて申しますには、或る日の午後、皇帝が演技場の競技を見る爲めにテイエル（ローマ西方の古都）で、外出されたとき、三人の從者とともに、市の城壁近くにある庭園のうちを散歩してゐましたが、そのうち一人彼等は二人宛別々になつたのです。卽ち一人

たのでムいました。「彼等はそのもつてゐる一切を棄て、貴下に從ひ、必要な費用を出して、塔を建てた」（ルカ傳第十四章廿八―廿五節）ました。そこへポンテイチアヌスと、彼とつれ立つて花園の池の側を歩んでゐた者とは、此二人をたづねて、同じ場所へ來合せました。けれども二人を見付けだして、「日がもう暮れたから、歸らうぢやないか」と言ひました。けれども二人は自分達の思ひ立つたことと、その企てたことを思ひ立つたかといふことを述べて、またどうしてそんなことを思ひ立つたかといふことと、自分達と一緒にさうなることと（修道士となること）は拒んでも、彼等がその爲めに自分達を窘めないようにと願ひました。けれども他の二人は少しもその心は變へませんでした。（彼の言ふところによれば）なほ矢張り自分等の果敢ない身の上を嘆き、同心の二人を祝して、どうぞ自分達のことも祈つて晃れと願つて、宮廷へ歸つて行きました。然者はその心を天に向けて、小舍にとゞまりました。そして二人とも許婚の妻をもつてゐたが。二人の歸正が知れるや、その女たちも亦童貞の身を貴下にさゝげました。

に充ちてゐない何物があるだらうか。またどれだけ多くの危険を通つて我々は、より大なる危険に到着するだらうか。更に我々は何時共處に到着するだらうか。けれども神の友となるのなら、私が望みさへすれば、今でも直ぐになれるのだ」と。そして彼は自分が新たに生れる陣痛いの苦しみを以て、その眼を再びこの本に向けて、讀んでゐましたが、貴下のみそなはし給ふ彼の裏にある人間は一變して、彼の心が明かになるや否や、直ちに彼は此世を遁れたのでゐました。彼はその本を讀んで、その胸に波が立ち騒いたときに、自身に對してしばらく憤激したのでしたが。やがて善い道をみとめて、その方に向つたのでゐました。彼の友達に申しました——「僕は今自分の希望から、離れて、神に仕へようと心をきめた。僕は今から直ぐに此處の修道院に入らうと思ふのだ。君は僕の眞似をしないまでも。僕に反對することはしないで呉れ給へ」と。するとその友は一僕も矢張り君にたよつて行かう。そこで一緒にそれほど立派な褒美と、それ程立派な奉仕とをつとめて行かう」と答へました。斯うして二人とも今は貴下のものとなつ

ひました。

けれども健全な感情をもつて此二人の者が、悉くその全身を捧げて、その人々を愈々切愛することになりましたとき、その人達に比らべて私の身はいよ〳〵呪はしく、厭はしいものになりました。それは私は十九を癒やされようとしたことを聞き、その人々を愈々切愛することになりましたとき、その人達に比らべて私の身はいよ〳〵呪はしく、厭はしいものになりました。それは私は十九才の時。シセロの「ホルテンシウス」を讀んで、智慧に對する熱烈な慾望を起して以來。既に多くの年、おそらくは十二年もほんやりとして過ごして來たからでムいます。然るに私はなほ地上の幸福を斥けることを躊躇し。またよしやそれを捜し出さないまでも、只それを探すだけですらも、既に發見されてゐる諸々の寶や、此世の諸王國にもまさる、肉體の快樂を、只意のまゝに爲し得られるにもまして遙かに結構なものに身を捧げることを躊躇致しました。けれども憐むべき青年であつたわたくしは、貴下に對して——「わたくしに貞潔と自制を與へたまへ。けれども今直ぐにではムいません」と、自分の貞潔を祈りました。それは貴下が直ぐにわた

七　聖人の心動く

以上はボンティチアヌスの語つたことでムいます。けれども主よ。貴下は彼が語つてゐる間、私を自身に向はしめ、私が心にとめるをきらつて。身をそむけてゐたら後から私をとらへ。私の顔の前に立たしめ給ひました。それは私がどんなに穢れてゐるか、どんなに曲つて醜くあるか。斑點がついて爛れてゐるかを私にみせようといふお積りでムいました。そこで私は自分の汚れを見て、怕れました、けれども我を去つてしまはうと努力致しませんでした。私は自分の眼を自身から反らしてその話をつゞけ。またあなたは再び私をわたくしの前にわたくしをお突き出しになりました。わたくしが不義を見出して、これを憎まんが爲め」（詩篇第卅七章の二）でムいました。わざと見ないふりをして。これを忘れてしまはそれを知つてはをりましたけれど、

つきりと分つて来たのに、此荷はやつぱりお前に負はれてゐる。けれども其荷物を卸ろして、天翔る翼を貰つてしまつたぢやないか」と。

究にその浮身を窶しもなければ。また十年餘もかんがえ込まなかつた者共は。ちやんと肩からポンティチアヌスが斯う語つてゐる間に、わたくしは恥の爲めに恐ろしく良心を刺されまた烈しく心を掻き紊されました。はけれども彼は、自分の其處へ來た目的である話を終ると、わたくしは自分に歸りました。私は自身の心に果さつさと歸つてしまひましたので、わたくしは自分に歸りました。また貴下のあとを跟けて行かうと努めるわたくしの魂は尻込みして、反抗し、自分の辯解すらも致し何を言ひ盡さずして殘しましたらう。また貴下のあとを跟けて行かうと努めるわたくしの魂は尻込みして、反抗し、自分の辯解すらも致しなかつたでせう。然るにわたくしは、果して如何なる非難の鞭をもつて、わたしはそれをまませたでせう。一切の議論は盡くされ、駁せられて、殘るはたゞ慄へてゐる無言の畏懼でした。しかもわたくしの魂は、まるで死を恐れるものゝやうに、軈ては自分を蕩盡せしめて死に致す習慣の退潮に、自分が乘ることを禁じられはしまいかと恐れてゐたの

くしの断りを聴き給ふて、わたくしを不潔なものゝうちから引き出して下さることを恐れたのでした。私の肉慾は殲滅せられるよりも、寧ろ満足せしめられんことを希望したのでした。マニケウス教の邪曲な道にまよふてをりましたから、そこで私は冒瀆な迷信を抱いて、そこで私は冒瀆な迷信を抱いてゐるとも敬虔の心を以て研究すること、思つたわけではムいません。けれどもそれは遥にまさつてるることゝ思つたのでムいます。

そこで、敵視した他の教へに比らべて、それは道理であると思つたのでムいます。

わたくしは、自分が此世の希望を棄て、たゞ貴下にだけ仕へることを毎日〳〵たるのは、畢竟、わたくしの前途を定むべき確實なものが現はれて来ないからのると思つてをりました。けれどもわたくしは今自分の眼の前で裸に引き剝かれて、自分の良心に斯く責めさいなまれる日が来たのでムいます。良心は責めて申しますも口癖に、はつきりと分つてもるない眞理の嘗つてるたではないか。それだのに、今眞理はは

顔色と聲とは、わたくしの言葉の語らなかつたことを語つたからでムいました。こに私共の宿に一つの小さな庭園がムいましたが、私共はそれを矢張の家中の一部のやうに使用致しました。といふのは主人、即ち此家の主人は、其處に住まつてるなかつたからでムいます。わたくしは自分の胸の煩悶に堪えかねて、とう〳〵そこへ走りました。それは、わたくしは此處にゐて、自分の心の中に惹起された、激烈な爭闘を誰にも知られずに遂に語い結果に導くまで、闘はうといふのでムいましたから。その仕方を、神よ、貴下は知ろしめしても、わたくしはまつたく、健康であらうとして、發狂し、生きようとして死んでをりました。また自分はどんなに惡るいものであるかを知つてるましたが、のち、間もなくわたくしが、どんなに語いものにならうといふことを知らなかつたのでした。わたくしは庭園のうちに退きましたが、アリ、ピの邪魔にはならなかつたのですし、また彼としては之程まで惱んでるるわたくしを、

でムいます。

八　内部の争闘

そこで、わたくしが自分の魂に烈しく反抗して、わたくしの胸の部屋のうちで起した此家内の大争闘の最中、わたくしは心に憂ひ、顔に當惑の色を浮べて、アリピウスに叫んで言つたのでムいます――「何が我々を惱すのか。それは一體何なのか。君は何を聽いてるのか。無學なものが却つて天を奪つてしまつた。それだのに學問はありながら、僕達はどうだ、まあ肉と血のうちにのたうちまはつてゐるぢやないか。それとも僕等は之まで先に立つて来たものだから、そんなもの共の後ろに跟いて行くことを恥ぢなければやなるまいか。又跟いて行かないのが結局恥ぢだからうか」と。マア私は斯麼やうなこと話しました。するとわたくしの心の餘りに激しくしてゐるので、アリピウスは後退りして、惘きながら默つてわたくしを眺めてをりました。わたしの聲は常とはかはり、わたくしの額と頰と、眼と

弱くせられ、或はその他の方法によつて弱められるときには、しないと思ふことが出來ないでしまふことがありますが、わたくしは斯くの如く逡巡して烈しく焦れ込んでゐながら。このやうな多くの働きを肉體で致したのでムいます。で、わたくしが若し髪を拂つたり、白分の顏を打つたり、指を組み合せて、私の膝を抱いたりしましたら、それは皆、私がしようと欲したからしたのでムいます。けれども若し私の手や足やが私の意志に從つて動かなかつたなら、わたくしはそれを欲したからとて、さうすることは出來なかつたのでせう、ですからわたくしは今意志と力とが一つでなかつた場合に多くの事を致しました。しかしてその一方に於ては、私がしたいと欲するや否や、ずぐに爲し得られる力をもつてゐて、しかも比較にならない程強くわたくしが悅んでしたらうところのことを、却つて致しませんでした。さうなつたわけは、斯麼事に於て、能力は卽ち意志でムいまして、意志することは卽ち實行することであつたからでムいます。しかもさうはせられなかつたのでした。そしてわたくしの心は自分に服從して、その大きな意志を、

どうしても見棄てて置かれなかつたからでムいます。わたくしは出來る限り建物から遠退いて坐つてをりました。私の神よ、わたくしは貴下のみ志と契約のうちに入つて行かなかつたことを口惜しがつて（エゼキエル書第十六章第十節）すつかり心を落され、烈しく怒つてをりました。わたくしの總ての骨は（詩篇第卅五の第十）わたくしに、それに入れと叫び、天にとゞく讃美の聲を足を運ぶ必要はなかつたのでムいます。それは實に我々がその中に入るには別段船や、車や、または足によらなくても濟むのでムいます、否、私共も家から現に我々が斯うして來て坐つてゐる處に來るほどもまたそのうちに到達するには、只行かうとする意志さへあれば、すなはち、變りやすく。半ば傷き、此方へころび、あつちへよろめき、一方は沈んで、悶へる意志ではない、別な立派な意志さへあればよいのでムいます。一方最後に、人がもしも手足を失ふか、もしくばその手足を繩でしばられて、病ひの爲めに

ほりに致しません。此奇怪なことは何處から來てをりますか。また何ぜでムいは申します、心は、それに意慾せよと命令致しますが、自身が意慾しなければ、命じません。それだのに心は命じられたことを致しません。けれどもその意慾が全體的でないのでムいます。そのために、その命令することも全體的ではムいません。何ぜかなれば、それが意慾する限り、それは命令し、またそれが意慾しない限りは、命令されたものが爲されないのでムいます。意志は意志があるべしと命令します、けれどもその意志たるや、それ自らであるべく、他の意志ではならないのです。然しその命令が全體的でムいませんから、その命令は存在致しません。何ぜかなれば意志が全體であるならば、それは既に存在してゐるのですから、存在せよと命令などは致しません。ですから、半分慾し、半分慾しないといふ奇怪なことはムいません、それは單に心の病氣でムいます。即ち眞理は起さうとするが、習慣は臥かさうとするところから、すつかり起き上りきらないのでムいます。ですから二個の意志があるといふことは、そのうちの一つが完全でないことに基

圍内で行ふよりも容易に、私の肉體はわたくしの最も弱い意志に從つてその順使のまゝに手や足や動かしたのでムいました。

九　心と肉體との關係

この奇怪なことは何處から參りましたでせうか、また何故でムいませうか。私が此疑問を呈しますように、貴下の御懸慮でわたくしを照らして下さいまし。即ち人間の隱れたる罪と、アダムの子孫の最も暗黑な苦悶とが答へるのでムいませうか。こゝろが肉體に命ずれば、肉體は直ぐに從ひますのにこゝろが心自身に命じますれば、抵抗を受けるではムいませんか。こゝろが心自身に命じて、命令と服從とを別々にして、命令すれば、手は直に動きまいます。然るに心は矢張り心で、手は卽ち肉體でムいます。心自身は外にゐるのではないにも拘らず、其と

ざかつたからでムいます。お前達のいふことを愼み、恥ぢて面を赫くしなさい、そして彼の御方に近づいて光りを浴びなさい、そしたならお前の顔は赭むことはないから。（詩篇第卅四篇六の五）私自らは。久しく考へてゐましたやうに、主なる私の神に奉仕することをかんがへまするに。斯う意慾してゐたものものであれば、これを意慾しなかつたものも私自らでもなければ、また全體的に意慾しないことが分りました。わたくしの意慾は全體的に意慾しないでもなかつたのでした。そのために私は自分と爭闘し、自分のうちを分裂さしましたけれど、それは決して他に一種の心がある裂はわたくしの意志に反して起つたものでしたけれど、それは決して他に一種の心があることを證據立てず、却つてそれは私自身の罪があるから。その罰を受けたのであることを證明致すのでムいます。「ですからこれを行ふものはもはや私ではなくて、わたくしのうちに宿る罪でムいます」（ロマ書第七章第十七節）一層氣儘に犯した私の罪に對する刑罰でムいます。私がアダムの子孫であつたからでムいます。

茲し相剋する意志の數だけ、それ〴〵指ちがつた性質があると致しますれば、たゞ二つ

づくもので。一つの意志は他の意志の缺いてるものをもつのでムいます。

十　意志の多様

おゝ神よ、二種の心が我に、彼等を貴下のみ前に死に去らしめ給へ。虚妄なことを語り、魂を惑はすものの思考することに於て。二個の意志があるのを見て、一つは善、一つは悪と。々のうちにあると稱へて。彼等が此悪しきものを保持しまた悪いものでムいます。又彼等が眞理を維持して、貴下の使徒が彼等に對して「汝等もと光りとなれり」（エペソ書第五章第八節）と言ふように、眞理圏なりしが、今は主にありて光りとなりませう。けれども彼等は、主に於てゞはなくて、彼等自らは善くなりました。それといふのも彼等は恐ろしく高慢となり、一層甚しい暗黒となりました。その傲慢によりて光であることを望み、魂の性質は即ち神の本質であるなどと想像して（ヨハネ傳第一章第九節）貴下から遠ざかり給ふた眞の光りである。

一人のひとのうちに相剋する二つの悪い性質、また二つの悪い魂があるとも考へなければならなくなります。そしたら善なる性質と。悪なる性質とが對立して、彼等のいつも言つてゐることは本當でなくなりませう。或は彼等は眞理に立ち戻つて、誰かゞ思案するときには、一つの魂がちがつた意志により燃え立たゝしめられるといふ説を拒むことは出來なくなります。

ですから、彼等が、一人の私のうちに、二個の爭ふ意志を認めるときには、二つの反對の實質から成り、二つの反對な原理に基き、一つは善、一つは惡なる二つの魂の間に爭鬪が起るのだと彼等に言はせないで下さいまし。眞の神よ、それは貴下は彼等を排斥、詰責し、罰したまふからでムいます。それは孰れにするも。丁度人を毒を用ひて殺さうか、劍によつて害しようかと思考すると同じく罪であるやうに。また他人の所有物の、是を使さうか。かれを侵さうか。放蕩して歡樂にふけらうか。或は慾張つて金錢を溜め込まうかと。若し機會さへあれば。他人の家を掠めやうと。乃至はさうする手段さへあれば

のみならず、また多くの性質がある筈でムいます。誰かゞ若しこの集會所に行かうかと思案すると此人達は叫ぶのでムいます――「見給へ、此處に二つの性質がある。一つは善い性質で、此方へ人をつれて行き、も一つは悪い性質で人を彼方へ引き戻してしまふ。なぜならば、若し二つの意志がこの間に生ずる、此躊躇は何處から起つてくるか」と。けれども私は申します――「集會所につれて行く性質も、劇場に引き戻す性質も同じく悪であると。けれども彼等は彼等の方へ來る性質を善であると信ずるのでムいます。そのわけを申せば、私共のうち誰かゞ若し劇場に行くべきかと思案して、自分の意志の分裂爭闘の爲めに迷ふてゐると致しましたら、マニケウスの教徒でも、矢張りこが答へに迷ひは致しますまいか。といふのは、彼等は私共を教會へやらうとする意志は彼等教會の與へる意志と等しく善であると告白しなければなりません我を受けて。それに從ふ彼等にあつてもまた等しく善でなければなりませんのですから（事實彼等はそんな告白は決して悦びませんが）。或はまたさうでなかつたら、

して一つとなるまでは相剋するのでムいます。之と同じことは、天上共を喜ばすのに、此世の幸福の樂しみが私共を下界に引戻す場合には、は全體の意志を以てかれを好まぬも、或苦悶に引きされ、眞理によつて天國を擇ぶも、習慣によつて容易にでムいます。

十一　靈肉の爭闘

斯うわたくしは魂の病ひにくるしみ、前よりも烈しく自己を責め、ながらも、それがすつかり斷ち切れてしまふまでは輾轉して止まなかつたのでムいます。尤もその時私が此鐵鎖にしばられてゐた程度は些細なものでしたけれど、それでも矢張り縛られることは縛られてゐました、そして主よ、貴下は嚴父の御慈悲をもつて、私の心の奥底を壓迫して、恐怖と恥辱との笞を倍加し給ひました。それはわたくしが再び負けるこ

姦淫を行はうかなどと思案する場合と同じく罪なのでムいます。若し斯うした時に起り、そしてみな等しく慾をそゝり立てたにしても。それを一時に果すことは出來ません。何ぜかなれば。是等の慾望は。その欲する多くのものゝうちに、心を四つ若しくはそれ以上の多數の相剋する意志によつて分裂さしてしまふからでムいます。然るに彼等は一つの意志が擇ばれて。多くの分裂してゐるそこに集結

し。また私を歸り去らせもしないで。たゞ私を宙ブラリンに吊るしました。

玩具のうちの玩具。虛榮中の虛榮、私の古い情婦が未だしつかりと私をとらへて放さなかつたのでムいました。彼女はわたくしの肉の衣を把らへて。窃かに囁きました――「貴下は私共を棄てなさるのか。そのときから私達は最早永久に貴下と一緒でなくなるの？」と又「そしたら。そのときから貴下に取つては、是もあれも捉によつて許るされないものになりましたよ」と。「是もあれも」といふ言葉で、彼等が示唆したものは何でムいませうか。どうぞ神よ、貴下の御慈悲でこれを貴下の僕（しもべ）の魂から取り除いて下さいませ。彼等の言葉を碌々聞き入れもせず、また彼等は眼の前にあらはれて來て、私と顔を合せも致しませんでしたけれど汚濁、何たる恥辱を示唆したのでムいませう。私は當時彼等の背後から來て。私に囁き。去らうとするのを。そつと引いて。自分等の方へ振り向かせようとしたやうでムいました。斯うして彼等は私を引き留め、私は身を彼等から振り放して。呼ばれてゐるところへ馳つて行くことを躊躇しました。といふのは横暴な習慣

とがないように。また。もうほんの僅か残つてゐる縛めを、わたくしが断ち切つてしまはないが爲めに。再びその鎖が力を得て。以前にもまして強くわたくしを縛らないようにとの御心盡しでムいました。私は自分の心うちに「そら、今だ。やれ、そら今だ、やれ」と言ひました。そして斯う言つたとき。私は殆んどそれをしようと致しましたが、實際には さう致しませんでした。しかも私は以前の狀態に戻りはせずして、いま一歩といふところに立止まつてゐました。ほつと一呼吸致しました。そして私はふたゞび試みまして、もうほんの少しと進みながら。もう既んでのことで捉らへるといふ間際まで來ましたが。私はそれに到達せず。それに觸れもしなければ、捉らへもせず、死に死することも。また生命に生きることにも踏出しました。しかしてゐる私が今まで慣らされて來た惡い感情は、わたくしが未だ慣れてをらなかつた善い性情よりも強く私をとらへました。そしてまつたく異つた自分とならうとしたその瞬間は。いよ〳〵わたくしが近くに進むにつれて、いよいよ大きな恐怖をもつて私を打ちました。けれどもそれは私を撃退することは致しません

獨りですることの出來たものはムいません。神樣が私を此人に御與へなさつたのでムいますよ。貴ドはそのやうに獨りで立ち、また獨りでお立ちにならないのは何ぜですか。貴ドは自身を主にお投げなさい。恐がることはムいません。主は決して身を引いて、貴下を仆れかすやうなことはなさいませんよ。安心して身を神にお投げなさい。主は貴下を受けて。貴下を癒し給ひませう」と。けれども私はやはり是等の愚かな囁きを聞き、躊躇してちうぶらりんになつてゐましたから。ひどく顔を赧く致しました。そこで彼女はふたゝび斯う言つてゐるやうでムいました——「貴ドのお耳を貴下の不潔な部分に向けて跼になさい。それでも私(さて)律法を話しは致しません」と。彼等は貴ドに愉快を話しますけれど、主なる貴下の神のわたくしの心のうちの此爭鬪は、わたくし自らにいます。けれどもアリピウスはわたくしの近くに反逆してゐるのに外ならなかつたのでムいます。

無言のうちに、わたくしの常ならぬ感激の結果を徐ろに待つてをりました。

は私に
けれ
が顫る
をりま
を受け
し。敬
には貞
います
母でム
丁度斯
なさい

「お前はあの者共と離れて生きていかれると思ふのか」申したかどうも此言葉は今は極度に響きます。といふのは私が顔を向へながら行かうとする方に、制慾の貞潔な威容があらはれました。それが晴々して少しも疑ふとはなく、即つて卒直に彼女に来い、安心して放逸に愉快ではなく、その語い模範に満ちた敬虔の手を差しのべて、私と、強請りました。まつたく。私を抱かうと致しました。こゝには青年もあれば、老人も、また壮年も潔山居るなほ処女であるものもをりました。そして彼等の各々のうちそのものが箱つてをりました。おゝ主よ、彼等はその良人にまします貴下によつて生んだ歓喜の子供達の多産な（詩篇第百十三の九）彼女（貞潔）は人を感激させる笑ひをもつて私に笑みかけ、

「貴下は此處にゐる人達にでさることがおできになりませんか。でも此人達の誰だつて。その主にまします神様の御助けがなくて。自分

のそなへものを捧げることになりました。そして實際言葉は是とはちがつてをりましたけれど、大抵次のやうな意味のことを私は貴下にむかつて呟きながら申上げました――「主よ、かくて汝は幾何時(いくそとき)を經たまふや。主よ、かくて幾何時を經給ふや。われらの先祖のよこしまなる業(わざ)を紀念したまふ勿れ――(詩篇第六の四、第七十九の五、八、同)と。私はそんなものに捉らはれると感じたからでムいます。わたくしは次のやうな悲しい言葉を出しました――「幾何時を經たまふのですか、幾何時を經たまふのですか。明日、またその明日までムいますか。何ぜ今爲し給はないのですか」と。

わたくしが以上のことを語り。わたくしの心の非常な苦しい悔恨のうちに泣いてゐましたとき、フト、男の子か、それとも女の子か知りませんが、子供の聲が隣りの家から聞えて、何かを暗誦し、屢々「取れよ、取りて讀め」といふのが繰返されて聞えました。そこで私の顏色は忽ちに變りました。斯麼言葉のある歌を唱つて、子供が遊ぶ遊びがあるだら

十二　遂に歸正

けれども深遠な考慮が私の奥底から。わたくしの、眼の前に積みあげました時。恐ろしい嵐が起つて、恐ろしい涙の驟雨を伴ひました。わたくしは之を注ぎ濫してしまはうと思つて。起ち上つてアリピウスを離れました。泣くには獨りこそ適いとわたくしは考へたのでムいました。そこでわたくしは、たところで、わたくしの邪魔にならない程の遠くへ退きました。そのとき、わたくしはそのいもりだつたのですが、彼はちやんとそれを悟つてをりました。といふのは私は何事かを彼に言つたのでしたが。私の聲はすつかり涙に塞つてゐましたのですから。

起ち上つたアリピウスは非常に愕きながらも、二人で坐つてゐた元の處に殘つてをりました。何ぜかは存じませんが。わたくしは、とある無花果の樹の下に身を投げて、わたくしの溢漲は、貴下に向つてかぐはしい犧牲

エス。キリストを衣よ。私の慾のために備へをする勿れ」（ロマ書第十五章第一節）と。それから先かたくしは讀みたくも思はなければ、また讀む必要もありませんでした。といて、終りに來ると、恰も平安の光りともいふべきものが、わたくしの心のうちに侵入して、疑惑の暗は殘りなく消え去つたからでムいます。

やがて私は指をその間に挿み、或は他の何かの印をつけて本を閉ぢ、今は靜かな顏になつて、アリピウスにそれを知らせました。貴下が彼の心にどのやうな働きを爲し給ふたかは知りませぬが、彼は私に――「君の讀んだ文句が知り度いものだ」と申しました。わたくしは彼にその文句を示しますと、彼は、わたくしの未だ知らなかつた、その次にある文句を讀みました。その文句は斯う書いてムいました――「されど信仰の弱き者を容れよ」と。此文句を彼は自分に當てはめて、わたくしに說明してくれました。で彼は此訓諭に力を得まして、彼の性格に最もふさわしく、また彼をして常に遙にわたくしとは逆つて、善い方へ彼を進ました果斷と決意とによつて、心に少しの當惑も躊躇もしないで、斷

うかと。一生懸命にそへてみましたが、どうもそんなことを何處でも聞いたことがあるとは思ひ出しませんでした。ですからわたくしは溢れ出づる涙を抑へて立ち上り。これこそは聖書を開いて。私が一番始めに見出す章を讀めといふ、神の御命令に相違ないと悟りました。

その讀まれてある言葉を聞いて。それが自分に向つて言はれてゐる勸めであると悟つたといふのは他の人々が福音書を讀んでゐました時、不圖アントニウスが入つて來まして。

いふ話を聞いてゐたからでムいます。アントニウスが聞きました言葉は「往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶（たから）を天に得ん。かつ來りて我に從へ」（マタイ傳第十九章第二十一節）

といふのでムいました。彼は此神託を受けて直ちに貴下のみもとに立ち歸つたのでムいまして。わたくしは急いでアリピウスの座つてをつたところに立ち歸りました。わたくしは立ち去る時に。使徒の書をそこに殘して置いたからでムいます。わたくしはそれを取つて開き、わたくしの眼が最初に落ちたところを讀みました。そこには斯ういふ文句がムいました——「宴樂。醉酒に。淫樂。好色に。爭鬪。嫉妬に步むべきにあらず。たゞ主イ

第九篇

感謝

「あゝ主よ、われは汝の僕なり。我はなんぢの僕にして、なんぢの妣の子なり。汝はわが繩紲を解きたまへり。われ讃美の供物をなんぢに捧げん。わが心とわが舌とはなんぢをたゝへんがために喜べり」（詩篇第百十五の十六、七）またわたくしの心と、わたくしの舌とに貴下をたゝへさして戴きませう。まつたく、主よ、誰かなんぢに比ぶべきものあらん」（詩篇第百十五の十節）と言はして下さい。私の骨にさう言はして下さい。そして貴下は私に、また私の魂に答へて下さい。「われは汝の救ひである」と。私は誰ですか、また如何なるものですか。いかなる悪をわたしは致しませんでしたらうか。わたくしの行ひに惑がなければ、わたくしの言葉に、わたくしの言葉に悪がなかつたでムい

然私と一緒に信仰の路に入ることになりました。それから私共はわたくしの母のところへ
参りまして、此事を告げ知らしましたので、彼女は大きに歓びました。彼女が歓喜の有様
がどんなであつたかと申しますれば、彼女は喜んで跳び立ち、嬉しい〳〵と聲をあげて
我々が總て求めてゐるもの、總て思つてゐるものよりもズット勝さつたことを爲し得られ
る貴下を（エペソ書第廿章）を崇めました。がそれは彼女が、あはれにも、涙を流して嘆きなが
ら、いつも彼女の願つたより以上のものを、私の糾正によつて貴下が彼女に與へ給ふたか
らでムいます。貴下はわたくしを貴下に立ち戻らせ、それによつて、私をして妻をも、此
世の如何なる希望をも求めないで、かの信仰の定木の上に立たしめ給ひました。久しき以
前、貴下は此定木のにわたくしを置いて彼女に示し給ひました。（本書第三篇參照）かうして貴
下は彼女が願つたものよりも。遥かに豊かに、またわたくしの肉體から生れる孫によつて
彼女が求めたところよりも。遥に貴い。深い道によつて、彼女の嘆きを、歓びに變へたま
ひました。

ばぬ程に倦くましまして、しかも自尊心のある者にとつては尊くましまさぬ貴下御自身を入れ給ひました。今やわたくしの魂は奔走と利獲との噛む配慮から、また輾轉煩悶と、慾の痂瘡を掻くことから解放せられました。そしてわたくしの幼ない舌は貴下にむかつて、わが光り、わが富、またわが救主にましますわが神よと、自由に申しました。

二　教師の職を棄てる

わたくしは貴下のみまへで、わたくしの舌でする職業を、口舌の市場より、騒々しくして塵ひ去らずに、徐々に引き去らうと決心致しました。かうして青年ども。すなはち貴下の徒法でもなく、たゞ偽りの狂亂と講壇上の爭論とを思つてゐる者共に、その狂暴の武器たる雄辯術をわたくしの口から買はせないようにしようと致しました。然るに茲に悲だ好都合であつたのは、折柄葡萄の收獲期が近寄つてその休暇（八月廿二日から十月十五日まで）までにほんの僅かな日子を餘すだけでムいましたから、わたくしは学校

ませうか。はけれども主よ、貴下は善にして慈仁にましまし、また貴下の右の手はわたくしの死の深淵をさぐり、堕落の淵を掻い乾し給ひました。そのために私は自分の心の底から、貴下の欲し給ふことを欲するやうになりました。けれども私の自由意志は、斯く多年の間、いづこにありましたらうか。またどのやうな低い深い、秘密な場から直に呼び出されて、わたくしの頸は貴下の「易い軛」（マタイ傳第十一章第廿三節）を受け、またわたくしの肩は、私の助け人であつて、私の贈主にましますイエス・キリストの軽い荷を負ふのでムいます。様々な愚昧な楽しみを棄てゝ行くことが、私によつてどれだけ楽しいことになりましたらう。また私が別れることを恐れたものゝ、なくなるのが、今や忽ち却つて歓喜となりました。それは貴下がそれな私の身から取り除いて下さつたからでムいます。眞實であつて、最高の歓喜にまします貴下はこれを棄て、そしてその代りに、肉または血にとつては楽しくないのですけれど、總ての歓楽よりも楽しくて、總ての光りよりも輝き、しかも總ての奥義よりも深遠で、一切の名誉といへども遥かに及

しく私を燃焼せしめましたので、反對な脊共があらゆる詭辯の舌から來るその呼吸も、たゞ却つてを愈々わたくしの燃焼を熾んならしめるだけで、私共を滅ぼすことは出來ませんでした。けれども貴下が遥く全地に巣めしめ給ふその聖名により、貴下の誓ひと志願とを實讃するものもありますから、もうほんの間近に逼つて來た休暇まで待つことをしないで、その以前に、多くの人達の前で明かに教師の職を退くことは、如何にも見榮を張るやうに思はれる懸念もムいました。たとへば私が斯うした行動をするのを見たり、又私が待設けてゐた衛荷の收獲期が非常に逼つてゐることを見たり致しましたら、世間の人達は、私が誰かエライ人に會ふつもりだなどと、樣々なことを申すのでムいませう。そして私の志を斯麼ふうに考へ、また論じ、貴下の善いことが却つて譏りの的になつたなら、私の目的に何の益がムいませうか。

それぱかりではムいません。その夏、非常に苦しんで學問を致しましたが爲めに、わたくしの肺が弱くなりだして、深い呼吸をすることが困難になり、しかも胸が痛むので、肺

してそれまで待つて、正式に赦はれた私は、再び身を清らぬことにしようと思ひました。ですから私の目的は貴下にはよく知れてをりましたけれど、人々の間には、只私の二三親友のほかには知られてをりませんのでした。私共の間には之を誰にも漏らさないといふ約束をしたのでした。けれども涙の谷からのぼつて（詩篇第八十四の六）京詣での歌をうたつてゐるやうに見せかけて。（詩篇第百廿四の百廿四）私共に。貴下は鋭い箭と、焼き盡す炭とを與へて、それでもつて私共を誘めるやうに見せかけて。甚しきは妨げを爲し。また恰も人がその食物にするときのやうに。受けるふりをして。私共を殺すところの欺僞の舌を制禦し給ふたのでムいます。

貴下はあなたの御慈悲をもつて。私共の心臓を射たまひましたので、私共は貴下のみ言葉に心臓を貫かれたまゝそれを携へてをりました。そして貴下が唔いものゝ代りに輝くものとなし。一旦死んでゐたのをまた生かし給ふたところの、貴下の下僕（しもべ）たちが示した模範が私共の心に幾つも想ひ出されて。私共の強い昏睡狀態をその熱誠の火で焼き盡しまた。畢竟私共を深淵に陷らせまいとの御配慮に基くことでムいます。また是等の模範は烈

たくしが此重任にたえたのは、常は貧慾と二人づれであつたのでムいます。或は代つて共に重荷をかつぐべきものが必要であつたのでムいます。けれども私は此行爲を目して「既に裏心から貴下のみ手に就かせるのは、罪を犯しるものである」と、申すもムいませう。一時たりとも身を僞瞞の椅子に悲深くましますよ、貴下は私が他そんな人達と議論を致すことは避けます。然し最も慈此罪までも、貴下の聖い御水によつて洗ひ潔め、赦してはくださいませんでしたか。

三　二友人の聖なる死狀

ヴェレクンヅス（第八篇に出た人名）はこの私共の幸福に對して、またく心を惱したのでムいますが、今はそれに強く結ばれてゐた彼は、私共との友達關係がなくなりさうだと思つたからでムいます。彼は未だ信徒であつても、彼は決してはなかつたか

に故障が起きたことが明かになつてなりました。
とが厭になりました。これで第一に私は悩んでゐたのでムいます。といふのは此病ひの爲めに、私は止むを得ず教師の職を罷めなければならないか、それでも癒えて、回復することとが出来たにしても、少くとも之を中止しなければならぬほどになつてゐたからでムいます。けれども後、わたくしは貴下が我々の主にもましますことを知るべく、閑暇を得たい切望を起して、その決心をつけましたとき、わが神よ、貴下は御存じでムいます、私は此時機にかなつて、少しも嘘僞ならぬ口實を得たことを却つて歡び始めました。その爲めに自分の子供達の利益を見て、私の教壇を去る自由を斷じて許したがらぬ親達の怒りを宥めることが出来ました。でムいますから、私は此やうな歡喜に先ちて、それまでの間の時間が經過するのをずつと辛棒致してゐました。それは約二十日の間でムいました。けれども私が勇氣をもたなかつたら、それを勇氣を皷して辛棒致しました。若し私が勇氣をもたなかつたら、恐らくわたくしは此事厭の爲めにひしぎつぶされてしまつたでムいませう。と申しますのは、最にわ

れて去つて貴下の内に憩ふたカッシキアクムの別荘に對して、貴下はヴエレクンヅスに酬ゐる給ひました。貴下は乳を注ぐ山たる貴下の山で、地上の罪を赦し給ふたからでムいます。

教徒そのとき彼自らは悩みましたけれど、

る、貴下のみ子の肉（ヨハネ傳第十四章六）を幻影であると信ずるになつてるないで、眞理にましますかの最も忌はしい誤謬の淵に陥つて、私共が信じたに信じたのでムいます。尤も未だ貴下の教會の如何なる聖典にもあづかつてはをりませんでしたが、最も熱心な眞理の探求者でムいました。彼は、私共が改心し、また貴下の

洗禮によつて新たに生れた後、久しからずして同じく公教會の忠誠な一員となり、またアフリカに於てその人民の間に於て、完全な貞潔と禁慾とをもつて貴下に仕へ、その全家を

あげて、彼の働きに依つてキリスト教徒となりました時、貴下は彼を肉の桎梏から解き給ふたのでムいます。そして彼は今アブラハムの懐（ふところ）に生きてをるのでムいます（ルカ傳第十六章第廿二節）

らでム
た旅行
自分は
慮なく
下は正
しい者の復活するとき。彼に報ゐ給ひ
なつた
のでムいます。即ち私共が羅馬に行つて不在であつた間に、彼は肉體の病氣にかゝ
り、そ
のときキリスト教徒となりまして、貴下の信徒として此世を去りました。けれども
それに
よつて貴下は啻に彼のみではなくて、また私共をも憐みたまひました。貴下は此友
人の私
共に對するなみ〳〵ならぬ親切を思ひながら、しかも彼を貴下の羊の群の一疋とし
て算へ
ることが出來ないで、私共が幸棒し難い悲哀に苦しむだらうと御配慮を給はつたか
らでム
います。我々の神よ、私共が貴下のものであることを感謝致します。貴下のおす〻
めと、
お慰めと、眞なる御約束とは私共に告げて申しふます、私共が浮世の熱病から癒やさ

でゝムいませんか。わたくしは心の奥底から安心して「わが心なんぢの聖顔を探ねたり。主よわれ汝の聖顔をたづねんと云へり」（詩篇第廿七の八節）ひましたから、日數が長く。久しく經つたやうに見えました。

四　愈々退隱

さて心のうちではもう遠の昔に解職せられてゐた修辭學の教授職から、實際に於て私が解職せられる日が參りました。雖てその事も實行せられました。貴下は私の舌を救つて下さいました。わたくしはのでゝムいます。貴下は既に此舌から私の心を救ひ置いて下さいました。わたくしは貴下をたゝへ、總て私の親近のものをつれてカッシキアクムにあるヴェレクンヅスへ移りました。其處へ行つてから、私が著はした本は、貴下に對する奉仕ではゝムいますが、矢張り傲慢な學派にあこがれてゐるたことは。私と一緒にゐたものとの闘はした議論の書、及び公前で獨り議論した書にあらはれてをります。まだ不在であつたネブリデイ

この懐と
から救い
そこに生
んのでず
に生きて
貴下の泉
でムいま
れば彼が
は。こん
ぶ限り慰
してネブリディウスが、只もう行ふばかりになつてゐるので、
てくるか
した。そ
めてやりました。また彼の境遇、すなはち結婚生活に忠實であるようにと勸めま
ぶ限り慰
む泉の主人にまします貴下は、私を憶へてゐ給ふかいでムいます。そこで私共
は。こん
なに歸正してはゐましたが、矢張り友情を以て悲しんでゐるヴエレクンヅスを及
に彼は之に醉ふてゐるとは思ハません。何ぜかなつかしの口に傾けないで、窮まりなく幸福
、その嬰の耳をわたくしの口に傾けないで、その嬰のロを
貴下の智慧を及ぶ限り飲んで
るのでムいます。今や彼はその
につけて、自分の望むがまゝに、貴下が迷ひのうち
濾の信仰に經驗のない小人であつた時に、瀕りに道を訊ねてをります、確に
。このやうな魂にふさはしい處がこの他にあるべくもおもはれませ
す。

入門志願者であるアリピウスと共に別荘にをりましたとき、傲慢の精の信仰の歌でであり。また敬虔な詩でおなとこころのダビデの詩篇を讀みして、わたくしはいかなる詩を汝に學びしたらう、わが母は老齢の年齢と、母の慈愛と、キリスト教徒の敬度とをもつて、私にすべてわたくしは是等の詩篇のうちで。どんな詩を貴下にあげましたらうかたくしは如何に貴下に對して胸を然やさましたでせう。また燃える來ることなら、人類の敬虔に對して胸をもつて、金世界にこの御言を宣べ傳へきつたく是等の詩は全世界に歌はれてゐるはづでム（詩篇第十六の第六）

して惡つたことでいふらざるはなし」

興の、此活躍は貴下のこの憐れみの光を通らしめる事能はざらしめ、

ウスに對してどうであつたかは、私の書簡が之を示してをります。けれども十分の暇を得て、當時のことでムいませうか。まして今は他の更に大きな慈悲を取り急いで申さうと致してをるのでムいますもの。主よ、貴下がいかなる刺(とげ)ある笞で私の心を打ち懲らし給ひましたか、私の曲つてゐるのを直くし、惡念上の諸々の山や丘やを低くし、を平にし給ひましたか、またどうして私ろを平にし、惡念上の諸々の山や丘やを低くし、なる我々の救主イエス。キリストの名に從はしめ給ふたかを、わたくしの記憶におもひ出して、貴下に感謝することは私にとつては誠に樂しいのでムいます。アリピウスは始め私共の書中に主のみ名の挿入せられるのを拒みました。彼は蛇の敵（蛇は惡魔を意味す。創世記）なる教會の健全な牧草の香氣よりも、寧ろ既に主の折り挫きたまふた學派の學藝の香柏の香りが私貴下の誠の愛に對しては新參者でムいまして。入門志願者に過ぎなかつたところの私は

ぢら窓しることを好ぶ。虚偽をしたひて幾何の時を経んとするか」（詩第四の第二）と仰せられ
ました。こんな希望と歓喜とは、すべてわたくしの眼と聲とからは出てました。何ぜかなれば、
よ、貴下のわたくしは或る時虚栄を好み、また虚偽を慕つてゐたからです。（キリストのこと、
詩篇第四の第三）これを死者に中から甦らせ給ふた貴下の聖者を僅大なるものがふして高いところから、その御約束、即ち助け主にまさるこの真理の靈を送らせ給ふた貴下の右に置き給ひました。そしてまたここの御方はもうこれを存じませんでした。その御方は確にこれをおつかはしになつたのでムいます。その御方は今や黙められて、死者の中からびに甦つた御光を受け給はなかつたのでムいます。主イエスは来だ御方は確にこれをおつかはしになつたのでムいます。その御方は今や黙められて、死者の中から

わたくしが閙暇を見て、詩篇第四を讀むとき、彼等が、何處が私の近いところにゐて（しかもそのゐることを私は知らないでゐて）彼等が私の顏を兒、またの聲を聞くこと。どんなにその詩篇が私に影響を及ぼしたかを、私は聞き度いと思ひました。「我が義を守り給ふ神よ、我が呼び求むる時に答へ給へり。わが患みたる時、なんぢ我をくつろがせ給へり。主よ、我を憐み、わが祈を聽きたまへ」（詩篇第四の一）私がこんなことを語つてゐるのを、彼等が私に聞いてゐることや、私を見てゐることを私が知つてゐるとは私が知らないで、しかも彼等が聽いてゐることを私は望みます。若し彼等は解しては呉れなかつたでせう。

わたくしは恐れ戰き、更にまた父よ、貴下の御慈悲のうちに希望と、歡喜とに燃やされました。そして貴下の善い靈は私に振り向きまして「人の子よ、いつまで心鈍きや。なん

は、どれぐらゐこれに心を動かされたことでムいませう。まつたく正しい怒りを私は知りました。といふのは、私は自身に對して怒ることをしないで、審判の啓示の日とのために、自らに對して忿怒を積んだ人々（ロマ書第二章五節）の言つてゐるやうに、私によつて罪を犯したのは、暗黒の民とはちがつた性であるが爲めではムいません。そして私の善は最早、私の外部にあるのでもなく、また私の眼をもつて太陽に於て求むべきものではなかつたのです。（第五篇第三節參照）

ばうとするものは、直ちに虚しくなつて、肉の眼に見える、無常なものゝうちに、（卽ち外部の光りでなく內なる靈の光）何ぜかなれば、外的のものに歡その上、自分が飢ゑた思想に於て、自分の影を舐めるからでムいます。あゝ彼等が、この（思想上の）斷食にすつかり疲れ果てゝ、——「誰か善いことを私共に見せてくれないものか知らん」と、云ふやうにしたいものです。そしたら「主よ、貴下の聖顏（みかほ）の光りは、我等の上に封ぜられたり」（詩篇第四の六）と、貴下は言ひ、彼等はそれを聞いたでムいませう。私共は世に來る萬人を照らす光りでムいません（ヨハネ傳第一章第九節）貴下に照らされるものでムい

方は一これを知れ一と、お叫びなさいよう。然るに私は此とほり久しく知らないで、空しいことを好み、虚偽を慕つてゐました。でですから私はそれを聞くと戦きました。と申すのは此言葉のために、空しいことと、虚偽とがあつたからなのでムいます。また私は自分の記憶の悪しみなんでムいまするに、私が眞理と見做しました諸々の幻影のうものどもが之を聞くことを望みます。恐らく彼等は胸が悪るくなつて、その毒を吐き出したでムいませう。そしてそこで彼等が貴下に對して救ひを呼んだとき、貴下は彼等に聞き給ふでムいませう。といふのは肉に於ける眞の死により、あの御力は私共の爲めに死に給ひ（ロマ書第八章卅四）今、私共の爲めに、貴下に御執成しをして下さるからでムいます。

私は一怒るとも罪を犯すこと勿れ」（詩篇第四の四）と讀みました。而して、我が神よ、この後罪を犯さないようにと、過ぎ去つたことについて自らに向つて怒ることを既に知つた私

そして私は次の文句を讀みましたとき、裏心から高らかに叫びました——「あゝ安らかにして、あゝ變らざらん」（詩篇第四の八）と。あゝ何とあの方は仰言いましたでせう——「われは臥しまた眠らん」（上同）と。それは「死は勝に呑まれたり」（コリント前書第十五章五四）と書いてある お言葉が成就するとき。誰か私を妨げませう。そして貴下は全く唯一にまして變り給ふことはムいません。また一切の苦勞を忘れてしまふ安息は貴下のうちにムいます。と申すのは貴下より以外には存在するものがなく（申命記第四章第廿五節　イザヤ第四十五章第五節）また貴下でないその他のものに心を向くべきものでなく。なほ又貴下のみ獨り、私を希望のうちに居らしめ給ふからでムいます（詩篇第四の第八節）わたゞ主よ、貴下のみ獨り、私を希望のうちに居らしたは死者に對しては、どうしていゝか私にはちつとも分りませんでした。私もその時唖或は死者の類の一人でムいまして、病める者、また天の蜜にて甘くせられ、貴下のみ光りに照らされた聖書に反對して、烈しく、貴下のみ目的に吠える者でムいました。そして私はこの聖書の敵に反對する熱心を以て燒き盡くされました。

ます。即ち私共はしばらく暗でムいましたが（エパソ書第五の八）、今、貴下に於て光りとなるようにといふのでムいます。嘻、どうぞ彼等が裏なる永久の光りを見ることが出来ますように。私は自分でそれを味得しながら、彼等に示すことを出来なかつたことを思ふと、たゞもう残念で、歯噛みを致しました。然るに彼等は「誰か善きことを我等に見する者あらんや」と申してさへも、私は彼等にそれを示されませんでした。けれども私は白分の案内で、白分の古い人（古い自我）を殺して、犠牲に供へたところ（詩篇第四の五）、その處に於て私は貴下に喜びを私の心に與へ給ひまして（詩篇第四の七）かうして私は貴下から離れた心を、その眼によつて、私の希望をかけました。貴下はそこに

過去の罪に對して不安を感ぜしめました。

五　アムブロシウスの勸め

萠芽牧種期の休暇が終りましたので、わたくしはミラノの人達に辭職を申出て、その學生達に對して雄辯術を教へるものを備はしもせんと欲ふたばかりでなくて。また呼吸の困難と、私の胸が痛むが爲めに、到底教授の職をつゞけて行かれなかつたからでムいます。かうして私は書簡によつて、貴下の祭司である聖人アムブロシウスに行き、わたくしが曩に犯した誤謬と、現在の自分の志とを告げ、聖書のうち何を讀むのが一番よろしいかといふことを、教へてくれるやうに願ひました。

シウスは、豫言者イザヤの書を私に薦めました。これはイザヤが他にまさつて明らかに福音と、異邦人に對するお召しを豫言してゐるからであると私は信じまするが、けれどもその

是等閑日月の間に起つた總てのことな私は何時想ひ出すでムいませうか。けれども私は貴下の答の餘しさと、貴下の無悲のふしぎに迅速なことを忘れず、またしばせたこん。この時貴下は齒痛を私に起さして慈らし給ひました。そしてその痛みが烈しくなつてき、一緒にゐました總ての友人達に、萬事に旦つて健康の神に在すところの貴下に向ひ、私の爲めに祈つて貰はうといふ心がわたくしに起りました。そこで私はこれを蠟板に書いて（當時まだペンと紙とは一般に使はれず）友人達に與へて之を讀ましたのです。そこで私は謙遜にして、敬虔、素朴な思ひを以て、膝をかゞめますや否や、直ちに痛みは云つてしまひました。けれども何の苦痛でしたらうか。またそれはどうして去つてしまひましたでせうか。わが主わが神よ、私は非常に怖れて告白致します。私は嬰兒のときから、未だ嘗てそのやうな痛みを感じたことはなかつたのでムいます。かうして貴下の聖旨は深くわたくしの心に印象せられて、私は信じて、喜び、貴下のみ名を稱へました。そして此信仰は私をして、まだ貴下の洗禮によつて赦るされてはゐなかつたところの私の

に、貴下の賜物について感謝致します。私はこの子供のうちに私の罪のほかには、何一物ももつてゐなかつたからでムいます。と申すのは人々は彼をあなたの難行に於て育てましたが、このやうに私等を感感せしめたのは貴下でムいまして、他のものではないからでムいます。私は貴下の恩恵を貴ドに感謝致します。私共の本のうちに「教師論」といふものがムいました。アデオダトウスと、私との間に交された對話篇でムいます。この書のうちに、私と對話してゐる彼の名によつて述べられてゐる思想は、皆十六才になる彼が考へたことであつて誰でムいませうか。貴下は早く彼の生命を世の中から取り給ひましたことは貴下は御存じでムいます。なほも驚くべく多くのことを、私は彼に於て發見致しました。彼の才能には私も畏れてをりました。斯麼奇蹟を行ふのは貴下でなくも別に恐れるところはムいません。私共と時代を同じくして洗禮の恩寵に預り、貴下の訓練のうちに育てられるやうにと、私共は彼をつれて行きました。かくて私共は洗禮を受け

初めの部分が解し難かつたので、全體も矢張りそのとほりであるだらうと想ひまして、主のお言葉のふりにもつとよく慣れてから、改めて讀まうと思つて、それを擱きました。

六　遂に洗禮を受く

聽て私の名を名乘つて。公衆の前に信仰を告白するときが來ましたのです。私共はカッシキアクムの別莊を去つてミラノに歸りました。アリピウスもまた私と共に。貴下に於て新たに生れんことを望みました。彼は既に貴下の聖典を受けるにふさわしい謙遜を着て、非凡の勇氣をもつて。凍つた伊太利の地を裸足になつて踏む難行をした程な、肉體の克己者でムいました。わたくしは肉によつて私から生れたわたくしの罪たる、私の子アデオダトゥスをつれてをりました。神よ。貴下は彼を善く造り給びました。彼はまだ十五才になりませんでしたが。その才に於ては既に多くの堂々たる學者をも凌いでをりました。主わがみ神、萬物および私共の不具を造り直し給ふ聖かなる力の造り主よ、わたくしは貴下

たしかにそれ以上でなかつたでムいます。敬虔なホのみ民等は、その司教である貴下の僕と一緒に死を覚悟して、會堂を守つてをるたのでムいました。するとと貴下の婢でムいますところの私の肚は、此迫害に對し、憂慮と戒心の主要な一部を身に引き受けて、を送つてをりました。私共は貴下から暖の熱を受けても尚ほ凍つてをりましたけれど、しかも愕き騒いでをる市街の光景にすつかり興奮さゝれてをりました。此悲哀に貴下の民が疲れ果てゝしまはないようにと、東方の習慣にならつて、讃美歌と詩篇とを歌ふべしといふ定めを置きました。この習慣は當日から今日に至るもなほ存在して、今や多くの者、否全世界を通じて、殆んど貴下の凡ての羊の群はこれに倣つてをります。

それから次に貴下は幻影によつて、殉教者プロタシウスとゲルヴシウスとの肉體が隠くされた場所を。たゞ今名指した貴下の司祭に啓示し給ひました。私共は此二人を斯うして多年の間、貴下の秘密の御庫のうちに、朽ち果てないようにして匿し給ふたのでムいましたから、適當の時機になつてから、之を出して此女帝の怒りを押し過めてしまは

過去の生涯の心配は私共を離れて去りました。そしてその頃、私は人類の救ひにかゝわる貴下の聖旨の深いことを思ひまして、ふしぎな喜びに飽くことがなかつたのでムいます。わたくしは貴下の教會の美妙な音にすつかり感動されて、どんなにか貴下の讃美歌と雅歌とに泣きましたらうぞ。その聲々はわたくしの耳に注ぎ入り、眞理は私の心に滴りました。そして心から敬虔な感情が湧きいでゝ、涙は頬をつたふて流れ落ち、しかもそれでもつて幸福を味ひました。

七　迫害を逭る

モラノの教會堂が斯うした慰めと奬勵とを用ひて、兄弟たちが大きな熱心により、盛に出し、心に思つて合唱し始めたのは久しいことではムいませんでした。（オウガスチンは三八七年復活節に洗禮を受けた）即ち幼帝ヴレンティニアヌスの母ユスティナがアルリアヌスに誘はれて陷つた自分の異端を庇ばうために、貴下の人アムブロシウスを迫害してから、僅かに一年ばかりで

過してをりました是等のことを貴下に感謝せしめ給ふのでムいますか。油はその香りの妙へに馨しかつたとき（雅歌第一の三）私はなほ貴下に從つて走りは致しませんでした。その鴛めに私は當ては貴下を求めて嘆息した如く、私は貴下の讃美歌を唱ひながら一層澤山涙を流しました。そして今は遂に此草の庵の空氣の許す限り、私は貴下に於て呼吸致しました。

八　母、聖モニカ

一つの心をもつ人々を一つの家に住まはせ給ふ貴下は、私共の市の青年で、エウオディウスをまた私共の仲間に加へ給ひました。彼は役人でムいましたが、私共よりも先に貴下のみ許に立ち歸り、洗禮を受け、その俗務を棄て、貴下の御用に立つ覺悟を致しました。私共と一緒にゐて、相共に聖い目的に住はうと致しました。わたくしは何處かに、最も有用に貴下に仕へ得べき場所を求めて、一緒にアフリカに歸らうと致しました。そこで私共

うといふ御思召になつたものでムいます。二人の屍體が發見され、發堀せられ、崇せられて。アムブロシウスの邸宅に移つされました。

り、實に汚れた靈に惱まされた人々が癒やされたばかりでなく、多年の間盲目であつて。市中によく知られてゐた一市民は。指が騒ぐので、何をそんなに喜ぶのかと訊いて、此奇蹟が行はれてゐることを知るや。手引きの人に共處へつれて行つて呉れるようにと願つて、「その死なんちにりました。いよ〳〵共處につれて行かれると。彼は自分の手布をもつて、おの前に貴き汝の聖徒に（詩篇第百十六の第十五）の柩にふるゝことを許るしていたゞき度いと望みました。彼がさう致しまして、その手布を自分の眼につけましたところが、忽ち眼は開かれました。そこで噂さは益々擴まり、貴下に對する讃美は燃え輝き、貴下の敵である者共の心すらも。たとへ信仰といふ健康な方には向はなかつたにもせよ、なほその迫害の狂暴を抑へました。わが神よ、貴下に感謝致します。何處から何處まで貴下はわたくしの記憶を呼び返して下さいまして。私が。こんなに大きい事件であつたにもかゝわらず。忘れて看

やうに、彼女の父も其嬰兒の折のから此下婢に負はれて育つたのでムいます。さうした關係から、またその下婢はいゝ齢をしてゐたのと、卓越した氣品をそなへてゐたことによつて、キリスト教を奉ずる人々の家に於て、その家長達から非常に敬はれてをりました。ですからその主人も自分の娘等の教育を此下婢にまかせ、その任務を果たしました。例を申せば、最も分相等な兩親の食卓で食事をする時の外には、どれほど渴私心のない嚴格さを以て彼等を烈しく娘等を制し、誠實な考へを以て彼等をいても、水一口飲むことすら許さず。悪い習慣に染まないように警戒し、斯ういふ巧まいからのことでムいます。ですから御覽なさい。女が結婚して、物置きと、客の主婦になつたときには、水なんか見向きもしないで、飲酒の悪癖に染まつてしまひます」と。斯うした教訓と、權威のある命令とで。彼女はその托された娘達の幼ない慾望を節制させ、彼等の切なる渴望を程よく整へましたので、彼等はその身にふさわしからぬことを望まないや

がテイベル河畔のオステイアまで参りました時。私の母は亡くなりました。私は前途に急ぐことがムいますから。此處に滯在なことを省いて申しません。けれども私は此私の懺悔と感謝とを受け納れ給へ。わが神よ、私が彼女は肉に於ては私を此世の光りのうちに生み、心に於ては永遠の光りのうちに生んだ貴下の妙について。またくしの魂か生んだことは少しも省きません。即ちでムいます。私が語らうとするのは彼女の賜物ではムいません、彼女に於ける貴下の賜物でムいます。何ぜかなれば、彼女は自身を造りもしなければ、また訓へもしなかつたからものが出るか知らなかつたのでムいます。貴下の教會の善い一人であつた忠信なものゝ家庭に於て、貴下を畏れるやうに彼女を訓へたのは、貴下のキリストの笏。貴下の獨りのみ子の教訓でムいました。けれども彼女は自分の此善い訓練を彼女の熱心によるとするよりも。

一人の老ひた下婢の手柄に致しました。恰も幼兒がいつも年長の娘の背に負はれる

なましたのでムいます。私共を造り、私共の魂を救ふことに何事かを爲し給ふ貴下は、我々に近くましますのでムき。我が神よ、貴下は何を爲し給ひましたか。どうして彼女を矯正し給ひましたか。してその魂を健全に復せしめ給ひましたか。貴下の秘密の庫から取り出してメスのやうに、激しく、鋭い嘲罵を他の女の魂から抽き出して、只一突き切り去り給ふたではムいませんか。いつも一人の女中が彼女と一緒に倉に行くのでしたが、その女中は、自分の若い夫婦とたゞ二人きりのとき、口論を始め、主婦の罪を指摘し、非常に鋭く罵り、彼女を「酒飲み女」と呼びました。この譏刺に心を貫かれた彼女は、自分の汚行を顧みて、直ちに是をいけないこととして棄てましたが、却つて私共を邪道に導きますが、敵は私共に反對して即ち此下婢は怒りにまかせて、その若い主婦を苦しめんとお

うになりました。

けれども貴下の妹がその子である私に告げましたやうに。酒を嗜むことが彼女の心に起りました。彼女は元来酒を飲まない乙女であつたのでムいますけれど、兩親の命によつて

椀の上から、杯を入れて、その中の酒を汲み出すとき、その酒を饅に入れる前に、習慣と

して、少し唇につけて啜るのでムいました。これ以上は彼女の心が許るさなかつたのでム

います。こゝも彼女は酒を飲みたい慾望からしたことではなく、たゞ少女時代の活氣があふ

れて此處に至つたのでムいます。かうして彼女は日毎にこの「少し」に、毎日の「少し」

を加へ、段々とそれが嵩み、遂にはその小さな盃になみ〳〵と滿たして、貪り欲むところ

の習慣に陷つてしまひました。少しだからといつて輕く事を見るものは、少し宛墮落して

行くものだからでムいます。そのときには賢い老婢とその熱心は諫めとは何處にムいまし

たらうか。主よ、貴下のお藥が私共の秘そかな病に益がムいませうか。彼女の父も、母も、また家扶も傍にゐないでも、家扶は常に近く

るやうにそれに仕へ、良人を貴下のものにしようと努め、行狀によつて範を示して、不言のうちに道を說きました。貴下はその偽めの彼女を美しくし、愛すべき、良人にとつて愛すべきものとなし給ひました。斯うして彼女は良人が閨房の楽れについてもぢつと辛棒して、管てその偽めに嫉妬して良人と喧嘩をするやうなことはゐませんでした。

と申すのは、良人が貴下を信ずるやうになり、貴下の御憐みがその上に降らんことを期待してゐたからでゐいます。けれどもまた良人は仁慈にすぐれてゐたとも激しかつたのでゐいます。そこで彼女は同じ程度に、怒ることも怒つてゐる良人と爭ふ事はなかつたのみならず、また言葉に於てさへも怒つてをりました。良人が若しフトした事から、無思慮に怒るやうなことがあれば、彼女は、靜かに、沈着した、宜い折を見計ひ、自分がさうした理由を述べたのであります。なほも一つ最後に申上げますことは、良人たちもまた柔しい良人たちばかりでなく、折ふしは、怒つた顏をもつてゐる多くの主婦が、折ふしは、喧嘩迄が、折ふしは、自分の良人の生活が非難致しますときには、

もつたので、決して主婦を矯正せんが爲に罵つたものではムいません。ですから下婢は斯う人のゐないところで罵つたのは、只其口論の場所と場合とが偶然さうなつたのか、或は下婢が、そのことに遲く氣がついた油斷の咎めを自分が受けることを恐れたからなのでムいませう。けれども主にましよして。天にあるもの、地にあるものを治め、最も深き泉流れの塗るゝを整へ給ふ者よ、貴下は一つの魂の不健全をもみ心のまゝにかへ、世の流れもつて。他の魂を矯正し給ひましたのです。それは、此事に氣付いた者、その矯正せんとおもふ者が、若しその言葉によつて矯正されても、それを矯正者自身の力に歸せないようにとの御配慮でムいます。

九　聖モンニカの德

斯のやうに彼女は淑やかに、眞面目に敎育せられ、その兩親によつて貴下に仕へました。婚姻の年頃になつて、良人を迎へ。主に仕ふ

自分と妻とが同じ部屋に並んで、家庭の幸福を楽しんでいる時に、妻の方から打ち明けて、そんな事実を聞くのは苦しいものです。しかし、また、こんな場合の妻の態度は、いろいろあるでしょう。自分の過去を清算して、新しい生活に入ろうとする決心をしたのだから、この上は、何事も打ち明けて、夫の同情を受けるのが当然だと思うのか、または、自分の過去を知られた以上は、もう夫に対して、貞淑な妻たる資格はないと思うのか、自分の過去を知られた後

彼女に行為等の口答のみをここに使用の、「
た彼女は即ちの平二いふ「貴女が
りましてから、それにその下女が
んなすから御自分達の運命をよく心
「世凡」と、彼女がどんなに善い良人に
ス（アクタイオン、父の名）がその姿を
なく、ただこうした機縁を恐れることが
難症、親しくその理由を訊かれました
之を使ったものはその償行によって感謝し、
しみ子さんは下婢になったとお思ひなさん
ては下婢になったとお思ひなさんけれはなりません
彼女は下婢になってはいけ
ことがて、御主人達に御逆らひに
ス・ハトリキアヌ
ことを聞いたことが
ました。それで彼
に殺へました
ました。私が前に申しました彼女等に
柳座せられて、苦
日は少女の姉もまた、ほしのうちは悪い下
婢等の告げ口によって、彼女に
ように服従により打ち克ち、遂には姑は自ら進んで

も彼が信者でなかつた時分に、非道な振舞をして。彼女が忍んでゐたことある彼に向つて、不平を言ふやうなことはムいませんでした。彼女はまた婢(しもめ)でムいました。（創記第九章第廿五節）彼女を知つてゐるものは誰でも。彼女に於て貴下を非常に賞讃し、尊敬し、愛慕致しました。と申すのはその聖い會話のむすんだ果が證明なして彼女の心に貴下のましますことを彼等は知つたからでムいます。即ち彼女は只一人の良人の妻でムいまして、その兩親を離れて、恭敬に自分の家を治め、善行の聞えの高く、その子女を育てゝ、それが貴下から離れるのを見る度毎に、彼等のために產みの苦痛を感じましたなほまた（ガラテヤ書四章十九節）。最後に、主よ、あなたの御惠みにより、貴下の下僕どもに語ることを許し給へば、私は告白致します。母が死ぬる前に。貴下に於て共に結合して、貴下の洗禮の恩寵を受けました私共總てに向つて。彼女は恰も私共總てを生んだものゝやうに、心をくだき、それと同時に。私共總てが彼女を生んだものゝやうに私共に仕へました。

話のうちにあらはされるとき、彼女は和解に都合のいゝことよりほかに、どんなことをも双方に對して打ち明けることをしませんでした。もし私が不幸にして無數の仲間がやつてゐることを（私はどんな恐るべき傳染によつて斯慶に罪が遠近に擴がつてゐるかを知りませんが）なもたなかつたなら、すなはち、當に互に忿つてゐる双方の者にむかひ、各一方が他方に對して、怒罵の言を吐いたことまでも、附け加へるといふことを知らなかつたなら、私のこの行爲もほんの些細な事と私には見えたかも知れません。けれども人が若し、あらゆる最善を盡くして相互間の敵意をどうして消さうかと考へませんと致しましたなら、悪口を吐いて益々之を煽動するも、またその敵意を増さないにしても。つまらぬ一小事と見なければなりますまい。彼女はこんな人間でムいました。彼女の心の最も奥に師として在す貴下は、彼女の胸を學校にして、そこで彼女を教へ給ふたのでムいます。

最後に、母はとうゝその良人の死際（しにぎわ）にそれを貴下に歸正さしたのでムいます。けれど

どき私共の心の目をもつて、あなたの泉、すなはち、あなたの生命の大上の流れを喫き来力に相応しく、ここの泉に満たされ、どうにかつたかも大いに、と申すのでムいます。

そして私共の一生は、肉的官能の至上の愉快といふこと、また物質的光りの最も輝いた光線といふことも、その世の楽しみと比ぶべくもないばかりではなく、もはるかに優つて到達致しました。そのとき私共は、たゞひとりに在す主に対する熱情をもつて、日と月とがそこにあるよりも、一層高めて、超越して、総ての物體を超越して、照らす諸々の天をさへも過ぎ行きました。いや、それどころか、あなたの聖業をかたり、暁星よりも更に高く昇り、遂に私共の魂に至り、あなたが真理の糧をもつて永久にイスラエルを養ひ給ふ座なる地に（エビキエル書第四十四章第十四節）達すべく進み行きました（詩篇第八十五章第五節）で

十　モンニカ永生に入る

けれども彼女がこの世を去るべき日、すなはち、あなたは知り給ふても、私と彼女とは只二人立つて、とあるかつたその日が迫つて来ましたとき、フト私をりました。これ貴下が何かしら秘密な法に依つて此のとほりに取り計ひ給ふたものであると私は信じます。この窓から私共はテイベル河畔のオスティアの宿の庭園を眺めることが出来ました。此處にわたくしども、長い旅路に疲れきつた後、世の騒がしさから逃れてまにに只二人、非常に愉快に談し合つてをりました。また既に過去となつたことは皆忘れて只將来にむかつて勵みながら（ピリピ書第三章第十三節）貴下の眞理のまへで、眼が未だ見もせず、私が未だ聞きもせず、人の心が未だ思ひもしなかつたところの（コリント前書第二章第九節イザヤ書第五十四章第四節）聖徒の永遠の生命とは、どんなものであらうかと、私共は互に談しあつてをりました。けれ

や、空や、若し天の極が極まつたならば。若し魂さへもそれ自身に對して靜まつたならば。また自分を思はず、自己を超越したならば。若しあらゆる夢や想像の啓示が靜まつたなら。あらゆる舌と、あらゆる表徴が靜まつたならば。若しあらゆるものが。何人に對しても沈默したら——といふのは、若しか誰かがこれらを聞き得たとしたならば、是等のものは皆。その人に對して「我等は自らを造らず。我等は永久に存へたまふものわれらを造り給へり」（詩篇第百の三）と云ふでゐないませうから——また若しその人が獨りで語りますなら。卽ち彼等によつてゞなく、彼自らによつて、私共が彼自身の言葉。すなはち。肉の舌によつて發せられず。天使の聲によつて發せられず、雷の音によつても發せられず。又類似の晦澁な謎によつて發せられない。彼自身の言葉を私が聞くために、けれどもまた。私共が是等の被造物に於て愛する其人。丁度今私共二人がそんなものによらないで。私共自分だけで好努力して。敏速な思想に於て。總てのものに臨み給ふところの。永遠の叡智にまで到着したやうに。さうした外のものによらず。只その人だ

ムいまして。そこでは生命は、總て存在するもの、また存在せんとするものを造つた彼（か）の智慧なのでムいます。そしてこの生命は造られたものではなくして、その嘗て在りしが如く今もあり、後もまた。矢張りそのとほりで在るものなのでムいます。

といふことも。「後にもあらん」といふことも。それに於てはなくて、只「在る」といふことだけでムいます。と申すのは此生命は永劫なものでありますのに、「嘗てありし」も「後にもあらん」も永劫ではないのだからでムいます。

私共の心の全努力によつて。それに少しばかり觸れることが出來ました。そして私共は嘆息致しました。私共の靈の最初の實がそれに結ばれて。私共に殘されも致しました。やがて是等の心があるところの私共の口の聲音的表現にまで立ち戻りました。（そんなことを考へて途に口に出して言つた）年をとらないで。久しきに亘り。萬物を更新し給ふ我等の主なる貴ドのみ「言（ことば）」によく何物が似てをりませうか。

ですから私共は申しました。——若し誰でもその肉の騷ぎが靜つたならば、若し地や水

また何のために私は此世に生きてゐるのでせうか、私が此世に於ける望みはもうし
まつたのですから。私には薩張り分りません。けれどもたつた一つのことがあり
その爲め私はしばらく此世に止まることを願つたのでした。それは私が死ぬまへに、お前
が公教會の信者になるのを見度いことだつたのです。私の神樣は、わたくしのために、充
分に、思つたよりもまさつて、此事を果し給ふたのです。かうして私は今お前が地上の幸
福を輕蔑して、キリストの下僕となつたのを見てゐます。だから私はもう世の中に何もす
ることはありません。」

十一　母の死

此話に對して私は何と母に答へましたか、よく記憶致してをりません。とも申すのは、それから後未だ五日を經たないのに。卽ち五日以內に、母は熱病に罹つて斃れたからでムいます。そして此病のあひだ。一日母は失神致しまして、しばらくのうち、何にも見なかつ

けに聞く、また若し、此精神の上昇が續くことが出來たとして。更に他の遥かにちがつた總ての幻影が全然取り去られて、此一つの上昇が私共を夢中にならせ、噛み込んでしまひ、彼等を見てゐる者を、我々が今嘆息して求めた此悟りの瞬間の如く、彼の生命が永久にあるように、是等の一層内部的な歡喜のうちに包むことが出來たとすれば、それこそは「汝の主の歡喜に入れよ」（マタイ傳第廿五章廿一）といふことになりはせぬか。そしてまた何時此事がムいませうか。よしそれは私共總てが遁る時でムいませうが。

私共はそれでも主よ、貴下は知ろしめします。私共がこんなことを語り。そしてまた私共が語りましたとき、この世と、それに屬する一切の喜悦とが、輕蔑すべきものとなりましたとき、母は私に斯う申しました——「倅や。私から見れば。この世の中にはどんなものはありません。わたしはなほ此世にゐて何をするのでせうか。

けれども、眼には見え給はない神よ。貴下が忠信なものどもの心に窃から斯麼不思議な果實が産出される貴下の賜物を考へましたとき。私謝を捧げました。私は母がどんなにか自分の墓について心配してゐるその良人のそばを指定し。そのつもりでゐたことを想ひ出したからなんです。母はその幸福のうへに睦じく暮らしてゐたのですから。一緒にゐたい、神が彼女に、海を越えて遥々と巡禮の後。今や遂に彼人たる妻たる土の部分（人は土によつてつくられたといふ。その故に此處では肉體といふ意）が。同じ土で、貴下の豐かなる御慈悲によつて、何時彼の女の心から排斥し去られたかを私は存じませんが。それがそんなに寫されたことを斯うも明白に見ましたのを。非常に感ムいます。けれども私は今もまつたくのところ。私共が密際で話し合つたとき。母は喜んであなたに感謝を捧げませう」と。申しましたとき、彼女は最早、その自分の故郷で死なうといふ

たのでムいましたくしは母のところへ馳せつけました。けれども程なく母は正氣にかへつて。私と弟のナヴイギウハとがゐるのを見て。詰問するやうに「わたしは一體何處にゐるのですか」と私共に訊きました。それから悲しみに打たれてゐる私共を眺めて「お前達の母を此處へ葬るのですよ」と。申しました。私は默つて。ぢつと涙を呑んでをりました。知らぬ他鄉の空でなくて。故鄉の土に母が死ぬことが幸福であらうから。自分はさうおさせ申したいと申しました。これを聞きました母は。弟がなほそんな浮世のことを好むのを知つて。心配さうな顏つきをして、眼でもつて彼をたしなめ。私の方をながめて——「御覽な。まだあんなことを言つてるますよ」と言ひ。すぐにまた私共二人に對ひ——「此肉體は何處葬つてもいゝよ。そんなことを決して彼是と心配することはいりません。お前達が何處にゐるやうとも、主の祭壇に於て。たゞ私がして欲しいのは。お前達が私を想ひ出してくれだことです」と申しました。母の自分の意志を斯う言葉にあらはした後。病氣が滿うじて、默つてしまひました。

涙となつて溢れ出ました。私の眼は同時に私の心の激烈な命令によつて、その泉を汲み出しました。それから、苦悶は私に遖だ辛らうムいました。それから母が最後の息を引き取りますが否や、私の仲のアデオダトウスはソットと大きな聲をあげて泣き出しました。そしてとう私共皆に制せられて、やう〳〵靜まつたのでムいます。それと同様に私から涙のうちに滑り出たところの、私白らの或る小兒らしい女々しさも、私の胸のうちにある、「大人ぢやないか貴様は」といふ聲に遮られて、默つてしまひました。何ぜかなれば、私共は泣きの涙と、嘆息とをもつて此葬式を行ふことは正しくないと思つたからでムいます。そのことをするのは不幸な者。あるひは全く滅亡したと思はれる者を哭くときの習慣なのでムいます。然し彼女は死んでも不幸ではなく、また全く死んでしまたのではなかつたのでムいます。私共は確な理由として、彼女の善き會話と、その偽りのない信仰とを握つてをりました。

では私の内心を悲痛ならしめたものは、一緒に生活する愉快な、親愛な習慣から突然變

十二　モンニカの死を悼む

わたくしは母の眼をとぢてやりました。すると、言ひしらぬ悲みが私の胸に起りまして

悩みを色にみせなかつたのではムいますが。その後また、私共がオステイヤにをりまして私は不在であつたとき。如何にも主婦らしい自信を以て、母は私の友人達と一緒に、此世の悪しむべきこと、また死の祝福について語らつたのでムいます。すると貴下がかよわい女性にこのやうな勇気を與へ給ふたのを見て、彼等は驚き……「貴下は御自分の故郷からこんなに遠く離れたところで死ぬのがおいやではムいませんか」と訊ねました。そのとき母は――「何ものも神よりは遠くムいませんん。また世の終りに。神様が私を甦らせ給ふのに、私が何處に居るかを御存知遊さないだらうといふ心配は少しもムいません」と申しました。で病みついてから九日めに、享年五十六歳で、此信仰の篤い、敬虔な魂は、肉體の束縛から解放せられました。私は丁度その時三十三歳でムいました。

の準備をしてゐる間に、私自身は、家のうちの一部に於て、私をうつちやつて置くことがよろしくないと思つた人々に對して、私の力の及ぶ限り、時宜に適したと思ふことについて話しを致しました。斯うして眞理の霄藥を貼ることによつて、只私自身にのみ知られてゐる内部の苦しみをなだめました。しかし他のものは私の苦しみを知らないで、私の言ふことを熟心に傾聽して、私が悲哀の感情をもつてゐないと思ひましたらしは、彼等のうちで誰も偸み聞くことの出來なかつた貴下のお耳にむかつて、自分が餘りに情に脆いことを責め、私の悲しみの涙をとゞめました。もつとも悲哀はいつもの烈しさをもつて再びおそふて來ましたけれど、少しく負けたゞけで、涙を流すほどにはならず、或は顔付きが變るほどには至りませんでした。それでも私は心の底に何を抑へつけてゐるかをよく承知してをりました。またそれに對してこんな力をもつてゐるのを見て、甚だしく憤りました。こんなことはその順序として、また私共の天性の命ずるところとして、必然起らねばならないことなのでムいます。で私は自分の

かれてしまつたことにより生じた生々しい痍以外は、何でムいませうか。母が最後の病ひに罹つてゐるとき、わたくしの孝順をいとほしく思つて、私のことを「大變に親切にしてくれる」と申し、また私の口から、つひぞ彼女に對して荒らい言葉や叱責の發しられるのを聞いたことがないと、母が申しましたとき、私はその證明に對して吝んだのでムいますけれども私共を造り給ふた神よ。どうして私が母に拂つた尊敬は、どうして私に對する母の奴隷的奉仕に比較することは出來ませうぞ。ですから私が母を奪はれましたとき、私の魂は傷がつきました、そして私と彼女の魂とから成り立つて、一つとなつてゐた生命は、まるで切り裂かれたものゝやうになりました。

そこで私の作が泣き止みますと、エウオディウスは豎琴をとり詩篇を歌ひ出し、全家はそれに唱和致しました——「主よ、われ汝はむかひて、憐憫と審判とをうたはん」（詩篇第百の一）と。けれども私共がしてゐたことを聞いて、多くの兄弟達と、信仰の篤い女達とは一緒にやつて來ました。そして、葬儀をすることをその務めとしてゐる人達が、慣習どほりにそ

Eli は、心から悲しみをまぎらはす爲めに。
から出來た Baλaveïoy（バライネイーオン）に語源をもつて語でありと聞いてゐるたからでムいます。
照覽ましませ、孤兒の父よ。私共はまた貴下の御慈悲にるして告白致します。
しましたけれど、さうしなかつた以前と變つて、ちつとも心が落着いたやうに
んでした。私の心ならは。少しもその悲哀の苦がい味が放散致さなかつたので
そこで今度は寢てみましたが。醒めての後も。依然として。私の悲哀は少しも覺えませ
るないことをみいだしました。私は自分獨り。寢床にをるとき。貴下の司數アムブロシウ
スの眞正な詩を憶ひ出しました——

神は萬物の造り主
また天の主宰者

日あををかざつて光をまとはせ
夜には柔かき熟睡（うまい）を與へ

悲哀に對して新らたな憂慮を抱いて悲しみ、かくして二重の悲しみに疲れ果てゝしまひました。

けれども、遺骸が野邊の送りをされたとき、私共二人は涙を流さずして往き、歸つて來ました。すなはち、私は祈禱するときにも、また屍體が墓のそばに置かれ、それが土の中に入れられるに先ち、彼女の爲めに、貴下に捧げられる贖ひの犧牲が慣習によつてさゝげられましたとき、私共が貴下にむかつて致しました祈禱に於ても私共は泣きは致しませんでした。けれでも私は終日、窃かに悲しみ、萎れる心をいだいて、どうぞ私の悲哀を癒して下さいと、一生懸命に貴下に御願ひ申しましたけれど、貴下は癒して下さいませんでした。わたくしは思ひます、この一つの教訓に鑑みますと、今は欺きの「言」をその養ひとしないい心にさへも、習慣の力の及ぼす影響がどれ程大きいかを、私に記憶せしめたまふたのでムいます。

そこで、私は浴場へ行つて、身を洗ふがよからうと思ひました。と申すのは沐浴 Balne-

すれば今は死んでしまつてゐても、多年の間私を貴下の御眼の前に生けるものにし度いと願つてゐた私の母の爲め、ほんの僅かな時間、私が哭したから、罪を犯したと言つて、私を嘲笑せしめないようにして頂きます。然し彼が大きな慈悲の人でありますならば、貴下のキリストの兄弟達の父にまします貴下に對して、私の罪の爲めに寧ろ泣かして下さい。

十三　亡き母の爲めに祈禱

けれども私の胸は、肉の想念に從つたとの非難をも受くべき、かの傷をもう癒やされてをりましたから、私の神よ、私はこの貴下の婢（しもべ）のために、ずつと異つた種類の涙なみなみと注ぎました。それはアダムに於て死するあらゆる魂の（コリント前書第十五章第廿二節）の危險を眞面目に思ふてくだされた心から、注ぎ出される涙でムいます。また彼女が肉の束縛から解放せられなかつた以前に、キリストによつて生き、その信仰と行爲とによつて、貴下の御名を稱讃して活きてはをりましたけれど、貴下が彼女を洗禮によつて再び生れしの給

弱くなれる節々を新たにし
再び働く力を得させ給ふ
疲れたる心を熾にして
悩める胸より憂慮をとり給ふ

私は少し宛、貴下の婢の昔のことを考へ、彼女の貴下に對つての神聖な愛着と従順とを想ひ出しました。私はそんなものを俄に奪はれてしまひましたので、貴下のみまへに泣きたいと存じました。そこで私は抑へてをりました涙にまけて、心のまゝに溢れしめ、それを枕として私の胸をやすませました。と申しますのは、其處には私の悲哀に對して、高いところから物を言つてゐる耳があつたからでムいます。主よ。今わたくしは書を讀む度い者はそれを讀むがよく、解釋したいものは貴下に懺悔致します。請ふて、貴下のお耳をあらはして、そしてその者が、若し私の母、すなはち私の眼から

奉ります。呪ひの木に懸り、そして貴下の右に座して、私共の爲めに執成をしてゐるところの（ロマ書第八章第卅四節）私共の藥（キリストの事）により、どるぞ私に聽いてください。彼女が救ひの水を受けましてから以來。多年の間に積りに積つたその負債をも免るしてください。どうぞ免して下さいまし。主よ。私から御願ひ致します。彼女の審判（きはき）にかゝはらないで下さいまし。憐憫を審判に打ち克たして下さいまし。貴下のみ言葉は眞（まこと）でムいますからでムいます。憐まんとする者を憐み、また貴下は憐憫ある者には憐憫を約束したふたからでムいます。憐まんとする者を憐み、また慈悲を施さうとする者に慈悲を施し給ふ貴下は、彼等をして憐憫ある者と爲し給ひました。

そしてまた私は自分の願つてゐるたものを既に主が果して下さつたことを信じます。けれども主よ、願くは誠意から致しますところの私の献物を受けて下さいませ。何ぜかなれば母は此世を去るべき日が近寄りますと、その肉體をくだ〳〵しく包んだり、或は香料をも

（負債とは廣義に解し罪）

ひまして以来（同第十五章第三節）貴下の御誡めにさからう言葉をその口から出さなかったとは、私は敢て申しません。（マタイ傳第十二章第廿二節）盲理にしますまい。（マタイ傳第十二章第廿二節）盲理にに向ひて、痴者よとこたふるものは、地獄の火にあるべし」（マタイ傳第五章第二十二節）と。し慈悲を乗て、きっと糺弾し給ひますならば。人々のうちに稱讃せらるたものとは思いへども、助すかりやうはムいません。（詩篇第百四十三の二同第百三十の三）けれど訊し給ふことが厳しくムいませんから。わとを信じ、且つ希望するのでムいます。けたくしは貴下にむかつて立ち得れども若し誰にても貴下にむか面を算へるとならば、貴下の賜物のほか、何を貴下にむかつて算ふべきでおゝっぴらな人は自ら人であることを知りうぞ人は自ら人であることを知りるわが神よ。私が感謝をもつて、今わたくしは彼女の篤にて、私の讃美にして。私の生命なころの私の母の導い行ひを暫時措貴下に乞ひ願ひ

（コリント前書第一章廿一節）
（同　上　後書第十章十七節）
（詩篇第九篇二十節）

めに罪を被せられ、とらへられることを恐れて、自分は何の負債もないと答へず、たゞ自分の罪は、誰もその代償をつぐなふことの出來ない彼の御方が、御自分は何の罪も負つていらつしやらないのに、私共に代つて、つぐなつて下さつたので、赦るされてゐるのだと答へるでせう。

ですから、どうぞ彼女が安らかに共良人と共にゐるように御願ひ申します。彼の前にもまだ後にも、母は誰にも嫁ぎませんでした。良人を貴下のものとなさんがために、彼女は貴下にまで結果する（ルカ傳第八章第十五節）忍耐をもつて良人に從ひました。靈をそゝいで下さい。おわが神よ。心と聲とを書とを以て私が仕へまする貴下の下僕達であり私の同胞である私の主達に靈をそゝぎ、凡そ是等のことを讀むものをしてみな悉く貴下の妙モンニカと、その瞬時が間の良人であつたパトウリキウスを。貴下のみ前に回想せしめて下さい。貴下は彼等の肉體によつて私を此世に出して下さいましたが。どうしてゝあつたかは私は存じません。どうぞ人々をして此移り行く世の光りに於ては私の兩親であ

つて薫らすことなどを思はず、また立派な記念碑を建てることも願はず、故郷に墓を置くことをも思ひませんでしたし、こんなことを私共に頼まず、只貴下のこの祭壇に於て自分が記憶せられるように顧つたからでムいます。これに與へられることをりました。此犠牲によつて、私共に、反對する證書（コロサイ書第二章第十四節）は塗り消されるのでムいます。敵は私共の過ちを算へ上げて、私等は敵と闘つて凱歌を奏するのでムいます。その犠牲の方に於て、何ものを見出すことはムいませう。私共は彼に於て勝ちまする。彼に對して罪ない血で償ひを爲すことが出來ません。私共の贖ひである此聖典に、貴下の下婢（モンニカの事）のそうぞ。彼の方が私共を贖ひたまふた價を償ひ、そして私共をあの御方から取り去る者は誰でムいませう。私共の贖ひである此聖典に、貴下の下婢（モンニカの事）のそうぞ。彼の方が私共を贖ひたまふた價を償ひ、そして私共をあの御方から取り去る者は誰でムいませう。その信仰の絆で結ばれました。どうぞ何人も彼女を貴下の保護から離らさないように。獅子も、龍も（共に悪魔）、乃至は詐瞞も邪魔をしませんように。といふのは、彼等は奸智に富む告訴者のた

冥想懺悔叢書講讀便法

一、本叢書は全部で六巻です。其發行の順序は裏面記載の通であります。

一、本叢書講讀の最便法は六冊分一時前納拂か三冊分一時前納拂が一番便利でございます。

三冊一時前納　金七圓五十錢
六冊一時前納　金十四圓也

一、右御注文は各地の書店で取扱ひますから御近所の書店へ御申込を願ひます。

大正十二年一月十五日印刷
大正十二年一月十八日發行

オウガスチン冥想錄
定價金二圓六十錢

翻譯者　宮原晃一郎
東京市牛込區水道町三十八番地

發行者　森脇美樹
東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二

印刷者　寺田國太郎
東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二

印刷所　早稲田印刷株式會社
東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二

不許複製

發行所　株式會社　文明書院
東京市牛込區水道町三十八番地
電話番町三五四二番
振替東京一七二〇番

り。私共の父に於ては、私共の母に於ては、私共の兄弟であります。また貴下の下にある私共の兄弟であり。た貴下の巡禮の民（ヘブル書第十一章第十節）の出てから歸り着く日まで、（生れてから死ぬまでの意味也）墓ひ喘ぐところの永遠のイエルサレムに於ては私と市民仲間である彼等二人を、敬虔なる情をもつて記憶にとめさして下さいませ。かうして私が、母の私に對する最後の要求の、私の祈禱によるよりかも、寧ろ告白により、また多くの人々の祈禱により。一層のたかに彼女に對して成就せられますように。

伊太利クロチエ博士著桂非當之助君譯

實際の哲學

菊版約五百頁定價二圓五十錢

時事新報評　著者は倫理を以て實在の總和と斷じ之を純理と實際とに區別したりと雖も其は後者たる實際の活動的關係を說明せるものにして玆に新說を得たるは我國學界の爲に慶すべき現象と謂ふべし。

英國ボーゼンケット氏著小野寺一男君譯

物の哲學

四六版約四百頁定價二圓五十錢

國民新聞評　パイプル大學の水準學者たる知識を有する人として生物學上乃至科學上に該博なる知識を有するの意、哲學は是れ學と理學とを前提とせざるなく、法則は生理學上に解興へ他面より見物解興へとするの云ふにあらず、以て生眼と

教の眞諦

國遠千代博士著三並良君譯

大阪毎日新聞評　著者は新理想主義の宇宙觀に基き現代哲學界に意とする所は宗教哲學にして生命を興へ得たりとする結晶が即ち本書なり、博士の年心血を濺ぎて能く此の難問題の間柄なくし書を成せるは論なかるべからず、而して本書の好譯と謂ふべし。

英國カーペンター博士著高島新三郎君譯

愛と死

四六版約四百頁定價二圓五十錢

東京朝日新聞評　著者は現代思想家たり、而して其の特に重きを置く所は人生哲學と宗教哲學とに在り、而して其の哲學乃至宗教哲學は人生の實際問題に關聯して光輝ある科學的體系を與へんとするにあり、故に本書は最も偉大なる哲學者の著書にして最も偉大なる哲學者の著書たるの價値あるものと謂ふべからず。

本叢書の發行の順序は大略左の通りに決定致しました、而して二月刊行分パスカル感想錄は譯者柳田泉氏の手を離れて目下製版中。三月刊行分エピクテータス語錄は佐久間政一氏が已に譯了の所獨逸から新著が着したので之れと對照目下原稿整理中。四月分以下は夫れ〴〵譯者は心血を濺いで其完成に苦心中であります。

一月刊行　オウガスチン懺悔錄

二月刊行　パスカル感想錄

四月刊行　アウレリアス冥想錄

三月刊行　エピクテータス語錄

五月刊行　カアペンタア吾が日吾が夢

ダンテ新生

獨逸オストウアルド博士著後藤格次君譯

價値の哲學

四六版五百八十頁定價二圓五十錢

東京日々新聞評　本書は自然科學界の大哲人たる博士が其專攻科目たる熱學の法則より其世界觀の說明を試み科學者の周匝精緻なる研究を以て精神の世界に過ろところベルグソン、オイケン等の純學者以外に又思想界の一大重鎭たり、本譯により此大思想を日本に傳ふるを得たるは眞に幸福と謂ふべし。

英國ダーウィン博士著阿部文夫君譯

種の起原の基礎

四六版四百餘頁定價二圓五十錢

時事新報評　『種の起源』の發行に先つ事十六七年其著者が認めたる原稿なるフランシス、ダーウィンが近年遺稿中より發見し之を編纂して公にせる者なり、本書を通讀すれば思想の變遷の跡を研究するを得ると同時に世界的名著の大發見の奈邊に存せしかを知るを得べし。

獨逸ヘッケル博士原著後藤格次君譯

生命の不可思議　上下

四六版各册四百餘頁定價各二圓五十錢

大阪朝日新聞評　現代の生物學界の泰斗にして獨逸に始めてダーウィンの進化說を採用したる鴻儒ヘッケル博士の名著の翻譯にして宇宙に於ける人類の地位に關する博士の結論と炭素の蛋白的化合物より有機的生命の進化に關するものとの斷案は始めて本書にあり、蓋し本書は博士の著述中最も精力を注ぎたるものにして名著中の名著とす。

米國グレゴリ氏著田制佐重君譯

科學の精神と其効用

四六版約四百頁定價二圓五十錢

讀賣新聞評　クラスゴー大學物理學教授にしてサイエンスに對する全く從來と異れる新卓說の提示である讀者は該著に依て人類生活國家生活乃至個人生活に對して科學が如何に重要緊切な密接關係を有するかを了解し科學の眞使を悟るであらう。